

AKB =
プロレス
= 皇室論

ジョーシキに染
まったアンチAKB
への宣戦布告
(2013.5.7、冒頭
に追記)

高橋 慶介

<2013. 5. 7 追記、お詫び>

<2013. 5. 7 追記>

<はじめに>の次の頁<出版社の方へ 紙の書籍としての出版先募集してます>に記載していた筆者への連絡先メールアドレスparufe102@yahoo.co.jpが、2012年11月10日頃より無効となっていたことが分かりました。

(私のミスです。parufe102@yahoo.co.jpから携帯メールアドレスに転送の設定にしていたのですが、転送先の携帯は迷惑メール対策で指定したアドレスからの受信しかできないようになっていました。送られたメールはparufe102@yahoo.co.jpにも残りません。)

さきほど、有効になるようにしました。

よって、2012年11月10日頃から2013年5月6日までにparufe102@yahoo.co.jpにメールを送っていただいた方がいましたら、大変申し訳ないですが、届いておりません。大変申し訳ありません。恐縮ですが、parufe102@yahoo.co.jpは現在有効ですので、再度ご連絡をお願い致します。

引き続き、紙の書籍としての出版先を募集しております。

詳しくは<出版社の方へ 紙の書籍としての出版先募集してます>の頁に記載しておりますので、よろしくお願い致します。

はじめに

「AKBと違って全然興味ない。AKBみたいな小娘達に比べたら、元おにゃんこのおばさん達のほうが全然いいわ！(笑)」

かつて、自分が何人もの友人に吹聴していたセリフである。

こんなことを言いながら、この頃自分はAKBのメンバーなど誰1人として知らなかった。

ここでは、単に「自分は年端もいかないアイドルに興味はない」ということを言いたいがための、そのようなアイドルの代表として使っただけ。

と、同時に、この頃（AKBにハマる前の自分）の自分も含め、「AKB？誰が誰か全然分からん。興味ない。」と多くの人と言う言葉には、

- ・ 俺は流行にひっかかからない人間だ
- ・ 俺は少なくとも気持ち悪いオタクとは違う。
- ・ 俺は少なくとも軽薄なアイドル集団を好きというような軽薄な男ではない。

自分はアンチ、ということでもなく、本当に前田敦子すら知らなかった全くの無関心層だったし、ろくに知らない物事を世間のイメージに沿って、自分なりに知ろうともせずに批判するのは嫌いなので、批判を口にしてことはなかったが、気持ちの中…無意識的には、そんな気持ちも込められていたと思う。

世間が抱いているAKBへのイメージは

- ・ 誰が誰だかも分からない、実力もない、人数が多くいるだけのアイドル集団。
- ・ 秋葉原発の、気持ち悪いオタクのアイドル
- ・ 「会いにいけるアイドル」=きもいオタクへのファンサービス

(こういうイメージがいかにただのイメージであったかということが、AKBのことを知れば知るほど分かるが、大衆とはいかにろくに知らずにイメージだけで物事を判断するものかということも、今ではよく分かる。)

そんな自分がAKBにハマりだして、このような本を書くにまで至ったきっかけは、AKBがすでに1

年以上前から「国民的アイドル」と言われるようになっていた2011年1月の引越で、CS放送が見られるようになり、音楽専門チャンネルをつけっ放しにすることが多くなったこと。

そこから流れるAKBの楽曲の良さ、そしてミュージックビデオの完成度の高さに徐々に惹きつけられるようになり、あとは、元来の「興味を持ちだしたらとことん」という性格によって、頭の中がAKB一色という時期を迎えるまであっという間だった。

それまでの37年間の人生でアイドルにハマったことはなかったため、アイドル道楽というものがこんなに楽しいものと初めて知った。

そして、すぐに気付いた。

「アイドルって…特にAKBって、プロレスじゃん！」

自分は小学生のころからプロレスヲタク歴30年以上。
学生の頃は週1のペースで生観戦し、学生プロレスなるものまでやっていた。

そんな自分が、まず感覚的にAKB＝プロレスと感じ、なぜそう感じるのか考えていくうちに、そこに＝天皇、皇室の存在も浮かび上がってきた。

そして、AKB好きを公言していくうち、プロレスと同じ目にあうことにすぐ気付いた。

軽蔑、蔑視。

通常、人の趣味嗜好を聞いてそれを面と向かってバカにするということは、まともな大人のすることではないと思うし、実際にそうしている人間は少ないと思うのだが、プロレス、そしてAKBに関しては、そのような大人の良識は適用解除され、バカにしていいことという免罪符を得ているようだ。（※1）

とにかく、世間のAKBへの偏見は、バッシングはひどい。

劇場公演を映像ですらまともに見たこともないような人間から、AKBとそのファンは軽薄、きもい…という事が前提として全てが語られている。

そのイメージを世間の大多数が共有してくれるはずだから大丈夫！という安心感を抛り所に、自分の感性でものを見ない、自分の頭でものを考えない人間でも、いっばしの「流行りもの批判」ができて、自分は流行に流されない、物事を批判的・本質的に見てんだ、という気分になれる格好の材料として、「AKB」という記号が存在している。

AKBの芸は未熟で、プロデューサーの秋元康は、若い女の子を使って、阿呆なファンを騙して金

儲けしてる極悪人…ろくに実態を見てもいない誰も彼もがこのイメージに沿って、ほとんど判で押したように同じような言葉でAKBを見下している。彼らは、AKBを応援しているファンは、流行、イメージに流されやすい阿呆で、自分達はそれより上に立つ人間、と思っているのだろうが、真逆で、そういう人間こそが昔ながらのアイドルイメージのままAKBを見て、世間で言われているAKBイメージをそのままオウムのように唱えて、批判とすら呼べないような品性、知性のカケラもないバッシングをしている…彼らアンチこそが「イメージ」に、「世間」に流されやすい人間。

子供の頃から、世間で八百長だクソだと言われるプロレスを1番好きな趣味に持ったことで、「世間」を「闘わなければいけないもの」という感覚で捉え、「ジョーシキ」に執着する人間を軽蔑し、「フツー」という生き方を否定するようになるなど、プロレス…というより、「世間がプロレスを見る目」に人格形成に多大な影響を受けて育った自分。

以降、長じてはベジタリアン（かなりゆるいが）になり、ボディビルに興味があり、2011年、37歳にしてAKBヲタになり…どれもこれも世間からの偏見の目が強いものばかりで(笑)（格闘技観戦と練習、読書という「まともな」趣味もあるが）もはや世間からの偏見がないジャンルなど物足りない感じさえする今日この頃(笑)

この本は、そのような世間への、自分からの宣戦布告書であり、同時にAKBとプロレスへのラブレターでもある。

※ 1 プロレスに関しては、そのような偏見は減ってきているように思うが、2つ理由があると思う。

1つは時代が変わって、現代では、1つの成熟したエンターテインメントという見方をされてきていること。

もう1つは、個人的なことだが、自分が地方（金沢）から上京してきたこと。これは地方と東京の違いなのか、単に金沢という土地柄なのか分からないが、プロレスと聞いてあからさまにバカにするのは圧倒的に金沢の人間であった、東京はプロレス云々ではなく、対人関係がスマート。心中はともかく、面と向かってどうこう言う人間が少ない。そんな東京でもAKBに関してはゴチャゴチャ言ってくるのが多いのだから、その偏見の根は相当根深い。

出版社の方へ 紙の書籍としての出版先募集してます

この本の、紙の書籍としての出版を検討して下さる方がいましたらご連絡下さい。

原稿の主旨に興味を持って検討していただけるならば、原稿の修正、加筆、その他応じられます。（加筆する分には、本稿に掲載したもの以外に、ほぼ骨格が固まっている目次タイトルは10以上あります）

※当電子書籍パブー利用規約の17条に「本サービスを利用して投稿されたテキスト・画像等の著作権は、当該テキスト・画像等を創作した者に帰属します。」とあり、念のため問い合わせたところ、当サイトで公開した作品を紙の書籍として出版することは問題ありません、という回答をいただいております。

連絡先 parufe102@yahoo.co.jp 高橋慶介

【追記】

上記メールアドレスparufe102@yahoo.co.jpが、2012年11月10日頃より無効となっていたことが分かりました。

（私のミスです。parufe102@yahoo.co.jpから携帯メールアドレスに転送の設定にしていたが、転送先の携帯は迷惑メール対策で指定したアドレスからの受信しかできないようになっていました。送られたメールはparufe102@yahoo.co.jpにも残りません。）

現在は有効になるようにしました。

よって、2012年11月10日頃から2013年5月6日までにparufe102@yahoo.co.jpにメールを送っていただいた方がいましたら、大変申し訳ないですが、届いておりません。大変申し訳ありません。恐縮ですが、parufe102@yahoo.co.jpは現在有効ですので、再度ご連絡をお願い致します。

目次

上に「目次」がありますが、目次タイトルが多くて、小見出しの全てを1度には表示できなくなっているのので、ここで小見出しに通し番号をつけて、一覧できる目次を載せておきます。

ちなみに、上の「目次」は、章名の右の矢印をクリックすると、小見出しが引っ込んだり出てきたりします。あと、「目次」全体をスクロールさせることもできますので、こちらとあわせてご利用下さい。

はじめに・出版社の方へ・目次

<はじめに>

<出版社の方へ>

<目次>

第1章 天皇、プロレス、アイドル 共通する特異な点は何か

1 <天皇、プロレス、アイドル 共通する特異な点は何か>

2 <天皇、プロレス、AKBを攻撃する人間が多いこと理由>

3 <「プロレス、AKBのファンは虚像を見ている」と見下す者こそが虚像を見ている。ファンが見ているのは実像>

4 <アイドル、プロレスファンこそ現実を直視している人間>

5 <天皇を存続させた日本人のメンタリティが日本のプロレス、アイドル、AKBを生んだ>

第2章 アンチには理解できるわけのないAKB総選挙の面白さ

6 <AKBの核・劇場公演とは？>

7 <アンチには理解できるわけのないAKB総選挙の面白さ>

8 <AKB総選挙批判に対して 遊びに貴賤がつけられている不可解さ>

9 <AKB総選挙批判は、ジョーシキに染まっている人間が浮き彫りになる>

10 <なぜAKBがことさら攻撃されるのか、その理由>

11 <根っからの“ジョーシキ”嫌いにとっては、AKBは「買い」>

第3章 プロレス、AKBこそ「リアル」 スポーツこそファンタジー

12 <プロレス、AKBこそ「リアル」 スポーツこそファンタジー>

13 <格闘技のリアリティ>

14 <リアリティなら、“真剣勝負”の格闘技よりプロレスの方が上>

15 <アイドルこそは最もリアリティある世界>

16 <リアルとリアリティの違い>

17 <人間はみなプロレスラー、アイドル。人生はプロレス>

18 <虚実が入り混じっているプロレスとアイドル、そして人生>

第4章 自分にない“人間”がほしい だからプロレス、AKB、ご皇室

19 <ファンが支えているプロレス、AKB。国民が推し戴いている天皇>

20 <国旗、サイリウム、掛け声…人間を推し戴く表現手段>

21 <天皇、プロレスラー、アイドルは「上」でなくてはいけない>

22 <自分にない“人間”がほしい だからプロレス、AKB、ご皇室>

23 <「人間」を観るジャンル>

24 <「いかがわしき」には「いかがわしき」を>

第5章 プロレスとAKBこそ人間の色気が最も見られる

2 5 <AKBの歌のベースは 色即是空 >

2 6 <AKBの楽曲の世界>

2 7 <“AKB顔” >

2 8 <少女達の大人数集団の独特の魅力>

2 9 <共同体と個人競争の社会>

3 0 <プロレスとAKBこそ人間の色気が最も見られる>

3 1 <物語の流れ、歴史、記憶の蓄積があってこそ、AKB、プロレス、皇室>

3 2 <登場シーンに集約されるプロレス、AKBの魅力>

3 3 <サプライズは人間ドラマの花形>

3 4 <共同幻想>

3 5 <偏見が熱気、パワーを生んでいる>

3 6 <「商売」が嫌いなアンチ達>

第6章 松本人志の笑いはノンフィクションテイスト=プロレス、AKB

3 7 <松本人志の笑いはノンフィクションテイスト=プロレス、AKB たけしの笑いはスポーツ
>

3 8 <ノンフィクションテイスト プロレス=虚数という概念>

3 9 <バナナはリンゴか? この世に「嘘」はない>

第7章 フワフワしたものが嫌い、だからAKBが好き

4 0 <嘘でも本当……華やかな虚構の世界を成り立たせるために流されている本物の汗>

4 1 <AKBの尋常じゃない汗の量>

4 2 <アイドル、プロレスラーの「実力」>

4 3 <フワフワしたものが嫌い、だからAKBが好き>

第8章 **AKB**握手会とは何か？ ファンとメンバーの1回10秒のプロレス

4 4 <参加するという行為 皇居一般参賀、AKB握手会、プロレス地方興行の風景>

4 5 <AKB握手会の笑顔を「営業」と見下す者は、人間そのものを見下している>

4 6 <推しメンとファンのプロレス>

4 7 <乃木坂46>

4 8 <「ガチ」か「嘘」でしか捉えられない無粋人間>

第9章 プロレスやアイドルの「嘘」にキレる人間は、世の中の本当の嘘に騙される

4 9 <既成概念でしか物事を捉えられない人々>

5 0 <ジャンルそのものを見下す愚かさ>

5 1 <プロレスやAKBを見下す類の人間は、切り捨て御免の侍>

5 2 <軽薄、非実力、キモイの代名詞として使われている「AKB」というデジタル記号>

5 3 <アンチプロレス・アンチAKBは、見ている世界と同じ色に染まるカメレオン>

5 4 <プロレスやアイドルの「嘘」にキレる人間は、世の中の本当の嘘に騙される>

5 5 <真正面から見る目がそのジャンルを育てる プロレス、アイドルの進化 皇室を学ぶ必要性>

5 6 <皇室、プロレス、アイドルを愛する者は物事に意識的な関わりをする文化人>

57 <指原スキャンダルに見る、理想のファン像>

終わりに・参考文献・奥付

<終わりに>

<参考文献>

<奥付>

1 天皇、プロレス、アイドル 共通する特異な点は何か

プロレス、アイドルというジャンルに共通する特異な点は何か。

他のショーは、あくまで表舞台は表舞台、演者はそこを降りれば1人の人間、という当たり前のことを演者側も見る側も当然の共通認識として持っている。

プロレスは違う。

勝敗を競っている、というのはショーの建前であるのだが、プロレスはショーの時間以外でも365日24時間、あくまでその建前を崩さない。

つまり、メディアの取材にレスラーが「いや～、この前の試合のフィニッシュのどこ、ほんとはこういう流れだったんだけど、1つ技失敗してアドリブでああいう流れになりました」などと語ることはない、ということだ。（*1）

リング外でレスラーが語る言葉はあくまで「この前の試合の借りは必ず返すぞ、おぼえとけテメエ！」…つまりプロレスは、リングを降りて、社会全体に対して24時間365日プロレスをやっている。

これが、俳優ならばドラマの敵役に対して、インタビューで「あのヤロー…」云々と語ることはない。

歌手が不倫の恋の歌を歌って、実生活でその歌手が円満夫婦生活を送っていてもそれを「嘘だ」と責める人はいない。

アイドルは違う。

表舞台で歌やダンスを見て楽しむ、だけではなく、ファンはアイドルをやっている人間そのものに幻想を抱く。

他のショーでは、建前の部分（「キャラクター」）と、生身の人間の部分が、当然分けて考えられているのに、プロレスラーとアイドルは、キャラクターでもなく、生身の人間でもなく……いや、キャラクターであり生身の人間である「プロレスラー」であり、「アイドル」なのだ。

プロレスを見る側はそこに展開されているものを、建前であることを分かりながら、そこにどっぷりはまる。（*2）

プロレス会場だけではない。

世間一般には、プロレス＝ショーというものは一般常識として定着されているにも関わらず、プロレスラーが一般のテレビ番組に出演した際には、そこに関わる他のタレント達は、プロレスを建前通りに扱う。

プロレスファンは、建前通りに扱うより一歩進んで、プロレスという空間を支える「観客」という役割を進んで担う。

歓声をあげ、カウント2・9の攻防にどよめき、勝った側負けた側に、それに相ふさわしい声援を送る。

アイドルフリーク達も、そこにいるのは1人の生身の人間であることを認識しながら、声援を送る。

曲の合間に、それぞれのグループ、歌に対して決まった掛け声をあげるところなど、まさに、「アイドル」という幻想空間の中で、ファン達自身が「ファン」という役割を進んで担っている象徴である。

そこで、さらにこの2つのジャンルを奥深いものにさせているのが、見せる側が建前と生身の2つが混然一体となった人間だとしたら、それを見る側も、建前には生身があるという事を認識している自分（1）と、それを分かっているながらも建前のままに楽しむ自分（2）が混然一体となっている、ということだ。

分かりやすく言うと、（1）は冷静に分析しながら見る（2）は、建前をそのまま受け取り熱狂する、その2つが一体となって見ているのがプロレスファンであり、アイドルファン…本著の主眼であるAKBファン。

プロレスとアイドルにハマったことがない人にはいまいち分かりにくいかもしれない。

映画を見ながら、人はそれが作り話と分かりながら、映画マニアなどはいろいろ分析しながら、恋愛映画にはキュンキュンし、アクション映画で悪者がやられるシーンにスカッと、ホラー映画で悲鳴をあげる。

事実として「嘘」「本当」はあっても、目の前で起こっていることには脳では嘘も本当も同じなのだ。

「分かっているながら・分析しながら、興奮する」ことは、映画その他でも同じ、特別なことではないが、プロレスとアイドルを一層深くしているのが、さきに述べたように、この「建前」が、オンとオフの区別なく「人間」そのものに建てられているということ。

プロレスとアイドルのこのような点を特異なものと表現したが、他のジャンルに比べれば、である。

つまり何がいたいかというと、他のジャンルに比べるから特異なのであって、これを我々の人生そのものに比べると、特異でもなんでもない。というより、人生そのものだ。

皆誰も、1人の、肩書も何もない「生身の人間」であることがまず第一にありながら、「課長」「先生」「お母さん」「〇〇君の恋人」「店員」「客」を、その時々相手に応じて使いわけ

ている。

そして、それを受け取る側も、課長が、課長である以前に〇×という1人の男であることを知っている。

△△先生が、偉そうなことは言っている、エロいことも考える1人の人間であることを知っている。

恋人関係などもそう。

お互いがお互いの役割を演じながら、お互いの幻想を守っている。

プロレスを「嘘」と表現する人は、ふだんはバカやったりしながらも、生徒の前では教育者としての威厳を持って熱心に指導する先生も、「嘘」と思うのだろうか？

アイドルが、握手会に来てくれたファンに対して笑顔で応じるのを「営業スマイル」という人にとっては、旅館の女将が心から客をもてなす態度もやはり「営業スマイル」とあると考えるのだろうか？

日本人にとって天皇陛下は天皇陛下である。

昭和天皇とか、大正天皇という尊称は御隠れあそばした後につけられたもので、今上の天皇陛下には、現在で言えば明仁という御名があるが、通常、国民が陛下のことを言う場合、「天皇陛下」である。

他国ではその地位にあらせられる時から「エリザベス女王」であり、「〇〇国王」だろう。

つまり、もう一度書くが、日本人にとって「天皇陛下」は「天皇陛下」である。

ある特定の個人ではなく、「天皇陛下」をおしいただき、敬愛しているのだ。

しかし、さりながら・同時に、まぎれもなく、天皇は1人の人間として存在し、国民も「天皇陛下」と言う場合、今上の陛下のご尊顔を頭に浮かべている。

先に、プロレスラーとアイドルの、他に比類なき特性についての説明を読んだ読者はもうお気づきだろう。

「建前」と「生身」が渾身一体となって、見る人に勇気や元気を与える存在。

天皇陛下とプロレスラー、アイドルを一緒にするとは何事か、と怒る人もいるかもしれないが、もちろん、一緒なわけではない。

天皇陛下をおしいただき、敬愛している日本人のメンタリティの素晴らしさが、プロレスが他に比類なきジャンルとしてここまで根付き、AKB48という新しいコンセプトのアイドルを「国民的アイドル」と言われるまでに成長させた、という1つの見方を提供したいのだ。

天皇陛下を敬愛する日本人の心はどういうものなのだろうか。

人間ではない神様、という敬愛のしかたではないと思う。（そういう人もいるだろうけど）

この国を支配している人間＝王様、ではもちろんない。

どこまでも血の通われた1人の人間でありながら、いや、であるからこそ、そして、国民の幸せをなんでも叶えてくれる万能の神、超能力者ではなく、大自然の前で、宇宙の下では自分達と同じ無力で弱い1人の人間が、常に我々の安寧と幸せを祈っている生身の御姿に敬愛の念を抱くのだ。

天皇陛下という役割を担っていただいていることに感謝し、押し載っている。

昔、「私、プロレスの味方です」の著者・村松具視氏が

「タイガーマスク＝誰々（1人の人間）」と認識しながら、しかし、タイガーマスクとして声援を送る少年ファン達は一種の天才ではないだろうか」

というような事を書いていた。（※3）

天皇陛下をおしいただき、敬愛するメンタリティは、これに通じるものがあると思う。

アイドルも同様。

キーワードは「生身の人間であり、同時に○○」

「自分達はその存在を支えている、押し載っている」

* 1 最近のプロレスは例外も出ている。顕著な例は、世界最大のプロレス団体「WWE」が、試合の打ち合わせ映像も含むドキュメンタリー映画を公表していたり、団体名も、以前の「ワールドレスリングフェデレーション」から「ワールドレスリングエンターテイメント」にし、ジャンルそのものも以前の「プロフェッショナルレスリング」から「スポーツエンターテイメント」にしたりしている。日本でも、建前は崩さないながらも興行のことを「大会」ではなく「ショー」と呼んだり、DDTのようにエンターテイメント色を前面に押し出している団体もある。

レスラー全体としてはあくまで建前は守っているが、昔に比べると、本音に近いところを語るようになってきているレスラーは多い。

* 2 プロレスファンには、建前を分かっているファンとそうでないファンがいる。その割合は分からないが、1つだけ確実に言えることは、昔に比べれば分かっているファンは急増していることである。何のデータもないが、著者の感触では、今は半分以上のファンは分かっている。コアなファンほど分かっている割合は高い。

※3 正確な文章は忘れた。こういう場合、人の言葉を引用するからには調べたうえで正確に再現すべきだろうが、少年時代、四半世紀ほど前に氏の言葉を読んで結果的にこういう言葉になって自分の頭に残った、ということが重要であり、その言葉を書かせてもらう。これもまたプロレス的である。

2 天皇、プロレス、AKBが攻撃される理由

天皇、プロレス、AKBに共通する特徴を挙げたが、同時にプロレス、AKBには、これを異様に嫌う、攻撃する人間が多いという共通点があり、天皇についても、（おおむね支持者の方が多いとはいえ）一定の反対論者がいる。

1つの理由としては、他にこのようなジャンルがない、なにがしかのジャンルに属さず、よく分からないものであること。

天皇について言えば、他の国にも王室はあるが、そのなかでも日本の皇室が特異な存在であることに変わりはない。

3者とも、生身の人間そのものに、それを支持する者がなんらかの意味を投影し、思い入れをもっている。

天皇について言えば、反対派も含め、その歴史や現在の在り方も分かっているとは思うが、プロレスとAKBについて言えば、ファン以外には、そのもの自体がなんだかよく分からない。

プロレスとは？

ショーなのかスポーツなのかよく分からない。という人も多いだろう。

また、ショーだから、という理由でバカにしている人達。

これは、全く分かっていないか、さもなくば、ショーというものそのものをバカにしているかだが、他のショーは特に蔑視せず、プロレスだけ蔑視しているのであれば、ショーというものそのものを見下しているわけではないわけだ。となれば、ショーではなく「八百長」と思っているからなのだろうが、八百長というのは、そもそも競技でなければ成立しない。

プロレスは、相手の協力がなければ成立しない技の応酬で成り立っており、そのことは少し格闘技をやっている人間には誰でも分かるものだ。いや、ロープワークやトップロープからの攻撃、空中技などは、格闘技をやっていないなくてもそうだと分かる。

つまり、ショーなのだ。ショーに「八百長」という言葉は成立しない。

つまり、ショーだ、あるいは八百長だという理由でプロレスを蔑視している人間は、プロレスのことは全く分かつちやいないのである。

AKBについては言わずもがな。

ファンでなければ、AKBの世界はなんだかよく分からないだろう。

（いや、AKBをバカにする人間の中には、なぜかかなりAKBについて詳しい者もいるようだが(・。・) 新しい情報も含めて。好きなことの情報収集をやるのは分かるが、なぜ嫌いなものを知りたがり語りたがるのか(笑))

プロデューサーの秋元康は、常識にこだわらず新しいものを生み出す思考の持ち主だ。（「秋元康の仕事学」」（NHK出版）など参照）

ジョーシキ外の大人数グループ（1つのグループというより、AKBというシステムであり、AKBというジャンルなのだが）そして、チーム編成、連日の劇場公演、よく出てくるワード「

選抜」「総選挙」、あるいは握手会のシステム、また、ヲタク用語の数々……これら全てがファン以外にはなんだかよく分からない。

(ファンにとっては、いろんなシステムが分かってくると逆に愛着がわいて好きになるのだが。)

これまでの常識に沿ったものの考え方しかできない者、既存のジャンルの楽しみ方…これはこういうジャンルで、こう楽しむんですよ～という既に定まったものでしか物事を捉えられない、楽しめないという者にはプロレスもAKBも絶対楽しめないだろう。

プロレス?…スポーツにはおかしなところあるし、ショー?う～ん、でも本人達は真剣勝負って言ってるし、身体的にすごいことはやってる……。で、社会で定められている概念に落とし込めずに消化不良をおこす。

プロレスはプロレスとして楽しめばいいのだが、ジョーシキに沿ってしか物事を考えられない者にとっては何か既存のジャンルの枠にはまってないとどうも気持ちが悪い。

AKB?…歌が上手いわけでない、ダンスもダンサーほどじゃない、アイドル?…のわりにはルックスもたいしたことないのが多いし、選抜とか総選挙とか研究生って何なの?

「これまでとは何か違うことをやっている」「自分達のこれまでのジョーシキの枠外のことをやっている」…そういうものは決して楽しめないし、それが人気が出てくるとなると叩きたくるのがジョーシキ大好き人間達。

2番目は

「インチキじゃねえか」「ただの人間じゃねえか」というもの。

彼らは、「建前」が「生身の人間」と違う＝インチキ、としかとれないのである。

映画、ドラマその他のショーであれば、映画で役者が演じていることと、その役者の素顔が違うことは受容できる。分かりやすい。

しかし、オンオフの区別なく幻想を守っているものについては、彼らはガマンできない。

彼らの考えでは、プロレスやAKBのファンは(また、人によっては天皇を敬愛している国民も)、建前をそのまま受け取っている＝騙されている、という見方なのだろう。

全く逆である。

バカにしている人間こそ、建前と生身の区別があることをしっかり認識せず、なんでも「ガチ」で受け取ることしかできない、貧しい感性の持ち主だから、建前の世界に生身の姿が見えた瞬間に「インチキだインチキだ」とはしゃぐのだ。

自分から見たら、いい歳こいて「サンタさんの正体はお父さんなんだぞ!」とドヤ顔で吹聴する困った人達である。

プロレスを見て、ロープから振られて返ってくる、トップロープからの攻撃を寝て待っている、相手の協力がなければかからない技の応酬etc…を見て、「だからプロレスって“やらせ”でしょ」と言う人。

ネットや週刊誌の暴露話で見たアイドルの整形疑惑や恋愛疑惑を自慢気に話したり、金にまつわる裏話を披露し、俺は芸能界、アイドルの実態を知ってるよとばかりに、ドヤ顔で話す人。

それはそれで構わないが、どちらも、自分は表面的なものではない深いところ見てるんだよという顔で話すのが、見ていて気恥ずかしい(笑)

それって、誰もが見てる・思ってる、浅いも浅い、1番表面の話だと思うのだが。

プロレス見て、「格闘技やってる俺の友達の〇〇ほうが強い」「俺のほうが強い」AKBの誰かを見て「俺の彼女のほうがかわいいよ」

なんの気ない雑談で言ってる分にはなんてことない会話だが、それをもって、プロレスorAKBを見下す感じで言ってる人には、ただただ苦笑するしかない。自分達がジャンルの本質に全く関係ない、極めてどうでもいい話をしていること、ひいては、プロレスのこともAKBのことも全く分かってないことを露呈している。

「んなこと、みんな知ってて楽しんでるんだよ(^_^;)」

知ってて楽しむ、と聞くと彼ら困った人達は、そうか、「生身の人間」が建前とは違うことに目をつぶって楽しむんだな、「割り切って」楽しんでるのか、と捉えるだろう。

つまり、彼らにとっては、どこまでも建前と「生身の人間」が違うことはマイナスとしてしかとらえられない、言い方を変えれば、建前と生身の人間が混然一体となっているタフで豊かなジャンルは理解できないのだ。

彼らには理解できないと思うが、建前と生身の人間の姿が違うことはマイナスでもなんでもないのである。

皇室を敬愛する人、プロレスファン達、アイドルファン達はそれに目をつぶっているわけでもなんでもない。

「天皇なんてただの人間じゃねえか」

そうです。

天皇陛下、ご皇族は常人とかけ離れた神様でなく、我々と同じ、自然の前では弱き人間だからこそ、その祈る姿に感動するのです。

「だから皇室は大切なのです」（篠沢秀夫 草思社）より要約して引用↓

「（陸軍の雨中の閲兵式で、檀上の足跡。昭和天皇の左右の2人は足跡は細かくギザギザで板はほとんど濡れていたのに対し、陛下の足跡はくっきり残り、その形の内側の板は全然濡れていなかった話、そのことを戦前、著者が少年時代に大人が話していたのを聞いた記憶）『偉いもんだよねえ、普通の人じゃないよ、やっぱり』と感心しているオヤジさんに、もう1人のオヤジさんが『だけど、神様じゃねえよ、神様だったら足跡つかねえもんな』と付け加え、皆で大笑い。」

「『現人神』という言い方を、戦後のマスコミでは、まるで、『戦前の日本の狂信的状態』、または『戦中の日本の強制的思想管理』の典型のように言うのが『報道人の基本常識』みたいに引き継がれて今日に至っているが、現実はこのオヤジさんたちの姿である。

『現人神』は天皇を崇めるための敬語である。『偉い人だ』という意味にすぎない。

戦後最初の元旦の、通称『人間宣言』には、六年生だったが、『陛下カワイソー、進駐軍に『人間です』って言わされてる。でも進駐軍ってバカみたい』と感じたものだ。

陛下が人間なのは誰にとっても当たり前だったのだから。そう、陛下もそう思っておられた。キリスト教的神と誤解した進駐軍がゴチャゴチャ言っているのを耳にした陛下は、御自分から進んであの勅語を出された。」

↑引用以上

プロレス、AKB、アイドルをバカにする人間の愚かさは、天皇に「人間宣言」をさせたGHQのバカさ加減に通じるものがある。

彼らにとっては、例えば映画の中はフィクションですよ、舞台の上はお芝居で、それを降りたら素の人間ですよ、あるいは、スポーツのように、これはこういうルールで勝ち負けを競ってますよ、という、と〜っても分かりやすい世界でないと安心して見てられない。

そうではない、オンとオフの境目が曖昧藻子とした世界に、自分から幻想にのっかったり、自分なりの愉しみ方を見つけたりすることができないのだ。心のキャパが狭いのである。

アイドルと自分の間に、疑似恋愛的幻想を、幻想と認識しながら楽しむ、という道楽を知らない。みんな幻想と分かっているのだ。アイドルのファンの中に、CDを買ってれば、握手会に行っていれば、そのアイドルといつか付き合えるようになると思っているファンがいるか？(笑) (まあ、そういうのもいるかもしれないが、少数のおかしな者のことまで言うなら、ど

のジャンルにもおかしなのはいる。)

ところが、全部を「ガチ」でしかとらえられない哀れな人間は、いつか付き合えるわけでもないのになんで1回10秒、千円の握手会に行くのか理解できない。それならキャバクラ行ったほうがわりがいい、となる(笑)

世間一般のイメージではアイドルの握手会に行く人間が弱冠危ないということになるのかもしれないが、それをバカにしているタイプの間人こそ、たとえ恋人や配偶者どうしてもお互い幻想を演じているということが分かっていない危ない人間じゃないだろうか。

プロレスファンとAKBファンの共通点=そのジャンルと自らすすんで「共犯関係」になること。

この世で1番強い絆は共犯関係。

そして、共犯関係とは、いったんその関係になったらなったら抜けられないものなんですよおおおおおおお！

(「共犯関係」という言葉の使い方、ならびに最後の絶叫は、週刊プロレスの往年の名物編集長・ターザン山本氏のそれを真似させていただきました)

3 「プロレス、AKBのファンは虚像を見ている」と見下す者こそが虚像を見ている。ファンが見ているのは実像

前項で、「全く逆である」ということを書いたが、このことは、もっと深く考えると、さらに興味深い問題だ。

AKBおよびそのファンをバカにする感覚の持ち主からすると、AKBを見てる人間は、アイドルという虚像を見て、ホントの生身の姿を見てないバカ、ということになり、俺達は虚像を見ずに、ホントの生身の姿見てるんだよ、ということになるのだろう。

繰り返すが、全く逆である。

彼らは、アイドルとは、お金のこと考えない、純真無垢、名誉欲も性欲もない…その他いろいろ、「アイドル」のあるべき姿＝彼らにとっての「ホントのアイドル」という虚像を見ようとしている。「ホントのアイドル」ならば、純真無垢そのものであって然るべき、という前提に立つ。

そして、それとは違う生身の姿が見えたり、週刊誌に書かれてたりするのを見た瞬間に、それらの姿は彼らが勝手に妄想している「ホントのアイドル」とは違う＝「嘘」となる。

そして、「ファンの奴らよ、ほら見ろ、〇〇ちゃんは男いるんだよ、引退した××はAVデビューしたよ、△△事務所はこれこれですぐに儲けてるんだよ」とアイドルが「嘘」であることをご教示して下さるというわけだ。

彼らの見てるものは「ホントのアイドル」にしろ、それとは違う生身の姿＝彼らにとっての「嘘」にしろ、両方とも虚像である。「ホントのアイドル」はあり得ない虚像。そして、生身の姿を彼らの妄想している「ホントのアイドル」とは違う「嘘」というおかしな目で見ている時点で、彼らにとっての「生身」も虚像。

AKBのファンは何を見ているか。

「アイドルであろうとする」「生身」の少女達の姿を見ている。

つまり、全く虚像は見えていない。彼らと違って。

虚像を見えていないから、生身の姿は「嘘」ではなく、人間らしいリアルな姿であり、本当の汗の匂いを感じ、魅力あり応援したくなる対象となる。

舞台やステージは虚の世界であることを分かりながら、生身の人間が虚を演じている姿、その歌やダンスを楽しみ、いろいろ悩みや葛藤を抱えながら頑張っている少女達の物語を見ている。

彼ら（バカにする人間）は、「アイドルであろうとする」の「であろうとする」を見ず、あり得ない「アイドルそのもの」という虚像を前提にする目の曇りから、そこから外れる姿＝「生身の姿」が「嘘」に見える。

AKBファンに「現実を見ろよ」と見下す彼らこそが、虚像を見ているがゆえに、現実＝あり

のままの彼女達＝アイドルであろうと頑張っている生身の姿という現実が見れなくなっているのだ。

AKBのファンは勝手に頭でつくりあげた虚像…まさしく虚像…でもものを見てないから、舞台、ステージという「リアルな虚像」をありのままに楽しむことができるのだ。
握手会なども「リアルな虚像」と言えるかもしれない。

この項のここまでの「AKB」は「アイドル」に変えてもいいのだが、夢見る少女達の成長物語を見せるというコンセプトのAKBで説明した方が、より明瞭だ。

実は、ここに説明したことを考えたのは、プロレスに関してだった。

現在はなくなってしまった「ハッスル」という団体（※1）

レーザーラモンHGやインリンオブジョイトイほか、多数の芸能人をレスラーとしてリングにあげ、おおがかりな演出で、誰の目にもエンターテインメントと分かる路線のプロレスを展開した。

ある人が、その興行を実家のテレビで見ていたら、親がどうもこれは見てられない、苦手だと難色を示したとのこと。理由として、そこで展開されるマイクアピール（※2）が「見てられない」そうなの。

その親は、ハッスルに限らず、プロレスはショーと認識している、とのこと。それなのにマイクアピールを「見てられない」とはどういうことなのだろう？（・。・）

かつて自分もそれと同じ経験をした。

自分がWWF（アメリカの、今や世界一の規模のプロレス団体WWEの昔の団体名。ハッスルもおおいに参考にしたと思われる、大規模にショーアップされたプロレス）のビデオを見てた時のこと。

ちょうど画面は、テーマ曲が流れる中、リングでハルク・ホーガンが試合後の恒例の、ボディビルばりの筋肉ポーズを四方に披露しているところだったのだが、ある人がそれを見て、苦虫を踏みつぶしたような顔で、不思議でしょうがないというように「何してんの？」と聞いてきた。

自分は普通に「観客にポーズでアピールしている」とありのまま答えたのだが、それでも「何してんの？」という苦虫顔は治らなかった。

その人も、普段からプロレスはショーだとさんざん言っている人である、自分と違い、「ショー」を見下す意味で使っていたが。

これらは一体、どういうことなのだろうかと考えてみた。

プロレスはショーだと認識しているくせ、マイクアピールやポージングなどの様子を不思議がり、見てられないと言う。

それこそが不思議だ。

それを考えていくと、結局、彼らは、プロレスをショーとは認識していないのである。

「ガチンコ」と認識しているからこそ、思い切り観客に向かってポーズをとっているところや、

観客に分かるようにマイクアピールしているところを見ると顔をしかめたり、「見てられない」ということになる。

「ガチンコ」という虚像を勝手に見ようとして、それとは違うところは「嘘」と認識して見る。だから「見てられない」ことになる。

「ガチンコ」も「嘘」も、彼らが勝手に自分の色めがねをかけて見た結果の虚像である。

プロレスファンは違う。

虚像などみていない。

ありのまま、身体を張って「プロレス」をしているところを見ている。

彼ら（＝プロレスを見下す人達）が色メガネをかけて虚像を見ているがゆえに見えない、「プロレス」の技術（＝格闘術ではなく、「プロレス」の技術。ロックアップや、アームホイップなど序盤のお決まりのムーブなど…プロレスを知らない人に分かりやすい例を挙げると、世間が「嘘」と見下す、ロープにふられて跳ね返ってくる動き1つとっても技術がある）、とその奥深さ、身体を張って「真剣にプロレスをしている」プロレスラーの「本気」、感動がそのまま見える。お金を儲ける興行だから「嘘」という、商売嫌いの人達の不思議な色メガネもかけていないので、彼らが見えない、仕事を終えて花道を引き上げていく大きな背中に漂う大人の色気もそのまま感じられる。仕事、興行だから漂う大人の匂いである。

「天皇陛下なんて、ふつうの人間じゃねえか」

「神話なんて嘘だろうが」etc…。

神話という物語を背負い、天皇というお役目を担っていただいているのが天皇陛下。生まれた時から否応なくそのお役目を背負われ、ご公務や、肉体的負担の大きい祭祀を日々行われている御方である。

勝手に「神話」がガチだとか、天皇は神様そのものという虚像を設定したうえで、それが「嘘」だからと批判するのは、プロレス、アイドル批判の構造そのものである。

※1 その流れを汲むハッスルMAN'Sワールドという団体が小規模ながら存在している。

※2 プロレスの試合前、試合後にマイクを持って、相手への挑発や観客へのアピールをすること。アメリカンプロレスでは昔から喋りも重視されていて、マイクアピールの上手い下手もレスラーの実力の1つとして重要視されていたが、現在は日本でも、マイクアピールのない興行など皆無とっていいほど、プロレスの重要な小道具となっている。

大仁田厚は、マイクアピールの上手さもあって、弱小団体からメジャーな存在になった。

余談だが、かつて、女お笑い芸人のまちゃまちゃがお笑いネタ番組「エンタの神様」で「摩邪コング」というキャラクターで、プロレスラーのマイクアピールをモチーフとしたネタでブレイクした。ウィキペディアによると、彼女は女子プロレスラーのさくらえみと小学校の同級生だそう

である。

4 アイドル、プロレスファンこそ現実を直視している人間

アイドルにハマっている、握手会で言葉を交わして喜ぶ、プロレスが好き、こういう人間は、世間一般ではそれらの「嘘」に騙されている、という見方をする者が多い。

そんなものの「嘘」を「本当」だと思っているおめでたい人間だと。

全く逆ではないか。

おめでたいのは彼らのほうである。

例えば、アイドルの握手会での笑顔の対応をことさらに「営業」「嘘」という者は、裏を返せば、ふだん自分達が日常で交わしている言葉は「本当」だと思っているのであろう。

アイドルの笑顔が「嘘」なら、あなたが恋人に言われる「愛してる」は、「本当」なのか？

プロレスが「嘘」なら、新聞・テレビ（＝記者クラブマスコミ）の報道によって映し出しされている我々の社会の姿は「本当」なのか？

彼らは、それらが「本当」だと思っているから、本当と嘘が重ね合わさっている、つまり我々の社会、人間関係そのものを凝縮して見せているようなアイドルとかプロレスの世界をことさらに「嘘」と攻撃したくなるのだ。

それに引き換え、この社会、人間関係のホントとウソの姿を十分認識している者は、その雛型のようなアイドルやプロレスの「嘘」（自分はそれを「嘘」と言うのは違うと思うのだが、アンチプロレス・AKBの言葉を借りて表現した）も呑み込んで楽しむことができる。

「『嘘』と割り切って楽しむ」とかいうことではない。それは誰だってできる。だから、最初から「嘘」が前提のテレビドラマ、映画は誰だって楽しむことができる。

「割り切る」のではなく、むしろ、「嘘」があるからこそ、豊かで、人間くさく色気があり、熱狂できるのだ。

5 天皇を存続させた日本人のメンタリティが日本のプロレス、アイドル、AKBを生んだ

アイドル、というものの起源を考えていくと…実際に日本の歌謡史に照らし合わせての詳細は「アイドル進化論 南沙織から初音ミク、AKB48まで」（太田省一 筑摩書房）という本など参考になるかと思うが、同著を読んでみたうえで、自分の考えた、非常にざっくりした“アイドル”の起こりとは…。

数多い歌手の中で、若い、容姿端麗な歌手を見る視線のなかに、歌そのものではなく、いや、歌も含めて、歌っている人間そのものに対してのある種の目線があることに人は自然と気付く。

（そこには、歌い手の姿を見せながら聴かせるテレビの普及が大きな役割を果たしている）

そこで、歌を歌うために歌手を用意するのではなく、歌手を魅せるために歌を用意するという発想が生まれる。

歌手を、役者に変えてもいい。演技力より、役者その人を憧れの異性と見る目が存在し、舞台の構成要素の1つとして役者がいるのではなく、その役者の女として、または男としての魅力を魅せるための舞台。

~~~~~

『17才』は、南の実年齢に合わせて企画されたものである。

当時、担当プロデューサー酒井政利は、「南沙織のプロデュースに関しては、このデビュー曲もそうであるように、私小説的な作りを一貫させてゆこうと私は考えていた」と述懐している。わかりやすくいえば、『17才』という曲が先にあってその内容にぴったりくる実在の少女が探されたわけではなく、そのような少女が先にいたから『17才』という曲がつけられたのである。それは歌謡界における1つの発明だったといえるだろう。

（中略）

（従来の）歌手は、楽曲の中の役割を理解し、それをうまく表現することが求められた。ほんとうはまだ独身であっても、楽曲が夫婦の仲を歌ったものであれば、その役をそつなく演じ、それらしく聞かせることが必要だったのである。

酒井が南に対してもくろんだのは、それとは逆のことである。南沙織という、まだ10代の“成長途上”の少女が持つ役割をそのまま生かすこと、それが楽曲の役割であり、曲の中の主人公は「私＝南沙織」である。つまり、作品という虚構の世界に歌手が入り込むのではなく、むしろ作品を歌手の実人生に寄り添わせること、それが酒井のいう「私小説的な作り」ということだろう。

「アイドル進化論 南沙織から初音ミク、AKB48まで」（太田省一 筑摩書房） 24～25ページより引用

~~~~~

「若い異性を見る目」に対して歌手という“作品”を提供する時、そこには当然、恋愛の歌が多くなる。

そして、歌の上手さへの比重は軽くなる。

時には、下手さがそのアイドル歌手のかわいさや成長途上の感じを見る者に与えるには好都合かもしれない。

アイドルという言葉自体はもちろん英語で、欧米にもアイドルと呼ばれるアーティストは存在するが、日本でいうところのアイドルとは違い、「偶像化」されていることを指すようで、エルビス・プレスリーやビートルズも、初期にはアイドルと呼ばれていたようである（←ウィキペディアの情報）

日本で呼ばれる“アイドル”は、歳若く、見た目がセールスポイントで、えてして歌唱力などの実力が伴っていないというイメージを持たれている言葉である。

実際、70～80年代のアイドル創世期の頃のアイドルにはそれが顕著だったと思う。

そして、欧米にもいわゆる、日本で言うところの“アイドル”に近いものとしてカテゴライズされているグループはあるが、日本のそれと比べれば、歌唱力は高いように思う。

向こうでは、歌手として売るからには、最低、これくらいの歌唱力はないといけないという通念があるのだろう。

このことから日本と欧米を比べた感想を述べよと言われれば、欧米はプロ意識が高いな～、厳しいな～、それに比べて日本は甘いな～、レベル低いな～、と語る人が多いと思うが、自分は逆である。

“アイドル”という、その人そのものを異性として憧れて見る目があるなら、その部分を切り離し、それに特化して見せる。その、“切り離し”、特化する、歌というジャンル本来の定義から柔軟に飛躍する頭は、素晴らしいと思う。

海外からなんでも取り入れて、自分たちの使い勝手のいいようにアレンジしてものにしてしまう日本人の特性と根っこでつながっているのではないだろうか。

蛇足だが、アイドルの歌唱力やダンスのレベルは、70～80年代以降、格段にあがっているように思う。

日本人の柔軟性を讃えたばかりだが、昔のアイドルの歌唱力は、人によってはあまりに低すぎたのは確か(笑)

上手いにこしたことはない…というか、通常の上手さではなく、アイドルとしての魅力を表現するための上手さ、というものも有りうべきものだろう。

そして、ルックスが良い少年少女を、ある程度の商品にしあげて売り出すのではなく、アイドルを見る視線の中にある、その成長を見て行く視線、楽しみ方にスポットライトを当てたのがAKB。

「歌手は、歌を聴かせるもの。歌の実力が必要」

これは正論で当たり前だが、その当たり前のことに固執してはアイドルというジャンルは生まれなかった。

そして、アイドル誕生後、

「アイドルはルックスが良くなければいけない。アイドルとして完成されていなければいけない。」

という発想に固執しては、決してルックスが抜群とはいえない少女達も集めてアイドルとして成長していく過程をそのまま見せるAKBというジャンルも生まれなかった。

発想が、常に、見ている側の意識をまっすぐに捉え、従来の定義にこだわらず、柔軟に形を変えさせることができる。

ある面では、前例にこだわったり、従来の常識から自由になれないのが日本人の短所だが、一方、このような、アイドル、AKBを生み出した柔軟さも同時に持ちあわせている。

プロレス、この他に比類なきジャンルがどういうふうに成立していったか。

その歴史的経緯については、「リングサイド プロレスから見えるアメリカ文化の真実」(スコット・M・ピークマン 早川書房)に詳しい。

おおざっぱにまとめてみると。

はじめはレスリングのプロとしてのプロ・レスリングの興行があった。

ガチンコである。

レスリングをそのままプロとしてお金をとって見せたのではなく、日本の柔術からとり入れた道着を着たり、同じく柔術から関節技をとりいれたり、いろんな試行錯誤の歴史がありつつもとにかくにもガチンコの格闘技であった。

それが、地方をまわるサーキットから徐々にガチンコではなく、一種の馴れ合いが生まれる。アメリカでは、大きくて力自慢の男はゴロゴロいるため、そういう男達の挑戦を受けて金を稼ぐという事も行われ、その際、挑戦者が現れるように、プロどうしの試合では、どちらかが一方的に勝つのでなく、「あいつになら勝てるんじゃないか」という思いを力自慢達に思わせるため、一進一退の攻防を演じるようになり、そのための基本技術のようなものも生まれていった。

当然、名乗りをあげてきた腕に覚えのある男達には、ガチンコで勝たなければいけない。

また、当時は、ガチンコだった頃の空気が色濃く残っており、ワーク（業界用語でいわゆる、通常のショーとしてのプロレス）のつもりでリングにあがってもシュート（ガチンコを意味する業界用語）を仕掛けられることも多々あり、中にはタイトルマッチでそれをやられ王座が移動するということもあったという。

若手時代、アメリカ武者修行中のアントニオ猪木が、対戦相手の眼球をえぐり出すという事件が起きているが、詳細は不明なれど、敵国日本人に対する差別でシュートを仕掛けられたのに対して猪木が、そうやって応じた可能性もある。

そのような事もあり、当時のプロレスラーは、ワークとしてのプロレスの技術を持ちつつも、シュートの技術ももっていた。（現在も、それが無いというわけではないが、使う機会は滅多にない）

ルー・テーズが長きに渡り世界王座を保持し一時代を築いたのは、スターとしての華を持ち、ワークとして観客動員が出来、プロモーターの言うこともちゃんと守る一方、もし仕掛けられても大丈夫なシュートの強さも持っていたからだという。（「リングサイド プロレスから見えるアメリカ文化の真実」（スコット・M・ビークマン 早川書房）

昔のプロレスは、今から見ると派手な技も少なく、シュートの名残も色濃く残っており、悪い言い方をすればジャンルとして確立していない、エンターテインメントとして成熟していなかったと言えるが、独特の、虚実入り混じった渋い男達の匂いが歴史書の彼方から匂ってくる。

そこからさらに、エンターテインメントとして成熟していく過程には、派手なギミックで自らのキャラクターを演出したゴージャス・ジョージの登場や、大規模な会場演出とそれに基づくストーリーラインで全米を制覇したWWFのプロレスなど、様々なエポックメイキングを経て今日のプロレスまでたどり着いていて、時代ごと、また団体ごとに同じジャンルでくくっていいのか疑問なほど、様々なプロレスがあるのだが、それを書くとならだけで1冊の本になってしまう。

ここでは、本著の主眼である、「日本」に入ってきたプロレスは、日本人によってどのように変化したか、を書きたいと思う。

これもまた、その変化をたどっていけばそれだけで1冊できるので、本質的な事を述べるにとどまりたい。

力道山の空手チョップからブームが始まったせいもあるのか、打撃技の当たりがわりと強いとか、アントニオ猪木からUWFへと引き継がれた“格闘技”色を出した路線からグラントのガチのテクニックをプロレスの流れの中に織り込んでいるとか、その他技術的なことはいろいろあるだろう。

が、ここではもっと本質的なことに触れたい。

日本のプロレスの特色は、「プロレスを見ている者がどういう環境の中で、何を意識し考えて見ているかという、見る者の全てを受け止めたうえでのプロレス」

そう聞いても、何のことやら分からぬと思う。

それを説明するのに、まず、アントニオ猪木が「プロレスに市民権を」と言いながらやっていたプロレスを挙げよう。（市民権…なんだか非常にこっぴどかしい言葉と感じるのは自分だけだろうか？(笑)）

まあ、今でもプロレスを見下すむきはあるが、その昔はもっとひどかった。

（今は、かなりの人が、プロレスを1つのエンターテインメントとして捉えていて、八百長だ云々と攻撃する手合いは少なくなっている）

その、プロレスファンであることを言えば人格を疑われるくらいの空気のあった頃、猪木は「プロレスに市民権を」と言いながら、言葉と行動でプロレスをしていた。

まず、「プロレスこそ最強の格闘技」と堂々と主張。

プロレスファンもそれを信じ、会場にはいつも「燃える闘魂 世界一強いアントニオ猪木」というオレンジ色のノボりを振り回しているおじさんがいた。思えばいい時代だった。あのおじさん、どうしてるだろうか。

それへの反論も、「いや、空手が最強だ」とか、「アリのパンチが入れば猪木なんか一撃だ」とか、なんともかわいいというか、そういう反応をしている時点で猪木の手の平のうえに乗っているわけである。少なくとも「プロレスは格闘技」と認めていることになるのだから。

2011年、「プロレスこそ最強の格闘技」と信じているプロレスファンは、絶滅危惧種に指定され、見かけたらへたに興奮させることなきよう、そっとすることが義務づけられている。

今、「プロレスこそ最強の格闘技」と誰かが言ったら、最強かどうかの以前に、敵味方なくほぼすべての人が??顔になった後こう言うだろう「…プロレスって、格闘技じゃないでしょ？」

しかし、昔は違ったのだ。そこまで「分かって見てる」ファンは少なかったし、プロレスファンは「プロレスは真剣勝負。強い」と信じ、世間一般は「プロレスは八百長」と蔑んでいた。つまり、プロレスラー以外は少数の人間しか、プロレスが何なのか、全く分かってなかった時代だった。

そのような時代に、そのようなプロレスファンの思い、視線を認めたくえに、アントニオ猪木は「プロレスこそ最強の格闘技」「プロレスに市民権を」を唱え、「異種格闘技戦」を行い、様々な格闘技の選手を次々に撃破、その天才というより鬼才というべきプロレスセンスと相まって、プロレス界のカリスマになった。

プロレスのリングで行われる「異種格闘技戦」とは、そういう名前の「プロレス」である。

あがってくる格闘技の選手はプロレスの基本技術はないため、ふつうのプロレスとは違うが、結果は決まっているという意味において「プロレス」だ。

いわば、猪木は「『プロレスこそ最強の格闘技』を唱えながら『異種格闘技戦』で異種格闘技の選手を破る」という「プロレス」をしていたのだ。

猪木が他のプロレスラーと違ったのは、「 」の中（ここでは「『プロレスこそ最強の格闘技』を唱えながら…」）の、ストーリーライン、テーマのスケールが格段に大きかったということだ。

通常は、「誰のタイトルに誰が挑戦を表明し、それに向けての前哨戦」とか、「誰と誰が仲間割れし、その遺恨決着」など、あくまで団体内、あるいはいいとこプロレス業界内の世界での

ストーリーラインのフィールドを、猪木は社会全体にまで広げて展開した。

モハメド・アリとの異種格闘技戦など、全世界をフィールドにしたプロレスだった（アリ戦は真剣勝負だったという話もあるが、そうであったとしても、この試合は広い意味におけるプロレスである。（※1））

異種格闘技戦だけではない。

古くからのプロレスファンならば、猪木の生い立ちを話せと言われれば、皆、宗教信者達がその開祖の物語を諳んじるかのごとく、軽やかに語るができるだろう。

「なんでもいいから日本一を目指せ」と説く祖父に育てられ、砲丸投げを始める。14歳で一家そろってブラジルに移住する船旅で太平洋上で急死し海に葬られる祖父を甲板から涙で見送る。ブラジルでは、エスペランサ（ポルトガル語で希望の意味。ここから後に、古館伊知郎が若手時代の高田伸彦を「青春のエスペランサ」と名付ける）と名付けられた農場で塗炭の苦しみを味わいつつ、兄とともに陸上競技会に優勝し、日系人兄弟が揃って優勝したことで大きく新聞に載ったのがブラジル遠征に来ていた力道山の目にとまり…。

ウィキペディアを見ながら打ったんだろうと思われるだろうが、誓って何も見ていない。昭和からのプロレスファンとして当然のように頭に入っている。もっと細かいエピソードも織り交ぜながら書けるが、省略して書いたくらいである。

こういう苦労した生い立ちをベースにして、猪木は自分の人生の「逆境」をストーリーにした「プロレス」を展開していった。

少年時代からの苦しい生い立ちから、プロレス入門後は、同期で、恵まれた体格に元巨人軍という経歴のジャイアント馬場が早くから期待されて、当時のエリートコースだったアメリカ遠征に先に行かれたのに対し、力道山の付け人として理不尽に殴られる日々を送っていた、という状況がファンに認知されていた。力道山の死後、その「エリート」のジャイアント馬場に挑戦を表明。当時は日本人vs外人という図式が当たり前だったので、その掟破りの勢いの良さと相まって、猪木人気急騰した。

その後、幹部の腐敗を追及したがために日本プロレスを追放され、新日本プロレスを旗揚げ。自分は関係者ではないので、追放の真実は知らない。ただ、真偽はどうあれ、正義を追求したがゆえに追放されたということが「アントニオ猪木」というストーリーで重要なのだ。ファンはその逆境のプロレス人生を、猪木が歯をくしばって展開するプロレスに重ね合わせて支持し、猪木もそういう視線を十分意識したうえで、それに合わせたプロレスを展開したはずだ。

そして、金も潤沢でなく、有力が外人招聘ルートもなかった猪木がさかんに唱えたのが「ストロングスタイル」だった。「本当に強い者が勝つプロレス」である。

「シュートでは強いが、ショーマンシップを嫌うがゆえにアメリカプロレス界で孤児になった」という触れ込みのカール・ゴッチと旗揚げ戦のメインでシングルで対戦。

本来ならあり得ない、旗揚げ戦のメインでエースが負けるというプロレスを行う。もちろん、シュートでやったわけではない。そういう「プロレス」をやり、「ストロングスタイル」というストーリーをスタートさせたのだ。

その後も、猪木は「ストロングスタイル」を標榜し、ライバル団体だった全日本プロレスとそのエース・ジャイアント馬場をことあるごとに挑発し、新日本プロレスは「ストロングスタイル」全日本プロレスはショーマンスタイル、というイメージを浸透させていくと同時に、プロレスの内容にも、ガチンコの関節技や寝技のテクニックを織り交ぜたプロレスを意図的に展開していき、「ストロングスタイル」という名の「プロレス」を続ける。

つまり、今ほどプロレスがエンターテインメントと認知されておらず、見ている側の、プロレスとは真剣勝負なのかショーなのかという曖昧な視線をそのまま、プロレスに生かしたのである。

これも、「プロレスこそ最強の格闘技」と同じく、見ている側の視線をそのまま生かし、巻き込んだストーリーであり、そこにファンなら誰もが知る猪木の逆境の人生に対するシンパシーも加味されて、それが金曜夜8時に全国中継され、まさに日本中を巻き込んだ新日本プロレス黄金時代が到来した。

いや、猪木の生い立ちや、新日本プロレスがテレビもない資金も貧弱な状態でスタートしたことは真実であり、実際にはどうかは不明だが、おそらく猪木が馬場よりもガチンコなら強いという自信を持っていたことも真実であり、どこの団体よりもきつい練習をしていたというのもおそらく本当であり、もはや、ストーリーという言い方さえ適当ではない。

本当であり嘘であり、虚実が入り混じり、「生身」と「建前」が混然一体となった究極のプロレスだったといえるかもしれない。

その後、「プロレスに市民権を」という「プロレス」は、「スポーツライクなプロレス」を標榜したUWF引き継がれていった。(UWFもまた、ガチンコをやっていたわけではなく、そういう「プロレス」をやっていたことは多くのファンの知る通り)

また、大仁田厚は、怪我による若くしての1回目の引退、その後の事業の失敗という実の人生での逆境からはいあがろうとする姿に、リング上ではいつくばり、マイクで涙ながらにこの団体を潰さないと叫ぶ姿を重ね合わせさせるプロレスで大ブレイクした。

5万円の資金で団体を旗揚げしたという実話を語り、有刺鉄線や電流爆破を使ったデスマッチ、そして涙のマイクで一般層にも有名になった。UWFとは対照的なプロレスに邁進し、「俺はプロレスが好きなんじゃ」と叫んだのも、大ブームだったUWFの「スポーツライクなプロレス」にそれこそ胡散臭さを感じ嫌っていたプロレスファン(筆者もその1人)の思いを取り込んだからである。(取り込んだというより、大仁田自身がそういうファンと同じ思いを抱いていたかもしれない)

UWFと大仁田厚、プロレスのスタイルは正反対ながら、一般メディアに多数露出し有名になったことは、世間を巻き込んだプロレスをやっていたからである。

長々と猪木やUWF、大仁田のプロレスについて書いたが、彼らのような大ブームを起こした、また、カリスマと呼ばれるようなレスラーは、プロレスをやる際に、プロレスの枠内でものを捉

えないのである。

プロレスを見ているファンの目、そして世間の目、さらには、そのような世間の目（偏見）の中でプロレスを見ているファンの目、そういう視線をすべて織り込み済みで、とりこんだうえでのプロレス。

村松友視氏の言葉を借りれば、「プロレス内プロレス」ではないのだ。

猪木、UWF、大仁田とそれが顕著な例を挙げたが、他のレスラー、団体にも、多かれ少なかれ、人生をプロレスに持ち込み、虚実入り混じりの重厚なプロレスを見せてくれたレスラーはたくさんいる。

アイドルもそうではないか。

歌謡界が、歌のことだけを考えて、その上手さや表現を考えているだけならば、アイドルという存在は生まれなかった。「プロレス内プロレス」ならぬ「歌 内 歌」であったならば、そこからのジャンルの広がりはなかったろう。

歌手に向けられている、ある視線に気づき、それをとりこんだゆえに、アイドルという存在が誕生した。

そして、AKBは言わば、アイドル界のアントニオ猪木である。

他のアイドルのファンも、そのアイドルのデビュー時からの歴史は勉強しているだろうが、AKBのファンにとってAKBが歩んできた歴史は、AKBに向けている視線と切っても切り離せないものであり、それなくしては語れないものである。

劇場でデビューしてから客席が埋まらない日々が続き…から始まるその歴史を見てきたから、あるいは後追いでもそれを知っているから、よけいに彼女達の汗が輝いて見えるのだ。

AKBに向けられてきた、あるいは今も向けられている、秋葉原が拠点なゆえの、オタクの街のアイドル=きもい、というような偏見がありながら頑張って国民的スターになってきたストーリー。

しかし、偏見がありながら、と同時に、偏見があったから、ファン達はその偏見とも闘いながら頑張る姿を、よけいに応援したくなったのではなかろうか。

そう、プロレスを見下す目、その中でプロレスを見ているファンの目を意識し、「『プロレスに市民権を』という『プロレス』」を展開したアントニオ猪木と同じように。

AKBの場合、それが意図的であったかはともかく、偏見があるからこそ、いったんハマった者は、AKBファンというアイデンティティをいやがうえにも持つことになり、応援にも力が入るのだ。

日本の歴史において天皇の起源は諸説あり、ここでは触れないが、とにもかくにも、摂関政治～武士の時代へと進む中で、権威と権力の分離が起きた。政治の実権は摂政・関白なり将軍なり、内閣なりが持つが、天皇の権威のもとに形のうえでは天皇がこの国の頂点、というものだ。

そして、その権威が、公平無私、ひたすら国民の安寧を祈り日々祭祀を行う存在であること。
この形は、素晴らしいものだ。

理由を挙げよう。

・ 独裁者が生まれにくい。

権力者と権威が一体とならないことで、ヒトラーや金正日のような独裁者が生まれにくい。

・ 皇室外交

権力者と権威が一体、つまり大統領のごときものであれば、外国との親善外交の際、任期によって変わる大統領どうしの外交では、未長いトップどうしの親善にならない。

また当然、なにがしかの政治信条、イデオロギーを持っている者どうしであるから、親善が目的であっても、そういう思惑がぶつかる。政治の流れと無関係の皇室どうしであれば、親善ということではうまくいく。

・ 象徴の役割

国の歴史、文化を体現する象徴はその時々特定の政治信条、利害を持った者よりも公平無私で党派によらず、国民の幸せを祈る存在であったほうがいい。

行事等でのお祝いを述べるのが、あるいは被災地にお見舞いに来るのが何か特定の党派、考えを持つ政治家であった場合、彼の考えに与しない国民は慰められない。

(まあ、天皇制廃止を願う左翼の国民だけは天皇が来ても嬉しくはないだろうけど、それ以外の国民は。)

権威と権力の分離がどのように起こったのかも、研究者によっていろいろあるかもしれない。

が、とにかく、日本においては世界に類を見ないほど古い時代から、天皇そのものを倒し新しい王朝をつくるのではなく、天皇のもとに権力者が実権をめぐった争い交代し今日まで来たことは確かだ。

この、権威と権力を分ける発想、柔軟さは、「権力を持つ者が権威をもつべき」という硬直した発想からは出てこない……これは、歌の「実力」にこだわらず、欧米のようにアイドルであろうが歌は上手くなければいけないという硬直した発想に陥らず、若い歌手を主人公とした“アイドル”を生みだし、そこからさらに、ルックスの良さでもなく、努力の過程やその「人間」を見ようとするAKBのようなシステム、あるいは全ての視線を受けとめたうえで独特の発展を遂げたプロレスを生み出した日本人のメンタリティにつながっていると思うのだ。

※1 本著では、プロレスという言葉をもっと具体的で分かりやすく、ショーで定義しているが

、プロレスという言葉は、筋金いりのプロレスファンにはもっと大きく定義され、用いられている。

ショーという定義の仕方に異論があるプロレスファンもあろうが、基本的に本著は、プロレスを知らない人、さらに言えば見下している人を読者に想定している。そのような人を相手にしている場合、その定義は分かりやすく具体的なものにしないと、理解は得られないだろう。

猪木ーアリ戦を、真剣勝負であってもプロレスだとする捉え方は、かつてボクシングの名勝負、辰吉vs薬師寺を見た後に村松友視氏が言った名ゼリフ「辰吉と薬師寺には久しぶりにいいプロレスを見せてもらった」という言葉がすんなり頭に入る“プロレス者”には説明不要だろうが、そうでない人にはピンと来ないかもしれない。本著ではそこまでの説明には踏み込まない。

6 AKBの核・劇場公演とは？

AKBとは一言で言えば何か？と、AKBヲタクに問えば、その答えは様々だろうが、自分は（またおそらくはかなりの数のヲタクも）「AKBとは劇場公演である」と答える。

とにかく、それを初めて体験した時は「衝撃」である。

自分だけではない。

多くの人がそれを初めて体験した時の衝撃を語っており、スタート直後からの古参ヲタ達が初めて劇場公演を体験した時の衝撃を綴ったブログが「48現象」（ワニブックス）に掲載されている。

「ゴーマニズム宣言」の作者、漫画家の小林よしのり氏も、劇場初体験を「衝撃」という言葉で表現している。

ここではまず、自分が生の劇場公演を初めて体験した時（ひかりテレビで週5回放送しているので（※1）、テレビではいつも見ていた）にSNSにアップした記事を紹介する（2012年3月20日、チームB夜公演）

【AKB劇場公演初体験の衝撃&AKBをクソ真面目に語る】

ようやく当てた劇場公演、チームB「シアターの女神」公演3／20、19時の回。

初めての劇場公演…アキバのジョナサンで過ごしてその時を待つ間も緊張した。

自分が出演するわけではないのに（当たり前だ）、まだAKBという世界にハマってから1年弱の「ド新規」の自分には、後追いで学習したAKBの創世以来の歴史は実体験ではなく頭の中で展開された物語なだけに、肥大化されてすごいことになってる。

そのすごいことが展開されてきた聖地に足を踏み入れる…それだけで唇が渴き心臓が高鳴り、手足がちょっと遠いところにあるように感覚が薄くなる。

劇場チケットの入手、入場順の抽選などが、体験してみた今となってはなんてこともないが、弱冠複雑なこと、そのジャンルのコアな場所、コアな人達がいる場所に初めて1人で足を踏み入れる心細さも相まって、完全な小市民モードで、オドオド、ドキドキしながら手続きをすすめ、いよいよ劇場いり！

入場は7～8巡あたりで、事前に、先日知り合った60回くらいは劇場で見てるというマイミクさんに電話で相談してアドバイスしてもらったことを頭に入れつつ席を探るが、前の方、セン

ターのあたりは埋まって、上手の1番センターよりで1番後ろという席に座る。

そこらへんに座るなら立見でセンターのほうが良いと言われてたのだけど、よりによって、1年ぶりの風邪を2日前にひいてしまい、治りかけでまだしんどかったので座ることを選んだ。みゃお（※宮崎美穂）をたくさん見たかったらセンターの上手寄りがいいというアドバイスを参考に、それはとれなかったけど、上手のセンター寄りにしたのだ。

やはり、2本の柱は邪魔だ(笑)

ふつう、これがある時点で、ここを劇場に使うのはやめようとなるだろうが、秋元康が話してたとおり、柱の存在が、この公演で〇〇をより見たいならこのポジションだとか、公演見てて、柱を境にメンバーが消えたり現れたりとか、1つの世界が出来上がって、楽しい(^_^)v

1番後ろとはいえ、めちゃくちゃ近い。ふつうに目を見て話ができるような距離。

この近さがAKBという世界のうえで圧倒的な意味を持つてることが分かった。

もう、チケット取るのが何百倍という抽選倍率なんだから、ファンのためにも経営的にも、もうちょっと大きいところに引っ越せばいいのにと感じてたが、支配人が、「今の近さから来る密度が失われる」（「48現象」（ワニブックス））と言う理由で引っ越さない理由も分かった。

姉妹グループも、AKBがこれだけブームなうえに出来て行ってるのだから、最初からもっと大きな劇場にした方が営業的には絶対いいはず。（実際、SKEやNMBも抽選倍率高くて中々見れないらしいし。）ブームが去れば、小さいところに引っ越せばいいのだから。

自分はこれまでのAKB、乃木坂のライブ、イベントで、サイリウムを振る楽しさを憶えてしまい、「アイドルについてヤイヤイ文句言うやつは、現場でサイリウムを振る楽しみを体験してみろ」と思うほど絶対的なアイテムで当然この日も満を持して持参していた。

小さい劇場でのライブ…ライブハウスでテンションあげあげで楽しむような感覚を想像してたので、よけいに気合いを入れていたのだが…。

予想に反して、これはサイリウムいらないな、と思って途中でやめて手拍子にし、さらには手拍子も特別にリズムにのりたくなるようなところだけにしてしまった。（mixは打ったし、拍手はしたし、コールもところどころ他の観客と一緒にしたけど^^）

ノリノリで振ったり手を叩いたりではなく、もう、見入ってしまう感じ。

少し体調が悪かったこともあるかもしれないが、目の前できらびやかな衣装で歌い踊る少女達の1人1人に吸い込まれていく感覚。

なんか、おっさんが少女達に見入ってしまうとか書くと「いやらしいわね」とか思われそうだが、そういう感覚ではなく！、異性を見る目とか抜きにして、「人間」がそこにいる圧倒的な存在感。

ノリノリで楽しむモードから、なんというか、見入って批評家スタイル的な楽しみ方になって

いた。

プロレスを見る時の自分と似たモードになった。

プロレスはもう30年見てるし（学生プロレスなるものもほんとに端くれで大したことはしてないけど一応やったこともあり）、プロレス観戦時は椅子に深く背持たれて、はたから見たらつままないのかな？というような表情で心の中で盛り上がりつつ、「ああ、打ち合わせの動き失敗してやり直したな」とか、「今のはもう1秒間を詰めてれば沸かせてた」とかとか、批評しながら見る楽しみも同時にしている。

なんか、今日はその感じになっていったのだ。

パフォーマンスする1人1人を見てるといろんなことを感じる。

（「1人1人のパフォーマンス」ではなく「パフォーマンスする1人1人」だ。ここ重要。）

AKBや乃木坂を見て、「ステージ映え」するコっているなあって思ったが、テレビで公演見るのと違い、生で見た時のステージ映えっていうのはまた違うなあとと思った。

ひかりTVに加入してるので、テレビで劇場公演はしょっちゅう見てるのだが、そういう意味で、今日、生で見ると全然印象が変わったメンバーも何人かいた。

鈴木紫帆里

あの長身でのパフォーマンス…手足が長いというのはステージですごい利点だなと思った。

自分は女性のタイプで言うとポッチャリ、ガッチリ系が好きなのだが、ステージに関して言えば、ポッチャリはちょっと見栄え不利だなと…この日出てた中では佐藤亜美菜と並んで1番好きなみやお（宮崎美穂）を見てて思った(笑)

武藤十夢

最初に目にとまった時、「こんなコいたっけ？誰だっけ？」と思ったら、十夢ちゃんだった。

「逆から読んでも武藤十夢！」

この公演のアンダー（代役）でよく出てて、ひかりTVで何回も見てる研究生だ。

生で見たらこんな印象が変わるものかと思ったくらい。

気合いを入れて頑張ってるのと同時に、何か照れみたいなものも感じる…「一生懸命さが可愛い」という表現がぴったり来るというか…将来、トップで活躍するんじゃないかという、すごい将来性を感じた。

増田有華

人の顔を分類するのに、ゆったん（←増田有華ちゃんのこと）のような、ハッキリした、バチーッとした顔立ちと、ポヤッとした…といったら失礼かな、柔らかいというか、うん、やっぱりポヤッとした顔立ちがあると思う。

ステージ映えするのは、ゆったんみたいなバチーッとした顔。

みやおとか、この日で言うと研究生の名取稚菜ちゃんはポヤッとした柔らかい顔。目の前で見たら可愛いんだけど、これもやっぱりステージ映えという意味では損してるかも。

佐藤夏希

TVで見てて、佐藤亜美菜もこの人もステージ映えするなあ、と思ってたけど、改めて感じた。単純に顔写真見ればそんなルックスがいいとは言えない（失礼；）

けど、歌が上手いのと、亜美菜もそうだけどこの中ではわりと年長なので、大人の女の魅力が際立つ。MCでも貫禄がある。ルックスがいいとは言えないとか書いたけど、惚れてまう。

…なんか、そんなこんな感想、考えがこの距離感でパフォーマンスする1人1人を見てて、ブワッと否応なく感じてしまう。

何かで、AKBの振り付けの先生が彼女達に「目からビームを、毛穴からオーラを全開にしてお客さんに向かっていかなければならない」というような事を言ってたと読んだ覚えがあるけど、その言葉、今日見て本当によく分かった。

パフォーマンスしてる彼女達1人1人の気持ちが否応なく伝わってくる。

最近プロレスを見てて思ったことがある。

身体が出来てて、もちろん受け身や基本的な技術ができていれば、あとはそのレスラーが身体の奥底から出てくるようなブワッというパッションがあれば、十分魅せられるプロレスができるのではないかな。

プロレスはエンターテイメントであるが、というより、であるがゆえに、ガチの格闘技以上の気合いが入ってなければ、人を感動させるプロレスはできない。

ガチでなくとも「相手をぶっ倒してやる」という気持ちで当たっていかないといけない。ほんとにKOするというのとは意味が違うが、映画やドラマの芝居でも感情を込めないと感動させられないのと同じ…いや、それとも弱冠違って、生身の身体をぶつけあっていくのだから、ある意味ほんとにぶっ倒す気迫で…まあ、とにかく、パッションが大事ということだ。

プロレスで1番重要なのは「間」（「リズム」と言ってもいい）だと思うのだが、パッションがあれば、「間」も、自然に最もいいものになる気がするのだ。

彼女達のパフォーマンスを見てても思った。

ダンスや歌の基本的な上手さも大事だけど、この距離で見せるとなると、パッションがとても大事だと。

それがあれば、表情、ダンスや歌声も引っ張られるように1番いいものになるような。

AKBの魅力を語るのに「一生懸命さ」という言葉がよく出てくるが、その大きな理由は、この劇場のごまかしようのない近さではないか。

もう、レッスン場で先生の目の前で踊っているような距離なので、ごまかしようがない。表情、動きの1つ1つに気合いが入り、手を抜くことなどできないのだ。動き、表情の全てがくっきり見える。息づかいや汗のしぶきまでこちらにかかってくるような錯覚にも襲われる。

そこにさらに、正規チームへの昇格やら、シングル曲への選抜やら、握手会の券の各人の人気の比較や総選挙のような競争原理が働いているからなおさらである。

中には、みやおみたいに、テレビ番組で見せているひょうひょうとした感じがステージでも感じられたり（いや、一生懸命やってるんだけど。自分の勝手な感じ方としては）、これもMCの天然ぷりと同じく、小林香菜みたいに曲中でも気合いというより不思議なオーラを感じさせるメンバーもいるが、それはそれで個性の面白さがある。

プロレスラーでも気合いを前面に押し出さず、一歩引いた、渋い魅力のレスラーがいるのと同じ。

いずれにしても、その近さゆえ見ると否応なく感じさせられる、各メンバーの「人間」が見られるのが楽しい！

全体を同時に見るのではなく、1人を10秒くらいフォーカスして見て、また次のメンバーへ…こういう見方になってた。

曲を楽しむのは、TVで音を大きくしていれば、家でも楽しめるけど、劇場では「人間」を見る楽しみ。自分はどちらかというとプロレスを見るのではなく、プロレスラーを見に会場に行っているタイプのプロレスファンなのだが、それと同じ感覚。

劇場公演の魅力はこれだけでなく、これは元から分かってることだが、楽曲が素晴らしい。

そして、それぞれの曲ごとに世界観があり、その世界観を表現する、素晴らしく凝っている可愛い衣装にチェンジしながら、大人数の少女達が目の前で圧巻のパフォーマンスを見せる。曲の世界観を構築している歌詞ははっきり聴きとれるし、表情やダンスなども相まって、ミュージカルを見ているようだ。

あと、隣の10代後半くらいの女の子がずっと、手で振りコピっているの？ステージと同じ振りをして楽しんでいるのもかわいかったな～。

パッと見渡せる範囲でも、15人くらいは女子がいたけど、もう、AKBには男でも女でも関係ない魅力がある。特に劇場公演はそうかも。（とは言っても、そりゃ男のファンのほうが多いのは今後も変わらないだろうけど）

いやしかし、初期のAKB劇場公演を見た人達が、その初体験の衝撃を書いたブログを「48現象」という本で読んだけど、気持ち分かるわ。

世間の人、いい年した大人がAKBにハマっていると聞くと、ロリコンかいなとか、あんなチャチャラした…とかそういう目で見るところだろう（自分もハマる前はそういう感じだった）

しかし、そういうんではないのである。

やらしい視線が全くひとかけらもないとは言わない(笑)

でも、そういうんではない。

自分のように、そういう目でAKBやそのファンを見下してて全く興味を持たなかった人間が、ちょっとしたきっかけで見てハマったのを何人も知っている。

メンバー、スタッフが作品にかけてる手間暇、かいている汗、その結果としての作品の素晴らしさ。

各地に小さな劇場があり、そこで間近でパフォーマンスを見て、様々な仕掛け・競争のもと、階段をかけあがっていく少女達の成長を見る。また、少女達は自分の夢へのステップとして、観客の目がすぐそこでごまかしのきかない小さな劇場、そして競争でもまれて、その中からテレビに出たり様々なジャンルで活躍する人材が出てくるといふ、この1つの文化にはすごい可能性を感じている。

今のようなブームはいつか終わるだろうし、終わってもかまわない。

しかし、「宝塚」がもはや劇場の名前ではなく、1つの文化の名前として定着しているのと同じように、これから50年、100年と続けて1つの文化として根付く可能性を十分に感じているし、そうなってほしい。

今日、劇場公演を見て改めてそれを感じました。

…記事は以上。

AKBとは何か、を知ることは、劇場公演とは何かを知ることが絶対不可欠であり、そのために劇場公演の基礎知識が必要である。

AKBは秋葉原にAKB48劇場が、SKEには名古屋・栄にSKE48劇場が、NMBには大阪・難波に、HKTには福岡に、各劇場がある。

収容250人のAKB劇場と多少違いはあれど、どこも同じような規模の小劇場。

公演は16人のメンバーで構成される各チームごと（AKBならチームA、チームK、チームB、チーム4）に行われる。

公演のセットリストは、2012年6月現在、チームAがやっている「目撃者」公演であれば全16曲で、どの公演もおおむねそのくらいの曲数。

メンバー全員による全体曲、複数人によるユニット曲、ソロ曲によって構成されている。

曲の順番、どの曲でこの衣装にチェンジする、どの曲の後にMCが入るか（だいたい3～4曲ごとに入る）などは公演ごとに決まっています。変わることではない。

日によって変わるのにはMCの内容、出演メンバー（詳しくは後述）

曲と曲のつながりは、前曲のユニットのメンバーが次の曲のイントロのサビではけていきながらの振り付けがあったり、全体曲が続く場合は次の曲のイントロで前曲の衣装を脱ぎ新しい衣装になりながら踊ったりと、いろいろな演出がされていて、公演は1つのパッケージとして完成されている。

各公演にはタイトルがついている。

2012年6月現在のAKBの公演であれば、チームAが「目撃者」公演、チームKは「RESET」公演、チームBは「シアターの女神」公演、チーム4は「太陽の女神」公演。

各劇場で、ほぼ毎日、どのチームかの公演が行われている。（AKB劇場であれば、チームA、K、B、4、そして研究生公演のいずれか）

1つの公演は、だいたい短くて4ヵ月ほど、長いもので2年以上続いて千秋楽を迎えて、また書き下ろしの新しい曲によるセットリストがつくられ、新公演がスタートする。

つまり、公演が続く間は各チーム、同じ公演をずっとやる。ユニット曲、ソロ曲を誰が歌うかは基本的に決まっています。変わることではない。（ユニットのメンバーを途中で変えた例はある）

しかし、メンバーがテレビその他、劇場以外での仕事がある時は基本的には研究生が（あるいは他チームの新人メンバーが）代役をつとめる（代役のことをアンダーと呼ぶ）

…基本知識としてはこういったところだろうか。

これらのことを初めて聞いた人が驚くとしたら、同じ公演を長いスパンでやっていることではなかろうか。

特に、2012年6月現在AKBのチームA、K、Bの公演は2年以上の長きにわたるロングラン公演となっている。

ファンはその長期間にわたって同じ内容の公演を見続けている。

もちろん、毎日違う観客なわけであるが…劇場公演は事前申し込みで何百倍という倍率の抽選に当たった者だけが見られる。ファンの経験を聞くと、毎日のように申し込み続けて、当選して

観覧できるまでには短くてもだいたい1ヶ月半ほどの間があくようだ。

しかし、ネットでの観覧（「AKB48 LIVE!! ON DEMAND」）は公演当日23時から、毎回配信されており、ひかりTVでは週5回、1～2週間遅れの公演を放送している。

AKBにハマったファンは同じ公演を、その全てが頭に入るほど繰り返し見ているわけだ。

飽きないのか？

全く飽きない。自分の場合は、これを書いている2012年8月時点では、生では残念ながらまだ2回しか体験してないのだが（今後さらに観に行くべく、劇場チケットセンターに応募し続けてます！）ひかりTVで週5回、その時間になれば必ずチャンネルをあわせている。

MCが毎回違って、その日によって違う話が聞けるというのもあるし、まず、楽曲がいい。すべて秋元康によって劇場公演用に書き下ろされた曲（※2）で、それぞれの曲の世界観が、振り付け、衣装、照明によって見事に表現され、ファンによってこの曲のここでこう叫ぶ、と自然に出来た応援によってさらに世界観がつくられている。

さらに、小劇場で目の前で繰り広げられるので、その日その日によって違う表情、パフォーマンスの良しあし、成長を見る喜び。小劇場という生物（なまもの）の魅力といえよいか。

同じ曲を繰り返し演じるメンバー、見ているファンの双方がその曲の歌詞を日々繰り返し読み込むことになり、その曲を深く理解していく。パフォーマンスのレベルはどんどん上がる。

2012年6月現在、AKB劇場でのチームA、K、B各チームの公演は2年を超えるロングランとなっているが、

「どうしてもマンネリになる。私はそれが嫌で、再び歌詞を読み込んで、意味を考え直したり、フリを少し変えたりするんです。自分なりに高い意識を保つようにして、それに気付いてくれるファンがいれば、より楽しく交流もできるんです」（柏木由紀）（※3）

見る側の目もどんどん肥えていく。

古典落語でも、一見さんで何も知らずに聞く人は、単純にどんな話の展開になるんだろう、どんなオチなんだろうと聴くところを、落語通は、とっくにお馴染みの演目を、この噺家はどうか演じるのか、その表現の仕方や成長を味わう。

それと同じようにAKBヲタクは、その日のメンバーのパフォーマンスの巧拙をしっかりと見、時に握手会でひいきのメンバーに直接、あの曲のあそこがよかった、また、あれはこうした方がいいなどのダメ出しのようなことも言う。

そして、これは最初から狙っていたのか、怪我の功名なのか、アンダー（代役）の存在が劇場

公演をいっそう惹きつけられるものになっている。

現在のブームでメンバーはいろいろな仕事で大忙し。1つの公演でアンダーは少ない時でも5人ほど、多い時は半分ほどになることもあるのではないかな？

このメンバーのアンダーは研究生の誰々、と基本的には決まっているのだが、その時によっては別の研究生だったり、新人の正規メンバーだったりする。

そうすると、例えば、いつもゆきりん（柏木由紀）の歌声で聴き、そのダンスを見ている同じパフォーマンスをそっくりそのまま研究生の〇〇バージョンで見ることになる。

全体曲では、16人で歌う箇所を担当しながら、踊りながら立ち位置を変えていくフォーメーションで1つのパフォーマンスをつくりあげるのだが、アンダーは先輩が担当している歌う箇所、フォーメーションをそのまま担当することになる。

〇〇の歌う「夜風の仕業」（「シアターの女神」公演での柏木由紀のソロ曲）はどんな感じになるんだろう、「チームB推し」（同公演での全体曲）でのゆきりんの担当する部分を、〇〇ならどうパフォーマンスするんだろう、という比較の目で見ることになる。

これはアンダーのコにとっては、こわいことでもあり、チャンスでもある。

また、ゆきりんにとってもこわいことだ。手を抜いてやっていけば、日々レッスンに励んで成長している研究生の〇〇のほうがいいじゃん、と言われかねない。

こわさ、チャンス…いろいろな思いはあるだろうが、確実に言えることはメンバーにとってはやりがいがあり、ファンにとっては楽しみの幅がグンと広がるということ。

そして、アンダーと同様に楽しみの幅を広げているのが、「お下がり公演」だ。

AKBのチームAが立ちあがって以降、新しいチーム、さらには地方の姉妹グループのチームが次々に出来ていったわけだが、どのチームも、いきなりオリジナルの公演をつくってもらえるわけではない。最初、そしてその次の公演くらいまでは、先輩チームのやった公演をやるのだ。

例えばNMB48のチームNは、最初、A3rd「誰かのために」公演を5ヶ月間、次にK2nd「青春ガールズ」を2011年5月から2012年6月現在公演中である。

（A3rdとは、チームAの3つめの公演、K2ndとはチームKの2つめの公演という意味。2012年6月現在、A、KはそれぞれA6th、K6th公演中）

つまり、ここではチームごとでそのパフォーマンスが比べられる。

チームによっても、重ねた年月の中で気風や特徴ができていくもので、例えば体育会系のチームK、妹系というか、いかにもアイドルらしい可愛さが特徴のチームB、ダンスが激しいチームSなど。

また、チームごとというだけでなく、先にあげたNMBのお下がり公演の例で言えば、「青春ガールズ」公演においてはKでは大島優子、河西智美が、女性どうしの禁断の愛を艶っぽく歌った2人ユニット曲「禁じられた2人」を、Nでは山田菜々、吉田朱里がどう歌いあげているか…そういう比較、それぞれの個性の違いを味わう楽しみがここにもある。

また、アリーナで全グループが勢ぞろいするコンサートなどでは、違うチームの劇場公演曲をパフォーマンスすることも恒例で、初めて目にするメンバーと曲の組み合わせに場内がどよめく。

お分かいただけるだろうか。

何も知らない人は、AKBと言えはいまだにいわゆる「萌え～」であるとかアキバ系だとか、また、あくまでこれまでの「アイドル」というジャンルの概念そのまま、誰がかわいいとか疑似恋愛とか…そういう面もあることはあるが…そういった面だけのイメージで見ているのだろう。

「会いに行けるアイドル」という有名になりすぎたキャッチがよけいにそういうイメージを強めていて、なんならAKBファンは従来のアイドル像よりもさらに萌え～とかルックス重視、単に可愛い女の子を見に行くだけ、本能に近いところで動いている奴らと見下すことで、自分達はそれを批判する文化的人間、とアンチは思っているのかもしれないが、実態は全く違う。

実際はかなりこのような、小劇場アイドル文化とも呼ぶべき、奥行きが深い、長期間見続けても飽きない、いや、長期間見続ければ見続けるほど楽しめる、奥行きが深い楽しみ方をしているのだ。

そんなこともろくに知らずに批判しているアンチこそ皮相浅薄、自分達のよく分からない異質なものが出来れば叩きたい、という霊長類の群れの本能のまま生きている非文化的人間というべきだろう。

※1 生中継ではなく、1～2週間遅れの放送

※2 秋元Pは作曲はやらないので作曲はもちろん様々な作曲家によるものだが、曲を選んでいるのは秋元P。

※3 「月刊AKB48Group新聞」2012.6月号より

7 アンチには理解できるわけのないAKB総選挙の面白さ

毎年、アンチがここぞとばかりに叩く選抜総選挙も、劇場公演を経てのものである。

AKBのことをよく知らない人々は、あれを単にかわいい娘ランキングとでも思っているから「あんなものに熱狂するなんて」と思っているのではあるが、全く分かっていない。

単なるかわいい娘ランキングであれば、柏木由紀、指原莉乃、北原里英といったメンバーが上位に入るわけがない。（お三かたにはこういうかたちでお名前を挙げたことをお詫びするとともに、AKBファンは単にルックスで応援するわけでないことを自分は誇りに思ってます）

AKBメンバーのルックスの平均点が他のアイドルグループに比べればずいぶん落ちるのは、アンチ達の言うとおりのことである。しかし、それはAKBが従来のアイドルというジャンルを踏襲しながらもそれを超えた新しいジャンルであるからだ。

選抜総選挙といえば、歴代1番の感動、第1回総選挙での佐藤亜美菜。

第1回選挙の約1年前に正規メンバー（チームA）に昇格した新人だった彼女。

AKBの立ち上げから2011年4月までの歴史を分かりやすく書いてくれている「AKB48ヒストリー 研究生公式読本」より引用させていただく↓

「自分がほかのメンバーみたいに人気がないっていうのは……わかっていました。握手会で私の前の列が途切れるとか、ファンレターの数がみんなに比べて少なかったから…。でも、どんなに少なくとも応援してくれるファンの方の声が嬉しかったし、劇場でAKB48として歌うのが本当に楽しくて。だから最初は気にしないようにしていたんです。でも大声ダイヤモンド(2008年10月22日発売)の頃から後輩の5期生が選抜に選ばれだして『もっとアピールしなくちゃ』って思うようになったんです。けど、私はほかのメンバーみたいにテレビにも雑誌にもほとんど呼ばれなかったから、何をしたらいいんだろう、?って」

そこで佐藤亜美菜はAKB48スタッフに頼み込んだ。「ほかのチームの公演にも出たいです」と。佐藤(亜)「まずはチームKさんの『最終ベルが鳴る』公演のDVDを借りて、レッスン場を開けてもらってダンスを覚えたんです。最初は1曲1曲ずつでした。劇場公演って、最初、メンバー全員でやる曲が4曲続くんですけど、その後は自己紹介なんです。だから4曲覚えれば、自己紹介までステージに立っていただけるんですよ。それに中盤まで覚えれば中間にあるMCに参加できる。そうやって、1曲ずつステージに立てる時間を増やしていったんです。だからよく来てくださるお客さんは『亜美菜、ココまで覚えたんだな』ってわかるんですよ。『前回と同じか……』って思われなくなかったし、何よりも1分でも多くステージに立っていたかったから、必死に覚えたんです」

そして、選抜総選挙が始まる2009年6月後半。佐藤亜美菜はチームKの公演だけでなく、チームBのセットリスト(演目)をも覚えていた。時を同じくしてチームBと同じセットリストを行っていた“後輩”である研究生の公演にも参加していたのである。

それどころか、AKB48の第2劇場である[シアターGロッソ]で行なわれていた“ひまわり組”の“のリバイバル公演の舞台にも立っていた…！！

つまり、チームA、K、B、研究生、ひまわり組というAKB48すべての劇場公演のダンスと歌をひとりで覚え、そのすべての公演に出続けていたことになる。当時そんなメンバーは、約50人いるAKB48の正規メンバーの中で佐藤亜美菜以外には誰もいなかった。

誰に頼まれたわけでもなかった。「ただ1分でも多く、ステージに立ちたかった」のだと佐藤亜美菜は言う。

↑引用以上

選抜は21位まで。

それまで1度も選抜に選ばれたことのなかった彼女。

投票開始初日の速報15位、続く中間発表の18位。

大・大健闘の順位だった。それまで選抜されたことのなかった彼女だが、ファンは頑張りを見ていたのだ。

そして、結果発表の日。

選抜への期待がふくむ中、まず、21位から13位までが発表された。

しかし、彼女の名は呼ばれなかった。

次いで発表されるのが、21位から30位までの、カップリング曲を歌う「アンダーガールズ」

21～13位までの発表が終わったところから再び引用↓

「…そうか、アンダーガールズなのかって思ったんです。」

21位から13位までの発表の後、アンダーガールズ9人の名前が呼ばれた。しかし、そこで佐藤亜美菜の名前が呼ばれることはなかった。

佐藤はそれから一切、顔を上げることができなくなった。自分のスカートと、固く握りしめる拳だけを見つめていた。手の甲には涙がこぼれ続ける。「やっぱりテレビに出ていなくちゃ、私のことなんて気づいてもらえないんだ」……パリから帰ってくる飛行機の中で誓った「何かやってやる」という気持ちも、どこかに消えてしまっていた。

どれだけ時間が経ったのだろう。1秒でも早く、このつらい時間が過ぎてくれればいいのに…。そううつむいていた佐藤の耳に、その言葉は届いた。

「第8位、チームA、佐藤・……・亜美菜」

司会の戸賀崎がそう言った瞬間、佐藤亜美菜は、弾かれるように立ち上がった。会場からはその日一番の歓声が上がった。

もう、まともに歩けなかった。この瞬間が来るまでに涙が枯れるほど泣いたにも関わらず、それまでの涙がウソだったかのように、大量の涙が溢れてきた。ステージに立ってからまともにしゃべれなかった。絞り出すように、ゆっくりとファンに気持ちを伝えた。

「私は……歌手や女優さんになりたくてAKB48をステップとして入ったのではなく、AKB48が本当に好きでAKB48になりたくて入って、いろいろな公演に出たかったから、自分からほかのチー

ムのダンスを覚えて……。テレビや雑誌に出ているほかのAKB48のコたちみたいに……。私はキラキラできないから。AKB48に貢献できてないって思っていて……。でもこうやって選抜に入ることができて、本当に……。嬉しいです」

↑引用以上。

ここにも書いてあるとおり、佐藤はメディア露出も少なく、普通に考えれば、選抜やアンダーに入るだけでも大健闘である（第1回は98人が選挙の対象）

ちなみに、ルックス的にはそんなに悪くはない（自分は好きだ）が、グループの中でとりわけいいというわけでは決してない。

そんな彼女が、なぜ8位という、誰もが思ってもいなかった順位をとれたのか。

劇場公演を誰よりも頑張っていた姿を、ファンはちゃんと見ていたからだ。

ここに紹介した佐藤亜美菜の例は、とりわけ感動ものだが、他のメンバーも1人1人それぞれのドラマがあり、ファンはその頑張りをつぶさに見ることができ、メディア、ネット様々な媒体から個々の背負う歴史も知る、そのうえでの総選挙。

それらを知ったうえで見れば、こんなに人間ドラマが凝縮されて見応えのあるイベントなどそうそうない。

当たり前だが自分の推しメンの努力・成長は、特によく見ているので、よけいに感動する。

それやこれやを知らぬ、劇場公演を見てもいない、メンバーのドラマを全く知りもしないのに総選挙を見て楽しめるわけがない。

楽しめないのを無理に興味を持って楽しめと言っているのではない。

しかし、知りもせず、当然楽しめるわけもないのに「何が楽しいのか分からない」とか「あんなの見てて恥ずかしくないのか」だの、何も知らぬのにゴチャゴチャ文句をぬかす輩が多いのには閉口する。

本著で何度も書いているが、自分はメジャースポーツにいったい興味がないので、種目によればルールもよく知らず、情報も知らないの、選手個々の歴史、ドラマも知らない。よって、楽しいとも当然思わない。

それらが、AKBどころではない大きさで年がら年中大きくメディアで取り上げられ、みな熱狂しているが、それを、「自分は何が楽しいのか分からない」という理由で批判するつもりもない。当たり前だろう。

ところが、AKBに関しては「自分は興味がない」「何が楽しいのか分からない」などといったことを、まるでそれが偉いことであるかのように、ことさら言いたがる輩が多い。

興味がなければ見なけりゃいいだけなのだが、アイドルというジャンル、そして流行しているA

KBを批判することで、自分は低俗なもの、流行しているものを批判している賢い人間なんですよ、というポーズをとりたいのだろう。

実際は、世間の価値観におもねって批判しやすいものを批判し、バカさ加減を露呈しているだけなのだが。

また、AKB史上数ある感動でも特に有名な、2009リクエストアワーセットリストベスト100で、「初日」が1位になった件。

リクエストアワーというのは、毎年、それまでに発表された48グループの全ての曲を対象に（つまり、AKB、SKE、他全ての姉妹グループの劇場公演曲、シングル、カップリング曲）、ファンの投票でベスト100を決めるというイベント。

テレビ、ラジオで流れることの多いCDシングル曲が当然、有利であり、特に、2009年リクエストアワーは前年ヒットした「大声ダイヤモンド」が1位になることが予想されていた。

ところが、ふたをあけてみれば1位に輝いたのは、シングル曲ではなく、チームBの神公演と呼び声高い「パジャマドライブ」公演のオープニング曲「初日」

「1人だけ踊れずに帰り道泣いた日もある」

「学校とレッスンの両立にあきらめた日もある」

「死ぬ気で踊ろう！ 死ぬ気で歌おう！ 初心を忘れず全力投球で！」

お下がり公演2つを経て、ようやくもらえた、このオリジナルの公演の初日を迎えるまでのチームBメンバーの苦労をストレートに歌詞にした曲で、メロディも決して、いわゆる売れ線のものではない。

にもかかわらずこの曲が1位になったのは、ファンが劇場公演をしっかりと見ていて、この曲の内容と、その歌詞のまま、全力投球で日々頑張っていた彼女達に共感したから。

その他にも、チームBのカラーや様々な歴史があったうえでのことで、ここでは長くなるので省くが、とにかくにも、AKBのファンは、そういう思い入れを持って見ているのだ。

AKBのことを何も知らずに単なる流行りものと見ている向きも多いし、AKBのファンとは流行に流されやすい傾向があると思っているのかもしれないが、とんでもないことだ。自分なりのこだわり、思い入れを持って物事を観る人間がAKBファンになる傾向が強い。

アイドルはアイドルだろ、という固定概念でしか物事を見れないアンチとはかなり違う。

8 AKB総選挙批判に対して 遊びに貴賤がつけられている不可解さ

東日本大震災から3カ月がたった2011年6月のAKB48 22ndシングル第3回選抜総選挙。

もちろん、被災地の困窮や原発の問題は未解決ながらも、通常のスポーツやお笑い番組、その他イベントも行われるようになっていた頃に行われたこのAKBのイベントとそれを大きく扱ったメディアに批判の声が起こった。こんな大変なご時世に何を騒いでいるのか、と。

あのような大災害が起こった際に、いつまで自粛してるべきかは人によって考えは違うだろう。震災からは3カ月がたったが、まだあの時期あのようなイベントをやるべきではないという考え方は1つの考えとしてあるかもしれない。

しかし、AKBへのイベントとその報道に対してだけの批判は意味が分からない。

あの時期にAKB選抜総選挙をやるべきでないのなら、他のスポーツや芸能、お笑いもやるべきではない。

「こんな時にAKBのイベントなど…」

と言う多くの方は、もし同じ時期に野球やサッカーの大イベントがあり、それを大々的に報道していたら

「こんな時に野球など…」

とは言わないのだろう。

おかしい話だ。

自分から見たら、どちらも本質は同じ「遊び」である。

ここで言う遊びとは、一生懸命やっているかふざけてやっているか、の意味ではない。

ここではもっと本質的な意味合いで、「文化」という言葉とほぼ等価。

野球は一生懸命で、見る人に感動や元気を与えると言うならば、AKBのライブや総選挙でのドラマも、一生懸命で見る人に感動や元気を与えている。どちらから感動を感じるかは人それぞれで、当たり前だがAKBのイベントに足を運んだり、報道に関心をもって見ているファンはAKBから元気や感動をもらっている。

アイドルが自粛すべき期間がもし半年ならスポーツも他の芸能も同じく半年。当然だろう。

この本の中ではやたら野球、サッカーを引き合いに出して、ファンが聞いたら怒ることばかり書いてるが(笑)、野球、サッカーそのものが嫌いなわけではない。

ただ、AKBやアイドルのことを「くだらないもの」と見下してる人間が同時に、野球やサッカー、その他、メジャースポーツと呼ばれるものに対しては、あたかもその優勝争いがさも重大事であるかのように認識してるのが、どうにも解せないだけ。

繰り返すが、スポーツの本質は遊びである。特に、見ている側にとっては。

もちろん、アイドルの本質もそう。

野球の日本シリーズの結末も、AKB総選挙の結果も、それらのファン以外にとっては、ど～ど～でもいいものである。

これがその年の食糧の出来具合という話になれば、それへの興味を普段意識していなくても、ど～でもいいものではないのだが。

いや、スポーツ、芸能等々の文化全般、それ自体を軽んじているのではない。

それらは現代社会の人間にとって、大切な欠くべからざるものである。

しかし、その各ジャンル、各競技、各芸能事、それら1つ1つは、興味のない人間にとってはど～でもいいものでしょう？

だからといってバカにしているのでもない。それぞれのジャンルのファンが、それぞれのジャンルを愛し、そこから元気なり感動なりを受け取ってあげればいいのだ。

要は、そのジャンルに貴賤がつけられ、あたかも野球の日本シリーズの結末やサッカーのワールドカップの結果は全日本人が知っておくべき大切なこと、AKB選抜総選挙やプロレスの興行は、どうでもいいもの、という認識が自分からしたら長年にわたり意味不明なのだ。

個々の中で、日本シリーズの結果は重要、AKBはどうでもいい、があるのは一向に差し支えない。自分にとってワールドカップやイチローの戦績がどうでもよくて、AKBジャンケン選抜の結果やDDTの肛門爆破（※1）が誰になるのかが重要なと同様だ。

しかし、そこを勘違いし、個々の好き嫌い、興味の有る無しではなく、絶対的な位置づけとして、ワールドカップの結果が重要、AKB総選挙の結果はどうでもいいもの、と誤った認識をしている人間が多いのではないか？（※2）

それが端的に出たのが、2011年6月のAKB総選挙の報道に対して、「こんな時期にこんな下らないもの」批判だろう。（繰り返すが、それを言うなら同時に、メジャースポーツ含む全てのジャンルの活動と、それらの報道に対して同じことを言うべきである。）

なぜそのような誤った認識が生まれるのか？

新聞、テレビが長年大きく報じて、「ジョーシキ」になっていること＝重大事という方程式が頭の中にできているからだろう。

もちろん、興味のある人の数の分大きく報じることは差し支えないと思うが（※3）、どんなに大きく報じられようが、その「遊び」に興味がある人が多いから大きく報じているだけであって、その本質が変わるわけではない。しかるに、新聞の一面やテレビのトップニュースで報じられ続けていることは社会にとっても自分にとっても重大事、という誤った認識を起こしてしまっているのではないか？

アンチAKBは「AKB総選挙などに大人が熱中してくだらない…」と言うが、そう言っている同じ人間が球を棒で打つゲームや、足で球を網の中に入れるゲームに熱中している様は、自分からしたら滑稽きわまりない図である。

スポーツを楽しんで見ている分には良いと思うし、また、そこから感動や教訓を得たりする熱

い目で応援するにしろ、あくまでゲームであるということを見ているなら全く良いと思うのだが、スポーツを熱中して見ながら同時にAKB総選挙を見下す手合いは、完全にそれがゲームであることを忘れ、ある種のスポーツ幻想とでもいうものに飲み込まれているのであろう。（逆に言えばゲームであるという本質をふまえてスポーツを楽しんでいる人は、決してAKBのイベントを見下したりはしないであろう）プロレスファンやアイドルファンが意識的に構築している幻想ではなく、その本質を見ず、わけもわからぬままに。

遊びである本質を分かりながら熱中して楽しもう、感動しよう、なら分かるが、そうではなく、もうホントに本質を見失っている人間こそ、いい歳こいてもうちよつと物事の本質を見よう。遠征から帰ってきた、失敗をした選手に罵声浴びせたり物を投げたり、海外では、自殺点をした選手をファンが殺すという事件もあったり。

それは一部の極端な例だろうが、そういう、ゲームであることを忘れ、ガチで国の威信がかかっていると幻想に飲み込まれている雰囲気は危ないだろう。

まあ、しかし、それはそれでいいだろう。サンタさんが本当に来てくれていると信じている子供に、あれはお父さんなんだよと無理に教える必要はないだろうから。

しかし、ど～しても許せないのは、そのような、本質を見ず幻想に飲み込まれている者が、サンタはお父さんだと知りながらも楽しんでいる…というより、サンタそのものよりも「サンタをしているお父さん」だからこそ、そこに感動や演者の色気を感じ、その本質を見て、極上の愉しみを知っている、プロレスファンやAKBファンを、「プロレスサンタは、AKBサンタはお父さんなんだよ」と、したり顔で見下すことである。

いやいやいやいやいやいや！分かってない、騙されているのは君達なんだよと言いたいのだ、わたしは！

※1 DDTという、エンタメ色を前面に押し出した団体のビッグマッチでときおり行われる罰ゲーム的イベント。おしりにしこんだ爆発物で肛門が爆破される。中澤マイケル選手が不幸にして、毎回犠牲になっている。

……こんなことを書くのは無粋というものだが、もちろんほんとに肛門が爆破されているわけではない。なんでもガチかインチキかという尺度でしか物事を見れない人のために念のため、本来書かなくてもよい無粋な説明を加えておく(笑)

※2 こう書くと、それが及ぼす経済効果の規模が違うとかなんとかぬかす者がいそうだが、それはあくまで副次的なこと。ここでは、物事の本質について書いている。

※3 そうなると、本来その人にとってそう面白いと感じられない競技であっても、大きく報道されてることはとりあえずチェックしておこうという人達もいるため、「興味のある人」の数は増えるという悪？循環もあるのだが。

9 AKB総選挙批判は、ジョーシキに染まっている人間が浮き彫りになる

AKB総選挙への批判を見ていると、いかに「ジョーシキ」に染まって、そこからしか物事を見れない人間が多いか分かる。

前項でも大震災後3カ月の第3回総選挙への「こんな時に…」という批判について書いたが、1年後の第4回についても地上波ゴールデンタイム生中継で高視聴率を取ったことで「福島原発が収まっていないこんな時に日本人はAKBでうつつをぬかして」てなことを言う輩がいる。

まず、AKBに限らず他の芸能事、スポーツも普通に開催されている時になぜことさらAKBだけを批判するのかということは前項でも書いたが、当日、テレビで見ていた人間も日本武道館に足を運んだ人間も、AKBに24時間、時間を使っているわけではない。

他のジャンルの娯楽、趣味に興じている人間と同じく、日頃、政治社会に関心を持ち、当然、原発にも相当の関心を払っているなかで、その時間はAKBを楽しんでいるだけである。

2時間の生中継を見ていたファンを「こんな時にAKBを…」と批判している人間は、24時間、食事や睡眠以外は原発情報を収集し、1日中天下国家を論じているのか？

当然、自分の娯楽・趣味に費やしている時間もあるだろう。

いや、（実際そんな人間はほとんどいないだろうが）自分は1日中政治社会の情報収集、勉強にのみ使っている！ だからAKBの中継を見ていた人間を批判する資格があるという偉い方、それはおかしいです。そうであるなら、自分の娯楽、趣味に時間を割いている人間全てを批判すべき。

もちろん、AKBファンの中に政治社会など全く関心を払わず、全ての時間をAKBに使ってる人間もいるかもしれない。

しかし、それはその人間が問題なのであって、どの娯楽にもそういう人間はいる。

また、「いや、AKBに関しては騒ぎ過ぎだから、マスコミが取り上げすぎだから批判している」という向きもあるかもしれないが、それこそ頭が「ジョーシキ」に染まっていることがモロに出ている。

前項に書いたこととも重複するが、長年、スポーツ紙トップで取り上げられ、常日頃、地上波ゴールデンタイムで放送され、高視聴率を取り、会場には毎週のように数万人が見に来るジャンルには「騒ぎすぎ」という批判はしないのか？

また野球やサッカーのことか、とウンザリされるかもしれないが、それに限らず他にもいくらでもある。

同じ原発の危険な状況でも、それが長年の「ジョーシキ」になっている娯楽ジャンルは、いつも通り騒いでもオツケー、しかし、AKBという新しいものは騒ぐことまかりならぬ、という思考はどこからくるのか。

「ジョーシキとなっていない、自分の分からないもの、新しいものに人気が出るのは認められない」

「出る杭は打ちたい」

例えば競馬。

（これは、その人気とお金のかけ方という両方で、AKBを批判する人間の“ジョーシキ”に染まった頭の構造を説明するのに例えとして最適だからだすだけであって、競馬をバカにするつもりは毛頭ないということを断っておく。あくまでAKBを見下すならば、という問いかけだ）

競馬ファンが何万もレースに金を使い、毎年決まった時期に、年に何度も重賞レースが大きく報道されることが批判されるのはあまり聞かない。

自分も批判するつもりはない。（※1）

しかし、今、AKBのような、あんな歌って踊る女の子達と握手して話すため、そしてメンバーに思い入れ持って「選挙」で投票するために金をかけるなんてきもい、バカバカしいと見下す手合い。

彼らは、もしも、競馬というものが元々存在せず、ここ5～6年で急に「馬の競争に金を賭ける」というジャンルが出てきて大人気を博したら、馬のかけっこに何万もつぎこみ、中にはギャンブルというよりは馬に思い入れを持って応援する者がいるなど気持ち悪いと見下すのではないか？

年に1度のAKB総選挙が大きく取り上げられ、報道されることを批判する者たち。

彼らは、やはり、もしも競馬が最近出来たジャンルでその人気ぶりに報道各社が年に何度も大きく扱えば、原発が大変な時に馬のかけっこを大きく報道して何考えてるんだ、と憤るだろう。

競馬は例えにぴったりだったから出したままで、他にもいくらでも当てはまる。

事の本質をごく普通に偏見なく見るならば、「歌って踊る少女達のドキュメント、人間ドラマ」と、「馬の競争における馬、人間のドキュメント」とどちらが上で、どちらが許されてどちらが許されない、などと言えるか？

要は彼らアンチAKBにとって大事なのは事の本質ではなく、「ジョーシキ」となってるか否か、である。

「AKB総選挙なんてものに大人が熱中するなんて恥ずかしくないのか」という人間は、もし将棋や囲碁が子供の遊びとしてしか存在しない世の中に生まれ、急にそれにプロ制度ができて大人がそ

の闘いに熱中するようになれば「あんなものに大人が熱中するなんて恥ずかしくないのか」と言うだろうし、その道具に大金を使うファンが出現すれば、AKBに金を使うファンをバカにするのと同じく、あんなものに大金を使ってアホかと言うだろう。（※2）

繰り返すが、彼らは事の本質を見ない。どこまでもジョーシキに縛られている。

彼らのそういう頭からすればアイドルという存在とそれを応援する人間を見下す偏見は当然生まれるだろうが、まあ、その偏見じたいがおかしいのだが、AKBはアイドルという要素ももちろん大きく持ちながらも、それにとどまらない新しいジャンルであるから、よけいに彼らにとって到底理解できないのは当然のことではある。

※1 動物愛護的な観点、その他何がしかの批判はあるかもしれないし、その批判を批判するつもりもない。ここではあくまで例えとして出しているので競馬の細かい問題には立ち入らない。

※2 これも、競馬と同じく例えとして出しただけで、将棋、囲碁を批判するつもりはまったくない。自分は将棋ファンで、かつて「週刊将棋」の検定クイズにせつせと答えを送ってポイントを稼いで、連盟認定のアマチュア1級の免状を持っている。（今は遠ざかっていることもあり、実際の棋力は全くそれに及ばないが）
駒も、本当にいい駒からみたらなんでもないものだが、たしか7～8千円したのを買って持っているし、高額な駒を持ちたい気持ちはよく分かる。

10 なぜAKBがことさら攻撃されるのか、その理由

第1章 2<天皇、プロレス、AKBが攻撃される理由>でプロレス、AKBへの攻撃が多いことやその特徴について触れたが、ことに、最近のAKBへの攻撃には辟易とする。

積極的に、嫌いなはずのものの情報をわざわざネットその他で一生懸命収集し、せっせとネットに書きこんでいる、なんだかよく分からない者達もいるが(笑)、とにかく、AKBおよびそのファンに対する世間の視線は偏見、蔑視の類が多い。

まず、アイドルという文化そのものが低く見られているというのが1点あるが、その中でもなぜAKBがことさら攻撃されるのか、その理由をいくつか考えてみた。

《秋葉原で誕生し、今でも秋葉原の劇場で公演しているということ》

電気街という顔とともに、ヲタクの街として今や完全に「アキバ文化」と言えるものが花開いている街・秋葉原。

言うまでもなく、AKB48はここで誕生し、今でも劇場公演が行われているのだが、AKBに対する蔑視・偏見には、アキバ発のアイドルということが大きく影響しているだろう。

当初はアキバありきではなく、東京の各所で劇場の物件探しをしていたのだが、アイドルが毎日公演する劇場という新しいコンセプトに物件を貸してくれるところは少なく（前例がないもの＝怪しい、ということなのだろう）、結局、秋葉原に物件が見つかり、そこに決まったという。

初めは、青山や渋谷で物件を探していたというが、もしそういう場所で誕生していたら、全く同じことをやっていたとしても、そのイメージは全く変わっていただろう。人間がものを見る時、目の前にかざす先入観とか偏見というフィルターはとんでもなく強い影響をもたらす。

《アイドルグループではなく、システムであることが理解されていない》

フツーの、3～5人くらいのアイドルグループが、今のAKBと全く同じ歌を歌っていて今のAKBくらいの大人気、ということならば、好き嫌いはあれど、ここまでの偏見はないだろう。

大人数で何がなんだか分からない、という分からないものへの不安や嫌悪がそこにはある。

AKBを1つのアイドルグループだと思っているのだ。

そういう捉え方が全く違うとは言わないが、AKBは1つのシステム、コンセプトの名前として理解したほうがいい。

アイドルや、歌手、女優を目指す少女達がオーディションを受け合格し、レッスンを重ね、各チームが各地の小劇場で公演を行いながら磨かれ、研究生から正規メンバーに昇格し、その中からさらにシングル曲発表のたびに選抜メンバーが選ばれる。時には選抜を選ぶのにファン投票やジャンケンもあり、それやこれやの中での悲喜こもごも、成長の過程を見て応援する、というコンセプトだ。

だから、よく聞かれる「誰が誰だか分からない」ということも、このコンセプトを面白いと思えば、それにのっかって楽しむ者は顔を憶えて行けばいいし、興味がなければ憶えなければいい

だけの話だ。

《新しいシステム、コンセプト。そしてそれが大流行してる、しかし常識としては根付いてない》

AKBという、新しいシステム、なんだかよく分からないもの、それらが大流行していることが世間の人のお気に召さないのだろう。

そして大事な点は、大流行しているものの、常識としては根付いていないということ。

秋元康はAKBの選抜総選挙その他が、いつかプロ野球のペナントレースを日本人が毎年毎年フツーに話題にするように、定着してくれたらと何かの機会に話していた。

いったん、握手会のことや昇格、選抜のことなどよく分からないものが誰もが知るジョーシキとなり根付けば、日本人は逆に、そこを自分もおさえようとし、悪くはいわない。

ジョーシキとなっていないが流行しているものは叩く、出る杭は打つ、しかしジョーシキとなればそれが自分にとって好きとか嫌いとか関係なく、とりあえずおさえおきたい、という日本人の悲しき習性。(Jリーグが誕生したとたんにはにわかにサッカーファンが増えた現象、ふだんボクシングに興味がなくともとりあえずゴールデンタイムに放送される世界タイトルマッチの結果は気にする人達……。)

AKBがもし流行を乗り越えてジョーシキとして定着すれば、ここまで叩かれることもなくなるだろうが、そこまではいってないものの大流行しているという点が、日本人の中の一部の残念な人達がちょうど叩きたくなるポイントなのだ。

《AKB商法批判》

アンチAKBはよく「AKB商法」という言葉を使う。

何を言わんとしているか。

世に溢れているAKB批判は、妄想や憶測に基づいて下劣な言葉を書きなぐっているだけのものばかりで、論理的な「批判」と言えるものはほとんど見当たらないので、何をもって「AKB商法」といっているのかはいまいち不明なのだが、おそらく、次のような商品についていっているのだろう。

握手会参加券付きCD

選抜総選挙投票権付きCD

同じシングル曲でカップリングや付属品の違う複数仕様

これらは、選抜総選挙投票券付きCD以外は、AKB独自のものでもなんでもない。

それを「AKB商法」と名付けること自体がおかしい。同様のことをやっている他のものと何が違うか。AKBはそれで売れまくっている、という違いだろう。

要は、出る杭は打ちたいという日本人の短所、ひがみ根性である。

選抜総選挙付きCDは、そもそも選抜総選挙というものをやっているグループがないからAKB独自のものであって当然なのだが、これは一体何が問題なのか。

1人1票でない、ということをよく批判する者がいるが、これは政治の選挙ではない。

同じ「ファン」といっても、なんとなくこのコかな、程度のファン（別にこれがいけないと言っているのではない）から、熱狂的なファンまでその思いの強さは全然違う。

1人で多くのお金を出した分、同じ数のファンだとしても、その思いいれの強いファンが多い方が順位が上、ということになるわけだ。繰り返すが、これは政治の選挙ではなく、アイドルグループの選挙なのだからそれで問題はない。

まあ、しかし、ファンの思いの総計は同じでも、たまたまお金持ちのファンが多い方が有利、という問題点はあるし、1人1票のほうがよい、というのも考えとしてあるだろう。

しかし！しかしである。AKBのファンが、これでは不公平ではないかとかこうした方がいい、というのは分かる。ファンなのだから、そのアイドルグループのシングル曲のメンバーに誰が選ばれるかの投票に意見があるのは当然分かる。

…一方、アンチAKBの連中は、なぜ嫌いなはずのAKBのシングルのメンバーを決める選挙のやり方が気になるのだ？(笑)

嫌いなアイドルグループのメンバーの選出方法…自分だったら、それがいかに不公平でおかしなものであったとしても、ど〜〜〜〜でもいいし、その感覚が正常だろう。

メディアが大々的に取り上げるようになったから、まるで自分に関係していることのように勘違いしているのかもしれないが、あれはAKBファンでない者にはどうでもいいことのはずである(笑) 批判する意味が分からないし、単に難癖をつけているだけである。AKBファンでない者にAKBシングルメンバー選抜の方法をあだこうだ言われる筋合いはない。

握手会参加券付、ということでCDの売上を伸ばしているというのも攻撃の対象らしい。(※1)

それについては、握手券単体では、風営法のからみで法律的に販売できないという事情がある。

握手会券にしる投票券にしる、買う者はそれに魅力を感じている分、自分の金でたくさん買うのだから、それをどうこう批判する意味が分からない。

中に大量のCDを買うファンがいて、それについて「たかがアイドルの…」と批判する向きもあるが、それも本人の意思に基づいてやっていることであり、たかがアイドル、たしかにたかがアイドル、いふなればたかが趣味の話だ。たかが趣味だからこそ、そこには人それぞれ、その趣味の持ち主以外にはわからぬ楽しみ、価値があるのだ。

例えば、腕時計に興味のない自分には、携帯電話で常に正確な時間が分かるのに、高額な、それこそ何百万、何千万もするような腕時計を買う感覚が全く理解できないが、それを批判するつもりもない。趣味嗜好の話だから。自分の金で自分の好きなもの、楽しいと思うものを買って

るものを、他人がとやかく言う筋合いがない。

その趣味嗜好の持ち主以外には理解できないような高額な金をかけているものは、世の中にくらでもいる。

釣り道具、将棋の高級な駒、宝石、切手の収集、…。

たかがアイドル、全くおっしゃる通りである。

しかし、たかがアイドルであれ、そこから元気なり楽しみなりを得ているぶん、金をかけているだけの話であって、好きなものに、好きなぶんだけの時間なり金なりをかけている…どこの世界にもあること。何故、AKBだけを批判するのか？それは、前述したように、AKBが（CDの販売の仕方は前例はあるが）システムとして新しいことをやっていて、それが爆発的に売れていることが、それまでのジョーシキに土着したい人間達、出る杭は打ちたい、ひがみ根性丸出しの人間達には気に入らない、ということだ。

「たかがアイドル」に自分の金をかけて楽しむ、何がいけないのだろうか。

陰湿で異常な行為は、「たかがアイドル」を批判するために、好きでもないはずのアイドルのあれこれの情報を収集し、ネットで批判し、また、そのファンを見下す言動をとって税にしていることである。

また最近では、あることないこと、若い少女達を傷つけることも何のその、中にはメンバーの身内のスキャンダルまで書きたて、人気絶頂のAKBを叩くことで売上を伸ばそうというあこぎな週刊誌等マスコミが多い。

「AKB商法」が何をいわんとしているかは不明だが、仮にAKBの運営をそう呼ぶのであれば、いろいろ変わったものがあるにしろなんにしても、AKBの商品、サービスを提供し、それに魅力を感じるファンが感じた分だけ買い、ファンは元気なり楽しみなりをもらっている、本質的にまっとうな商売の話。

それに対しAKBを批判することで売上を伸ばそうという「AKB批判商法」は、「たかがアイドル」＝趣味嗜好の次元の話に難癖つけ、それに携わる者、ファンの気分を害し他者を見下すことで税にしている傾向のある者に、その歪んだ快感を売っている、品性のないあこぎな商売である。

《批判することで生まれる自信》

大流行している、そしてアイドルという世間で低く見られているジャンルに属すること、という2つの条件が揃うことによって、もう1つ、批判が多くなる要素が生まれる。

それは…批判することで、おれは頭いいんだよというアピールができること。

流行しているものを批判することで、自分は流行に流されない、物事を批判する目を持ってんだよというポーズができる。プラス、自分は「アイドルなどという低俗な文化」に染まる人間達よりは上等な人間だという自信も持てる。

AKBヲタクと、AKB批判をする人、どっちが頭よさげに見えるかと言ったら、AKB批判者だろう(笑)

そして、これまで述べたきたように、生身と建前が混然一体となったジャンルは、ものの見方の浅い阿呆ほど大ハシャギで批判するという特徴がある。

言わば、AKBを批判することは、阿呆が頭よさげに振る舞うにはもってこいなのだ。

そして、AKBを批判することは、これまで述べたきたようなあれやこれやで「これはバカにしているものだ」という共通感覚が世間にあり、多数派にまわってバカにできるという安心感がある。

え？

AKBは今や国民的アイドルだから、バカにする方が多数ってことはないんじゃない？

たしかに売れていてファンも多いが、いくら多いと言っても、日本人全体の割合からすれば、ファンでない人のほうが圧倒的に多いことは間違いない。

そして、ファンでない人間のかなり多くにアンチの感情を持たれている。

そういう意味で、アンチの度合いはいろいろあれど、軽いのも含めれば、ファンよりアンチのほうが多数だろう。

※1 握手券も売上を伸ばしている一因ではあるが、もちろん楽曲自体の魅力があるからだ。

「2011年1月オリコンシングルチャートでは特典の付かない通常盤旧譜4枚が同時に3週連続トップ10入りを果たしている。また、「ポニーテールとシュシュ」や「ヘビーローテーション」、ベストアルバム「神曲たち」が70週以上連続でチャートインしてロングセラーとなるなど、購入特典がほぼ無力化しても売り上げを伸ばしている作品もある。」(ウィキペディア) また、「ヘビーローテーション」「会いたかった」はカラオケのロングセラーとなっている。

1 1 根っからの“ジョーシキ”嫌いにとっては、AKBは「買い」

自分は、子供の頃から世の「常識」や「フツー」とされていること、それが常識だからフツーだからということではそれを受け入れることをしない、という事が最大のアイデンティティだった。

子供の時分に、1番好きなものがプロレスという世間様から軽蔑されバカにされるものだったことが、その原因になったのか、逆にそういう人間だったから、世間から軽蔑されているプロレスでも好きになっていったのか。8割が前者で、2割が後者だと思う。

まわりがやってるから、自分も…というのが最もかっこ悪いことで、まわりがどう思おうが自分が好きなら好き、興味ないならない。

そういう人間ならば、「国民的アイドル」になってからのAKBのファンになるのはおかしいじゃないかと思われるかもしれないが、全く逆である。

そういう人間だからAKBファンになったのだ。

いや、きっかけは、流行にのっかるのが好きとか嫌いという次元とは全く関係なく、その作品の素晴らしさに気付いたのがきっかけで、ハマったのはこのグループが「人間を見せる」、汗の匂いのするアイドルだったからだが、「ジョーシキ」「フツー」が嫌いという性格が、ますますそれを加速したのだ。

AKBって流行りもんじゃん、と思うかもしれないが、自分が染まるのを嫌う「ジョーシキ」とは、もっと人々の意識に深く根付いているもの。

つまり、アイドル=実力のないもの、軽薄なもの、評価するに足りないもの、という「ジョーシキ」

いい年こいた人間が見るものではないという「ジョーシキ」

自分が、AKBの楽曲の歌詞が素晴らしいという話をする「？」とか「アホか」という反応をされるが多々ある。

歌詞をいいと思うかは、人それぞれだと思うので、歌詞を認識して聴いたうえでならいろいろな感想があって当然と思うが、まあ、ろくに聴いたり歌詞を読んで認識してないのに「アホか」という反応する者は、前述した「ジョーシキ」に染まっている。

ある本に掲載されていた秋元康のコメントの1部を紹介する。

「アーティストっぽく見せようと必死だったり、そういうブランド感を妙に奉ったりしてるのは苦手。そういう人たちを見てると僕は何か…。偽悪的な気分になってくるんだよね。お前らがそうならこっちは真逆の、ぜんっぜんカッコよくない、チャラチャラしたところから始めてやる、て(笑)。そういうのが面白いでしょ。そこで“意外といいよね〜”って言われるのが。」

↑この秋元康の言葉、すんごく分かるのだ。分かるというより、自分の感覚の中心、「ジョーシキ」が嫌いな自分のアイデンティティそのものというか。

（松本人志といい、秋元康といい、自分がその作品を好きな人は、インタビューで語る言葉も、やはり感覚が近いというか、すんごく分かる。ただ、アントニオ猪木のプロレスは大好き（他のレスラーとは別格と思っている）だが、彼の語る言葉はほとんど理解できない（笑））

軽薄で「評価」に値しない（とジョーシキ的にはカテゴリされてる）アイドルというジャンルで、大人数の束もので大人気になった…というところが、世の中の“ジョーシキに染まりつつも自らはその意識はなく、逆に、流行してるものを批判することで俺は流行に流されない自分を持ってんだよというポーズをしたい人々”にとって、AKBは最も批判して気持ちいい題材としてうつるのだろう。

プロレスファンとして、子供の頃から“世間と闘う”ことが宿命だった自分は、大人になってからもベジタリアン（ゆるいベジタリアンだけど）になった時、AKBにハマった時も、「あ、今度はこれで世間の偏見と闘うんだな」と思ったものだ(笑)

根っからの、ジョーシキには染まらない派の自分には、AKBは「買い」なのだ。

ジャンルに貴賤をつけて「スポーツ、競技>ショー」という、よく分からない価値観を持っているなあと感じる人が時々いる。

自分は人間臭いもの、汗の匂いが好きだ。

匂いフェチではない(笑) そして、「流した汗は嘘をつかない」的な意味合いでもない。余談になるが、中高生の時に読んでた井上靖の一連の自伝的小説の中に、氏の金沢大学柔道部の先輩が話す「練習量が全てを決定する柔道」という言葉が度々出てきたが、子供ながらに「練習量が全てを決定する…?なんでそんなつまらないものに打ちこむ気になるんだろう?」と思ったものだ(※1) こういう風に思う子供は変わってるのだろうか。とにかく労力をかけた方が勝つ…そんなものより、創意工夫や頭を使うこと…そういう勝負が面白いのじゃないかと。

自分は、そもそもスポーツというものより、ショーの世界の方が好きである。

一定のルールで「フェアに」勝負を決するという人工的な世界に偽物感を感じる。

「本物の」世界はそんなものじゃない。

「実力」では下の者が出世したりいい目を見たりすることもある。

でも決して「実力」が関係ないわけでもなく。そして、そもそも何を「実力」というのか。

「仕事ができる」とは?

いわゆる「仕事ができないやつ」でも職場を和ませて良い雰囲気にすることも間接的に全体の成績に貢献しているはずだし、出世を目指すなら、上司に気に入られることも能力のうち、と考える人もいるはず。ようは、一筋縄で実力の評価ができるわけではない。

そういう、リアルな・「本物の」世界を体現してるものは、スポーツであろうか?

自分にとってそういう意味での「本物」を感じ、その人間模様に魅入られてしまうのは、スポーツよりもプロレスである。AKB48である。

プロレスは前に述べたような「他に比類なきジャンル」(←たしか、村松友視さんの本に書いてあった言葉)だが、AKBも、独特の世界を持ったグループで、もはや1つのアイドルグループの名前というよりは、1つのジャンルであろうと思う。

各地の小さな常設劇場で、研究生からスタートし、売れてきた先輩の代役(アンダー)をこなしながら成長し、チームの一員となり、成長していくさまを、劇場や握手会で直にメンバーに感想を話したりしながら、見ていく…。ファンが選抜メンバーを決める総選挙。大人数の中で上にあがるメンバー、まだ埋もれているメンバー、その人間模様を見守り、「推し」を応援する、「リアルな」ドキュメンタリー。それがAKBというコンセプトだ。

自分がプロレスのことを「エンターテイメントだ」と説明すると、多くの人が「あ、そうやって割り切って見てるんだ」というような事を言うが、その意味がよく分からない。

何を「割り切って」見なければいけないのだろうか？

何も割り切って見てない。

もう、その面白さ、レスラーの放つ人間の匂いに心からゾクゾク、ワクワク、完全に子供が大人を見上げる眼差しそのままに、憧れの眼差しでみている。

AKB48のメンバーの成長物語にも、その一筋縄ではいかないショーの世界での、右左曲折ある中で時に挫折したり夢を実現させていったりという人間模様心からワクワクする。

逆に自分からしたら、「スポーツ」を見てる人は割り切って見てるんだろうな、と思う。

完全にルールが決まっていて、そのルールの枠内で全ての評価が数字で明示される、という、本物の世界ではあり得ない人工的な世界を、とにかくそういうものだと割り切って受け入れる。

投げたボールを棒で引っぱたいて、決められた広さよりも遠くに飛ばしたら点が入るという誰かがどこかで決めた決まり事を割り切って受け入れる。

何故だか手を使わずに、とにかく足を使って球を網の中にたくさん入れた方が勝ちという仮定の世界を割り切って受け入れる。

↑悪意ある書き方をしてみました(笑)、物事は同じ事象でも、悪意でも善意でも表現できる。

スポーツをこれまで述べたのと同じ趣旨で善意で書けば、現実世界と違ってところが素晴らしいと言えるのだろう。

時に理不尽に思え、何をどうすればいいのか分からなくなることもある世界の中で生きる人々にとって、決められたルールがあり、努力すべきことがはっきり分かり、その中で勝負しスツキリと結果がつくという、現実世界ではあり得ない理想郷、ファンタジーの世界であるところがスポーツの素晴らしいところだ。

※1 後にそれが意味するところは、柔道の立ち技よりも寝技の方が、センスよりも経験や練習量で上手くなれる比重が大きい、という意味合いで使われていることが分かった。この言葉に影響されたわけでは全く関係なくのだが、大人になってから寝技中心の格闘技、ブラジリアン柔術を習っていて柔道の町道場にも少し通った経験があるので、今はこの言葉に込められた気持ちが分かる。

13 格闘技のリアリティ

自分は、格闘技、ボディビル以外のスポーツに興味がない。
(ボディビルのことはここではおいておくとして) 格闘技以外のスポーツにリアリティを感じない。

プロレスとアイドルにはリアリティを感じ、スポーツをファンタジーと捉えていることは既に述べたが、スポーツの中でも、格闘技にはリアリティを感じる。

もちろん、格闘技も競技であり、各格闘技にルールが設定されているが、2人の人間が向き合って闘うということは、リアルな人間の生活にあり、本能に根ざしている“喧嘩”を感じることができる。無条件に血沸き肉躍る。

格闘技が強くなることイコール喧嘩が強くなる、とは必ずしもならないことは承知しているし、実戦では凶器の使用や複数の闘いもありえることその他は百も承知。

実際のケンカに近い格闘技がいいというのでもない。

ルールの枠内でも2人の人間が向き合って、KOやギブアップあるいは投げを狙う、抑え込む、ダメージを与えあう闘いということに、ものすごい“人間のリアリティ”を感じる。

また、格闘技の強者を目指すことにもリアリティがある。

あらゆるスポーツ競技がなかった太古の昔。

神様が現れ、汝に、投げられた球を棒で遠くに打てる能力を授けよう！と言ったとしよう。おそらく多くの方は、たいして嬉しくないだろう。

神様と対等に話すことが許されるなら、「いえ、けっこうです」と言う人も多いはずだ(笑)
球を足で上手く扱うことができる能力も、ノーサンキュー。

人を投げとばす能力はほしいか？ほしい！

人と殴り合いで勝つ能力。ほしい！

人を抑え込み、屈服させる能力。ほしい！

太古の時代、という設定にしたが、現代でも、少なくとも自分は同じ答えだ。
自分が今、格闘技を習っているから、大会に出て勝ちたいから、ということではない。
「強くなる」その事自体が喜びなのだ。人間くさいのだ！

他のスポーツは、そこで強くなることの喜びは、その人工的に設定されたファンタジーの世界の存在がなければ、あり得ない。

松本人志のコントで、東野幸治と今田耕治が、なんだかわけの分からないスポーツで争っているのがあるが、あれはそういうスポーツという、ある意味わけのわからないジャンルそのものを皮肉っているものだと思う。

もし、格闘技以外のスポーツ、例えば球技にリアリティがあるとすれば…。

多くの人間がフォーメーションを組んで、指揮系統があり、作戦をたてて道具を使ってどこかに球を命中させたり防いだり…戦争のシュミレーション、ではなかろうか。

また、松本人志はかつて「ガキの使い」のトークの中で、水泳のことを

「ドボーンで飛び込んで、（相手は全然進んでないのに自分が）すぐにゴールしてウワ～って喜ぶのは分かりますよ。でも、トン（自分がゴール）、トン（相手が数秒後にゴール）くらいの差でウオ～ッって。あれが分からん」

とか

（野球に関して）「なんで3回ストライク取られたらアウトやねん。俺は4球目で打つかもしらんのに」

などと発言していて、もちろん、笑いをとるためのものであるが、そこには彼の本音がベースになっているのが、スポーツに関して彼と同じ感覚であろう（と勝手に思っている）自分にはよく分かる。

14 リアリティなら、“真剣勝負”の格闘技よりプロレスの方が上

前項第3章 13<格闘技のリアリティ>で、スポーツの中では格闘技にリアリティを感じると書いたが、それよりさらにリアリティある世界がプロレスである。

そう言われて、読者は本著をこのページから読み始めたのでなければ、まさか著者が、「あらゆる格闘技の要素を持っているのが、プロレス。プロレスこそ最強の格闘技。」などと、プロレス最強論を説き始めたりしないことはお分かりだろう(笑)

なぜ、真剣勝負の格闘技より、プロレスにリアリティがあるのか。

それは、まず、その興行までにいろんな遺恨やストーリーがあること。そして、プロレスラーが大見得を切って入場し、大怪我を負わさないような暗黙の了解にのっとり、一定の流儀に沿って闘い、観客にアピールしながら闘うからだ。マイクアピールなどもある。

何言ってるの？　そういうところがプロレスが嘘くさいとこじゃん、と思われたかな？

まず、動物の同種間の闘いというものは、多くがメスを獲得するものや序列争い、餌をめぐる戦いだ、そこでは相手の命を狙うような戦いはしないのが通常である(例外はある)

お互いに致命傷にならないような戦い方をするのだ。完全にその戦いが形式的になっているものもある。

詳しくは、動物学の本などひもとけば、同種間の闘いが、ある一定の流儀に従って、お互いに致命傷を負わさないようにしながら、相手を殺す、倒すというよりも、自分の方が強い、ということ「誇示」つまり「見せる」ために闘っていることが分かるだろう。

ここで格好の例として、ある魚がお互いに闘う際に、必ず、相手の1番ぶ厚い胸板をつつきあって、それ以外の弱いところは攻撃しない、という例がある…(それを書いてあった本があって、なんという書名の何ページ、とメモしたつもりがどこかにやってしまい、具体的に書けない…発見できたら、引用してここに書きます)

このような戦いを見て、人間のやっていることに当てはめるならば…プロレスに近いだろう。魚の、ダメージの少ない胸板をお互いに攻撃しあうところなど、プロレスの序盤の定番、お互いの胸板へ1発ずつチョップや張り手を叩きあうシーンそのものである。つまり、どちらが強いかを“競う”のではなく、どちらが強いかを“誇示”しあうのだ。

格闘技も、お互いに致命傷を負わないようルールがあるではないかと言われそうだが、動物に

は明文化されたルールがあるわけではなく、本能に基づいた“暗黙の了解”として行っている。

また、格闘技競技者がKOや一本を狙うのは“とどめをさす”気持ちと似ており、また、見る側の意識としては、“真剣勝負”であり、とどめをさす戦いのシュミレーションだ。

動物の同種間の闘いのもう1つの側面は、ケースによっては、どちらが強いのか、を自分の群れのオスやメスに“見せている”ことだろう。これは、プロレスのように見る者を楽しませるため、感動を与えるためではなく、自分の強さを示して優位に立つため、という違いはあるものの、「見せる」という意味合いで「ショー」である。

戦いに勝った後は、その動物の流儀で、精一杯メスにアピールしたりする。

人間でもそうである。

仲間内での喧嘩、もしくはまわりの目がある中での喧嘩は、ある種の強い「自分」を演じて、強さを誇示したい、あるいは強さに自信のない者は、弱さをさらけ出したくないためにビビりながらも虚勢をはる。

喧嘩前、あるいは喧嘩中、後の罵り合い。

勝った方は、勝った事を相手に、または周りに誇示し、負けた方も時には口で反撃する。

プロレスはこれとそっくりではないか。

それぞれのキャラクターをつくって見栄をきって入場し、にらみ合い、見ている者にアピールしあい、闘いの前後にはマイクアピールなどもする。

反則は5カウントまでオッケー、という曖昧な規定も、喧嘩と似ている。

お互いを殺し合おうという喧嘩など、世の中全体の喧嘩の数から言えば、実際は少ない。

これ以上はやってはいけない、という理性がどこかで働き、曖昧ながらも一線を引いている。

本著を書いていて改めて感じることは、世の中で「本物」とされているものこそが如何に人工的で嘘くさいもので、「嘘」「偽物」と見られているもの（プロレス、アイドル）こそがいかにか本物であるか、ということだ。

特に、女性アイドル。若い女の子が、あらゆる方法で自分を可愛く表現し、異性にアピールする。AKBでは、それを大人数で競い合う。競い合う女の子達は友達であり、ライバルでもある。まさに本当の人間の姿そのものを凝縮し表現した世界ではないか。こんなリアリティのある世界がどこにある？

この社会では、こんなリアルな世界を「偽物」視し、なんだかよく分からないルールを設定し競い合ってるスポーツの世界の方が「本物」とされているわけですが(笑)

さらにリアルな話をしよう。

現実世界では女の「可愛さ」は、ルックスだけでなく、その人間的魅力も相まって「可愛く見えていく」

【折にふれてのいろんな表情見て】、また、【自分とそのコが共有したいろんな記憶】、それらがあって、元々のルックスが「可愛くみえていく」

これを具現化し、リアリティとして示しているのが様々な企画や番組の「無茶ぶり」「ガチの企画、ドキュメンタリー」（総選挙等）で彼女達のいろんな表情、それぞれの人間的個性を引き出して見せ（【折にふれてのいろんな表情見て】）、「プロデューサー秋元康が「1番大切な仕事」としている握手会を随時開催している（【自分とそのコが共有したいろんな記憶】）…そう、AKB48である。

リアルの世界では、人間の集団（会社なりクラスなり）がいる中で、まわりのコと対比することでそれぞれの個性が見えて、その中で誰かを好きになっていく。それも大人数グループという点でAKBが「リアリティ」を持っている点だ。

そして、大切なのは、ファンはそれらがあくまで「リアリティ」であって、「リアル」な恋愛に結びつかないことを分かっていること。しかし、それでいてまぎれもなく、その対象になるアイドル達は生身の人間。

これが、建前と生身が混然一体となっている世界を愛しているAKBファンたちがタフで豊かな感情を持っているという所以である。

アイドルの世界を批判する人間はとかく結局、金の世界でしょと言うが、まあ、商売で何が悪いのかという論（第5章 36<「商売」が嫌いな人達>参照）はさておいて、それを言うなら、球を棒で遠く打ったり、捕まえたりするのが上手な人間がそれこそ何十億ともらっていることこそ不思議な世界だ。

それに引き換え、女子が異性にその可愛さをアピールして射止めて大金や地位を手にする。厭というほどリアルである。

リアルな世界が嫌いで、ファンタジーを見て安心したい向きが、スポーツを称賛する一方でプロレスやアイドルを貶めるのは、自然の成り行きだろう。

16 リアルとリアリティの違い

プロレスにリアリティは必要だと思う。

しかしそれは、いわゆるU系（※1）の試合を指すのではない。

「リアリティが出るように」ガチンコの格闘技のキックや関節技を主体にして、ロープワーク（※2）、トップロープからの攻撃、空中技なんてやめにして、攻防を真剣勝負の格闘技に近づけたほうがいい…とは思わない。

それは、「リアリティ」ではなく、「リアル」っぽく見せようとしているだけだ。

「リアリティ」と「リアル」っぽく見せることはどう違うのか。

この場合の「リアル」とは、単なる真剣勝負の格闘技のことで、それっぽく見せることが「リアル」っぽく見せるということ。

「リアリティ」とは、プロレスという世界の中での首尾一貫性を守るという事と、「説得力」を持たせる、ということだ。

お互いの協力がないと成立しない技の攻防がプロレス。

そこでまず大切なのが1つ1つの技にリアリティがあること。

技のリアリティとは何か？

たとえば打撃なら。

ガチ格闘技のように、KOできるアゴやテンプル（こめかみ）にパンチや蹴りを入れる、もしくはそれっぽく見せることがリアリティか？

それはリアルっぽく見せる、ということであってリアリティではない。

それは、リアル（ガチ格闘技）の真似ごと。

では、リアリティあるプロレスの打撃とは？

プロレスの定番、胸板へ場内に響き渡るような音の出るチョップ、キックを叩きこむ攻撃。

胸板とはチョップやキックを叩きこんでも、怪我のないところ（※3）

そして、胸板は、叩き方によって音が最も派手に出るところでもある。

相手の胸板をバシーン！と叩き場内を沸かせ、「来てみろおらあ！」と自分の胸を出し、今度は相手のチョップを受ける。その繰り返しが序盤での1つの定番の展開なのだが、もちろんこれはリアル（真剣勝負）な格闘技とは全く外れた攻防だ。

しかし、そこに気持ちを込めてド迫力でやりあうことで、「リアルな闘い」ではないが、「闘いのリアリティ」が出てくる。

技の様式美もリアリティの鍵だ。

プロレスの芸術品と言われるジャーマンスープレックス。

ガチンコではそう簡単には決まらない技で、決まったとして、ブリッジしてホールドしても相手が肩をあげられなくなるほど抑え込めるわけではない。

つまり、「リアル」ではそれがそう簡単には決まらない、決まっても返せるということ…しかし、それが分かっていたとしても、決まった一瞬のうちに、観客の頭に、「後方に投げられて頭部にダメージを与えて同時に投げたブリッジでホールドする」というストーリーが出来上がる様式美で、一瞬のうちに観客の頭に技の「意味」を共有させることが「リアリティ」

「意味」を共有させること…プロレスという世界の中で意味が成り立っていて、首尾一貫性があること。

「リアル」な格闘技の真似はしなくていい。

ただ、プロレスという世界での首尾一貫性＝リアリティを守ってほしい。

例えば、トップロープから、倒れている相手への攻撃。

トップロープにあがる時間、あがってから下で倒れている相手にダイブして技をかけるまで、ゆっくり時間かけてやるのは自分は嫌いである。

「その間に逃げられるやん」

「そんなに起きれないなら、攻撃しなくてもその間にフォールできるやん」

ということになる。

もちろん、「リアル」な話をすれば、トップロープに上がっている時間は、どんなに速くしても数秒はかかるのだから、どんなに速くトップロープに上がろうが逃げられるのは同じである。

しかし、そこに少しでも「リアリティ」を持たせるならば、トップロープにあがって攻撃するまではなるべく速くしたほうがいいし、下で攻撃を受けるほうは、どこに相手がいるか分からず、起き上がろうとしてところに相手がトップロープから降ってきた、ということをやっとした動作、表情で表現したほうがいい。

細かいところを例にあげていくつか述べたが、要は、プロレスとは「闘い」の「表現」なんだ、ということのを忘れずに、それにあつた動き、表情をすればいい。

さらに言うなら、そういう気持ち、パッションを込めてやっていれば、自然と「リアリティ」が出て、見る側の気持ちを熱くさせるプロレスになる。

プロレスもアイドルも、それを誹謗する者達は、つまるところそれらが「嘘」だといいたいのだろう。

自分は「嘘」という表現には非常に違和感があるのだが、まあ、とりあえずここでは彼等の言葉とそのまま使って「嘘」だとして話をすると、その「嘘」で表現しようとしている世界はこれ以

上ないほど人間の匂いのする「リアル」なもの、さらに言えば「自然なもの」（＝本能）だ。

「嘘」で表現しようとしている世界とは？

プロレスならば、「闘い」の本能。

「相手を殺す」ではなく、自分の強さを相手に、そして、まわりの人間たちに誇示したいという本能。

アイドルならば、若い女の子が自分の可愛さを精一杯アピールしたい、という本能。

AKBの場合は、さらにそこに「人間」の喜怒哀楽、そして、成長を見守り応援したい、直接交流したいという見る側の願望もあわさっている。

じゃあ、闘いを表現したいなら（orそれを見たいなら）真剣勝負の格闘技でいいではないか？真剣勝負の格闘技もたしかに1つの表現ではあると思う。

が、真剣ならば、素人が見て、何をやっているのか分からない攻防も多い。

特に寝技の攻防など、今どちらが優勢なのかすら分からないだろう。

自分は、まがりなりにも柔術をやっているので寝技の攻防は非常に面白く見れる。

しかし、それは技術の攻防がまるでゲームのように面白いのであって、闘いの「表現」としてはプロレスのそれに敵うものではない。

また、真剣なれば、あっという間に勝負がつくこともしばしば。

ふりまわしたパンチがたまたまアゴにクリーンヒットした「ラッキーパンチ」

そういうKOならまだしも、怪我によるドクターストップなどの不完全燃焼によるあっけない幕切れもある。

逆に、膠着した展開が延々と続いた末の時間切れドロウもある。

そういう、見る側にとって面白くない試合もあり得る。勝負を競う「競技」である以上は。

そういった試合の場合、またそうでなくても、格闘技の試合は「競技」を見る満足感はあるが、必ずしも「闘い」を見れる満足感は約束されていない。

それは「表現」を第一の目的としていない以上、やむを得ないことだ。

「リアル」に闘っていることを見せるのだから、必ずしも「闘い」を感じさせることはできない。

さらに言うなら、プロレスを「嘘」と誹謗するなら、では、究極の理想「リアル」は路上の喧嘩、あるいは戦争での殺し合いだろう。

では、それを見て、魂が震えるような感動の「闘い」を感じることはできるか？

「リアル」とは対極の「プロレス」こそが、人間の、感動を伴う「闘い」のリアリティを最も感じさせることができるのだ。

プロレスを「嘘」と誹謗し、「リアル」を求める論で言えば、アイドルも、若い女の子の持つ可愛さや、あるいは本著で言っているAKBの「人間くささ」の魅力云々というならば、そのコの全部を見せればいいではないか、となるのだろう。

しかし、言うのもアホらしいが、いくらAKBの魅力がアイドル・人間ドキュメンタリーだと言って、そのコの部屋にカメラでも設置して24時間流したら、見たくもない姿も見ねばならない(笑)

まあ、アイドルやAKBの、建前とは違う生身の姿の情報をあれこれ知って税に入る…要は、アイドルの「嘘」を指摘してはしゃぐ類の人間は、そこまでやれば「本当」だと納得するんじゃないかなあ。

限りなく変態ですな。

つまり、プロレスやアイドルも、その表現したい「リアル」を表現するためには「嘘」が必要なのだ。

「嘘」があるからこそ「リアリティ」

「嘘」があって初めてリアルに感動できる。

まあしかし、ここではアンチの言う「嘘」という表現を使っているが、自分はそれを「嘘」とは思わない。

相手の攻撃をよけず、鍛え上げた筋肉の鎧、生身の胸板を大声をあげながら思い切り叩き合う、2人の人間。そこに込められた痛みと気持ち。そのどこに嘘があるのだろう。

仲間達とハードなレッスンに励み、時に競争にさらされながら、限られた人間しか立てない華々しいステージで精一杯の笑顔、歌、ダンスでファンに応える若い女の子達。その短い青春の一時の、どこに嘘があるのだろう。

そして、プロレスもアイドルも、表現の舞台が、リングやステージにとどまらず、メディアを含めたこの社会すべてが舞台なのだ。

「本当」も「嘘」もない。彼らにとっては、生身の自分とキャラクターとしての自分が混然一体となった「表現」なのだ。

※ 1 「真剣勝負」を標榜して、キックや関節技を主体とし、場外乱闘や空中技などを廃したプロレスを行っていたUWF、及びそこから派生してUWFのスタイルを継承した団体が行っていた「

格闘技系」のプロレスのスタイル

※ 2 ロープの反動を使った攻防

※ 3 もちろん、プロレスラーが鍛えていない素人にやったりすれば怪我するだろうし、プロレスラーどうしであってもやり方によってどうにでもなるだろう。

17 人間はみなプロレスラー、アイドル。人生はプロレス

プロレスラーも、アイドルも、ある種のキャラを演じ、プロレスラーは強さを、アイドルは可愛さを演出していることをもって、それらを「嘘だ」と言うのは、人生、人間そのものを「嘘だ」と言っているのと同じこと。

人間誰しも皆、その場その場で何がしかの自分を演じ分け、自分の良さを演出している。特に異性の前では。

プロレスは、プロレスラーどうしの、技の応酬によって試合をつくって盛り上げていく。

一方が攻撃し、相手が受ける。その1つの応酬が、さらにまた次の展開に結びつき、一連の、意味のある試合の流れが形つくられていく。

人と人との会話、ひいては人間社会の営みも全てがそう。

人に対して発せられる言葉は、発した側は相手に、必ずなにがしかの期待を持っている。

ボケに対してはツッコミ、笑いが1つ成り立つのはプロレスにおける1つの攻防が成り立つのと同じ。

恋人どうしの語らいもそう。

恋人に「愛している」と言う時、人は、それを伝えたいだけでなく、それに対する反応がおり、そこに1つのプロレスが成り立つことを期待している。

たいして愛していなくとも(笑)、その言葉を発すること(+それへの相手の反応、会話)で、そこに甘い恋人どうし空間をつくり、それに酔いたい気分で言っている場合もあるだろう。

その場合、言われた相手は、そういう気分にひたりたい相手の気持ちを察して、その場所、時間、雰囲気、自分と相手がそこまで至るまでの2人も共通の記憶などを加味しながら、最高の言葉をチョイスして反応しようとするだろう。

言葉でなく、何かの行動でもよい。黙ってうなづく、キスするなど。自分の普段装ってるキャラにあったものを。反応の選択肢は無数にある。

あるいは、何かの反応の選択時にガラッとキャラを変えてみるのもありだろう。それまで大人しかった男が、荒々しく抱きしめるとか。ベビーフェイス(善玉)キャラだったプロレスラーが、ヒール(悪役)キャラに変身する時のようなものだ。

変身…アイドルで言えば、何かのきっかけに路線を変えたりしてブレイクする時など、そういうタイミングの計り方、行動のチョイスの仕方に“プロレス頭”が現れる。

AKBは握手会の対応の良し悪しが総選挙の順位におおいに反映していることは、多くの人の知るところだが、数か月前から何と声をかけるか考えに考えてきたファンの一言にわずかな時間でどう反応し切り返すか、まさにAKBメンバーは握手会で究極のプロレス力=人間力を試されている。

人は、まさに人生でプロレスをやっている。

それぞれの場で自分のキャラを演じていること。

演じているといっても、それは本当の自分と切っても切り離せないものであること。

プロレスやAKBを見下した目で見ると、人生そのものの虚実入り混じったものを生々しく凝縮して見せられるのがイヤなのだろう。

そういう意味において、人生そのものに疲れている人達のために、ファンタジーの世界＝スポーツがあるという見方もできる。

「プロレスが人生に似ているのではなく、人生がプロレスに似ているのだ」と言ったのは、村松友視氏だったか。

プロレスが人生に似ていると言っても、人生という獺としてとらえどころのないものに例えてもよく分からない話だが、人生がプロレスに似ていると言え、獺とした人生が非常に分かりやすくなる。

人はみな、それぞれ本当の自分を持ったうえで、それを核として、人前では、それぞれの場所にふさわしい自分＝プロレスラーになればいいのだ。俳優のように丸っきり違う自分になろうとすると無理があり、「本当の自分」を貫こうとしても無理がある。

あるいは、その時目の前にいるのが自分にとって大切な異性であればアイドルになればいい。これも、俳優は無理でも、あくまで生身の自分を核とした「アイドル」にならなれる。

そして、相手との言葉や行動のキャッチボールで、1つの関係性を成り立たせていけばいい。

男が言う「愛している」は、ガチか、八百長か？（笑）

女が言う「愛してる」は、純愛か、営業か？（笑）

プロレスは虚実入り混じったジャンル、とよく言われる。

こう聞くと、プロレスが分かってない人は、スポーツの要素もあり、ショーの要素もありってことね、と理解するかもしれないが、そういう意味ではない。

プロレスはショーである。

もちろん、身体を張っていること、ショーを成り立たせるための肉体をつくる厳しいトレーニングをしていること、受け身や、展開をつくるためのテクニックの習得、それらをスポーツ的要素と言えばそうなのだが、競技、という意味でのスポーツではない。（※1）

では何が虚で何が実なのか。

自分がプロレスを見始めたのは、長州力と藤波辰爾の「名勝負数え唄」（※2）からだ。

若いうちにジュニアヘビー級で脚光を浴びて、甘いマスクで若きスターとなっていた藤波に、地味なスタイルで中堅に甘んじていた長州力が6人タッグでの仲間割れでケンカを売り、マイクで「俺はおまえの咬ませ犬じゃない」という後々まで語り継がれる名言を放って始まった「抗争」である。

この場合、仲間割れして長州が藤波にケンカを売ったこと、その後2人が「抗争」を始めたことは、あらかじめ決められていたアングルである（※3）この例に限らず、当たり前の話だが。

そこは「虚」だ。

だが、地味なスタイルで日陰の存在だった長州がスターで華麗なプロレスの藤波に反旗をひるがえし、猛然と攻めまくるという流れの一連の試合に当時のファンが熱狂したのは、普段、上司や上の立場の人間に従うことを強いられている、非エリートのサラリーマンはじめ大衆ファンの、長州へのシンパシーという「実」があったから。

また、長州が日陰の存在で藤波がスターだったこと（実際は知らないが、おそらくギャラにも差があったと推測）はまぎれもない事実であり、長州自身に本当に藤波に対するジェラシーがあったかもしれないし、なかったとしても、そのまぎれもない立場の差という事実をもとにした「抗争」であったために、ジェラシーを表現することはたやすくできたはず。

そして、いくら下剋上のアングル（※4）で、そういう流れのプロレスを展開したとしても、長州力に、あのムンムンただよう雑草のような「男」の匂い、硬派な魅力がなければ、あそこまで、雑草がエリートに噛みつく「抗争」が受けることはなかったし、その後の日本のプロレスビジネスも大きく流れを変えられることはなかった。

あのムンムンの男気は「実」だ。長州、天龍をはじめとしてガチンコの格闘技から来たプロレスラーには、「男」オーラが凄く、何もせずとも怖さを感じさせる人が多い。

そして、それまで地味で日陰の存在だった長州力が、これをきっかけに大ブレイクし、その後の人生に大きな影響を与えたこと。そこで得た人気があって、その後長州が新日本プロレスを脱退、復帰を繰り返し日本プロレス界の台風の目となったこと。その「抗争」をきっかけにして生まれた、長州のハイスパートレスリングと呼ばれるそれまでのプロレスの間をつめた早い展開がプロレスというショーのスタイルを大きく変えたこと、それらは全て事実であり、「実」だ。

この「抗争」のアングルを考えたのは誰かは知らないが、大衆のエリートへの鬱積、藤波の順調なレスラー人生、地味な存在だった長州のオーラ、そういう「実」があってこそ、「虚」である抗争が生まれ、その「虚」からまた、新しいプロレスのスタイル、長州の人気、それを背景にした長州の団体の移り変わりという「実」が生まれた。「建前」（虚）と「生身」（実）が混然一体となったジャンルの魅力である。

それを見て支持したファンの中にも、そこにある「抗争」が「虚」であることが分かりながら見ているという「虚」と、そこに投影した、自身の、上司やエリートに対する鬱憤という「実」を抱えながら見ていたわけだ。

また、プロレスという「虚」の中のちょっとした何気ない攻防の中に、ガチンコでやったらどちらが強いという「実」や、リングで肌をあわせている2人の先輩・後輩や、人気の優劣、性格といった「実」の関係性がどこか表情やしぐさに出ていたり、攻防の中のふとした瞬間にそれが垣間見れることも、信頼関係のもとで生身の身体をお互いに預けてぶつけあうプロレスならではである。

これはなかなかレアなケースだが、リング外のリアルな事実＝「実」をそのままリング上の対立の構造＝「虚」に持ち込んだケースもある。

ハルク・ホーガンと、所属していた団体WWEの代表・ビンス・マクマホンJrの長年に渡るリアルな確執がリング上のストーリーにそのまま持ち込まれ対決が実現したり、長州力と橋本真也の確執も同様にリング上での対決となって実現した（※5）

情報化社会の現代において、リング外のリアルな話のあれこれもマニアに共通認識になるほど知られやすくなっているがゆえに生まれる流れだ。

同様にレアなケースだが、プロレス中になんらかのアクシデントや感情のもつれが原因でガチンコのケンカに発展してしまったケースもある。

これは現代では極めて珍しいことだが、昔のアメリカでは意図してガチンコを仕掛けることはよくあり、それでタイトルが移動してしまったケースもあったという。（「リングサイドプロレスから見えるアメリカ文化の真実」（スコット・M・ピークマン 早川書房））それも

あり、昔のレスラーはガチンコの技術も習得していた。それを、いざという時に出す「懐のナイフ」という言い方をする。

これはプロのショーマンとして決して褒められたことではないが、これも生身と建前が一体となったジャンルだからこそ起こることではある。

あくまで勝敗を競う建前を社会にとっている以上、リングの上で相手に何を仕掛けられても、自分の身は自分で守るしかないという恐ろしさも「虚」の世界に潜んでいる「実」。

お互いの協力を前提とした技の攻防を繰り返して成り立たせている「虚」、その相手の技を受けているのは痛みを感じる生身の身体で、一歩間違えれば大怪我や死につながる危険なものであるという「実」。

格上のレスラーが格下を相手にする試合の前、「中途半端なら潰す」というコメントを出すことがあるが、これは試合の煽りで言う場合もあるが、時に格下の新人が自分の技の圧力、当たりの強さに耐えられなかったり、技術的、精神的に攻防の展開についてこれないと判断した場合、早い時間で一方的に叩き潰す展開で試合をフィニッシュにする、というケースもあり、「中途半端なら潰す」は本音＝「実」でもある。

この場合、格下のレスラーが歯を食いしばって立ちあがり必死にくらいついていく姿は、「そういう流れ」のプロレスをやっている面＝「虚」と、試合（＝ショー）を成り立たせるために必死になっているという「実」でもある。

「虚」「実」…これもまた人生そのもの。

他人との会話。

100%「実」だけで成り立っている会話などそうそうない。

「実」をもとにしながらも、相手に気を使い、空気、流れを考えて「虚」を用いつつ会話を成り立たせ、その「虚」の流れの中で自分の「実」を相手に伝えようとする。

ふだん、職場や家庭、それぞれの場でそれぞれ違う顔を持ち、その場にふさわしい言動を演じ、「虚」の自分を演じている。

しかし、まぎれもなくその「虚」は同時に「実」の自分でもあり。

日本人は特に本音と建前を使い分け、本音を語ってぶつかりあうよりも相手との和を保とうとする民族だ。お互いにそれが分かっているから、お互いの「虚」の向こうに相手の「実」を見ようとし、それに合わせて「虚」を演じる。相手はまたその「虚」の向こうに相手の「実」を見ようとし…。

日本でアイドルというジャンルが進化し、プロレスが独特の発達の仕方をし栄えたのもそこからあたりに理由があるのかもしれない。

職場などでなくとも、これ以上ないくらい親密な相手とのプライベートな空間…例えば、恋人に言う「愛してる」

本音なのか、実は他に本命がいるのか、その場でのノリなのか。

自分では本心…「実」だと思っても、単に感情が昂ぶっている「虚」かもしれない。

本当に100%の本音で話しているような相手は家族や親友、恋人であっても稀だろう。

100%本音もあるだろうが、同時にそこに何%かの嘘もある…100%にさらに他に何%が加わることなど数学的にはあり得ないが、人間は数学で割り切れるような単純なものではない。100%の本音と100%の嘘が重なり合って存在していることもある。

「プロレスが人生に似ているのではなく、人生がプロレスに似ているのだ。」という言葉は村松友視氏のものだったかと思うが、漠然とした人生というものを捉えようとした時、この項に書いたようなことを踏まえてたうえで「人生はプロレスだ」と考えると、なるほど、人生が分かりやすくなる。

人は、日常生活において、みな、場の空気を読み、その場にふさわしい言動を意識的に演じることによって、共同幻想を守っている。

「会社」という共同幻想。 「飲み会」 「合コン」 「デート」、冠婚葬祭…etc。

しかるに、プロレスという共同幻想を支えている人を見下す。

アイドルという共同幻想を楽しんでいる人を見下す。

ふだん、自分達が日常で演じて支えている共同幻想を端的に見せられるのが不愉快なのだろうか？

プロレスを「嘘」というならば、では、いったい何が「本当」なのか？

アイドルの笑顔を「営業」というならば、いったい何が「本心」なのか？

※1 ショーよりもスポーツ、競技の方が上等なもの、というわけの分からない観念が現代社会ではわりとよく見られるため、プロレスファンの中には、「いや、プロレスとは観客との闘いなんだ」、とか、その他いろいろなことを言って、とにかく、「ショー」「エンターテインメント」という言葉でプロレスを呼ぶのをいやがり、最終的に「闘い」「スポーツ」という言葉にしたがる人は多いが、ある意味において「闘い」と呼ぶことを間違いとは言わないが、本

質はショーであって、ショーと呼んでいることでプロレスをなめているように感じるとしたら、それはそう感じる人が「ショー」をなめているのである。

別項で書いた「ジャンルに貴賤なし」という言葉にあえて反して言わせてもらえれば、少なくとも自分の中ではスポーツよりショーの方が上等なもの。自分が言う「プロレスはショー」という言葉の意味には、そこに誇りこそあれ、プロレスを見下している意味は全く含まれていない。

※2 プロレス実況の天才、古館伊知郎が2人の一連の名勝負の数々につけたキャッチフレーズ。初代タイガーマスクの空中殺法に「四次元殺法」（空中を舞っている様は、普通に考えれば「三次元」なのだが、そこを「四次元」と本来あり得ない表現にした！）、アンドレ・ザ・ジャイアントの入場を「一人民族大移動」（どう考えてもあり得ない表現！）と名付けたり、彼の生み出したキャッチは最高だった。

※3 新日本プロレスレフェリーだったミスター高橋氏が出版した「流血の魔術 最強の演技 すべてのプロレスはショーである」に詳細がある。

※4 あらかじめ決めたプロレスの流れ、仕掛けなどをそう呼ぶ

※5 試合自体は、プロレスの範疇を超えるような危険なものにはならず、プロレスをしっかりとやっていた。

19 ファンが支えているプロレス、AKB。国民が押し戴いている天皇

2011年10月7日、ミル・マスカラス来日40周年記念興行がプロレスの聖地・後樂園ホールで行われた。

ミル・マスカラス、69歳。

世間一般のその歳の人と比べれば素晴らしい肉体をしているが、若いレスラー達のと比べて見劣りすることは一目瞭然。

動きもちろん、全盛期とは程遠いし、現役バリバリ世代がやる試合とは雲泥の差である。

それでも試合は入場の時点から大盛況。

昔見ていたマスカラスの今の姿に、自分の昔を、今を、想いを重ねる。

その69歳とは思えないほど鍛えられてはいるものの、昔に比べれば衰えた身体に時の経過、想いを馳せ、まぎれもなくあのスーパースターがそこにいるという事実酔う。

40年来の、マスカラスが出す1つ1つのお馴染みの技にあがる歓声。

伝統芸能とも言える心地よさ。この日の会場の空気は、聖なる祭りというプロレスの本質を最もよく現わしていた。

試合後、出場全レスラーがリングにあがり記念撮影をしている風景と場内の空気を見てまた浮かんできた、プロレスの良い興行を見た後によく心に浮かびあがってくる言葉。

プロレスって最高だな。

そう思わせるものは何なのか、いろいろ考えてみた。

最初に思ったのは、すでに書いたが、マスカラスの姿に自分自身の人生を重ねあわせて見ている、というもの。

こんなに選手（演者）の息が長く続くジャンルはなかなかない。

役者や歌手はどうかと思われるかもしれないが、彼らはその時々のドラマの役割を演じ、その時々の歌を歌っている。

プロレスラーは、言わば、マスカラスならマスカラスという役、キャラクターをずっと演じ続けているのだ。

しかも、前述したように、役者と違って、建前としてプロレスラーは24時間365日プロレスラー。

演者に対するファンの思い入れは他のジャンルより強烈だ。

(アイドルもプロレスラーと同様だが、アイドルがアイドルとしていられる時間は短い。)

たしかに、これも「最高」の気持ちの一因には違いない。

しかし、この空間の温かさを見て、もっと素晴らしい事実を発見した。

それは、プロレスとは、見ている側がそれを支えているものだ、ということ。

衰えた肉体、迫力のなくなった技に対する歓声、それはたしかに、歴史を見、聖なるお祭りへの歓声であるが、もう1つ、自らの熱い視線と歓声とで、その技の1つ1つを彩り、マスカラスを聖者に行っているのだ。

建前を積極的に支持し、言わば自らがジャンルの共犯者となることで、そのジャンルの幻想を成り立たせているプロレスファンの特性。(同時にそれはそのままアイドルファンの特性でもある)

それがこの日、69歳のマスカラスと、そう変わらない歳の弟のドス・カラスが、現役バリバリの相手タッグに勝ってしまうという究極の「建前の世界」で露わになり、ファンの温かさがその空間を支配したのだ。

「自分達が支えている」

この想いを、ファン達が最も自覚しているのがアイドル、そしてAKBではないだろうか。

野球やサッカーのような、1つの出来上がったスポーツの世界は、大マスコミが常に大きく取り上げ、ジャンル自体はもはや安泰だろうし、個々の選手は、ファンが増えようが減ろうが、ルールに沿って実力をあげ、成績を残せば上にいける。

普通のショーの世界でも、歌や演技は、もちろんファンが増えてCDなりチケットなり視聴率なりがとれるかどうかで成功不成功が決まるが、それには良い芸を提供できるかがカギである。その歌(あるいはその芝居ごとに)、評価や売上は大きく変わる。

アイドルは、芸の力はもちろん重要だが、その芸を通して、その人間そのものを応援してくれる人が増えるかが問題である。

もちろん、その歌やイベントごとに売上は変わるが、アイドルファンは、人間の魅力を売るアイドルの特性から、そのアイドルそのもののファンになるのであって、どんな歌やイベントでも継続して買う傾向が強い。コアなファンの存在もある。

何より、その人間そのものを好きになり、応援するのだ。「支えられている」「支えている」感強い。

AKBは、なお支え、支えられている感が強い。

というより、それがコンセプトの1つだろう。

小さな劇場からスタートし、そこに通う少数のファンが支えていた初期の時代、そして、握手

会等のファンとの直接のコンタクト、総選挙というファンの評価がダイレクトに反映する、参加型の企画。

秋元康は、AKBとは「コンピューターでいうとOSはWindowsではなくLinux(※1)」「みんながそのOSをバージョンアップして、お互い共有しあうというのが理想」と語り、様々な企画や決定を、ファンの反応を見て決めるという。初期の頃は、秋元康自身が劇場ロビーで観客に感想を聞いていた。(「QuickJapan vol.87 AKB 48 永久保存版大特集」) その後もスタッフを通じてファンの声を吸い上げ、現在はグーグルプラス(通称ぐぐたす)という、メンバー全員、スタッフ、ファンが自由に参加できるSNSの存在も大きい。

各メンバーが研究生からスタートし、昇格し、劇場公演に出ながら様々な媒体に出て、シングル選抜入りしたり、総選挙があったりという、人間ドラマを見れるグループ。

その独特のシステムゆえ、ファンでない者には分かりづらく、その分、ファンになっていろいろな事を憶えていくと、単純にAKBファンになったというよりは、AKBという世界に入ったんだという感覚が得られる。

ある時、ある人がAKB仲間の1人を「自分の同期で…」というふうに自分に紹介した。その後、それは「会社の同期」という意味で話してたことが判明したのだが、自分ははじめそれを「AKBのファンになった時期が同じ者」という意味でとった。

会社なり部活なりの組織で「同期」という言い方はあるが、アイドルグループのファンになった時期で先輩とか後輩とか同期という言い方はあまりしないだろうから、そう解釈するのはおかしいだろうが、AKBに関してはそれがしっくりくる感があるのだ(笑)

現に、「同期」という言い方はその時以外聞いたことはないにしても、ファンになった時期により、ドラマ「マジすか学園」を見てのファンを「マジすか新規」と呼んだことに始まり、同じようにどの曲からファンになったかで自らを「ヘビロテ新規です」と自己紹介したりする。そして、最もよく聞くのが初期からのファンを「古参」、わりと新しいファンを「新規」という言い方。

それらは、AKBが1つのアイドルグループというよりは、1つのコンセプト、さらには1つのジャンルという捉え方から来ている。ジャンルに対する思い入れの強さとも言えるだろう。

自分達が支えている、という想いの表現が、ライブ会場で各曲の決まり事で発生する客席からのコールやmix(※2)、ヲタ芸。

そして、AKBでは、メンバーの〇〇のファン、とは言わずに、〇〇を「推してる」と言う。

天皇は国民が推し載っている、という言い方をする。

推し載く…物を恭しく顔の全面の上方にささげ持つ。その人を敬って組織の長として迎える。
(goo辞書 <http://dictionary.goo.ne.jp/>)

敬って…ということは大前提としてあるのだが、同時に、国民がささげ持つ、象徴としていた

だく、という意志がその言葉には込められている。

一般の国民大衆が天皇の存在を意識するようになったのは、歴史の中ではわりと最近なのかもしれない。が、摂関家や武士、時代の実権を握る者が天皇を押し載っていた。（※3）

そして、現代。

皇居の一般参賀でのお出ましに国旗を振る国民と、それに笑顔で手を振って応えられるご皇族。

それは、こちらとあちらという対峙する2つの存在でありながら、こちらがなければあちらもなく、あちらがなければこちらもない、1つの風景。

国旗を振る国民は、ご皇族に対峙し国旗を振っていると同時に、自分達はその1つの風景を構成している、欠くべからざる要素であることを認識している。

自らの熱い視線と歓声とで、その技の1つ1つを彩り、マスカラスを聖者にしていたプロレスファンのように。

アイドルのコンサートでサイリウムを振って、その世界で認知されているお決まりのコールを叫ぶファンも、自分達が観る対象を崇拜していると同時に、自分達が応援している風景があつてこそその観られる側であることを認識し、歓声をあげることで積極的にその風景をつくっている。

客席をかきわけ、観客に襲いかからんと暴れながら入場してくる悪役レスラーから、殴られるわけではないことを分かりながら逃げ回る観客のように。（こういうタイプの悪役は最近あまりいないが）（※4）

他のジャンルではどうか。

スポーツ。本質的に、それを観る者がいなくても成り立つ世界である。

（金を払う客がいなければ経営が成り立たないじゃないかという実際的な問題ではない。ジャンルの本質的な話として）

芸能…歌や演劇も観る者あつてではないか。確かに、観る者がいなければ成り立たない。

しかし、天皇、プロレスラー、アイドルに対する、押し載くという感覚、熱烈に応援する存在がなくても、ジャンルとしては成り立つ。

それらのような、観る側・押し載く側と、観られる側・押し載く側にある、独特な熱気のある関係性ではない。

表現したい思いあまって1人で夜空に歌う歌手、または、誰見るわけでもない紙に書かれた自己完結の芸術として描かれた絵画…あり得る風景だが、1人で夜空にアイドルキャッチフレーズを披露し、アイドルソングを歌い踊るのは、練習でない限りあり得ない…あつたらちよっとアレな風景だろう(笑)

同様に、誰も見てないプロレスはあり得ず（※5）、押し戴く国民不在の天皇というのもあり得ない。

その理由は「建前」と「生身」が混然一体となった「人間」が主役というところがキーポイント。

「人間」を観るジャンルは、それを観る側も「人間」であることが必要であり、両方が主役なのだ。

国旗を振り、天皇陛下万歳を叫ぶ国民と、穏やかににこやかにそれに応えて手をふられる天皇陛下。

未完成ながら一生懸命歌って踊る少女の汗と、これもまたサイリウムを力一杯ふり、大声で応援する観客の汗。

プロレスラーを強さの象徴として尊敬し、それが建前の世界であると知りつつ、そのファンとしての振る舞いを自らも演じながら応援するファンと、それに鍛えられた肉体と技で応えるプロレスラーが支配する空間。

サイコーだな、と思う。

※1 Linux 個々のユーザーが開発者となって、全世界で改良&バージョンアップが続けられているオープンソースのソフトウェア、とのこと。自分はパソコン関係にうといので全く知らない。

※2 ミックスと読む。AKBの歌のイントロ、間奏でファンが叫ぶ掛け声。「タイガー、ファイヤー、サイバー、ダイバー、バイバー、ジャージャー」さらにこれの日本語（2連mix）、アイヌ語（3連mix）がある。AKB以前の地下アイドルからあったようだが、AKBのライブで爆発的に広まった。

※3 撰闘家や中世からの武士が天皇家を廃し、自らが新しい王朝を開かなかつたのは天皇を敬う精神ではなく、その権威をそのまま利用した方が時どきの権力に好都合だったからという側面があったにせよ、とにもかくにも、実権を握る者が天皇を押し戴く、という形をとることにより天皇が存在していたことは間違いない。

※4 小学生の時、観客を襲いにきたストロングマシンから逃げた後、客席に戻ってきた自分に、そこに微動せず待ち「あの人は殴ったら警察に捕まるんやから、襲われるわけないから逃げなくていいんや」と自分に言った父親（プロレスファンではなく、自分の引率で来てた）に、その頃は基本的にプロレスはガチンコだと思っていた子供ながらに「これは逃げて楽しむものなんや。この人は分かっとらんなあ」と心の中で言った自分は、プロレス、そして長じて、その頃生まれてもいなかったメンバーによって構成されるAKBのファンになる素質は持っていたわけだ。

※5 巖流島で猪木とマサ斎藤が観衆なしで闘ったり、大仁田厚がターザン後藤、タイガー・ジェット・シンとそれぞれシングルで行った「ノーピープルマッチ」などがあるが、当然、プロレスマスコミからファンに報道されて、ストーリーの点となることを前提としたプロレスである。

20 国旗、サイリウム、掛け声...人間を押し戴く表現手段

2011年1月29日、Not yet (※1) 3rdシングル「ペラペラペラオ」発売記念イベントは、自分のAKBヲタク活動史上最悪のイベントだった。

なぜ？

メンバーの出来が悪かった？

いや、曲の最高のパフォーマンス、それぞれの個性がよく出てたトーク、おもしろかったです。

イベントの構成が悪かった？

いや、派手でかわいい舞台美術、歌とトーク、笑いを混ぜた構成、お見事でした。お見送りでの指定メンバー、自分の場合はさしこ(※2)からの手渡し時の会話も、いつも通り元気いっぱいの笑顔を見せてくれました。

では、何で最悪だったのか？

自分、サイリウムを持っていくのを忘れてしまったのです…。

つまり、極めて個人的なミス。

サイリウムとは、アイドルのイベントに行く人ならお馴染み、光り輝く棒…昔で言うペンライト。

曲のテンポにあわせてリズムを取って、時に激しく、おだやかなテンポの時には滑らかに振って、その曲と自分自身のテンションを同調させる。

メンバーが出てきた時、歓迎の気持ちそのままに手を振るようにそれを横に振る。

曲の終り、「どうでしたか〜！」と客席に聞くメンバーにも、よかったよ〜！という意味で、また、ステージから手を振りながら去っていくメンバーにそれに応えてバイバーイ！の意味で、激しく横に振る。

このアイテムの持つ魔力がいかに大きいかわからない。

持って参加するのと持たないのとでは、同じ空間にいて同じものを見ていながら、その体験は全く違うと言っていい。あの、使い捨てなら150円ほど、電池式なら1000~2000円ほどの棒で、100倍は楽しめる。

まず、さきにしたが、曲のリズムへの同調。

身体を揺らしたり手拍子したり、何も持たずに手を振ったりしてもいいのだが、手の先で軽い遠心力を持って揺れる感触で、それらより同調感が勝っている。

明るく楽しく光る棒が手元で揺れているのを感じながら、視覚的にもリズムにのれる。ライブの照明効果が、自分自身ののりたいうリズムで手元でとれるのだ。

それから、他の観客との一体感。

これまで書いたとおり、アイドルファンは、芸を見るのと同時に“人間”そのものを応援しているので、思い入れが強い。そのぶん、同じアイドルを応援する他のファンとの連帯感も強い。

(AKBは特に人間成長ドキュメンタリーだから、さらにその思い入れは強い。)

各自がそれぞれで他人には分かりにくいやり方でリズムをとっているよりも、会場全体で視覚的に共有できる優れた方法、それがサイリウム。

そして、何より、ステージ上へのメンバーへ、応援の気持ちを伝えられること！

メンバーが見ているのは、客席全体のサイリウムの波であるが、その中の1つに自分になれるのだ。メンバーがその1本1本を識別しているわけではないにしても、その視界のどこかに自分の気持ちにのせて振っている光も入っている！

大声でメンバーの名前を叫んだり、MCの時にいいタイミングでメンバーに拾われるような大声でのメッセージを言うのは勇気がいるが、棒を1本振るだけなら誰でもできる。そして、その棒はこれでもか！と光り輝いていて、振り方で十分に自分の気持ちを表現することができる。リズムに乗り、他の観客と一体となり、メンバーに自分の気持ちを精一杯表現できるのだ！

あの楽しさ…嘘だと思ったら、アイドルのライブに来て振ってもらえば1番分かってもらえるのだが、アイドルに興味ない人は、1度、カラオケで使ってみるといい。

リズムをとる楽しさ、そして歌っている人へ「聴いてるよ！楽しんでるよ！」ということを送ることができ、振ってる方も、振られて歌っている方も気持ちいいことこのうえない。

歌っているのが、あなたが想いを寄せる異性なら、アップテンポの曲調時は狂おしい恋心を時に激しく振るリズムにのせ、スローの時は、優しく抱きしめたい気持ちを穏やかで優しいリズムで振るといい。

とびきりの笑顔でかわいいあなたが（それほどでもないあなたも）視線を送りながらピンク色のサイリウムを振れば、愛しい彼の中であなたの点数は急上昇するはず。

歌い手が気に入りたい上司やお得意さんならば、最高のごきげん取りができる。

また、人が歌っている時に自分の歌を選ぶ間…特に2人カラオケの場合…は、相手の歌から意識が離れていて、長くかかる場合は若干の申し訳なさがあるが、検索機械をいじってない方の片手でサイリウムを小刻みに振ってあげていれば、その申し訳なさはほとんどなくなる。

カラオケルーム内全体の一体感もバッチリ。

アイドルのライブで振る楽しさが少しは分かるはずだ。

アイドルに特に興味あるわけではない人達とのカラオケで人数分持ちこんで、適度に盛り上がってきたところで全員に渡したことが数回あるが、めっちゃくちゃ好評である。(※3)

ほんとうに、アイドルのライブでサイリウム…ペンライトを振ることを始めた人には、アイド

ル界のノーベル賞を贈るべきだ。

話は冒頭の部分から続く…。この日、“丸腰”でライブに臨んだ自分。

失って初めて分かる、大切なもの。

振った経験なしでこのライブに挑んでいけば、楽しめたかもしれない。

しかし、いったんあれを知ってしまった自分には、その喪失感、忘れてきた自分を責める気持ちでまるで気持ちが高まらなかった。人差し指を立てて振ってみたりしたものの、やはりサイリウムがないとアカン。

ライブ終了後、帰宅してからもなかなか立ち直れず。

光る棒1本忘れたことで38歳の中年男がここまで落ち込むかというほど落ち込んだ。そして、その気持ちがこの原稿を書かせた。

アイドルのライブに行く時は、財布、携帯、サイリウム。

このサイリウムの例でも痛感したが、本著の命題、プロレス、AKB（アイドル）～、皇室…。 “人間”に何かを求めて、その人間を推し戴く、幻想を支える、応援する世界では、その気持ちを伝え、表現する手段が必要だ。

プロレスには、「イ～ノ～キ～！イ～ノ～キ～！…」と観客が一体となって選手の名前を呼ぶ、〇〇コール。野次、ブーイング。

最近は減ってるが、リングアナの選手紹介時にとばす紙テープ。女子プロでは、コスチュームの色などから、このレスラーならこの色、というお決まりの色で統一されていたりもする。

プロレス、AKBには、その日その場で起こる「サプライズ」が重要な要素になっているが（第5章 33＜サプライズは人間ドラマの花形＞参照）、その一方で、「いつもの～」という安心感も重要である。

プロレスでは各団体でお決まりのオープニング曲がかかり、それへの会場一体の手拍子で、その団体のつくる世界観に入っていく安心感と高揚感がたまらない。

レスラーがある決まった技をかける前やかける時などのお決まりの掛け声もある。

鈴木みのるがリングインでロープをくぐる際には、テーマ曲の歌詞と共に「かっぜに～なれ～」と叫ぶ。小島聡がコーナーにぶつけた相手を倒してトップロープに登る前に人差し指を突き立てた後は一緒に「いっちゃんぞ、バカヤロー！」。神田浩之が正面飛びのドロップキックを放つ前には「ジョン・ウー！」

48グループの劇場公演、ライブではオープニングで劇場オープン開始時から続くovertureが流れ、ファンが3連mix(※4)を打つ。お決まりのリズムに乗っての高揚、一体感…。ふだん、AKBを理解できない人間だらけの社会と違い、この場はファンだけの空間だということを、馴染んだリズムを身体に受けて感じると共に、自分もまわりの観客に「俺もAKBの味方だ！」という思いをのせて打つのだ！同時にこれから登場してくるメンバーに「この場所は味方だけだよ！」と知らせる。

公演の自己紹介では、メンバーの多くがオリジナルのキャッチフレーズを持っていて、ファンとの掛け合いで成立しているものも多い。

「ド、レミ、ド、ミ～ド～」観客「みやお～(^0^)/」

「緑茶？麦茶？ウーロン茶？でもやっぱり～？」観客「あきちゃ～(^0^)/」

「あなたが欲しいのは金の斧？銀の斧？それともハルカオノ？」観客「ハルカオノー(^0^)/」。

順に、宮崎美穂、高城亜樹、小野晴香(SKE48・2012年3月卒業)の自己紹介である。

キャッチフレーズ、見てるだけでも非常に楽しい。ツイッターやっている方は、48グループメンバーのキャッチフレーズをひたすら紹介しているアカウントがあるので、ぜひ(@AKB_SKE_Catch)

皇居の一般参賀や、御婚礼パレードの沿道に集まった国民が国旗を振る風景はお馴染みのものだが、あの風景に国旗がなくて皆手を振っているだけだったら、皇室を押し戴く国民、という風景として物足りないだろう。

あれはお出ましになられた皇室の方々への、誰にでも、確実に出来る気持ちの伝え方で、さらには、そこに集う自分以外の国民達との一体感を感じることができる。その先に、この日本の社会とそこに生きる国民全体との一体感も感じられるに違いない。

一般参賀の際はボランティアの方々国旗を配って下さるらしいが、もしもらい損ねたりで、あの中で国旗を持たずにいたらなかなか寂しいのではないかな。少なくとも、自分は国旗をめいっぱい振って参加したい。

※1 AKBの派生ユニットの1つ。メンバーは大島優子、指原莉乃、北原里恵、横山由依の4人。

※2 指原莉乃の愛称。

※3 しかし、アイドルファンでない人達の振り方はやはりあまり上手ではない。1本調子で、変化がないのだ。どういう変化の付け方があるか、アイドルのライブで勉強しよう！

※4 mix…曲のイントロや間奏でファンが叫ぶ「タイガー、ファイヤー、サイバー、ファイバー、ダイバー、バイバー、ジャージャー」という掛け声。これは見てのとおり英語だが、その日本語訳バージョン、アイヌ語訳バージョンもあり、英語→日本語までいくのが2連mix、英語→日本語→アイヌ語までいくのが3連mix。ちなみに、SKE劇場公演のovertureではmixを打たないらしい。

mixについて詳しくは、シングル「GIVE ME FIVE！」通常版typeA付属DVDに収録されている「美しいMIX講座」を見て下さい。

21 天皇、プロレスラー、アイドルは「上」でなくてははいけない

タワーレコードの社長がアイドルヲタクで、「タモリ倶楽部」に出演してアイドル愛を語っていた。

そのような立場であれば、CDの入手や、ライブの入場なども関係者として、なんならバックステージにも入れそうなものだが、彼は基本的には自腹でCDを買い、ライブに行き（たまに招待で行くこともあるとのこと）、生写真を買ってるという。

本人はそれを「僕らが支えないと（ファンがお金を出さないと）彼女達が長続きしないから」と話してたが、それももちろんあるだろうが、それ以上に、全てを「関係者」「偉いさん」の立場で見れるようになったら、自分とアイドルとの関係性が崩れてしまう、自分の「アイドル」が「アイドル」でなくなってしまうのを分かっているからではないだろうか。

客席から舞台を、または自室からテレビ画面を通して見てこそ、アイドルはアイドル足りえるのだ。

握手会などの、ほんの短い時間、目の前に降りてくるからこそ「アイドルと握手している、話している」興奮と喜びがある。

「会いに行けるアイドル」というコンセプトと共にスタートし、「握手会が1番重要な仕事」（秋元康）なAKBにおいても、あくまで「アイドル」と会えるから楽しいのだ。

握手会がエスカレートし、例えば「お酒の接待をしてくれる会」などになったら、もはや自分にとってのアイドルではなくなってしまう。

身近に感じる「アイドル」だからいいのであって、ほんとに自分達と同じところまでおりてきては「アイドル」足りえない。

プロレスラーもそう。

昔のプロレスは、完全にプロレス側が上、観客は下、だった。

その日の興行に至るまでの流れは、自分で雑誌等を見ていかなければ分からない。

現在は、ちょっとした規模の会場、とくに東京なら小さな会場でもスクリーンを設置し、開始前に“あおり映像”で、それまでの流れだったりインタビューを流すことで、初めての観客にもストーリーが理解できるようになっていることが多い。（昔より今の方がストーリーが複雑な場合が多いせいもあるだろうが）

昔は、何の前触れもなく、18時半になって、カンカンカンカンカン…と無機質なゴングの音が鳴らされると同時に若手が静かに走ってリングに上がり第1試合が始まり（昔は前座レスラーの入場にはテーマ曲は鳴らされなかった）、メインが終了すれば、メインイベンターは勝ち名乗りを受けた後、黙ってリングを降りて花道を引き揚げていき、リングアナの「本日の試合は全て終了致しました。またのご来場を…」という言葉と共に、観客は、特に言葉を発するでなく引き上げていくメインイベンターの背中を見ながら帰途についたのである。

今は、試合前にはリングアナ、もしくはレスラー自身による、“前説”があり、興業の最後には、誰かがメのマイクをして終わる。（その団体、興行によっても違うので必ずとは言えな

いが)

「1、2、3、ダー」や、「3、2、1、ハッスルハッスル！」みたいに観客にも参加させてその団体お決まりのメの唱和をして終わりという団体も多々。

昔は、マイクアピールなんか1つの興業で1つもない時の方が多かったなんて、最近見始めたファンには信じられないだろう。

今のプロレスは開始時間にちゃんと始まる。

何を当たり前のことをと思うなかれ、昔は殿様商売、試合開始時間が遅れるのは当たり前、インディーによっては……思い出すのはWING(笑)(※1)、平気で30分くらい遅れてたりしてた。

今はそうそうお客様を待たせるようなことはあまりありません。

たしかに、今のプロレスはエンターテイメントとして成熟し、試合内容もものすごい進化をしている。

昔と今と、試合内容どちらが面白いかと聞かれれば、断然今だろう。

興行の進行にも無駄なく、観客を満足させて帰そうという努力も素晴らしい。

しかし、難癖つけるわけではないが、観客を「お客様」にしてしまっている感がなきにしもあらず。

いや、団体側の心としてはそれでいいのだろう。

しかし、現場、会場、プロレスラーの醸し出す雰囲気は、いくばくでも、泥臭さや、昔のような殿様商売的な、粗野な感じがあると嬉しい…具体的にここをこう、とは言えないのだが。

長州力や天龍源一郎が、入場だけ、その存在だけで何故あれほど会場を沸かすことができるのか、そこを少し考えてみる価値はあるかもしれない。

雰囲気として観客より「上」という殿様商売的な雰囲気を出しつつ、実際はかゆいところに手が届くように気を配り、必ずお客を満足させて帰す興行をやる…というのが理想か。

具体的にどうすればいいのかと聞かれても自分も分からない…芸の世界は奥深く、難しい。だから、面白い。

ご皇室も。

尊い方々だから仰ぎ見る、というのと同時に仰ぎ見るからこそ尊い方々になる。

その方々が、慰問その他の短い時間、我々に直にお声をかけていただくかたこそ感激する。

「開かれた皇室」というのは素晴らしいこととは思いますが、無制限に開けば開くほどいい、ということではない。ご皇室がご皇室でなくなってしまう。どこらへんまで開くか、その加減が大切だ

。

プロレスラーも、「人間」を見せるのが極上の愉しみで、その意味でリングの外でマスコミを

通して、プライベートなところでの言葉や表情を見せるのもありだが、何をどこまで見せるのか、そこにもプロレスラーは「プロレス頭」を働かせなくてはならない。

昔、ある若手レスラーがいた。

そのプロレスラーが自分は大嫌いだった。何故か？

そのプロレスラーは、元々熱烈なプロレスファンだった。それが高じてプロレスラーになった。

よくある話ではある。

そして、その事を知っていたからというわけではなく、もう、彼のプロレスには、「自分が今、かつて憧れていたプロレスラーである事が嬉しくてしょうがない、プロレスが出来ることが嬉しくてしょうがない」という思いが溢れ出ていた。

そのどこがいけないのか？と思われるかもしれない。

いけないのだ。

プロレスには、人間の匂いがすることが最大の魅力だと言ってきたが、嗅ぎたい匂いは、「大人の男」であり、自分達が子供になったかのように見上げることができる存在なのだ。

ちょっと言い過ぎな表現をすれば、プロレスは仕事でやっているだけだ、というくらいの、大人の匂い。

事実、カリスマ、と呼ばれる、また、超のつく大物レスラーは、プロレスファン出身でないレスラー。プロレスはあくまで自分が光るための道具として考えている。プロレスにしがみつけない。

力道山、アントニオ猪木、前田日明、ハルク・ホーガン…。

(そういう意味では、前述の条件にはあてはまるのに、ジャンボ鶴田が「カリスマ」という言葉からは最も遠いレスラーだったのは謎だが((笑))何事にも例外はある)

話を戻して…その若手のようなプロレスラーを見ていると、プロレス少年がそのまま大人になってリングにあがってる錯覚をおぼえてしまって、大人の男の匂いとは程遠く、憧れることができないのだ。自分達と同じ地平線上に見えてしまってはダメなのだ。

もちろん、実際、血のにじむ努力をして強靱な肉体を持ったプロレスラーの、どこがおまえと同じ地平だ、という反論が出そうだが、そういう理屈…スクワット何千回できるとか、ケンカをすればこっちは何もできないとか…を頭で知識として理解して初めて憧れられるようなことを求めているのではない。

理屈抜きに、いやがうえにも匂ってくる、プンプン強烈な大人の男、プロレスラーの匂いを求めているのだ。

ちなみに、その若手レスラーは現在はかなり好きになった。

若手の頃は「自分が憧れていたあのプロレス」をやっている満足感でいっぱいに見えたが、今は「自分のプロレス」を見つけて、そこに全身先霊をかけてやっている。

クールな佇まいを持った、大人の男の匂いプンプン…というのとは違うが、魅力的なプロレスラーになった。

一方、これをアイドルにあてはめるとどうか。

プロレスラーへの憧れむきだしのプロレスラーは下だが、アイドルへの憧れむきだしで、今、自分が憧れていたアイドルになった喜び全開でステージに立っている少女は…。

めちやくちや魅力的である！！

同じ人間臭さを見たいのでも、プロレスラーには、大人の男が観たいという願望があるが、アイドルの少女たちには、自分の同じ地平に立っている少女が観たい。両方とも「人間」が観たいというのは共通しているが、施されるデコレーションが違う。アイドルが等身大の可愛さという幻想でデコレーションした人間臭さを売ってるとしたら、プロレスは強い大人の男という幻想でデコレーションした人間臭さを売っている。

プロレスラーには「大人の男」「強さ」

アイドルには「可愛さ」「身近さ」

では、天皇陛下、ご皇族には、日本人は何を求めているか。

「親」を求めているのではないか。

国民の親になっていただきたい、ということではないか。

理想の親像。権威があり、尊敬し慕う存在でありながら、何よりも子の幸せを考え、それでいて干渉してくるのではなく、遠くから見守り祈ってしてくれる。

であるから、最近の皇室報道…中でも興味本位のものを見てて危惧を覚える。皇室が開かれて親しみが増すのはいい。

が、なんでも暴露して親の権威が失われてはいけない。

無制限に「開いて」はいけない。

親には親の権威が必要。

「お友達」「自分達と同じ地平」ではご皇族の意義がなくなってしまう。

「上」になにがしかの人間を仰ぎ見たいというのは、人間の本能のようなものかもしれない（※2）

アイドルには、自分の理想の異性像を。母性的な優しさを。（※3）

プロレスラーには、強い、大人の、父性的な理想像を。

ご皇室には、母性、父性両方を兼ね備えた親としての理想像を。国の象徴としての権威を。

※1 90年代前半に存在したインディーのプロレス団体。いろんな意味でインディーらしい、90年代インディープロレスファンの記憶に残る団体。

※2 「上」を求める、言い換えればボスを認める本能…。

アイドルを求めるのも、皇室を敬愛しているのも男女の差はないし、プロレスファンも男性の方が多いとはいえ、女性ファンも大勢いる。しかし、1つの参考として、以前、テレビで放送されたアメリカの小学校での男女別の教育方法の試みを紹介する。

男女の持つ性質にあった教育。

男の子クラスでは、先生がボスであることをはっきりさせる。そのために、1人1人が順番に先生と拳をタッチしながら教室に入る。

授業では、お互いに競争したがる男の性質を利用し、勉強への意欲と集中力を高めるため、先生が問題を出す。

「これが分かる人！」とあおると、男の子は「はい！」「はい！」と競って手を挙げる。

正解した子はボス＝先生が褒める。

これで男の子達は勉学に勤しむ、というわけである。

女の子クラスでは、先生はボスらしさを出さない。

男の子クラスのように手を挙げさせ競わせるのではなく、グループに分け、問題をグループごとに考えさせ、発表させる。（これを男の子にやらせると、グループの中で誰の答えが正しいかの競争意識が出てうまくいかない傾向があるとのこと）

※3 昔のアイドルはどちらかというと遠いスターの理想像、現代、AKBの場合は、人間として汗をかいている姿を見せ、自分も頑張ろうという気にさせてくれる身近な理想像、という違いはあるものの、理想像という意味では違いはない。

22 自分がない“人間”がほしい だからプロレス、AKB、ご皇室

プロレスもAKBも“人間”を見るのが醍醐味と書いてきているが、しかし、人間くさければそれでいいというものではもちろんない。

単に人間くさい人達を見たければ、大衆居酒屋にでも行けばいいのかもしれない。

プロレスは、男の憧れ「強さ」を象徴し、分厚い肉体で相手の技を真正面から受け止め、やられても立ちあがっていく姿に、自分の理想の「人間」像を観る。

「強さ」（＝真剣勝負の格闘技での強さ、という意味ではない）を感じさせる、「強い人間」が見たい、というのが基本にあつたうえで、各レスラーそれぞれの“人間”、個性を観る楽しみがある。

アイドルが可愛さという幻想でデコレーションした人間臭さを売ってるとしたら、プロレスは強さという幻想でデコレーションした人間臭さを売ってるとでも言おうか。

少年、青年期の自分はかなり貧弱な身体で気持ちも弱かった。小さなことにいちいち心を悩ませ、何事にも動じてしまう弱い気持ち。

そういう自分がないもの。分厚い肉体。そして、何事にも動じない、「男」のオーラ全開のレスラー達（特に、長州力や天龍源一郎など）の「大人」の匂いに惹きつけられていた。

そんな自分も歳をとっていくにつれ、自分より年下のレスラー達が徐々に多くなっていく。

今や、メインイベントの主力どころはほとんどが年下のレスラー達だ。

…そうになると、どうしたって、レスラー達に感じていた、自分になかった「大人の男」への憧れ、というものは薄らいでくる。

もちろん、どれだけ年下であろうが、自分よりも肉体的にも精神的にも逞しい若いレスラー達への憧れの気持ちはある。

しかし、やはり少年期、青年期に大人のレスラー達を仰ぎ見て感じ、そして求めていた、自分がないもの＝「大人の男」の匂いは、自分自身が少なくとも年齢だけでも「大人の男」になっていくにつれ、どうしても薄れていってしまうのも確か。

そして。

自分が大人の男、つまるところはおっさんになっていくに連れ、「自分がないもの」が変わっていく。

そう！

10代後半から20歳前後の少女達、あの年代の少女達だけが持つ、あの輝き！

それも、夢に向かって一途に進んでいく少女達の。

それも、少女達が集団になった時の、男やおぼはん達が集団になった時には決して出ない、あの、独特の団結の強さ、輝き！

夢に向かって進んでいく少女達の集団の輝き、純粹さ、、、それをなんと言葉にしていいか分からないが、「それ」は、確実に！おっさんが逆立ちしたって持ち得ない何か、である。

今後歳をとっていくにつれ、ますます、「自分にはない」ものになっていくだろう。

ご皇室が体現しておられる聖なるものを見て静かに感動する気持ちも、我々が俗なる世界で生きているからだ。自分達の世界では失われがちな静謐、私心のなさ、柔和で全てを包み込んでくれるような温かさ、それらを求めている。

異性にも、自分にはないものを感じ、求める。

自分にはないものをもっている友人に心ひかれる。

他の人間に「自分にはないもの」を求めるのは、人生と同じ。

それをまさに「人間」で具現化し、見せてくれるのが、ご皇室であり、プロレスラーであり、アイドルである。

23 「人間」を観るジャンル

決められたルールの枠内で競うスポーツ、事前に完璧にやることが決まっているショー（歌や演劇）、よりも、完璧には決められてはいないショー（プロレス）、ドキュメンタリータッチで成長の様子を見せる運動体（AKB）は“人間力”がモロに出る。

ここでプロレスを完璧にきめられてはいないショー、というのは、1から10まで台本で決められている芝居とは違う、ということだ（※1）

フィニッシュや、ところどころ打ち合わせが必要な攻防を除いては、観客の反応を見ながら、臨機応変に試合をつくっていく、生物（なまもの）のエンターテインメントである。

その中で、自分というものを表現しながら試合をつくっていく。

否応なく、その人間そのもの、人間力が露わになる。そう説明されてもプロレスを見ていない人にはピンとこないかもしれないが。

AKBの劇場公演のMC（曲の合間に自分達でお題を考え、それに沿ってトークをする時間がある）は、本人達に任されている。

なにしろほぼ毎日行うし、生観覧、ネット、CS放送での常連客はいる。当然、毎回違ったトークを行う。

握手会はそれこそ、10～30秒ごとに目の前にやってくるファンの話に、次から次へ臨機応変に対応しなければいけない、究極のアドリブの舞台だ。

また、正規チームの昇格や、様々な企画の発表は劇場やコンサートのステージ上で発表されることが多く、そこでのメンバーのリアクションもファンの視線にさらされている。

AKBの冠番組（※2）では、無茶ブリと呼ばれる体当たり企画をはじめとして、メンバーの個性を光らせるための企画によって構成されている。

その他にも総選挙やじゃんけん選抜などのガチでドラマティックな企画でのコメントを求められる場、さらにはブログ、ぐぐたす（※3）での対応など…とにかく、AKBには、メンバーの“人間”を浮かび上がらせる場が満載である。（それは当然、AKBのコンセプトに沿った意図的なものだ。）

要は、プロレスもAKBも、その舞台のうえで、アドリブで自分という人間を表現するジャンルだ。

表現手段としての技術も大切だが、そもそも表現するもの＝自分自身の個性を見きわめる、そしてそれを高める、全人的な行為が重要になってくる。

自分の中にないものは表現できないから、その個性を人生の中でいかに育てていけるか。「そこに人間がいる」存在感をいかに打ち出していけるか。

そして、「人間」を見る側の人間の眼力も試される。こんなに面白いジャンルがあろうか。

ドラゴンゲートという団体がある。

ルチャリブレ（メキシコのプロレス）を基本にしつつ、日本流にアレンジしたスタイルで、飛んだり跳ねたりの空中技、スピーディーな展開、イケメンで垢ぬけたレスラーが多く、女性客の割合が1番多い団体だ。

よく見に行く。完成された、洗練されたプロレスを見せてくれて毎回面白い。興行の完成度に安定感がある。

ただ、何故かいつも感じることもある。

とても面白いのだが、「プロレスを見た」という感じがあまりしないのだ。

最初、その原因は選手の身体がメジャー団体と比較して小さいせいかなと思った。

確かにそれはある。

プロレスラーの身体はとにかく“ごつい”のが理想であって、ドラゴンゲートのレスラー達はビルドアップはされてるけど全体的に小さい。これまでのプロレス界には、とにかくデカくなれという教えがあったのに対し、プロレス界で最近はやってる、脂肪をある程度削ぎ落として、ボディビルダー寄りの身体をしている選手が多い。

しかし、それだけではない事に気付いた。

この団体、完成されているのだ。

プロレスには、全体のストーリーラインがあり、それに沿った試合があり、試合後のマイクや遺恨づくりというものがあるのだが、それら全ての細かいところまでを完全に決めてやるのは不可能である。

例えば、今やプロレスに完全に欠かせないものとなったマイクアピールであれば、言葉のやりとりや喋る順番を事細かに決めていくわけではなく、ストーリーラインに沿った線で各自が自分の言葉で喋るのだろう。ところどころ、決めてるセリフなどはあるかもしれないが。別に自分は業界関係者ではないので本当のところを実地で知っているわけではなく、あくまで自分が思うところであるが。

それに比べてドラゴンゲートのマイクのやりとりは、まあ、全く無駄な部分がない。

無駄のない、ちょっと説明的な言葉のやりとりで、マイクを持つ順番も実にスムーズに周り、それもけっこうな長い時間をとって展開され、必ずしっかり今後のストーリーにつながる言葉のやりとりが完成する。おそらく、細かいところまでしっかり事前に決めていくのだと思う。

その理由の1つには、この団体が、所属レスラーが各ユニットに別れての軍団抗争というコンセプトがしっかり決まっていて、飽きさせない為か、レスラー達がわりと短いサイクルで裏切りやなんやかやでユニットを移ったり、新たなユニットが出来たり、消滅したりという展開が目まぐるしく、それを説明する必要があるため。

もう1つは、最近小さな会場でも試合前のあおり映像を使って、そこまでのストーリーを観客に見せる団体が増えてきた中、この団体ではビッグマッチ以外では映像を使わないために、そ

れら目まぐるしいストーリーの全てをマイク合戦で説明しているからである。

で、何が問題なのか。

なんというか、窮屈さを感じるのだ。

レスラーが自由に伸び伸びとできていないというか。

これも、最近のプロレスでは割と珍しく、ヒール（悪役）キャラとベビーフェイス（善玉）キャラがしっかり色わけされていることもあってか、レスラー本人、生身の個性がキャラの鎧が固すぎて窮屈に見える。

キャラがハッキリしているからと言って、必ずしも個性が発揮できないわけではないが、あまりにキャラの縛り、ストーリーラインの説明くささの窮屈さがありすぎると、どうしても伸び伸びした個性が発揮しにくい（※4）

プロのエンターテインメントということであり、その中でのストーリーを進行するためのマイクであるならば、それこそ事前にしっかり台本をつくって憶えて、それを展開するのが正解、であるはずだ。それをだいたいの流れだけ決めてあとはアドリブで…など、プロレス以外のフツートのショーの考え方からすれば「手抜き」ということになってしまう。

ドラゴンゲートのやり方で正解のはずだ。

なのに、そこに窮屈さを感じ、プロレスをエンターテインメントとして楽しんでいる自分が「プロレスを見たという感じがしない」という感想を持ってしまう…。

アドリブ、決まっている流れの中でその中で各レスラーが自分をどう表現するのか、それが見たいのだ。

AKBの楽しみ方と全く同じである。

AKBの番組での無茶ぶり企画も、その無茶ぶり企画を楽しんでいるのではなく、それに各メンバーがどう反応するか、その個性を見るのが楽しい。

そして、自分にとってのプロレスとは、「プロレスラーがやっているプロレス」も楽しみながらも、それ以上に、「プロレスをやっているプロレスラー」を見るのが極上の楽しみなのだ。

“人間”を“観る”ジャンル、は、見せる側（プロレスラー、アイドル）もそれを見るファンも、感性、品性、知性が同時にフル回転する。

（ついでに言うと、感性、品性、知性が同時に低い人間は、ジャンルそのものを見下すという愚をおかす。）

2011年9月にCSのチャンネル・ファミリー劇場で始まったAKBのコント番組「びみよ〜」

AKBのメンバーがガチでコントで挑む、という宣伝。

その言葉に偽りはないが、しかし、単にコントで笑いたいなら芸人のコントを見ればいいわけで、「AKBがやるコント」の意味が問われるとこだったけど、しっかり期待に応えてくれた。

コントに限らず、AKBがやる事というのは、バラエティにしても何にしても、目的はメンバーそれぞれの個性、人間くささを引っ張り出すための道具。

だから、「びみよ〜」もその名の通り、コントの素人でアドリブなどまだまだ早いはずの彼女達には本来あるまじき、アドリブ感ただようゆる〜い空気感を出して、各コントの終わりには演じたメンバーの感想VTRが挟まれる。それもインタビュースペースで改めてコメントをとるのではなく、終わった直後の通路などで、息を弾ませたまま。

伝説のお笑い番組「ひょうきん族」では、プロデューサーが若き日のたけしやさんまら芸人に「スタジオで思い切り遊んでくれ、それを俺達が勝手に撮るから」と言ってたそうで、番組は思い切り楽屋ネタ雰囲気溢れていた。（※5）

「びみよ〜」ではプロデューサーの気持ちとしてこうではないだろうか

「一生懸命、コントをやってくれ。『コントをやってるAKB』を俺達が勝手に撮るから」

そう、この番組に限らず、夢を追う少女達のドキュメンタリーであるAKBというジャンルの主役は、「AKBの歌、AKBのダンス、AKBのコント」ではなく、「歌を歌うAKB、ダンスをするAKB、コントをするAKB」

こういう見方をする自分は、プロレスよりもプロレスラーが好きでプロレスを見ている。

後楽園ホールは、リング、レスラーと観客の距離が…距離自体は前の方の席に座ればどこの会場でも近いから、距離ではなく「距離感」が…近い、自分の1番好きな会場なのだが、この後楽園で見れる自分だけの？お楽しみがある。

東側の入場口、レスラーは、客席からわずかに見える（席によっては見えない）、バックステージからの階段を観客席には背中を見せるかたちで昇り、向きを変えて少し歩いて場内の入場花道に姿を現す。

その階段は基本的には会場からよく見えるようにはなっていないのだが、席によるが、観客席から見えることは見える。横にカーテンがあることもあり、レスラーとしては、そこを昇り降りしている時は、レスラーとして観客の目にさらされているという意識は希薄だと思う。

つまり、入場時、1人の人間がバックステージから「プロレスラー」として観客の前に飛び出す直前の背中が、そして退場時には「プロレスラー」からバックステージへ、下を向いて階段を降りる、1人の人間へと身体の力が抜いていく姿を見られるのである。

（最近はCS放送で試合後のインタビューが撮られることが多くなり、バックステージに戻っても

仕事が待っている時はあるが)

その姿を見るのがなんともしびれるのである。

このよううってつけの場所のものでなくても、ひきあげていくレスラーの背中を見るのが自分は好きなのだ。

「人間」がたしかにそこにいると感じる。

※1 試合によって、ほぼ完璧に流れをきめたうえで行ったりすることもあるだろうけど。

※2 「週刊AKB」「AKBINGO」「有吉AKB共和国」(以上、地上波)「AKB48ネ申テレビ」(CS)など

※3 48グループのメンバー全員が参加しているSNS「グーグルプラス」の略称。

※4 ドラゴンゲートでいうとCIMAというトップスターが、天性の明るさで、ヒール(悪役)をやっている時でも、リング上をまぶしく輝かせている。一瞬一瞬を完全に楽しみきって表現している、本当にスターという言葉がふさわしいレスラー。その他にも同団体で天性の個性を発揮しているレスラーはいる。本文にも書いているが、試合のレベルは非常に高い。別にこの団体を悪く言っているわけではないのであしからず。

※5 それを見て「ひょうきん族なんて楽屋ネタばかりじゃねえか」と言い、クラスの中で1人、裏番組で、最後はひょうきん族に追い落とされた「全員集合」に寝返ったのが小学生の時の自分だった。

24 「いかがわしさ」には「いかがわしさ」を

前項で、ドラゴンゲートを見ていて、この団体が「プロレス」を感じさせない理由を書いたが、同時にこの団体の長丁場のマイクアピール合戦に、「見てられない」感覚を持っている自分もいた。〈第1章 3「プロレス、AKBのファンは虚像を見ている」と、見下す者が虚像を見ている。ファンが見ているのは実像〉で述べたような、プロレスのマイクアピールを「見てられない」というプロレスアンチのように。

長くて説明的すぎるきらいがある、ということもあるのだが、それだけではない…。

考え続けて出た答え。

「プロレス」を感じさせない理由、マイク合戦を「見てられない」気持ちにさせるもの、それは共通の理由だった。

それは。

この団体、

「いかがわしさ」がないのだ。

まず、この団体に育った純血レスラーが圧倒的に多い（※1）

そして、他団体との交流もわりと少ない。

若いレスラーが多い。みんな、本当に真面目に一生懸命、プロレスをやっている。技術はピカイチ。

これが他の団体だと、いろんな団体を渡り歩いてきたベテランレスラー、複数の団体にあがっているフリーのレスラーなど、「いろいろあったんだなあ」という人生遍歴を、そのぶ厚い身体、ちょっとばかりつきすぎちゃった脂肪にムンムン感じさせるレスラーが少なからずいる。

そういう、プロレスラーが醸し出す「大人の色気」が少なくとも自分にとってはプロレスを見る醍醐味であり、それはある種のいかがわしさに通じる。

それがなくなることが、「プロレスを見た」感じがしない理由であると同時に、マイク合戦を「見てられない」と感じさせる理由でもあった。

「見てられない」というのは、ありていに言えば、ある種のヤラセ感が出過ぎているのを感じて見てられない気分になる、という意味。

そこにプロレスラーの「いかがわしさ」があっては、余計に「見てられない」と感じるのでは

ないか？

違うのだ。逆なのである。

プロレスの「軍団抗争」というものは、冷静に見れば、こんなにバカバカしくて嘘くさいものはない。

いい歳した大人達が、闘う理由もつるむ理由もよく分からないまま「軍団」をつくったり裏切ったりというドラマを繰り広げ、終着点がどこにあるのかもよく分からない。

そのバカバカしい「抗争」はどうやれば、バカバカしく見えなくなるか？

それは、プロレスラー達そのものが、カタギっぽさを消して、いかがわしく、異形の間人臭さを感じさせることである。

先に「いい歳した大人達が～云々」と書いたが、それを普通の尺度で考えれば「バカバカしい」となってしまうわけだ。

普通の世界でなくせばいいのだ！

昔、大仁田厚率いるFMWという団体は、あちこちから流れてきた寄せ集めのようなプロレスラー、聞いたこともない海外の団体の外人レスラー達がリングの上で電流爆破デスマッチだの、地雷爆破マッチなどのハチャメチャなデスマッチを、これまた大の大人が誰が裏切っただのどうしたのだというストーリーを、大仁田厚がこれまた熱い熱い語り口調のマイクで絶叫し、バカバカしさの極致のような世界を展開していた。

しかし、それを「見てられない」と思ったことはなかった。

それまでの王道のプロレスとはかけ離れていた電流爆破マッチなどを見た後も、「プロレスを見た」という満足感があった。

当時のFMWより、技術はドラゴンゲートの方が数段上である。

マイク合戦もスマートで無駄がない。ショーとして完成されている。

しかし、「いかがわしさ」がないため、リングで繰り広げられるマイクアピール合戦、軍団抗争のストーリーの説明が、それだけヤラセっぽさが浮かんでみえてしまう。だから「見てられない」

他方、プロレスラーそのものがいかがわしさ満載、異形の間人臭さを感じさせている団体は、そこでいかにフツーではあり得ない「軍団抗争」のストーリーが展開されていようとも、「さもありなん」、あっても不思議ではないワールドになるのだ。

つまり、大の大人が繰り広げる「軍団抗争」「マイクアピール」などをそこに含む「いかがわしい」プロレスは、「いかがわしい」プロレスラーがやってこそ、少なくとも頭では「これはガ

チンコではない」と分かっている、心ではそれを感じない、1つの完成された世界になる。

「いかがわしさ」×「いかがわしさ」＝熟成されたプロレス、大人の色気、演者の色気

「いかがわしさ」×「まっとうな人間」＝浮足立ったいかがわしさ（＝見てられない感）

あまりに完成されて無駄がない試合、無駄のないマイク合戦のドラゴンゲートは、ややもすると、ヒール（悪役）のレスラー達が「一生懸命、悪役をやっている好青年」に見える。

それに比べて、数々の団体を…人生を渡り歩き、大きな腹が出て、喋りも達者ではなく、自由にその場で思いついたような言葉をしゃがれた声でマイクでがなりたてるベテランの悪役レスラーは、それを仕事でやっている頭では分かっている、実際目の前にするとすごい迫力だ。

いかがわしさがそのまま、カタギではない人間の迫力になっている。（※2）

その迫力こそがプロレスなのだ。

※1 現在、プロレスの団体は数えきれないほど多くあり、団体の移籍（時には団体そのものの消滅による移籍も。）も、特に弱小団体ならごくふつうのこと。現在は、デビューしてから引退までずっと同じ団体に在籍しているレスラーの方が少ないかもしれない。

※2 カタギ、という言葉の解釈には幅があるようで、プロレスラーが“カタギ”か“非カタギ”かは解釈によるが、まあ、ここでカタギでないと言っているのは、少なくともプロレスラーを暴力団のごとくに言っているのではなく、バカにしているのでもないのを念のため。文章の流れで文意を汲んで下さい。

自分がAKBにハマり出したきっかけは、2011年1月の引越しに伴ってCS放送が視聴可能になって、音楽専門チャンネルをつけていることが多くなり、そこで流されていたAKBのミュージックビデオを目にし曲を聴くようになったことである。

誰がかわいいとか、本著で述べてる「人間」が見れるアイドル云々ということは後からであり、そもそもハマったきっかけは作品なのだ。

AKBのミュージックビデオの完成度はすごい。特にシングル曲の。

カラオケに行って歌うのはほとんどAKBなのだが、そこで「本人映像」つまりミュージックビデオが流れる曲も歌うと、それまでAKBに関心なかった人も皆、その素晴らしさに感心する。

また、曲自体も素晴らしい。

秋元康が、「AKBの曲は〇〇」と定番化されることが嫌いで、作品ごとにテーマを変えてくるのだが、自分がその底に流れるテーマを1つ挙げろと言われれば、「色即是空」と答える。

自分は仏教の専門家ではない。

若い頃に般若心経に興味を持ち、連続してそれについての本を5～6冊読んだことがあり、あとはヨガをやっている関係で多少、関連のことを聞きかじっている程度だ。

なので、ここで言う色即是空とは、そういう自分が思うところの色即是空だ。

色即是空 今、目の前にある華やかで楽しい風景、時間は実はじつにはかない幻である。

色即是空のあとは、空即是色と続く。

そして、これは、もはや自分が思うところの解釈というのも超えて、こう読み取ろうという自分の勝手な意志であるといっているが、

幻でありながらも、今目の前にあるこの時間を生ききろう。

幻であるがゆえ、はかないものであるがゆえに。

この時は、瞬く間に過ぎてしまう幻であり、はかないものである。

しかし、はかないからと嘆くのではなく、はかないからこそ、今、この時をめいっぱい生ききろう。

そういったメッセージがAKBの作品を通して聞こえてくる。

今、輝いているこの時間は、今だけのものということを知りながら、しかし分かっているからこそ楽しんでいるorがんばっている、という思いを感じる。

色即是空ということと言うなら、アイドルの存在そのものが色即是空である。

松田聖子のような存在は例外として、アイドルでいられる時間は青春の限られた時間であり、女のお肌の曲がり角は25歳というのはホントかどうかは知らないが、老いはそういう早い時期に容赦なく、誰の目にも分かるように彼女達の容貌にくっきりと刻まれていく。

少女達の持つ若さ、可憐さははかない一時のもの。

それに加え、AKBには、もう1つ。

少女達が集団になった時の、あのワイワイした楽しさ。

少女達が一緒に夢を追う時のあの、団結力とそこから生み出される強さ。

それもひと時のものである。

(おばちゃん達の集団の強さもそれはそれで独特のものがあるが(笑)、少女達の集団の可憐さとはこれが同じ女の集団かと思間違えばかりに、全く異質なものである。)

その頑張っている様子…総選挙や選抜、昇格制度などのシステムや、バラエティの彼女達の無茶ぶり企画、ほぼ毎日の劇場公演で生で見れる成長など、わずかな期間を精一杯生ききっている少女達の集団をドキュメンタリーで我々に見せてくれるのだから、AKBのコンセプト自体が「色即是空」と言っているかもしれない。

その歌、詞の世界については次項で改めて詳しく書くとして、AKBの歌詞から般若心経の話をする、??という顔をされる。

第2章 11 <根っからの“ジョーシキ”嫌いにとっては、AKBは「買い」>で書いた「ジョーシキ」の話と同じことだが、そういう人の頭の中には、勝手につくったカテゴリがあるのだろう。「宗教 哲学」カテゴリ、「アイドル」カテゴリ...etc。

さらには「宗教 哲学」カテゴリは、「高尚なもの」カテゴリの中にすっぽりと入っている。あるいは「難しいもの」カテゴリかもしれないし、「かっこいいもの」カテゴリかもしれない。

そして、アイドルというものは、さしずめ「くだらないもの」カテゴリに放りこまれている。そういう世間一般の価値観におもねったカテゴリが頭の中にある人ならば、まず間違いなく「くだらないもの」には「プロレス」も放りこまれていると思われる。

そして「くだらないもの」カテゴリの中のものと「高尚なもの」カテゴリの中のものが交わることは全くないのだ。

こういう膠着した頭の持ち主には、真に「高尚な」真実など永遠に見えない。

「高尚な」言葉の響きに酔ったり、「くだらないもの」を見下したりしている人間は、自分の頭の中では「くだらない人間」カテゴリに放り込まれる…あれ、俺も同じか? (笑)

AKBの曲をバカにする人間の何人が、歌詞カードを見ながらちゃんと歌を聞いたのか？

アイドルは、かわいいイメージで売ってるだけと見下す人間こそが、「これはアイドルの曲だから」という「イメージ」で聴いているのではないか？

そういう人間に、もし、「桜の木になろう」などの曲を、これがAKBの曲だとは知らせずに、シンガーソングライターっぽいコーディネートした服着た人間に、アコースティックギターでアーティストっぽい雰囲気(笑)歌わせて聴かせたら、同じように見下すだろうか？

前項で、AKBの歌の底に流れるのは色即是空の感覚と書いた。

キラキラと輝く青春ははかないもので、そのはかなさを抱き締めつつ、だからこそ今を生ききろうとする、その輝きとせつなさ。

青春を人生と書き変えても、そのまま同じメッセージになる。人生のそれが青春に凝縮されているのだ。

毎年、早春に、「桜」がタイトルに入り、内容でも卒業や新しいスタートがテーマとなる曲が発表されている。（2012年は、タイトルこそ「GIVE ME FIVE！」だったが。）

言うまでもなく、毎年同じ時期に見事な花を咲かせ、短い日数で散ってしまう桜は、日本人の無常感、“もののあはれ”を最も象徴するものである。

無常感、もののあはれは、ここで自分が言うところの色即是空とかなり似た意味合いを持っており、AKBが毎年、その桜をテーマとした曲を出しているのも頷ける。

10代の若者の桜の季節に訪れる別れと旅立ち、その期待感と不安、その世界を見事につくりあげていると同時に、その気持ちにセンチメンタルに浸っているだけではダメで、自分の足で一歩一歩力強く目標に向かっていかなければいけないというメッセージが込められている。

自分は、AKBのシングルの中では「10年桜」が1番好きである。

卒業前に「君」に恋してた日々を振り返ると同時に、これからの未来への期待で胸ふくらませる、桜咲く「今」という時間が鮮やかに描かれている。

「10年後」という、未来でもあり同時に確かに近く訪れるという感触も持てる時に、もっと成長して「君」に「また会おう！」という若者の高揚感。

卒業シーズンのそういう気持ちをアップテンポでありながらせつないメロディにのせて表現しているこの曲を聴くと、何歳であっても、未来を見据えて「今」頑張ろうという気持ちになれる。

多くの歌詞に共通していることの1つは、過去、未来の大きな時の流れやこの世界全体、こういう大きなものを想い空を見上げながらも、今ここで足元見つめて着実に1歩1歩歩こうというメッセージだ。

将棋の名人の言葉

「着眼大局、着手小局」という言葉が思い浮かぶ。

10年桜

つらいことあっても

うまくいかなくても
過ぎる春を数えながら
寂しくなるけれど
未来を信じれば
僕は頑張れる

桜の葉

喜びも悲しみも
過ぎ去った季節
新しい道
歩き始める

空を見上げれば
その大きさに
果てしなく続く
道の長さを知った

晴れの日も雨の日も
明日は来るから
微笑みながら
一歩 踏み出す

青春の今という時は瞬く間に過ぎてしまう幻のようなもの。だからといって刹那的に生きるのではなく、逆に、それを意識すればこそ、今を大切に生きられる、そう生きようというメッセージがこめられている。聴いているとそういう気持ちになれる。

涙サプライズ

広い世界の片隅で
同じ時代を生きてる
今がきっと青春かも
遠い先で いつの日か
思い出さだろう

Happy Happy birthday!

ケーキのキャンドルを

一息で

さあ 吹き消せよ

ああ その先のしあわせに届くように…

Happy Happy birthday!

まだ 夢の途中さ

目の前の

未来の道は

輝いてるよ

まず一歩

歩き出そう

この、「今しかない!」「今を生きろ!」というメッセージは、AKBの多くの歌に共通して見られるものである。

それは、青春のひと時を精一杯努力し生きている少女達を見せるというAKBのコンセプトと重なり合い、AKBが歌うからこそ、そのメッセージがよけいに心に入ってくる。

「誰が歌う歌か」ということを前提に書いている、職業作詞家の秋元康のつくった素晴らしい作品群だ。

大声ダイヤモンド

失うものに気づいた時

いても立っても

いられなかった

今すぐ 僕にできるのは

この思い 言葉にすること

「RIVER」は、目の前の川を今、全力で渡りきれ、という力強いメッセージソング。

大ヒットした「Beginner」は、過去の経験なんか関係ない、恥も外聞も捨てて常に今という時をBeginnerとして開き直って生きろという、強烈な歌詞が胸に突き刺さる曲だ。

「ポニテールとシュシュ」は、夏という、強烈ではかない季節と、せつない恋心がアップテンポながらもせつないメロディに込められている。

せつないのに、この片思いの気持ちを抱き締めてこのまま永遠にしたいような気持ち。

ポニテールとシュシュ

ポニーテール（切なくなる）

片思い

瞳と瞳合えば

今はただの友達

束ねた長い髪

水玉のシュシュ

恋の尻尾は

捕まえられない

触れたら消えてく

幻

ポニーテール（ほどかないで）

変わらずに

君は君で（僕は僕で）

走るだけ

ポニーテール（ほどかないで）

いつまでもはしゃいでいる

君は少女のまま

色即是空は、今のこの華やかな光景や楽しみも、はかない幻、すぐに過ぎ去るもの、という認識だが、以下に挙げた歌詞は、それに続く空即是色＝（はかないものだが、しかし、今、確かにそのはかなくも華やかな「今」を感じている。）

ヘビーローテーション

人は誰も

一生のうち

何回愛せるのだろう？

たった一度

忘れられない

恋ができれば満足さ

そんなときめきを感じて
花は綻ぶのかな

Everyday、カチューシャ

確かなものなど
何も欲しくはないよ
無邪気な君と
来年も
海に来られたら…

ここに挙げたのは、すべてシングルとして発売されている曲だが、AKBの楽曲のほとんどは、劇場公演で歌い踊られている「劇場公演曲」その数は膨大で、数百曲にのぼる。

世間一般に知られているのはシングルばかりだが、実は劇場公演曲にこそ名曲が多い。

それについても書いてたらキリがないのだが、公演ごとにCD、DVDが発売されているので、ぜひ聴いてみてほしい。劇場で生で見るのが1番なのは言うまでもないが。

27 “AKB顔”

AKBにはかわいいコが少ない、あるいはメンバーよりかわいいコ、そのへんにいっぱいいるじゃん！AKBってたいしたことないよね…という声をよく聞く。自分もハマる前はそう思った。

しかし、それは従来のアイドルというジャンルの尺度でAKBを見ているからこそその感想であって、AKBのメンバーのルックスの平均値がそう高くない、中には全くそのへんを歩いている普通のコと同じレベルなメンバーもいることはファンなら百も承知で、秋元康自身が「クラスで2番目、3番目に可愛い子を集めた」と言っている。「クラスで10番目に～（以下同文）」というのを読んだ記憶もある。どちらが本当かは分からないが、とにかく、お人形さんみたいに可愛いコ、あるいは常人離れしたスター顔はAKBには似つかわしくないのだ。

「AKB顔」にふさわしいのは次の3点だろう。

1. 身近にいそう
2. 個性があり、ある人が見ればかわいいと思うが、別の人がみればそうでもない、つまり好み有别れること
3. 表情が豊か

1について。

「人間」を感じさせること。自分達が支えるという感覚をもちやすいこと。

2について。

「俺はこのコが好き」という感覚を持ち得ること。誰から見ても美人、ではそう感じえない。

「俺はあのコが好き、このコはちょっと…」ワイワイと言えることが楽しい。

3について

これも1と同じく「人間」を感じさせること。

自分が宮澤佐江ちゃんを推している理由の1つは、その表情の豊かさ。口の形の変化が最高に好きである。

ここで、メンバーの一覧表を見ながら、特にAKBっぽい顔と、それっぽくない顔を直感で挙げてみた。

AKB顔 指原莉乃 高城亜樹 北原里英 柏木由紀 渡辺麻友

AKBっぽくない顔 篠田麻里子 梅田彩佳 板野友美 松井咲子

さしこ（指原） あきちゃ（高城） きたりえ（北原） ゆきりん（柏木）は、お分かりだろう。ルックスは常人並である。

もしも4人がこれを読んでいたら怒りそうだが、ここから最大限に褒めるから読み進めてほ

しい。

「ルックスがいい」と「かわいい」は違うのだ。

前者は単に顔のつくりの問題。

後者は表情や、日頃の行動を見てその人に抱く人間像（AKBでいえば、番組や公演などで見て抱く印象）、その人と自分のこれまでの人生における関わりで蓄積されている記憶（AKBでいえば、握手会などでの記憶）、それら全てを含めて1人の人間の心の中でできあがっていく全人的な印象の問題。

自ら「かわいくない」と、おそらく本気で言っている指原莉乃だが、たしかにルックスは「クラスで4～5番目にかわいい女の子」（筆者独断）という感じだが、自分にはかわいくてたまらない。現在、個人的推しメンランキングでは5位くらいにつけている。

そのメンバーの歩んできた歴史、テレビ番組や公演、握手会などでの対応、そういった全ての記憶をもって彼女を見ると、そこに「かわいい」という感情が生まれるのだ。

これも何も特別なことではなく、我々の人生で、誰かを「かわいい」と思う過程と同じである。対象が異性である場合、もちろんルックスも大きく、その感情に影響してくるが、対象を見てきた、関わってきた記憶が相まってかわいいという感情が生まれる。

それをある意味具現化したのがAKBの、少女達の頑張っている様子、喜怒哀楽を昇格、選抜、選挙などのドラマで真近で見せるコンセプトだ。さらに握手会では自分とそのメンバーとの直接の関わりの記憶が出来上がっていく。

AKBファンはその楽しみ方を理解しているから、全体的にルックスが少々劣っていてもあまりたいした問題ではないのだ。むしろ、ふつうっぽい感じのコの方がいい。

顔のつくりがいいことなど、生まれつきの問題だから、たいした自慢にはならない。

ルックスが素晴らしくかわいいまゆゆ（渡辺麻友）を“AKB顔”入れたのは、AKBの拠点・秋葉原の二次元文化を具現化した顔だからで、深い意味はない。

「AKBっぽくない顔」の篠田麻里子と板野友美は、誰から見てもかわいいからだ。

AKBファンではないけど、トップ5～10くらいまで何となく分かるというくらいの人に、その中では誰が好きかと聞くと、ほとんどの人が篠田麻里子と答える。

特にそれぞれの個性などを知らずに写真を見て選ぶ感覚だと篠田麻里子が1番人気になるのだと思う（麻里子様は個性がないと言っているのではない）

さらに、2人とも、大人の匂いがして、完成されている感じがする。

どこか頼りなげで、自分達が推して応援せねば！と感じさせるのがAKBっぽいところ。そういう意味ではさしこ（指原莉乃）などはルックスが常人並であることに加えて、まさしくAKBの申し子のようなコである。

麻里子様やともちん（板野友美）などは他のメンバーと同じく頑張っているのだろうが、余裕でやっていそうに見えるのは損でもある。（と同時に、それが個性でもあるからいいのだが）

そして、梅田彩佳、松井咲子を含めた「っぽくない顔」4人に共通するのは、都会っぽさで

ある。洗練された都会の女の子という感じ。

かわいいか美人かで言うと美人だ。

都会よりはちょっと田舎くさいほうがAKBっぽい。田舎の高校の女子運動部のひたむきさというか。ひたむきに頑張っているのは都会も田舎も関係ないわけだが、イメージが違う。

部活で汗を流したあとは、オシャレな私服に着替えて電車乗って友達とカラオケ行って、休日は男友達や彼氏と渋谷で買い物…という都会の運動部と、部活後はジャージで自転車で家に帰って、休日はやはりジャージで自転車乗ってジャスコのフードコーナーで部活の女友達5人でだべる…。(イメージですよ、イメージ!) 練習時間は同じでも、田舎の方が全てを部活に賭けているという感じがするだろう(笑)

AKBは、やはりAKBにいる間はAKBに全てをかけて頑張ってもらいたい気がする。(もちろん、麻里子様達もさしこ達も両方とも頑張ってると思いますよ。ここで言ってるのは、単に顔のイメージでの話です!)

「少女たちよ」というAKBの歌があり、秋元康がメンバー達に頑張れというメッセージを送っているような歌詞なのだが、そのサビに、

少女たちよ
何もあきらめるな
悲しいことなんか すべて捨てて
全力で
全力で

というところがある。

自分はしばらく、「悲しいことなんか すべて捨てて」というところを「楽しいことなんか すべて捨てて」と聴き間違えていた。

それで疑問に思ってた。なかった。

遊びも恋もすべて捨ててこれに打ちこめ、というメッセージと解釈し、とても印象に残っていた。

AKB以外が歌っていたら「楽しいことなんか すべて捨てて」って??と疑問に思って、すぐ歌詞を読み直していたかもしれない。

田舎くさいほうがいい…に話を戻すと、ベストなのは、田園風景広がる地方の出身ではなく、東京近郊のベッドタウンで、特に都会でもなければ、田んぼが広がっているわけでもない住宅地出身。「普通感」「どこにでもいそうな感」を感じるから。

前田敦子の千葉県市川出身、大島優子の栃木県出身などは最高である。さすがツートップ(笑)

28 少女達の大人数集団の独特の魅力

ずっとAKBグループを見ていると、それ以外のアイドルを見ていて何か物足りないものを感じることもある。

魅力的なコがないわけではない。楽曲が良くないわけではない。例えば、ももいろクローバーZの楽曲の面白さ、ライブパフォーマンスの激しさ、楽しさは異常なまでにすごい。大好きである。

では、AKB以外のアイドルを見て感じる物足りなさとは何か。総選挙や正規チームへの昇格システムなどの人間ドラマか。あるいは劇場公演という核があることか。それも大きい。

しかし、もう1つ、大きなもの。

少女達が大人数で1つの集団になった時の魅力。

少女達が集団になった時のあのワイワイした楽しい感じ、そして結束の強さ。

そもそも、動物学的に、人類のメスはオスと違って、同性どうしの結束が固いようである。

人類というより、霊長類じたいが、種にもよるが、そういった傾向がある種見られるようだ（※1）

そして、我々オスは、メスは単独で浮遊した存在のメスではなく、そのような結束あるメスの集団を見て、その中から特定のメスを見定めて選ぶという本能があるのではないか。

こられの本能に関する考察は自分の想像だが、本能としてどうかはさておき、集団性の魅力は人生そのものであろう。

学校のクラスの女子達、職場のOL達、その他、男よりもまとまりのいい女子集団の中で他の女子達との関係性の中で1人1人の個性が浮き彫りになり、その中から誰かを好きになっていく…。

そう、AKBグループの1つの大きな魅力は、まるでクラスの女子達を見ているような楽しさを味あわせてくれること。

ただ集団でいればいいというものではない。

本当の身近にいる集団なら、いやでもその関係性の中から全員の個性が見えてくるであろうが、舞台の上での歌やダンスを見ているだけではそれらは見えづらい。

それらをファンの前に見せる、様々なツールが用意されている。

メンバー達に任されている、舞台のMCでのかけあい。

研究生からの昇格や総選挙といった仕掛け、バックステージの積極的な公開、インタビューなどで見えてくる集団のドラマ。冠番組での無茶ぶり企画への集団での挑戦。お笑いのコーナーでのメンバーどうしの楽屋ネタ織り交ぜたかけあいやぶっちゃけトーク。

また、2011年12月にメンバー全員の参加が発表されたグーグルプラス、通称ぐぐたすでは、メンバーどうし、お互いが発信したつぶやきにコメントしあう様子が毎日見られている。

そういう集団としての魅力を見せて行く時に大切なのは、メンバーそれぞれが違う個性の魅力

を持っていることであり、前項、第5章 27<“AKB顔”>で書いたように、誰が見ても美人、というお人形のようなルックスの良さよりも、好き嫌いが分かれる、個性美を持った顔のほうが良い。もちろん、顔だけでなく、様々な活動を通して見えてくる人間性も。集団であるからこそ、まわりのメンバーとの比較で、それぞれの個性がよけいに光るのだ。

また、少女達の関係性そのものも魅力である。

若い女子の仲間どうしは、男のそれと違い、お互いを褒め合い、また互いへの友情を照れることなく前面に出す。

一緒に遊びに行ったメンバーとくっついているツーショットをブログにアップしたり、「○△ちゃん、可愛い!」「○×ちゃん、お誕生日おめでとう!大好きだよ(*^_^*)」といったことを書いたり…。男が同じことはできないし、やったら気持ち悪い(笑)

AKBの場合は特に、厳しいレッスン、連日の劇場公演、世間からの偏見など、大変なことを共に乗り越えてきたという絆があるゆえだろうが、メンバーどうしの結束が強い。

一方、仲間であると同時に昇格、選抜、総選挙、個別握手会券の枚数等で常に競争にさらされているライバルという面もあり、仲間と同時にライバルという人間関係の機微にも惹きつけられる。

現在、AKB以外にも大人数女性アイドルグループが複数活動しているが、そういった、集団の中でのドラマを見せる仕掛の多さでAKBは少女の集団性の魅力を最も見ることができる。

AKB以前の、おにゃんこクラブ、モーニング娘。の大ブーム、また、現在のAKB以外の大人数アイドルの隆盛も、少女達が集団になった時の魅力がその成功の大きな原因の一つだろう。

(※1) ボノボという、チンパンジーの近種など。

前項（第5章 28〈少女達の大人数集団の独特の魅力〉）で、「仲間と同時にライバルという人間関係の機微にも惹きつけられる。」と書いたが、AKBは全体がAKBという共同体で仲間であると同時に、その中でお互いに競わされるシステムになっている。

チームごとに劇場公演を行うため、チームどうし比較され、さらにチームの中でも競争意識が働くという多重構造だ。

そこで少女達の見せるふとした表情、視線の落とし方1つに、そこに湧いているであろういろんな感情を読み取るのが、青春のドキュメンタリーたるAKBを見る愉しみ。

それが最も凝縮され、味わうことができるのが選抜総選挙だ。

2009～2011年まで3年連続で1位と2位を交互にとっている前田敦子と大島優子の、バックステージでの抱擁シーン。1位のほうが大泣きし、2位がそれを慰めている…この時のそれぞれの胸中はいかなるものか。

AKBは、そういったことに想像力をかき立てられ、気持ちを考えさせられる機会、材料の宝庫である。“人間”を見せるのが1番のコンセプト。

プロレスは、リングで向かい合う者どうしが協力して1つの“試合”をつくっていくチームプレーだ。しかし、最近のプロレスで毎試合のように見られる、当たりの強いエルボーやチョップの応酬などでは、どちらがそれを押し切るか…どちらが強さをアピールできるか、そういったところはお互いの1つの意地の勝負である。

1つ1つの試合がつながり1の興行になり、そこでどう盛り上げ、観客を満足させられるか。その1つ1つの興行がつながり、年間を通したストーリーをどう盛り上げていくか、団体がパッケージとしてプロレスというエンターテインメントを提供していく。

さらに大きく見るならば、1つ1つの団体の盛り上がりがプロレスという業界全体のパイを広げることにもなり、1つの運命共同体を為している。

そういう意味ではプロレスは団体競技。

一方、プロレスラー個人個人はいかに自分のキャラクターを確立し、魅力あるものにし、商品価値を高めていけるかという、個人としての勝負もある。

現在は、昔より団体の垣根が低くなり、他団体への参戦や移籍が頻繁になり、フリーのレスラーも多くなり、インディーでは道場やレスラーそのものをあまり抱えず、興行のたびにフリーや他団体の選手を集める団体も多くなっているため、よけいに、レスラーは自分自身のインパクト、商品価値を高める必要に駆られている。

そういう意味で、プロレスも、AKBと同じく多層な次元でのチーププレーと、それと重なって個人の競争も同時に存在する世界。

これもまた、この社会そのもの。

企業は、1つの目的を追求する共同体であり、多くの部署、個人が協同しながらも、同時に企

業内での出世競争もしている。

学校、部活、はたまた国家……同じように共同体と、その中の個人競争という多重構造がある。

スポーツもそうじゃないかと言われそうだが、自分から見たら、プロレスやAKBのそれと比べるとあまりに単純化されていて面白くない。

スポーツがスポ根漫画なら、プロレスやAKBは文学だろう。

それについては次項で。

30 プロレスとAKBこそ人間の色気が最も見られる

スポーツがスポ根漫画なら、プロレス、AKBは文学…。

自分は30年来プロレスを見続け、2011年にAKBにハマったのだが、AKBのステージを見ていて、理屈よりも感覚で「これはプロレスだなあ」ということを強く感じていた。

そう感じさせるものは一体なんなのか？

1つには、建前と生身が混然一体となっている、プロレスラーとアイドルという存在の在り方だが、それに連なるもう1つの理由。

色気、だ。

人間の色気である。

色気とは何か？

隠しているもの、秘めているものがチラリと見える、または透けて見える快感である。

建前の世界の中に“素”の人間が見て取れる瞬間。それが人間の“色気”だ。

色気とは、完全に丸裸ではなく、チラリと肌（=素の人間）が見られる瞬間。

映画、ドラマのように建前は建前で完結している世界は、建前という服を着ている世界。

逆にスポーツは、分かりやすく勝ち負けを競う、勝ちに向かって頑張ってます！という姿をそのまま見せる、丸裸の世界。

生身の人間をそのまま見る世界でもなく、建前でありながら建前とは認めず、リングの外でのリアルな人間関係（縦社会での上下関係やら友人関係やら）とは違う対立関係を、身体と身体をぶつけあって、アドリブで、本物の痛みを伴いながら表現しているプロレスという舞台こそ、建前の中に素の人間が垣間見える、また観る側の想像力の中で素の人間力を観賞できる、この世で最も人間の色気が漂っている場所。

あるレスラーがリング上で敵対し罵倒している相手が、かつて鬼軍曹として道場で新弟子だった彼をしごきあげていたレスラーで、罵倒しながらも腰が引けているのが分かる瞬間。

先に売れた後輩への攻撃が当たりが強くてきついのが見てとれた時。

先輩への攻撃の今一步の踏み込みが足りず、気の弱さが感じられるヒール（悪役）。

そういったものが見える瞬間。

また、そういった想像。

芸の世界ゆえにはっきりした評価基準はないが、建前では勝ち負け、タイトルの有無ではっきりした白黒があるため、ジェラシーや様々な思惑が見え隠れする。

A K Bもまた、少女達の素の人間としての色気が充満している。

秋元康の言葉に「K-P O Pは大リーグ、A K Bは高校野球」というものがある。

K-P O Pは完成されたショー、A K Bは一生懸命さ、人間の魅力、という言葉の主旨は分かるので、それに異を唱えるのではないが、あえて言うなら、高校野球は（それに限らずスポーツ全般は）一生懸命さがモロ出しの世界。そこに色気の介在する余地はない。

A K Bは、一生懸命さを見せているが、一生懸命さそのままスポーツのように歯を食いしばって苦悶の表情を浮かべてステージで踊っているわけではない。

舞台では可愛い衣装を着て笑顔で歌って踊る。

モロ出しではないのだ。

しかし、笑顔には汗がしたたり落ち、可愛い衣装は汗でびっしょり…。

一見華やかでフワフワしたものでありながら、そこに一生懸命さがシースルーを通した肌のように見えるのが、愛おしい色気となっている。

ならば他のアイドルだってそうではないかと言われるかもしれないが、やはりA K Bに最も人間の色気を感じる…というか、他にはプロレスに匹敵するような色気は感じたことはない。

単純に、とりわけ努力の量が半端ではないということ。

そして、ある種、正規チームへの昇格や選抜、選抜総選挙、個別握手会の券の売れ行きなど、競争がスポーツ的にシステム化されているところがあること。

スポーツのように一定のルールでの単純な評価基準では色気は感じられないのだが、芸という評価基準がはっきりしない世界に、昇格や順位といった目標を設定した競争のシステムを持ちこんだことが色気を生んだ。

大人数の中でのはっきりと差がつけられる競争システムがありながらも、芸という評価基準が必ずしもハッキリしない世界で、目標に向かって何をどう頑張ればいいのか、そこから考え、もがき、悩み、頑張る姿が人間社会そのものを映し出していて、色気になるのだ。

プロレスは、格闘技が分かる者が観れば、格闘技ではないことは明白である。

見え見えだ。虚構の世界である。

しかし、虚構の世界を通して、まぎれもない生身の鍛えられた男の裸身のぶつかりあい、まぎれもない本物の痛みがそのまま見える。まぎれもなく、芸の世界でありながら建前は競技という異質な世界ゆえに、様々な思惑を抱きながらもがいている生身の人間が見える。だから、尋常ではない人間臭さ、色気が充満しているのだ。

「プロレスは底が丸見えの底無し沼」（今はなき「週刊ファイト」の故・井上義啓編集長の言葉）…名言中の名言である。

色気という言葉人間臭さの意味合いで使ってきたが、鍛えられた裸身がぶつかりあい組みあい、スピーディーに躍動するという、セクシャリティという意味での色気もそこにはある。

AKB…アイドルにしても、もちろん、歌い踊る女の、女性としての可愛さ、躍動感を訴える
いう、セクシャリティとしての色気がある。

プロレスは、男の強さ、アイドルは、少女の可愛さをめいっぱいアピールしている。

セクシャリティのアピールは、人間がふだん意識的にも無意識的にも常に行っていること…特別なことでなくとも、出かける前の服装、髪型セットや立ち振る舞いなど…であり、それを凝縮しているプロレス、アイドルの世界は、これ以上ないほど人間臭い世界であり、それがまた人間としての色気にもつながっている。

ただ！

プロレスラーの色気にしても、AKBの色気にしても、モロ出しでないだけに観る側にいくらかの想像力が必要だ。

昔、プロレスファンには読書家が多いということを言っていた人がいたが、頷ける話だ。

であるから、プロレスもAKBも、想像力がなく上っ面しか見れない人間によって批判される運命にあり、それがアンチが多い理由の1つである。

3 1 物語の流れ、歴史、記憶の蓄積があってこそ、AKB、プロレス、皇室

AKBにハマったきっかけはミュージックビデオであり、最初はその作品そのものを楽しんでいた。その後、AKBの冠バラエティ番組を見始めてそれぞれの個性が分かるようになってきて、さらにAKBに関するドキュメンタリー本や映画なども見て、各チームやメンバー個々の歴史が分かるようになってくると、楽曲もさることながら、そのパーソナリティ、各個人の成長物語も同時に楽しむようになってくる。

そうなってくると、特に可愛いともなんとも思わないコをテレビや雑誌で見かけたとして、そのコがAKBのまだ知らない研究生だと分かったら、そのとたんにチェックしなければと思ってしっかり見てしまう(笑)

つまり、もうAKBというアイドルが好きというよりは、夢を追う少女達をリアルタイムドキュメンタリーで見るというAKBというジャンルが好きになっているのだ。「好きなアイドルはAKB」というより、「趣味はAKB」といった方がピンとくる。

だから、特にAKBが好きでない人がよく言う(かつて自分も言っていた)「AKBにはこれと言って可愛いコがないから興味ない」というのも、普通にアイドルを好き・嫌いで考えているような感覚で言っているのであって、その感覚からはAKBを見ていてもピンとはこないと思う。

AKBという物語を見る、もっと言えば自分が総選挙の投票その他で応援し人気をあげる、あるいは、そのメンバーに握手会でステージやテレビを見ての感想を直に伝えたり…その物語に参加しているという感覚になってくる事がハマるか否かという別れ目になる。

そもそもがそういう、成長のドキュメンタリー、ファン参加型アイドル(劇場で毎日…今は高倍率の抽選で毎日困難になったが…見れる、その他、握手会、総選挙など)というコンセプトでスタートしている。

プロレスも、楽しむためには流れをおさえること。

小さなことで言えば、各団体のその時展開されているストーリーライン(サイドストーリー…どういう“軍団”があり、どういう“抗争”が展開されているかなど)を知っておくこと。

もちろん、何の予備知識もなくとも楽しめるのがプロレスであり、それぞれの興行には、予備知識なしで初めてプロレスを見る人も必ずいるだろうから、主催者側はそういう客も楽しませて帰れるプロレスをすることは大切。

だが、やはり知っておいたほうが楽しめることは間違いない。

余談だが、10年ほど前?団体を旗揚げしたプロレスラーが「うちはサイドストーリーのための放送作家をつける!」と週刊プロレスだったか、プロレスの雑誌のインタビューで話しているのが掲載されていて、いつの頃からかプロレスを提供する側が、建前は守りつつも本音に近い話をするようになってはいたものの、ここまで話すかと驚いたのを憶えている。実際にその団体が放送作家をつけたのかは知らないし、ほとんどの団体は、サイドストーリーはレスラーやフロントが考えているものとは思いますが。

話はそれだが、プロレスにおいて流れを押さえるとは、その時々団体のストーリー展開を知

っておくことの他に、それぞれのレスラーのそれまで歩んできた歴史や、団体の人の出入りなどの変遷、歴史、団体の興亡、これらを知っておくことだ。

AKBと同じく、ドキュメンタリーの間人ドラマを見る愉しみと感動。

アイドルは、一般的に活動期間は短いので、そのわずかな時間に全てを燃焼させる若さを見て元気をもらうのだが、プロレスラーの活動期間は長い。

今、レジェンドと呼ばれる大ベテランの藤波、長州、天龍といったレスラー達はキャリア30～40年になる。それぞれ、小さな団体や、大きな団体の前座でリングにあがっているが、普通の人からみたら、そんな全盛期をとっくに過ぎた還暦近いプロレスラーを見て何が楽しいのか、と思うだろう。

だが、ベテランレスラーの、若い頃から見ているその身体・容貌に、自分の人生を重ねあわせて堪能するという愉しみは、現役時代の長いプロレスだからこそである。

たとえ、若い頃のようなプロレスができなくても、その人を生で見るだけで金を払う価値があると思わせる存在感（個人的には天龍源一郎がまさきに頭に浮かぶ）、レスラーの歴史。

天皇も、日本の歴史を何も知らない人に、この人が日本の象徴ですと説明したとて、敬う気持ちにはなりづらいかもしれない。

日本の歴史の流れを深く知れば知るほど、その悠久の流れの中で絶えず推戴されてきた存在に感じ入るものと思う。

物語の流れ、歴史、記憶の蓄積があつてこそ、AKB、プロレス、皇室。

これもまた、我々の人生、そして人間関係そのもの。人間は、その人間の歩んできた歴史、記憶があつてこそ人間。本人にとっても、彼と関わり、彼を見る人間にとっても。

3 2 登場シーンに集約されるプロレス、AKBの魅力

AKBのアリーナでのコンサートは、48グループ全て（2012年7月現在で言うとAKB、SKE、NMB、HKT、JKTの各グループ）のメンバーが出演している。

それぞれ、AKBならば、チームA、チームK、チームB、チーム4、さらにそれぞれの劇場公演の中のユニットにも分かれており、その他、シングル曲、メジャーデビューしている派生ユニットもある。各シングルの選抜メンバー組、カップリングを歌うアンダーガールズも入れれば膨大な組み合わせだ。

コンサートのセットリストは、それら多数の組み分けで構成される（その他、その日限りのシャッフルや他のユニットの曲を別ユニットが歌うなどもあり）。

一般の人が耳にするのはシングルで発売された曲だろうけど、48グループには劇場公演曲が膨大にあり、全ての楽曲は400曲を超える（2012年7月現在）

後半はシングルヒット曲が続いて盛り上がるのが定番だが、それまでは、どのグループ、チーム、ユニットがどの曲を歌うのか、想像がつかない。

アリーナコンサートでは、事前にその日のセットリスト（パフォーマンスする曲とその順番）は発表されていない。

メインステージの他、出島ステージがいくつもあり、1曲終わると、次のイントロと同時に、どこかのステージにスポットライトがバツと当たり、そこに〇〇チーム、あるいはメンバーの誰々がいてオーツと沸いてそのまま盛り上がっていく…。

この、曲の出だしと人間の登場によって沸くという光景が、テーマ曲と共に場内に入ってくるプロレスラーの姿と重なって見えたのが、プロレスとAKBが一緒だと感じた最初だった。

長年の思い出が詰まり、そのプロレスラーそのものと言っていいようなテーマ曲の鳴り出しと共に、入場の歩みで高まっていくプロレスファン。

アリーナに現れた一瞬で、グループ、チーム、ユニットのこれまでの歴史、自分なりの思い出、思い出を彼女達の姿に投影し、その思い出と共に曲で盛り上がるAKBファン。

彼女達の歌と踊りで盛り上がってるのか、歌って踊る彼女達を見て盛り上がってるのか。その2つが混然一体となっている。

建前と生身が一体となったジャンルの興奮。

プロレスラーは現役でいる年数が長いゆえ、思い出が十分育つ。

天龍、長州、藤波など、38歳の自分が小学生の時から思い出、思い出を持って見れているのだ。

その思い入れはどう育ったか。

もし、力道山が急死することなく日本のプロレスがずっと1つの団体に統合されたままで、さらには相撲のようなきっちり決まったシステムで優勝、昇格を決めるシリーズの繰り返し…では、ここまでの思い入れは育たなかったろう。

団体の集合離散、トラブル、離脱、スキャンダル…それやこれやを観てきたから、厚みのある人間、レスラー像をそこに描けているのだ。

きちっとしたシステムのもとに勝敗を競うスポーツというジャンルのスターに対する思い入れとはまた違うところだ。決して統合されたコミッション制度のようなものをつくらず、様々なスキャンダルが定期的にかかるという、スポーツであればただのマイナス要素を餌にしてプロレスというタフな化け物、プロレスファンという見巧者は育っていく。

しかし同時にそこに、テーマ曲とともに入場してきたレスラーが四角いリングに上がり、3カウントで決着がつき…その他、プロレスという宇宙を形づくっている様々な要素に規定されて1つの「プロレス」という世界があり、そのうえでこそ歴史ができていたのであって、全く野放図では1つの世界観は成り立たないことも確か。

つまり、歴史を形作るうえでのステージとしての一定の世界観はありながら、きつく縛られてはいないからこそ、様々な人間ドラマが生まれ、思い入れが育つのだ。

自分にとって、30年の思い入れがあるプロレスに匹敵するほどの人間の色気、思い入れを感じさせるAKBのメンバー達。何がそこまで思い入れを持たせるのか。

それは何度も書いている通り、研究生から正規チームへの昇格や、選抜、選抜総選挙、それぞれのチームが歩んできた歴史など、短い間にも濃厚に人間ドラマを起こさせる仕掛け。ある程度システム化している世界。

これも、ある程度のシステム化だからいいのである。

世の中、競技化させるイコール「ちゃんとしたもの」になるというイメージがあるのかもしれないが、もしも…もしも、AKBの昇格が、審査員の前でダンスをして、競技ダンスのように点数をつけられて、何点以上は昇格。であるとか、選抜メンバーは、歌の点数の上位者が選ばれるとかであったら。

そんなつまらないもの、誰が見たいだろうか？

ある意味、それをやってるのがスポーツというジャンルとも言えるのだが…。それはそれでそういう面白さもまたあるだろう。ジャンルに貴賤なし。

プロレスで述べたのと同様、ある程度、AKBという世界を成り立たせているシステムがあり、その世界観にはまっていく快感の一方、世界観を構築する縛りがきつすぎても面白くない。

アリーナコンサートの話に戻す。

ゆるいながらもある程度構築されている1つの世界、その世界で起こっているいろんな歴史、ドラマを、曲の出だしとスポットライトが当たる瞬間に心に湧きあがらせる。他では類がない

ほど、人数、グループ（チーム、ユニット）、曲が多いため、曲の出だしと登場の瞬間の「これが来たか！」という感動は大きい。

プロレスもAKB（アイドル）も、その芸と共に人間を見せるジャンルであるから、レスラーorメンバーの登場シーンはある意味ハイライトとも言えるほど重要。

あの興奮と感動にジャンルの本質が集約されていると言ってもいいかもしれない。

であるから、登場シーンの演出にはとことんこだわってほしいと思う。

3 3 サプライズは人間ドラマの花形

ノンフィクション性、ということでプロレスにもAKBにも欠かせないのが「サプライズ」プロレスならば、リング上のストーリーの展開。

試合結果もその後の流れに続く点であり、新しいスターが誕生する大金星の試合結果などはビッグサプライズになる。

サプライズの最たるものは、他団体のレスラーが試合後に「殴り込み」をかけてリングに上がってきた時など。

AKBは、選抜総選挙の結果発表は大会場にファンを入れて、お祭りのように盛大にやる。

また、コンサートの終わりなどに、研究生からの昇格メンバー発表、卒業の発表、次の企画の発表などの「サプライズ」が定番になっている。

そういったことを事前にメンバーにも知らせず、メンバーとファンが共にその場で驚きを共有し、ドラマの展開の証人となる。

人間ドラマを見せているジャンルにおいて、「サプライズ」はそのドラマ性の面白さが最も凝縮された、花形の瞬間。

プロレスは昔のような、団体側が上、というファンとの力関係がなくなって久しく、AKBは運営側とファンを従来の芸能の常識よりかなり近いところにおいている（※1）

だが、団体（AKBで言うなら運営）が前もって決めていた事柄で、何も知らなかったファンをどよめかせる「サプライズ」の瞬間は、圧倒的に団体（運営）が上に立つ瞬間であり、そこに団体（運営）の演者としての色気がある。

サプライズが起こってどよめいた次の瞬間のザワザワ…。

そう来たか…という感嘆、そしてそれに対して「そりゃないよ…」「面白そう！」「俺だったらこうする…」様々な批評。

想像力が豊かなプロレス、AKBファンは、1つの仕掛けに対してあれこれと様々なことを考え、想像する。それが楽しいのだ。

何を想像するのか？

その仕掛けを行った運営側の意図、裏事情、そこからの展開、それに絡むプロレスラーorメンバー達の気持ちなど。

スポーツのように実力評価が単純でなく、不確定要素が多いエンターテインメントからこそ、そこにファンが100人いれば100通りの想像、考えが生まれ得るのだが、ストーリー、ノンフィクション性、「人間」を売っているジャンル＝プロレス、AKBの場合はさらに無限に想像力をふくらませる余地がある。

プロレス、AKBの人間ドラマ…プロレスはプロレスラーの選手生命が長いので、ファンとレスラーが共有するドラマの時間、歴史が特に長い。

「サプライズ」は、そのドラマの中の「今」を色濃く感じさせる。それがつながってドラマの歴史となっていく。

(※1) AKBには、ファンから吸い上げた意見を運営にどんどん反映させる、立ち上げ当初からの姿勢がある。初期の頃は秋元康が劇場ロビーで直接ファンの話を聞き、劇場支配人が公演後にファンのたまり場のファミレスに行って、声を吸い上げていた。現在でも握手会会場において劇場支配人と話ができ、意見を伝えられる「支配人の部屋」、48グループメンバー全員、スタッフ、プロデューサーも参加しているSNS「グーグルプラス」でのコメント欄、その他様々な方法でファンの声を聞き反映させる努力がなされている。

34 共同幻想

アイドルのファンは、そのアイドルに彼氏がいたということ、自分の情報で…たとえば自分友人の知り合いがその彼氏だったとか…知ったとしても、ああ、そうなのかわりと冷静だと思ふ。もちろん人にもよるだろうが、だいたいのファンは。

しかし、それがマスコミにすっぱ抜かれ、結果、それを認めて…というような流れになったら幻滅するのではないか。

要は、実際に彼氏がいてもよいが、アイドルとそのファン集団が共に共有している世界での幻想、共同幻想を壊されることがいけないのだ。

昔、とある場所で…プロレスの会場や道場ではない…で、プロレスラーが携帯で

「うん、いや、俺がイヤなのは〇〇に負けることじゃないの。負けるのはいいんだけど、そのまま勝ち逃げされるんじゃないかと思ってさ……1回負けてその後勝って…ならいいんだけど…そうそう、うん…」と普通の声のトーンで話しているのを、たまたま聞いてしまったことがある(笑)

その時、自分と一緒にいたプロレスファンと2人で顔を見合せて声を殺して笑ったものだ(笑)(詳しくは書けないが、そのプロレスラーはそこに誰もいないと思っていたであろうが、ついたての後ろに我々がいたという状況)

プロレスファンをウブでおバカなものと思っている世間の人、そういう話を聞いたらファンはショックを受けるものと思っているのだろうが、単におもしろい話が聞けたと喜んでのみである。自分は、ここまで直接的にはなくともこの類の裏話は他にも多々聞いている。

この話では、自分個人でレスラーの素の姿を見たから、むしろ喜んでいるのである。

しかし、もしこれがリングの上で、観客全部にあからさまに、勝敗を競っている、闘っているという建前をこわすようなへまを見せられたら「おいおい、ダメだよ」と顔をしかめるだろう。

リング上でのことでも、自分から見て、「あ、これはほんとは違うフィニッシュのはずだったけど、アクシデントで違う結果にしたな」とか「ここからの流れは事前の打ち合わせどおりだな」ということが秘かに分かった時は、問題ない…むしろ、ちょっと嬉しい(笑)(自分は学生プロレスなるものをゆるゆるとではあったが経験していて、見ている年数も長いので、そういうのが分かる時は分かる。)

全体で、思いきり、その建前のほころびが共有されてしまうようなへまはダメなのだ。

共同幻想が崩れるから。

共同幻想！

以前、会場の自分の席の近くで男が連れの人に、

「ああ、レフリー失神したふりしたね…ここからしばらくヒール（悪役）が反則し放題、っていう展開になるよ」

だの、

大音響で音が響き渡った打撃技の後に

「（自分の太腿を自分の掌で叩いて）今のはこれだよ」（※1）

と、解説していたことがあった。

解説するのは自由である。

自分の場合は、一緒に見ているのが、いわゆる純粋なファン（基本的にプロレスは勝敗が決まっていないと思って見ているファン）でなければ、そういうことを小声で話すことはある。

そう、小声で。

そういう類の話を、会場でまわりの観客に聞こえるような声で言うべきではない。

その男もそうだったし、時折、まわりの観客に聞こえるようにその類の解説や、建前をとっぱらった話をするやつがいる。

まず1つには、それを聞いている観客の中には、いわゆる純粋なファンもいるかもしれないこと。

プロレスは「分かって」観たほうが100倍面白いとは思う。

しかし、競技だと思い見ているファンの夢をわざわざ壊す必要もない。

しかも、プロレスを見ている最中に。

もう1つは、例え、そのまわりにいるのが全員「分かっている」観客であっても、会場での「共同幻想」を崩すな、ということ。

全員が分かっていることでも、そういう類のことはお互いの連れどうし小声で話し、大きな声を出すのは、レスラーへのコールや声援、建前を崩さない範囲での野次に限るべき。

自分は、プロレスの会場として横浜アリーナがあまり好きではない。

リングの向こう側、つまり自分のとこと逆側の観客席が、キャパのわりに遠い感じがする。実際の距離は分からないが、受ける感じがそうなのだ。

プロレスは、リングの四方に観客がいて、その存在をしっかりと感じられればこそ、リングが、そこで展開されているプロレスがたくさんの人間に見られている凄い場所、という共同幻想が成り立つのだ。

一時期、「シアタープロレス」という形式があった。(今でもあるのかな?)

演劇や映画を観る会場で、舞台上にリングを設置するというもの。つまり、観客は一方からのみ観ることになる。

実際にその形式での興行は観たことはないのだが、おそらく、重要なものが欠けていてイマイチなのではないかと思う。この場合の重要なもの=リングの向こう側に見える観客席、である。

映画やお芝居は共同幻想?

いや、それらは、「これは嘘のお話ですよ」という前提を共有しているわけだから、違う。

プロレス、アイドルは、俺達がこの場所では、この世界観を支えよう、という確信犯的意志に基づく共同幻想がある。

この場所とは、もちろん興行、イベントの会場であるが、その他にもアイドルであればブログのコメント欄などもそうだろう。

余談だが、プロスポーツは…プロでなくとも4年に1回世間が大騒ぎするオリンピックなども…言うなれば、確信犯的意志なき共同幻想…に自分には見える。

皇室は、国民が、その源流である神話の世界からご皇室という物語をともに支え、押し戴いている。

自分の祖母から聞いた話だが、祖母の母だったか、祖母の祖母だったかが、昭和天皇のことを好かんということを話してたそうである。思想的、政治的なことではなく、生理的なこと…話し方が好きではないとか、単にタイプではない、というようなことだったらしい(笑)

第1章 2<天皇、プロレス、AKBが攻撃される理由>の中にも書いたが、戦前においても、天皇が1人の人間であることは誰しもが分かっていたこと。

家の中のたわいもない私的な会話であれば、そういう類の話はしていたわけだ。…まあ、自分の祖先は少々失礼かもしれないが(苦笑)…しかし、私的な会話のすべてにまで過剰な敬語を使ったり、やんごとなき方々として話してるより、例えば、若い女の子が、男子のご皇室の方々を、誰が素敵とか誰はタイプじゃないとか話してるような程度のことは、むしろあった方が健全な気がする。

しかし、公的な場所では、あくまで神話につながる尊き御方として敬う態度をとる。

アイドルのファンになるのは疑似恋愛、といたりする。

疑似恋愛という言葉でアイドルとの関係を捉えるのなら、それはあくまで“疑似恋愛”を楽しんでいる。

AKBの握手会に行っているうちに、毎回握手に行っていればいつかメンバーと付き合える、と思っているファンはいない(笑) (※2)

アイドルという世界を見下す手合いは、疑似恋愛ならば、“疑似”のない恋愛の方が上、という単純脳から

「握手会行くなきゃバクラ、あるいはリアルな恋愛のほうがいい」という発想が出てくるのであろうが、リアルな恋愛と疑似恋愛は別腹なのだ。

当たり前だろう(笑)

2011年1月終わりに、AKBのメンバー2人が男性との写真がネット上に流出し、2人がAKBの規則・恋愛禁止を破っていたことを認め、脱退した。

この時の、2人のファンの反応は、2人のブログへのコメント、その他SNSのコミュニティを見る限り、これまでの2人に対するそれまでの感謝や激励が圧倒的で、復帰を望む声も多く、そして、彼氏がいたことについては気にしていないという思いのほうが多数であるように見受けられた。

中には違う考えもあったし、あまりに罵声的なコメントは管理者が削除している可能性もあるが、大半は温かい声だろうと思う。

自分は、もし自分の推しメンに彼氏がいたとして、ま〜まったく構わない。

ただ、いないことにはしてほしい。いや、それかももう一步譲って、恋愛禁止ルールをなくして、いることを公言してもオッケーで、しかしブログに彼氏とのデートをアップしたり、公演のMCで彼氏自慢を話さないでいてくれればいいかな(笑)くらいに思う。

アイドルに彼氏がいてもかまわない、しかし公にはいないことにはしてほしい。

プロレスラーが実はガチンコ弱くてもかまわない、しかし、強さの幻想は守っていてほしい。

まあ、どちらかといえば、アイドルに彼氏はいない方が、プロレスラーはガチンコで強いほうが嬉しいが(笑) (※3)

※1 相手に蹴りやパンチなどを放つ際に、自分の掌で自分の体を叩き、大きな音を出す、プロレスの1つのテクニック

※2 これだけたくさんファンがいれば、稀にいるかもしれないが、稀なケースをあげつらうならば、どんなジャンルのファンにもおかしな人間はいる。

※3 (笑)はつけたが、アマレスや柔道などのアマチュア格闘技で実績を持ってプロレス入りしたレスラーや、相撲などプロ格闘技から転向してきたレスラーは、やはり強者のオーラが出ていて、プロレスラーとして魅力的である。そういう意味で、プロレスラーはガチンコで強い方がいいのは間違いない。

35 偏見が熱気、パワーを生んでいる

プロレスは、その鍛えられた肉体と、攻防を成り立たせるための技術、試合の組み立ての妙、ストーリーラインの結び方、ちょっとした仕草、表情、佇まいで自分を表現する表現力、それらが試される肉体芸術の舞台であり、見る側から言えば、子供、何の予備知識もない人にも楽しめ、感動と元気を与えられる大衆娯楽でもあり、見巧者としてその表現を批評しながら奥深く楽しめる芸術でもある。

やる側もファンも、十分に胸を張れる、奥深いエンターテインメントであり、自分もこのような奥深いジャンルを30年以上見続けてきたことは誇りだ。

では、プロレスが現在のような社会的地位から抜け出し、その素晴らしさを世間に認知してもらって確固たる社会的地位を築いてほしいかと言ったら……全く思わない。

プロレスがプロレスのまま社会的地位を築くとは、プロレスがガチンコであるという建前を降ろし、ショーであることを公表し社会での地位を築く、ということだ。（※1）

例えば、プロレスラーが文化勲章で叙勲されたり、テレビで「昨日のメインであの技で決まる予定だったんですが、息があわずに失敗してアドリブで決めました…」なんてことを喋ったり、テレビでコメンテーターが、団体のストーリーラインの巧拙を批評したり…。

要は、ケーフェイ（※2）なき世界、プロレスの全てが丸裸で建前をなくし、世間にストレートにその表現を評価される世界になってほしいかと言うと、全くそうは思わないのだ。

プロレスは、その建前を貫き通してこそプロレスだ。

当然の結果として、八百長云々という偏見から逃れられない。

その、世間の偏見に対して、なめられてたまるかと尋常ではない練習をこなし、身体をはって凄いプロレスを見せ、世間と対峙する。それでこそプロレス。

偏見の目がそのままプロレスのパワーになっている。

また、プロレスファンにとっても、世間の偏見があるからこそ、俺達がこのプロレスという世界を支えるんだという愛着、我はプロレスファンなりというアイデンティティが強固に生まれてくる。

プロレスとは村松友視氏の言葉を借りるなら「ジャンルの鬼っ子」「他に比類なきジャンル」ショーでありながら競技という建前をとり、世間では「八百長」と蔑まれているがゆえ、試合結果などは一般紙、テレビでは報道されない。

その一方で、プロレスというものの存在は日本人なら誰もが知るメジャーなものであり、結果は報道されないが、日本人なら誰もがその名を知るプロレスラーは何人も存在し、バラエティ番組などに出演することはしょっちゅう。プロレスラーから国会議員を3人輩出している。

誰もがショーだと認識している一方、プロレスラーがテレビに出演する際など、共演者はプロレスラー本人の前ではあくまでプロレスを建前（競技）どおりに扱う。

げに不可思議なジャンルだ。これからも、偏見、蔑視に対峙し、「世間」に身体を張りつづけていってほしい。

フェイクでありながら、ドキュメンタリーの体裁をとる、フェイク・ドキュメンタリーの魅力

。表現の舞台はリングの上だけでなく、この世界すべて。

アイドルも同じ。

アイドルが、あくまであれはステージ、グラビアの中の虚像です、演じているんですと言って、タバコ吸いながらインタビューで自分の素を語るようなジャンルになったら、全てが虚であることを共通認識にしている演劇や映画の世界と同じになる。

プロレスと同じく、虚実が入り混じったフェイク・ドキュメンタリーの豊かさを持つがゆえ、自らそれと共犯関係になる楽しさや優しさを持たぬ大多数の「世間」からは蔑視される運命にあるが、それでいいのだ。

AKBはさらに、「大多数の束ものアイドル」「秋葉原発」「会いにいけるアイドル」、さらにはプロデューサーが同じことからおにゃんこクラブという、そのコンセプトが全く違う集団と同じようなイメージで捉えられたことなどなど、偏見を受けやすいイメージが盛りだくさんで、実際に偏見が凄まじくひどい。

しかし、その偏見が、メンバー、スタッフ、ファンにとって負けてなるかという独特の熱気、パワーになっている側面もある。

「世間」と対峙し、勝負する「ザ・マイナーパワー」（※3）の渦は、確実に、偏見にまみれた世間の中で、物事を先入観にとらわれずに見る少数の人間の心を掴んで巻き込み、さらにその渦を強くしていくのだ。

※ 1 アメリカの世界最大のプロレス団体「WWE」は、リハーサルの風景などを収録した映画を公開し、「プロレス＝プロフェッショナルレスリング」という言葉とも決別すべく「スポーツ・エンターテインメント」と称している。（「プロレスラー」は「スーパースターズ」）
また、日本でもアメリカでも、プロレスラーが建前を取り外した内容の自叙伝を出したり、完全に建前は取り外さないまでも、本音に近い内容でコメントを出すケースも多くなってはいる

※ 2 プロレスラー、関係者が、部外者に聞かれてはまずい話をしているところに部外者が接近

してきた場合、その話を打ち切ることを相手に知らせる、プロレス業界用語。昔、同名のタイトルの暴露本が出てファンの誰もが知る隠語となった。

※ 3 かつての週刊プロレス名物編集長・ターザン山本氏が週プロに執筆していた連載のタイトル。

AKBのことを悪く言う人間の中には、悪く言うわりにけっこうAKBのことを知っている者がいる(笑)

自分の好きなことをたくさん知っていろいろ話したがるのは当たり前な感情だと思うが、嫌いなことをいろいろ知っていたり、あるいは、それについて語りたがる彼らの心理はなかなか研究に値するテーマである。

だいたい言うことは共通している。

「誰々が整形だ」

「上の方の女のコはプロデューサーとかと出来てるんじゃないの？」

「しょせん、全部商売でしょ。」

ある時自分がAKBのミュージックビデオの作品としての素晴らしさを話したらこう言った人間がいた。

「でも、それは撮ってる人がうまいんじゃないの？」

…。

まさか、AKBのミュージックビデオを、彼女達自身が絵コンテつくってカメラ担いで撮ってると思ってるファンは誰1人としていないわけで(笑)、この場合の彼が言う「でも」という日本語の意味が分からない。当然、撮ってるスタッフがいて、彼らの、AKBの作品に対する手間暇おしまない努力が素晴らしい作品になっているのだが、その事がなぜ「AKBのミュージックビデオが素晴らしい」という感想に対する「でも」という否定になるのか？

しかし、彼の、この普通に考えると意味不明の言葉が、アンチAKB心理の一端を見事に浮き彫りにしている。

要は、AKBの女のコ達の頑張り、夢を掴む物語のなんのと言って、しょせん、大きなビジネスの中でのこと…「上」(運営サイド、プロデューサー、スタッフ…)の意向が働いてるわけでしょ、彼女達は「上」の金儲けの手段でしょ、下らない…という意識なのだろう。

そういう人は自分達の住んでる世界そのものがそういう世界である事は認識したうえでのことだろうか？

それならば、大きな権力が覆いかぶさり、個々の努力ではどうにもならない事が多すぎる中で、それを分かりつつも個々が自分のできる事を、時にあきらめたり愚痴ったりしながらもがいている…この社会そのものが「下らない」という世界観なのだろうか。

「上」の大きな意向があるからと言って、個々の努力や意志が全く無関係な世界、ではない。

いや、もしかしたら努力が全て無駄に終わるケースもあるかもしれない。

でも、そういう一筋縄ではいかない世界という事、どんなに努力しても、運や、たまたま運営側のお気に入りにはなれないことで、叶わないかもしれない、そういう世界で苦悩しながら頑張っている姿の方が、「本物の」人間の汗の匂いがして好きなのである。

プロレスも同じ。

つまり「流した汗は嘘をつかない」的スポ根的な汗の匂いだけではなく、冷汗や焦りの汗が混じった、真の人間の汗の匂いが好きなのだ。

世の中には、ずいぶん「商売」が嫌いな人、お金がたくさん動いていることに、あれこれ言う人間が多いことに驚く。

とにかく大金が動いていることがイコールくだらないこと、軽蔑すべきことになるらしい。

「プロレスなんて興行で商売じゃねえか」

そうです。

仕事でやってるから、そこにただの純粹さでは出ない大人の男の色気が出るんです。ショーのさなかにふと垣間見える素の表情やその背中に彼らの人生を感じるんです。

「ぼく、プロレスが大好きだから、お金はもらわずボランティアでやってます！」と純粹そのものの瞳をウルウルさせて語るプロレスラーばかりになったら、自分は即刻、プロレスファンやめます(笑)

(AKBが、商売抜き、趣味でやってるだけのアマチュアアイドル集団になってほしいとも全く思わない。)

もちろん、プロレスラーはプロレスが好きでやってる人が多いとは思いますが、金のことを考えるとわりにあわない仕事かもしれない。お金よりもプロレスが好きだからという気持ちでやってるレスラーを否定する気はさらさらないし、そう高くないギャラでも、プロレスが好きでめいっぱい身体張って、意地張ってプロレスやってるレスラーは素敵だ。

しかし、もしも、プロレスもAKB(&その他のアイドル)も金、商売の関係のない世界…例えば、お役所お抱えの業界になってプロレスラーは公務員、身分保障のもとで、人気の変動に関係なく、高くも安くもならない一定の給料もらって安心してプロレス、アイドル活動ができますよ、という世界になったら、ま～、つまんないプロレス、芸能界になるでしょうな。

AKBやアイドルの金にまつわる話をするので、アイドルなんてこんなもんだぜ、と暴いた気になっているアホマスコミやアンチ達にとっては、そういうつまんない世界こそが理想なのかな？(^0^)そういうつまんない世界になってようやく彼ら単細胞人間が認める「商売抜きの」「本物」のアイドル誕生…おめでとう(^0^)/

プロレスはリングの外での浮き沈み、それに伴って変わる実入り、団体の集合離散や移籍、裏切り…いろんなことがあって、それらの元にはお金のこともあるかもしれないが、それらも含めたレスラー達の「ガチ」の人間模様や、背負っている歴史、それらを知ったうえで観るから、プロレスは観ている期間が長くなるほど深く味わえるのである。

そういうもろもろの「人間」ドラマは、汚いといえば汚いのかもかもしれないが、そういう「いろいろある世界」の中でちらりと見える人間の男気だったり優しさだったりが見えないのだ。

いや、「いろいろある世界」だからこそ、その「いろいろ」に対する反応でその「人間」があ

ぶり出され、「本物」の感情が見えるのだ。

「商売」が嫌いではない人達は、汚いものは汚いもの！で、お金がからむ世界は「お金の世界」でしかないという固定観念のもと、そこに血の通った「人間」がいるってことがてんで見えなくなってるんじゃないかな。

いや、お金が動くことはガマンできるけど、その基準が人気とか、売り出し方とかそういう、ハッキリしないものであることが、彼ら単細胞人間にはガマンできないのかもしれない。

一定のルール、団体の集合離散などない一定の決まった組織のもとで、ひたすら技量をあげて良い成績を残した者の年棒があがるという、わかりやす〜い、きれ〜な世界でないと安心して見てられないのだろう。

37 松本人志の笑いはノンフィクションテイスト＝プロレス、AKB たけしの笑いはスポーツ

自分が好きな笑いは、ドキュメンタリー、ノンフィクションのテイストである。
どういうことか？

たとえば、SNSで下らないつぶやきなどする時。冗談だよ、笑ってねというのを思い切り打ち出すのではなく、自分のカッコ悪いところをそのまま、あるいは大げさに拡大して書くような。

ベタで分かりやすい例を出すとすると…

「今日は宮澤佐江ちゃん（※1）と妄想でデートしちゃいました～」
というような言葉で笑いをとりたい時、言葉の最後に（笑）や、「な～んちゃって」というような言葉をつけないということ。

それをつけることで、妄想でアイドルとデートするカッコ悪さは半減するかもしれないが、笑いも半減する。

あくまで真面目な体裁でそれを言うのがいい。できたら「しちゃいました」などよりも、もっと淡々とした言葉で。さらに、「デートした」という漠然とした言葉より、具体的に何か描写した方がいい。

それを100%真に受けてしまう人もいるだろうが、それは受け取る側の想像力不足ということ。

芸人で言うと、自分はダウンタウンの松っちゃんがめちゃくちゃ好きである。

彼の笑いは、ノンフィクションのテイストだ。

あり得ないことを飛躍させてボケる時も、淡々とした口調で放つから面白い。

それに比べて、もう1人、天才と称されるビートたけしの笑いは、「はい、ボケましたよ～」
「ここで笑って下さい～」という、分かりやすいボケだ。

たけしに関しては、彼の映画は大好きなのだが、笑いはそれほど好きではない。

そして、昔から印象に残っているのが、プロレスに関しての彼の発言。

いろいろなことを言っているのを聞いたが、要は、プロレスはヤラセである、という事をいろいろな言い方で言っているのと、これはハッキリそう言っているのではないが、なぜああいうヤラセのどこがおもしろいのか、と思っているのが見てとれるのだ。

不思議なのは、彼の食いぶちの1つである社会評論においては、世の中の規範や常識とは違った物の見方を言うことを芸風に行っているのに、プロレスに関しては、前述したように「プロレスはヤラセ」などという、要するにそこらのおっさんが言うような平平凡凡のことしか言わないことだ(笑)

松っちゃんの、ノンフィクション的な笑いというのは、プロレスに通じるものがある。

建前の世界を、これは建前ですとは絶対に言わずに生身の人間がパフォーマンスするプロレス

という世界と、「ここ笑うところですよ」という笑いではなく、ノンフィクションのテイストで、とんでもないフィクションの世界を構築している松っちゃんの笑い。

だから、たけしがプロレスを理解できない一方で、松っちゃんがプロレス好き（格闘技も好き）で、たびたび観戦しているのも、頷ける話だ。

そして、週刊誌やネットで書かれていることで、どこまでが本当なのか分からないが、たけしが「AKBがなぜ売れているのか分からない」等とAKBを批判してるらしいが、ああ、プロレスが分からない人にはAKBも分からないだろうなと合点がいった。

さらに、松っちゃんは最近丸くなってあまり毒を吐かなくなったが、昔はよくスポーツに…特にメジャースポーツに毒を吐いてた（※2）一方、たけしは野球好き。

松っちゃんがAKBをどう思ってるか分からないが、彼がノンフィクションテイストの笑いで、プロレス好き、格闘技好きで、メジャースポーツ嫌い、たけしが分かりやすい笑いで、メジャースポーツ好き、プロレス嫌い、AKB嫌いであること、そして自分が松っちゃんが大好きであることは、自分の中では全部繋がっている。

笑いがノンフィクションの雰囲気の方が深みがあって面白いのは当たり前だ。

人間の業の肯定が笑いなのだから。

（※1）AKB48、チームKのメンバー。自分の推しメン

（※2）自分の記憶にある発言の中のいくつかを挙げていく。

・次週の「HEYHEYHEY!」がバレーボールのワールドカップ?でお休み、となることを浜ちゃんが予告した際に「バレーで俺の番組がつぶれる…最っ悪ですね」

・サッカーに「あんなもん何がおもしろいねん」

・ホラ話をするのが定番だった、昔の「ガキの使い」のハガキのコーナーで、横綱の次は?との問いに「大関」 浜ちゃん「正解。」 松っちゃん「はっ…当たってもた。ホンマに知らんからボケるにボケられん。」

・著書で、サッカーのワールドカップが視聴率50%近くをとったことに関して「まあ、でも裏を返せば半分の人を見てないわけで。」「頑張れ頑張れと言ってる皆さん、おまえらが頑張れよ」

また、「ごつつうええ感じ」の打ち切りの原因が、松っちゃんに無断で同番組を野球の試合に差し替えたことに松っちゃんが激怒した事なのは有名な話。

昔、「笑っていいとも」のテレフォンのコーナーで、翌日のゲストを呼ぶ電話をした際に間違い電話をしてしまい、一般人のおじさんが出て、それをタモリが面白がって会話した末、なんとそのおじさんを翌日のテレフォンのゲストに呼ぶという事件があったのを最近知った。(※1)

それを知った時、まさきに「プロレスっぽい」と感じた。

その事件(?)の何が「プロレスっぽい」と感じさせるのか。

ノンフィクション性である。

プロレスはエンターテインメントだ、ショーだと言っているのではないか、と言われそうだが、あくまでその建前はガチンコ、ノンフィクションである。

「軍団抗争」も「遺恨」もすべて。

そこにプロレスの特殊性があり、独特の面白さがあるのだ。

大の大人、同じ会社に所属する大人どうしが敵になったり味方になったり、あるいはどんなにガチンコではあり得ないような技や展開であっても、演劇や映画と違い、あくまでこれはガチンコだという建前をとる。ノンフィクション性を貫く。であるからこそ、ファンタジーたり得る。

これは嘘の話ですよという前提に立つテレビドラマや映画は、それを見る側の視点に立てば、中身がどんな魔法や妖精が出てくる話であろうと、真のファンタジーたり得ない。嘘だって言っちゃってるんだから。

どんなものであっても、真のファンタジーたり得ようとすれば、これはガチンコだと言い張らなければならない。

見る側がそれを分かっていたとしても、ガチンコだと言い張り続けてくれることで、ファンタジーたり得るのだ。見る側の素質にもよるが。

同じようにプロレス的だとまさきに感じたのが、2012年5月2日に、乃木坂46のセカンドシングルとAKBの指原莉乃のソロデビュー曲が同日発売し、その対決がAKBや乃木坂の番組で盛り上げられていった件である。

これは、乃木坂CDの付属DVDの、メンバー33人それぞれとの妄想デート映像に対抗し、指原CDのDVDには、1人で33パターンでの妄想デートを収録したり、番組内で両者がゲームで対決したりと、「仲がいい対決」だ。

プロレスやアイドルをバカにする、貧しい感性の持ち主ならば「ヤラセじゃねえか」などと、この上なくどうしようもないセリフをはきそうなところだ。

これは、両者の「対決記者会見」(※2)で、乃木坂メンバーと指原が丁々発止のマイク合戦をやっている時に、指原が発言する前に机上の台本をチラリと見る仕草をして笑いをとったように、誰が見てもわかるエンターテインメントだ。

そうであっても、マイク合戦もノンフィクションの体裁で進行をしている点、そして、最初から、そういう盛り上げ狙いで同日発売だとしても、実際にどちらが売れるかはファン次第でありガチであり、それを両サイドが気にするのもガチだ。

プロレスの「遺恨」が嘘であっても、リングでぶつけ合っている肉体はまぎれもない本物で、本物の痛みと共にそれを行っているように。

先のいいとものは、間違い電話というノンフィクションをエンターテインメントにしたケース。もしこれが最初から仕組まれていたことなら、エンターテインメントをノンフィクションの体裁にしたもの。

乃木坂とさしこの対決は、CDの話題作り、メディア内での「対決」というエンターテインメントとプロモーションを展開するため、「同日発売」というまぎれもないノンフィクションを作ったもの。

どちらも、ノンフィクション（実）とエンターテインメント（虚）が表裏一体、つまりプロレスになっている。

ノンフィクションが云々でエンターテインメントでどうたら、などと冗長な説明はいらない。「プロレス」という一語で見事に説明がつくのだ。

いいとものは、翌日に素人のおじさんをお呼んだところで「すごいプロレスだ！」
乃木坂とさしこの件は「おもしろいプロレスするなあ！」

この「プロレス」という概念があるかどうかで、世の中を観る目が変わる。

「何言ってんだ、この世にはホントかウソしかない！」

たしかにそうです。

しかし、ガチ（実数）とウソ（負数）の他に、あり得ない数…虚数（プロレス）という概念があった方が世の中を正確に、そして楽しく捉えられる。

さらに言うと、この世に本当に実在するのはガチ（実数）だけ。

ウソ（負数）も人間の脳でのみあり得るものであり、ウソをついている（負数をつくっている）人間がいる、というガチがあるだけ。

同じく、プロレスも突き詰めれば、「『プロレス』をやっている『リアルな人間』」の姿が浮かび上がる「ガチ」

ウソやプロレスを否定する人間こそ、リアルな実像を見れない似非科学者である。

※1 本物のゲストが出るテレフォンのコーナーとは別に時間を設け、そのおじさんが本コーナ

一と同じように翌日のゲストとして友達を呼び、それは3日間続いたとのこと。ちなみにこの間違い電話事件がガチだったのかどうなのかは知らない。ガチであったとしても、そうでなかったとしてもプロレス的展開である。

※ 2 「有吉AKB共和国」で放送。

前項の最後のページの補足説明。

この世にウソは何1つない。

いや、あるのだが、それは人間の頭の中で観念上、存在するだけ。

例えば、バナナを指さして「これはリンゴです」と言ったとして、それを「ウソ」と言うのは単に人間の観念。まあ、言葉というものが観念なのだから当たり前。

しかし、事実…究極の事実は、バナナなる物体を指差して「コレハリンゴデス」と言っている人間なる生き物がいるだけだ。

その現象を見る人間の観念の反応の1つに「それはウソだ」と蔑む、という反応がある。

その他、何も感じないという反応、言葉のまま「それはリンゴだ」と思う反応、いろいろあるだろう。

プロレス、AKBのファン、さらに皇室を敬愛する国民は、それは決して「リンゴ」ではないことを知りつつ、バナナを「リンゴです」と言っている「人間」に興味を示し、見定め、愛するという反応をする。

純粹無垢でずっと笑顔でいる人間などいないことを知りつつ、そういう夢を見せようとステージで頑張って笑顔でパフォーマンスする「人間」を見て、その夢をともに追う。

勝敗は決まっていることは知りつつ、強さを表現するためにぶつかりあい、本物の痛みと汗まみれになっている「人間」を見て、尊敬の念を抱く。

神話と史実は違うことを知りながら、神話を背負ってお役目を果たされている天皇陛下を敬愛する。

一方、アンチは、ステージや握手会での笑顔、リングの上でぶつかりあう身体、陛下の微笑みを「嘘じゃねえか」としたり顔で見下す。

どちらが真実を直視しているのか？

反応の違いが分かれる重要なポイントは、バナナをリンゴと呼ぶことをウソとかホント云々言う以前に、そもそもの話として「バナナ」という名前は勝手に世の中の人間が定義したものであることを認識できているかどうかであろう。

第8章 45 <AKB握手会の笑顔を「営業」と見下す者は、人間そのものを見下している>で、

「落ち込んで飲みたい友人と一緒に酒の席で、『もう疲れたから帰りたい』と思ってたら、それを『本音で』正直に話すのが、『本物の』関係なのだろうか？

疲れて帰りたいけど『もっと飲もう』と『嘘』を言って付き合う気持ちが『本物』」

と書いた。

これは普段の生活の中での「本物」の気持ちの表れの1つを表現したものだが、これを本著でとりあげているテーマに当てはめて考えると…。

天皇陛下が、各機会にお言葉を述べられる時、手元の原稿を見みながら読み、その原稿が宮内庁の役人なりが書いたものであったとして、その言葉を聞く側は、そのことをマイナスと捉えるだろうか？

東日本大震災発生の日後、陛下はカメラを通して、国民にお見舞いの言葉を読まれた。

手元の原稿を読みながらのお言葉だった。

感激した人も多かったと思う。原稿がどのように実際に完成するものかは知らない。陛下御自ら起草されたものかもしれないが、もし仮にあれが役人のつくったものであったとして、それを知ってその感動が消えるという人は少ないと思う。

原稿が誰が書いたものかは問題ではなく、天皇陛下が天皇としてのお役目を果たそうと、ああやってカメラの前で語りかけているお姿に励まされるのだ。

原稿を書いたのが役人だったとして、それを読まれている陛下のお気持ちが「嘘」と言えるのか？それを読まれて天皇としての役割を果たし、国民を励まそうという陛下のお気持ちは「本当」ではないか。

プロレスを「嘘」と表現する人。

たしかに、勝敗を競っているのは建前であり、その意味では虚構であるといえる。

が、いい試合をして観客を満足させよう、プロレスから元気をもらおうとするファンの気持ちに応えようと身体を張っているのは「本当」である。

嘘と思うなら、やってみればよい。テキトーな気持ちで、人を感動させるプロレスができるかどうか。

いい試合をし、自分のキャラクターを磨きあげ魅力的なものにしていけば、上にあがり、メインイベントになれる。上を目指して身体をはって必死に頑張っているのも「本当」だ。

時々、先輩レスラーと新人のチャレンジマッチ的な試合が組まれる。新人が先輩の胸を借りてくらくらいついていき、最後は負けて、先輩や観客に健闘をたたえられて終わる、というのが定番。

その試合で、ガチンコでは新人の方が強かったとしたら、リング上に見える風景は「嘘」か？
たしかに、虚構ではある。

しかし、体育系社会で先輩相手の緊張しながら、まだ試合の組み立てが下手な新人が、先輩が引っ張る試合の組み立てについていき、観客を沸かせようと頑張り、そしてそれが果たせた安堵感と、そんな彼を讃える先輩や観客の気持ちは「本当」である。

プロレスの技は、かける方と受ける方の呼吸がずれたり、失敗した時には非常に危ない。

誰が見てもよけられるのに受けることが分かる、トップロープから、また、場外への飛び技は、その「ガチではあり得なさ度」から、軽くみられがちだ。

だが、あれはリングという空間で見てるからなんとはいえなに見てしまうが、ジュニアヘビー級でも体重80、90キロあろうかという人間があの高さから、時にはアクロバットな回転などいれながら飛んで、それを下の人間が受け止めてお互いに怪我がないようにするのは、一歩間違えれば大怪我を負う、身体を張った芸当なのだ。（実際、それで一生の障害を背負ったレスラーもいる。）しかも、それは一発の技をせーのでやって、終われば拍手でとりあえず終了、また定位置に戻って呼吸を整えて…ではない。プロレスの試合の流れの中で、それをこともなげにやっていかななくてはいけない。

その他にも、投げ技、打撃…危険が隣り合わせの身体を張ったショーでの緊張感、そういう危険な芸当を受け止められるだけの身体、成り立たせるための受け身、技の技術、それらのための練習。そこでは、まぎれもなく人間の本物の汗が流されている。

こんなこともあった。

芸能人を多数リングに上げて（花束贈呈などの余興ではなく、プロレスをさせるため）これまで日本にはなかった大規模の派手なショーアップのしかたでブレイクした「ハッスル」という団体。

その横浜アリーナのビッグマッチでのメイン。

試合は、リング上の“高田総統”（高田延彦）の化身“ジ・エスペランサー”の放った“レーザービターン”（振りおろした手から放たれるビーム）を、リングから離れたステージに登場した、“妖精さん”（小池栄子＝エスペランサーの対戦相手・坂田亘の妻）に盾で跳ね返され、そこに坂田亘（小池栄子の夫）が蹴りを入れてエスペランサーの身体が爆発（コスチュームに仕込んでいた火薬を破裂させる特殊効果）し、坂田のフォール勝ち、という流れ。

ステージからリングまでの花道を爆薬がパン！パン！パン！パン！と爆発していき、最後は、とどめの蹴りで身体の爆薬が爆発し、ゆっくり前のめりに倒れるエスペランサー…。

そういうスタイルのプロレスの後、興行の締めとなるマイクを持った坂田が、当然、メインの内容に沿ったことを喋っていた。

「仲間を支えられてやっとエスペランサーを倒せました」的な、ふつうのマイクだったが、それが途中で、「やっと倒せた」ことが、「仲間を支えられてメインのプレッシャーに負けそうになりながらも役目を果たせた」という内容にそのままスライドし、涙を流し始めた。

“レーザービターン”を“妖精さん”が跳ね返し、とどめのキックでエスペランサーが爆発したことは子供でも分かる虚構だが、その一連の流れを、しっかり絶妙のタイミング（＝間）で成功させ、興行のメインを成功させようと流した汗は、まぎれもなく本物である。（プロレスに限らず、ショーの命はタイミング＝間、である）

このマイクでの涙が、予定していたものあったかどうかは分からない。

しかし、リングスという格闘技系プロレス団体出身で、このスタイルのプロレスのキャリアがそんなに長いわけではない坂田が、大舞台のメインを任されて、当日までの長いプレッシャーから、無事メインを成功させた安堵と喜びの感情はまぎれもなくあつただろうし、自分は、そのことで流した涙であつたろうと想像した。

アイドルという存在の起こりについては、第1章 5＜天皇を存続させた日本人のメンタリティが日本のプロレス、アイドル、AKBを生んだ＞で書いているが、芸そのものではなく、異性の若さという魅力を楽しむための芸…歌、ダンスなど…を身上とする彼女達（彼等）につけられた「アイドル」という言葉は、ともすれば「実力がない」「軽薄なもの」という言葉に近い感覚で用いられる。

第7章 42＜アイドル、プロレスラーの「実力」＞でアイドルの「実力」について考察するが、アイドルとしての実力、という捉え方がある。

そのような、アイドルとしての実力、という捉え方からしても、また、それと大きく関係している芸そのものの実力という意味においても、アイドル冬の時代の90年代を経て、00年代のモーニング娘。あたりからであろうか？、現代のアイドルは、70～80年代のアイドルよりは、求められるパフォーマンスレベルが高くなっている…特にダンスはずいぶん難しく、激しくなった。

特にAKBのメンバー、スタッフが1つ1つの作品やライブにかけている手間ひまは尋常じゃない。（具体的には次項第7章 41＜AKBの尋常じゃない汗の量＞）

なぜそうなるのか。

もちろん、なによりも見ている人に少しでも元気を届けたいという気持ちであり、それはひしひしと伝わってくる。

そして、もう1つ。

夢に向かって成長していくドキュメンタリーを見せてくれるのがAKBの醍醐味であり、いい作品、いいライブをつくるために努力すると同時に、人間かいている汗、胸いっぱい努力そのものを見せたい、という意図。ダンスの振り付けもそのために激しくしたりしているのでは…などと想像したり。

ライブや総選挙のリハーサルや終了後のバックステージなどには、取材陣を多数入れている。

アイドルがスッピンで、リハーサルで同じグループのメンバーにダメだしをしているところなど、普通ならば「マイナスイメージ」ととらえて表には出さないものだが、AKBではそのようなシーンは映像として公開され、ファンはよく目にする光景だ。

華やかな虚構の世界を成り立たせるために流されている本物の汗。

これがプロスポーツの世界ならば、見ている方はゲームの面白さを味わうと同時に、ダイレクトに、懸命に頑張っている姿を見て感動することができる。

しかし、アイドルのコンサートなどの華やかなショーでは、そうはいかない。彼女達はショーのさなかには、とびきりの笑顔で、歌って踊って人を楽しませる。

AKBはそのコンセプトから舞台裏の汗を映画などで公開はしているが、少なくともショーの最中には、それを成り立たせるための悲壮なまでの努力は見せない。見せないようにすることにも努力している。

プロレスにしても、AKB、アイドルにしても、虚構であるが、虚構で人を元気にさせたり、感動させるためにはものすごい本物の努力が必要なのだ。

そして、どのジャンルでも、そのジャンルの見巧者達はその本物が見える。

というより、素人であっても、細かいことは分からずとも、偏見という心のフィルターがない人間ならば、努力しているショーを見れば、表面の奥の一生懸命さは分かるはずである。

4 1 AKBの尋常じゃない汗の量

48グループのメンバー達は、常設の劇場で行う劇場公演曲（1つの公演で15曲ほど。半年～2年ほどで新しい公演になる）、シングルで発売される曲の歌、ダンスをそのたびごとに覚えていく。

曲ごとに、大人数で複雑に位置が入れ換わるフォーメーション。位置が違えば振りも違う。

ここまでも中々大変だが、もう1つ。

曲によって人によってそれぞれの位置があるのだが、AKBは劇場公演や歌番組だけをやっていないのではない。

各人、バラエティやドラマ、ラジオ、グラビアなどの個人や派生ユニットの仕事があるため、全員が揃うことは少ない。

そうすると、欠けたメンバーの位置の振りを代役を務める誰かが憶えねばならず、さらには人数も変わってくれば、フォーメーションそのものもその日用に変えなくてはならない。

つまり、日によって新たなことを憶えてこなさなくてはならないのだ。

そのような、歌、ダンスの練習、リハ、本番にとられる時間の他に、各人が派生ユニット、個人の仕事をやってやっている。

曲によってダンスの激しさも目をひく。

映画「DOCUMENTARY of AKB48 Show must go on 少女たちは傷つきながら、夢を見る」は、2011年のAKBの活動を追ったドキュメンタリー。

なかでも圧巻だったのが、自分も見に行った、7月に行われた西武ドームでの3 daysコンサートの舞台裏。

熱中症や過呼吸でバタバタ倒れるメンバー。

プレッシャーによる過呼吸で発作をおこす前田敦子や大島優子の姿は、これを公開していいのかというほどのあられもない姿。ふつうの、従来のアイドルならあの姿は公開NGだろう。しかし、泥臭さ、汗臭さをそのまま見せていくのがAKBのコンセプト。

過呼吸から一時ステージをリタイアし、再び戻ってきてもなお呼吸が定まらないあっちゃんが、「フライングゲット」のスタート、いったんメンバーの人山にうずもれてスタンバイした一瞬後、音の出だしと同時に立ち上がって笑顔をつくった瞬間にはシビれた。

たぶん、世間一般のAKBに対するイメージは、大人の金儲けのために集められた女の子がかわいい服を着せられて媚びた歌を歌って踊ってるチャラチャラした集団、というところだろう。

まあ、自分自身、ハマる前までは遠からずそんなイメージだったが、世間一般のイメージと、しっかりと見た実際の姿がこんなに違うグループもなかなかないのではないか。

ミュージックビデオの作りもかなりの見応えである。

自分がAKBにハマったきっかけは、ミュージックビデオ。

その、それぞれの曲の世界観を実に手間暇かけてあざやかに表現している力作の数々がきっかけになったファンは多い。

シングルの発売ごとに開催される握手会。

握手会のことを「1枚たった10秒でぼろい商売」と書いてる週刊誌があったが、想像力不足も甚だしい。

個別握手会（※1）は、1部1時間半で、ある程度以上の人気メンバーであれば、1日6部ある。その間、10～30秒ごとに次から次へとながれてくるファンと握手する。ただ握手するだけではない。笑顔で、それぞれのファンの話しかけに対応し、喜んでもらえるよう努力している。

自分のファンが、それぞれ応援メッセージや感想を言いに来てくれるのだから（よほどイタイ1部のファン以外は）嬉しさ、楽しさもあるだろうが、それでも大変な仕事には違いない。個別握手会1回で、たいてい2～3人は体調不良で中断、中止になるメンバーがいる（※2）

握手の対応の良しあしが総選挙の順位にもしっかり反映されている。

そういう仕事の数々を、高校生、大学生、なかには中学生のメンバーは、学業とともにこなしている。

2012年4月にSKE48のエース、15歳の松井珠理奈が過労のために入院してしまった。

メンバーのみならずスタッフの苦労も相当なものである。

その中から1つ、衣装のことを挙げよう。

劇場公演では、その曲にあわせてデザインされた凝った衣装も見どころの1つだが、基本的に1人1着。世界に1着のオリジナル。楽屋でスタッフ達が必死でドライヤーで衣装を乾かしている様子がドキュメンタリーで流されていた。

ちなみに衣装は、1つの公演で約90着、それが各チーム各公演ごとに用意される。

シングルでは、それぞれの曲の世界観にあわせた衣装が、統一感を持たせながらも、個人個人の個性にあわせてアレンジされていたりする。普段からコミュニケーションをとってメンバーそれぞれの個性を熟知しているスタイリストがデザインしている。（「QuickJapan vol.87 AKB48 永久保存版大特集」）

2011年7月の西武ドームコンサートで用意された衣装は900着以上。

2012年5/3～5/24、AKBリバイバル公演「見逃した君達へ2」で使った衣装は、2387着（終了日ののグーグルプラス（※3）でのサルオバサン（広報の西山さん）の書き込み）

AKBの衣装さん達には頭が下がる。もちろん、他の部門のスタッフにも。

まず、あれだけの大人数を管理する大変さ。小劇場で毎日のように行われる公演を支える仕事。グループ総出演…200人を超すメンバーの出演するアリーナ、ドームコンサートの運営。普

通にこなすだけでも大変な仕事だが、いいものをつくろうという熱意が作品、イベントを通じて伝わってくる。

秋元康の曲作りへの妥協のなさも有名である。

1つのシングルを選ぶのに1000曲以上を聴き、詞をつけて完成させていく過程で何度でも作曲家に修正を指示し、やりとりを重ねて行く。

ミュージックビデオにおいても監督選びから最高のものをつくろうという熱意で突き進んでいく。

その、妥協のない仕事っぷりは、関係書籍において、数々の作曲家、監督、劇場関係者などが語っている。〈参考文献〉のページを参考にして、読んでみてほしい。（※4）

AKBが売れた原因を世間一般では、アイドルの売り出しに長けた秋元康が頭の中で戦略をちよいちよいと考え、そこに電通やらがのっかってホイホイと順調に、想定通りの展開で金儲けしているようなイメージだろうが、実際は全く違う。

AKBのこれまでの歩みやそこにあったエピソードを書いていけばそれだけで1冊の本になるので…実際、「AKB48ヒストリー」という本があるので、その本や、〈参考文献〉に挙げた本など読んでもらえば分かるが、戦略通りとか順調といった言葉からは程遠い、スタッフとメンバーの試行錯誤の連続、悪く言えば行き当たりばったり、とにかくファンの声を直に聞きダイレクトに運営に反映させ（※5）、その時々で作品、劇場公演、運営の改善に惜しみない力を注いで努力した結果が現在のブームである。

もちろん、電通のバックアップその他の「大人の事情」によるものも大きかったには違いないが、それだけではフワフワしたブームは作れても、劇場の、イベントのあの熱気、AKBについてクソ真面目に語る大人（こんな文章を打っている自分も含めて）の熱をつくることは到底できなかったろう。

アンチの中には、「大人の事情」「裏話」だけをネットその他で収集し、せいぜいバラエティや地上波歌番組でシングルをちょこっと聞いて、それだけでAKBの全てを知った気になっているのがある。

AKBの核でAKBそのものと言ってもいい劇場公演も見ず、基本的なシステムも知らず、真偽怪しげな裏情報ではない発言主が明示されている各種書籍の中のスタッフやメンバーの言葉も読まずに。

例えるなら、野球のルールも知らず、見たこともなく、バラエティ番組に出てる選手やスポーツニュースの中で映る野球だけを見て、ネットで野球の経営にまつわる「大人の事情」やスキャンダルだけを収集して野球を批判しているのと同じだ。奇態である。

先に、秋元康が頭の中でちよいちよいと考えた戦略で…は違うと書いたが、最大の戦略があったとしたら、劇場という核を持ち、メンバー、自らも含めたスタッフが手間暇かけ、汗を書いて

いいものを作り、ファンの声を吸い上げながら、メンバーの成長していく過程、人間ドラマをそのまま見せようという“戦略”だろう。

その他にもいろいろな原因があったとしても、それなくしては現在のような熱をもった人気はなかったことは確かである。

※1 全国握手会と個別握手会がある。全握はミニライブがあるが、握手の時間は1人2～3秒。どのメンバーのいるレーン（複数メンバーのいるレーンと、特に人気あるメンバーの1人レーンがある）に行くかは当日決められる。個別握手会は、事前に指定して申し込んで券をとったメンバーと1枚約10秒握手できる。3枚までまとめ出し可能。ミニライブはなし。

※2 その場合は返品（返金）もしくは、後日の振り替えかを選べる。

※3 48グループメンバー、及び秋元康をはじめ、スタッフも何人か参加しているSNS。ファンもメンバー、スタッフの投稿に対しコメントでき、今や48グループの、メンバー・運営側とファンの主要な交流の場となっている。

※4 ぐぐたすで秋元康が自分のページで「業務連絡」として作曲家やレコード会社の担当者にダメ出しや、やり直しを命じたりして曲のできるやりとりの一部を公開したり、コンサートの反省点を書いたりしている。

※5 初期の頃は劇場ロビーで秋元Pがファンと交流し、劇場支配人がファンの溜まり場のファミレスで話を聞いてたりしていた。現在も、劇場支配人が握手会でファンの要望を直に聞く「支配人の部屋」の開催、ぐぐたすでのファンとの交流の他、ファンとダイレクトにつながろうという姿勢は変わらない。メンバーもぐぐたすや握手会で直にファンからの感想（時にはダメ出し）を聞くことができる。

4 2 アイドル、プロレスラーの「実力」

ともすれば、実力がないもの、という意味合いでも使われる、アイドルという言葉。

アイドルとは、楽曲や、演技力といったその芸そのものの魅力を表現する手段としての人間ではない。アイドルという人間ありきで、その人間の魅力を引き出すための歌、ダンスなどのパフォーマンス。

「芸の実力」ではなく、「人間の魅力」（若い、女・男としての魅力＝当然、ルックスも重要な要素）を見るジャンル。

別頁でも述べたとおり、00年代以降あたりから、アイドルに求められる歌唱力やダンス、MCやバラエティでのトーク力などは、昔に比べて高くなっていると思う。

が、個々のレベルは千差万別なのはおいとくとして、総じて、歌唱力では本職の歌手には及ばず、ダンスではプロダンサーに及ばず、トークでは芸人には及ばない。

では、アイドルとは何なのか？

こう聞かれれば、少なくともアイドルに特に思い入れのない人ならばルックスがいいだけと答えるかもしれない。

たしかに、昔のアイドルにはそう言われてもむべなるかな、という人もいたかもしれない(笑)

しかし、AKBはそうではない。いや、AKBだけではないかもしれないが、ここではAKBを代表にして答えてみたい。

なにしろ、まずこれはAKB批判者達も、特にファンでも批判者でもない人も、そしてファンの多くも認める事実として、AKBのメンバー達のルックスの平均点は決して高くない(笑)

(ただし、ルックスが良い、というのと可愛い、というのは、無関係ではないにしろまた別の話で、そういう意味ではAKBのメンバー達はルックスは良くなくても可愛いのだ…それについては第5章 27<“AKB顔”>で)

では、アイドルとは何なのか？

若さ、というもののしか持ち得ない人間の魅力を、特に異性としての魅力を、歌やダンス、その他を通じて最大に表現するもの、ではなかろうか。

(もちろん、そこに顔立ちというものは無関係ではないが、それも含めての人間としての魅力である。)

であるから、アイドルに「実力」がない、などということはない。

単に「歌の実力」や「ダンスの実力」がない、だけ…いや、個々で見れば本職なみにそれらが上手いコもいるから、「歌の実力」や「ダンスの実力」が単純に求められているジャンルでは

ない、と言い直そう。

プロデューズ側の「実力」は、そのコの魅力を最も引き出せる楽曲やパフォーマンスを決めること。それらの売り出し方のタイミングや方法を決め、ファンがその物語を共有、共感できる歴史をつくっていくこと。

アイドル本人の「実力」とは、もちろん、与えられた歌やダンスやトークのスキルを高めるということもありつつ、それらを通して自分自身の内面をいかに表現して、各人の個性によって、見る人に元気なり、癒しなり、疑似恋愛気分なり、何かを与えられる力。

最近では、というかAKBは特にバラエティ番組での無茶ぶりや、“ガチ”の企画で、それぞれの個性が試されることが多い。（これも、人間ドキュメンタリーを見せるという意図のもとだと思うが）

そこには、はっきりと定められる評価基準はない。

見る人によって、評価は様々であり、単純な実力の評価基準はない中で、運営側に評価されたメンバーが、オーディション通過、デビュー、シングルCDの選抜メンバー入り、テレビ出演、などの機会を与えられ、そこで人気を得たメンバーがさらに人気を伸ばしていく。

そういうはっきりした「実力」の基準がない、ということはイコール実力は関係ない、ということではない。単純な評価基準はない、というだけであり、各人の努力の余地はある。

全く人生そのものである。決められた人工的なルールの中で評価が単純明快という、スポーツのようなファンタジーの世界とは違って、どこまでも人間くさくて魅力的な世界だ。

もちろん、芸能界には、よく口さがない連中が噂するような枕営業やら、そうでなくても単に番組プロデューサーやスポンサーの好みでチャンスを得る場合もあるだろう。

そのあたりのことは分からないが、しかし、それやこれやも含めて人生の縮図。

プロレスラーの実力。

プロレス初心者の人にプロレスのことを話していて、どうも混乱してしまうのは、プロレスラーの「実力」ということについてである。

ショーということを前提に話しているのだから、「実力」というのは、その意味での実力であるのはもちろんなのだが、なぜだか実力＝ガチンコ、真剣勝負の強さ、という意味でとられてしまう。

なぜそんな不思議なことになるのか、答えは簡単だ。

プロレスファン以外の人達、特にプロレスを八百長だと見下す人間ほどプロレスを真剣勝負だと思っているのだ(笑) (第1章 3<「プロレス、AKBのファンは虚像を見ている」と見下す者こそが虚像を見ている。ファンが見ているのは実像>

参照)

矛盾する話だが、実際そうなのだ。

だから、「プロレスは真剣勝負ではなく、ショーですよ」という前提で話しているのにも関わらず、プロレスにおける実力とは真剣勝負の強さ、としか認識できない。

ショーマンとしての実力、という概念がないわけではないのだと思うのだが。歌手としての実力、俳優としての実力、ダンサーとしての実力…これらの言葉を聞いて意味が分からないという人はいないだろう。

なぜにプロレスの実力、と聞いてそれが理解できない、もしくは全然違う方に理解されるのか。

プロレスは真剣勝負→真剣勝負の「実力」は強さ→その真剣勝負のインチキでショーをやっている、という構図なのだ、プロレスをバカにしている人達の頭は。

だから、繰り返すが、プロレスをショーだとバカにしている人間ほど、基本認識としてはプロレスを真剣勝負だと思っているのである(笑)

「力道山の頃は真剣勝負だった」という、プロレスを分かっている人から見たら子供のように無知で無邪気でかわいいことを言うおじさん達がよくいるが、そういうのは間違いなくその手合いである(笑)

プロレスとは、お互いの協力がないと成り立たない技の連続で成り立っている。そこには、ガチンコの技術とは全く違う、プロレスの技術がある。

プロレスの歴史をひも解くと、単なる真剣勝負から、いろんな経緯を経てエンターテインメントとしてのプロレスになっていった歴史がある。（「リングサイド プロレスから見えるアメリカ文化の真実」(スコット・M・ピークマン 早川書房)に詳しい。）

その歴史を進化させる中で出来上がっていったエンターテインメントとしてのプロレスの基本技術、そして各人が様々に編み出したムーヴや展開がある。

それらを血のにじむような練習でしっかりと身につけたうえ、技を受け止められる強靱な肉体をつくりあげ、プロレスラー達は試合を組み立て、リングの上で素晴らしいエンターテインメントを展開するのだ。

そう言ってもプロレスのことを知らない人には分かりにくいだろうから、プロレスの技術の1つ、受け身を例にとってみよう。

組み技系の格闘技なら全てにおいて身につけなければいけない受け身。

柔道、合気道、レスリング…それぞれ、受け身の取り方の細かいところは違ってくるが、目的は1つ。投げられた時に頭を打たないように、ダメージを最小限に抑えることである。

しかし、プロレスで言う受け身は違う。

もちろん、頭部を守りダメージを少なくすることもあるのだが、それと同時に、相手の技をしっかり凄いものに見せるための受け身がプロレスで言う受け身である。

相手の投げ技には、派手に見栄えがするように飛んで、なおかつ頭部に致命的なダメージを受けないようにする。

投げでなくとも、例えばリアットを受けた時に、尻もちをつくようにどすんと倒れるのではなく、しっかり身体が浮くように飛んで、受け身をとる。同じリアットでも、受ける方の上手い下手で、すごいリアットにもなれば、へなちょこリアットにもなるのだ。

そういう意味での上手さが、プロレスで言う受け身の上手さである。相手の技を光らせて、自分もダメージをなるべく受けないのが理想。

その他、序盤のロックアップ（お互いに、相手の肘と首を押さえて4つに組んだ状態）からヘッドロックを左手で取って、ロープに送って（このロープに振られて返ってくるロープワークという動きにも、基本技術がある）返ってくる相手と左肩どうしでぶつかるムーブ。（どちらでぶつかるか約束事がなければ、怖くて全力でロープから返ってこれない。やってみれば分かる）

ヘッドロックから首投げで投げて、投げられた方がレグシザースで相手の頭を挟んで返して、そこから2人がスクッと起きて観客の拍手がおこる、おなじみの展開。

その他、様々な技の応酬のパターンがあり、それらを観客の反応を見ながら、臨機応変に組み立てて序盤の展開をつくっていく。

いろいろ細かいところを書いたが、何が言いたいかというと、プロレスとは「真剣勝負のインチキ」ではなく、全ての展開がお互いの協力がなければ成り立たない技の応酬で、それらには基本技術がある、つまりエンターテイメントとして成熟しているジャンルなのだ。

「プロレスの実力」とは、それらの技術の上手さ、試合の組み立ての巧拙、自分のキャラクターの確立、表現力、さらには、見るだけで金を払う価値があると思わせる肉体を持っているか、試合に向けてのあおりのインタビューでの表現力、などなど。

さらに言えば、コスチュームの選び方なども実力のうちだろう。

また、基本技術がものすごく下手でも、間の取り方や表情、オーラ、観客の予想を裏切る仕掛け…それらの突き抜けた表現力で超一流と言われるアントニオ猪木のようなレスラーもいる。俳優で言うなら、滑舌その他基本的なことが全然ダメでも、その存在感、オーラで一流と言われる俳優（演技のことはよく分からないが、勝新太郎などがそれにあたる？）。

そういうレスラーを実力があるかと聞かれた場合、人によって評価が違ってくるだろう。

そういう意味で、プロレスも、スポーツという簡単に実力が評価できる世界ではなく、どこまでも奥深く、一生見続けて飽きないジャンルである。

「実力」が一筋縄では評価ができないところ、かといって、「実力」は確実にある世界、というところは人生そのもの。逆に実力の評価が明瞭に示されるスポーツの世界はファンタジーの世界である。

歌手や役者の実力と「アイドルの実力」について書いていて、似たものに、寄席や舞台での芸人の実力と、テレビのバラエティ番組での芸人の実力の違いに似ていると思った。

これも、ともすれば、寄席の芸人は「本物」、バラエティの芸人は「にせもの」的なことを言う人間がいる。

これも、寄席がジャンルとして確固たる地位があるのに比べ、「バラエティ」というものの社会的地位があやふやなため、世間のジョーシキに沿った考え方しかできない人間は、偏見で目が曇っていて見えない。

では、寄席一筋の芸人がバラエティに出て、そこで求められる流れに沿いながら笑いがしっかりとれるのか？

時々、「〇〇ってお笑い芸人面白くないよな～。あいつよりは俺のほうが面白いと言えるよ」とか言う勘違い人間がいる。バラエティが軽い気持ちで楽しむものだから、つくるのも簡単にできるものだという、なんだかアイドルを見下す人間と同じ傾向を感じるが、お気楽に見るものだから、つくる方もお気楽につくれているわけではない。お友達たちとの飲みの席などで笑いをとるのとバラエティで笑いをつくるのと同じに考えているのかもしれないが。

テレビには番組の台本があり、その流れに沿いながら、話さねばならない。好き勝手に時間を気にせず話せばいいというものではない。

全体のチームプレーであり、自分一人が暴れ過ぎてもいけない。

仲間うちなら、長年ずっと一緒にいるなかでお互いのキャラも分かっている、その認識を土台に笑いをとれるが、テレビでは、あくまで番組の中の自分が与えられた限られた時間で、自分のキャラというものを表現して視聴者に分からせなければいけない。

仲間うちでの飲み会や職場の休み時間などのリラックスした雰囲気ではなく、カメラや照明が一齐に自分に向かってるスタジオで、「笑いをとらなければいけない」「視聴率をとらなければいけない」という状況で、決められた流れの中で、時間や全体のバランスを考えながら発言し、リアクションをとらなくてははいけないのだ。そう簡単なものではないでしょう。

寄席、舞台は金を払って見に来て、集中して見ている観客を笑わさなければいけない。

テレビ、特にバラエティは、無料でお気楽に見ているという違いがある。

だからと言って、寄席が難しく、バラエティは簡単、ということにはならない。

与えられている条件が違うだけ。

金を払って見に来た客を満足させて帰す大変さ。

いつでもチャンネルを変える、テレビを切ることのできる視聴者を引き付けて、視聴率という結果を出さなければいけないテレビの大変さ。

どちらが難しい、どちらが大変という比較はできない。

もし、絶対的に寄席のほうが難しい、と言えるものならば、寄席の名人達が集まってバラエティ

番組つくれば面白いものができなければおかしいが、そう言えるか？

ジャンルが違うものを比較してもどうしようもないのだ。

よって、自分からしたら

- ・ 高尚な、アーティスティックなお歌ではなくアイドルの歌を聞いて楽しんでいる人、
- ・ 真剣勝負の格闘技ではなく、プロレスを見て楽しんでいる人、
- ・ 高座の笑いではなく、テレビの笑いを見て楽しんでいる人、

Etc…

を見て、「本物の○○を分かってない」と見下す手合いこそ、分かってないなあ、としみじみ思うのである。

4 3 フワフワしたものが嫌い、だからAKBが好き

人生を38年送ってきて、未だに自分というものが分かってこなくても、自分の好きなもの、嫌いなものは何なのかということが徐々に分かってくる。

自分の場合、好きなものは「人間の匂いのするもの」で、嫌いなものはその逆、人間の匂いがしない「フワフワしたもの」だ。

例をあげていくと…。

好きな漫画は「ゴルゴ13」を筆頭に、劇画。

嫌いな…嫌いというより、本当に読み進められないのが少女漫画の絵。内容はおもしろいものはたくさんあると思う。が、あの絵がもう、嫌いとかいうことじゃなく、目がチカチカしてくるような感覚で読めない。

あと、これは食わず嫌いなのかもしれないが、いわゆるヲタクっぽい、カラフルなセーラー服着た女のコが主人公のような感じのアニメも好きではない。

ちゃんと見てないから単にイメージで言ってるだけなのだが、人間の匂いがしない感じがする。

まあ、37歳にして（それまで興味なく、どちらかと言うとバカにしていた）「アイドル」というジャンルにハマったのだから、これからの人生でアニメにハマったり、少女漫画も読めるようになる可能性はあると思うが。

プロレスラーでなんといっても「たまらん」のは、花道を去っていくベテランレスラーの背中であり、天龍、長州のような男気ムンムンのレスラーは、目の前で見てその男気にあてられるだけでも金を払う価値がある。

逆に、前述したドラゴンゲートという団体は、すごく洗練されていて「世界最先端のプロレス」を称しているだけあって、試合はすごく面白いが、一方で「人間臭さ」がもう少し感じられないのが残念。

その流れで言うと、「AKB（アイドル）って、フワフワしてるんじゃないの？」と思われるかもしれない。

違うのだ。

真逆で、AKBは、人間の匂いプンプンのアイドルなのである。

もうちょっとかっこよく言えば、「汗の匂いのするアイドル」といったところか。

まず、ホームグラウンドが小劇場の公演。たいした装飾もない小さな舞台上（※1）、セットリストごとに何曲も難しいダンスを覚え、そしてMCも全てまかされる。

昔のアイドルのように、司会者の仕切りのもと、万事用意のととのったテレビのスポットライトに押し出されるように出て、素人同然（以下？）の歌唱力、身体を少しゆらすくらいの簡単な振りを披露し、お疲れ様、というのとはワケが違う。（昔の、と言ってもいろんなアイドルがい

たし、全てがそうというわけではない。また、そういう感じのアイドルにしても、実際はいろんな苦勞があったろう。ここでは、自分の言いたいことを説明するために、自分の目に映った昔のアイドルの感じをオーバーに再現したまで。）

研究生からスタートし、魅力的な素材になってきたら、正規メンバーにされる。

そして、ここが重要だが、その苦勞の様子を、日々、ファンに見せている、ということである。

総選挙、というこれまで考えられなかった、人気を順位づけして公開するというイベントでの泣き笑い。

かなりキツイこともやらされる冠番組（※2）で見せる人間性。

公演で、メンバーもファンと一緒に突然次の企画や、メンバーの脱退などを知らされる“サプライズ”

これら全ては、これらによって、メンバーの感情をファンに前に表出させるために置かれた、ドキュメンタリーを成り立たせるための仕掛けとして機能している。

テレビや映画、雑誌の取材などにも、積極的にバックステージを見せている。

もちろん、見せられないところは見せていないだろうが、ダメだしをされているところ、へばっている様子などもバンバン流されている。運営側が意図的にそうしているのだろう。メンバー達の成長する様子、あるいは途中で挫折するところも含めて人間のドキュメンタリーを見せる、というAKBのコンセプトのもとに。

この「人間の匂い」が好き、ということの説明補足する意味で、自分的に「好きなかっこつけ方」「嫌いなかっこつけ方」があるので、それを挙げる。

ファッション編

「嫌いなかっこつけ方」雑誌でチェックした卒なく無難に流行りのものを着こなす。

「好きなかっこつけ方」流行など無視。自分が思うかっこよさを追求したスタイル。

アーティスト編

「嫌いな～」無難なファッションで登場し、自分の歌うさわやかなラブソングの主人公そのままに、ボソボソとアーティストっぽい喋り方をする人。下ネタなど決して言わない。

「好きな～」スケベ心も隠そうとせず、自分の思うところをみっともないくらいに熱く語り、身体をビルドアップして以降は上半身を露出させたファッションがとたんに増えた長渕剛。

スポーツ選手

「嫌いな～」流行のヘアにオシャレな装い、鍛えた身体はさりげなく見せるっぽく見せたいJリーガー。

「好きな～」タンクトップにテカテカ黒肌、さりげなさなど微塵もなく身体を見せつけるボディ

ビルダー。

ようは、むきだしで生きてる人が好きで、そうでない、なんだか「フワフワしたもの」が嫌いなのだ。

かっこつけてる事を重々認識しつつ、「かっこつけてる自分」も同時にさらけだしているのは好き。

自分で「かっこつけてる」事を自己認識してない、あるいは認識してても「かっこつけてる自分」は隠し、さりげなくかっこつけようとしてるのは嫌いである。

AKBのメンバー達の、それぞれの夢へ向かって奮闘している姿は、前述したような様々な方法でファンの前に露呈されている。

また、AKBファン達は、それぞれのメンバーが、どのような夢を持って、どういう苦勞をしてAKBに入ってきたか、入ってからの苦勞などの物語をだいたい知っている。

篠田麻里子が劇場隣接のカフェからメンバー入りしたこと、横山由依が京都から長距離バスで週末ごとに上京しレッスンに励んでいたこと、梅田彩佳のケガによる長期欠場、などなど。

そして、それぞれが少しでも多くのスポットライトの当たる場所に立ちたいという欲望を隠していない。

「アイドルになりたい」という願望は、「見る人を元気にしたい」というような思いももちろんあるが、悪く言えば、ある意味なかなかなかっこ悪い部分もある。

自分の容姿にそれなりの自信があり、男の視線、声援を浴びながらスポットライトのあたるところで歌ったり踊ったりしたい、という願望。

だからであろう、よくアイドルで「家族が勝手に履歴書送っちゃって…」という入ったいきさつ？を話す人がいる。

それが本当であれ嘘であれ、普通のアイドルならばその発言はありだろうが、AKBではあり得ない。

「AKBは夢のプラットホーム」と秋元康が言っているように、芸能界に入って、AKBに入って、叶えたい夢がある、それを堂々と口に出し、その夢に向かって成長していく様子を見るドキュメンタリー、それがAKBであるからだ。

そういう彼女達自身のもがく姿が浮き彫りになって現れるのを見て、何かを感じるのだ。

アイドル、というものの自体は「人間」の匂いのしない、自分の言うところの「フワフワしたもの」かもしれないが、アイドルになりたい、また、アイドルを通過して女優、歌手などになりたい、という願望とそこへ向かう姿が浮き彫りになることで、とたんにこれ以上ないほど人間の匂いがしてくる。そう、AKBとは、汗の匂いがするアイドルである。

AKBに限らず、アイドルはフワフワしてるものかもしれないが、そこに夢を持って汗水たらす少女達は人間臭い。AKBは、それを見せているグループだ。いや、グループというよりそういうシステムであり、ジャンルなのだ。

だから、AKBには、AKB自身のことを歌った歌が多数ある。

抽象的にもあるが、具体的なものも多い。AKB用語を用いている歌も多数ある。

「チームB推し」「黄金センター」、その他にも多くの曲で、「AKB」「センター」「選抜」などの言葉、メンバーの名前を歌詞に散りばめた、AKBそのものを歌っている。

「Overtake」

選抜メンバー もれて嘆くより
今 君にできることへ 努力しかないんだ

秋元康からメンバー達へのメッセージ（それはひいては人生そのものへの応援歌にもなっている）とともとれる歌詞も多数。

「少女たちよ」

ステージの片隅で
もがき続ける
悔しさや空しさも
青春の時

少女たちよ
もうすぐ夜明けが来る
夢の未来はこれから始まる WOWWOW
少女たちよ
何もあきらめるな
悲しいことなんか すべて捨てて
全力で
全力で
走るんだ！

昔、その当時バリバリのトップアイドル・小泉今日子が歌う「なんてったってアイドル」という歌があった。

当時としては、なかなかぶっ飛んでる歌詞でインパクトが強かった。（※3）作詞は秋元康である。

この歌は時代を反映してバブルの匂いがしているのに引き換え、大不況時代に生まれ育ち、人

間としてしっかりしている現代の若者から出ているAKBをはじめとした現代のアイドルに与えられた歌の歌詞からは、自分がチャホヤされたいというよりも見る人を元気にしたいという気持ちの方を強く感じる。が、「なんてったって～」にしる現代のアイドルにしる、アイドルでいることの嬉しさをみっともないまでに「さらけ出している」ところは好きだ。

バブルの時代に「さらけ出そう」としたら、「なんてったってアイドル」の方向になるのだろう。

そして、時代は平成大不況。

頑張る人間がかっこいいという時代意識のもとに誕生したAKBが、いかに人間臭く汗まみれのアイドルであるかについては、映画「DOCUMENTARY of AKB 48 Show must go on 少女たちは傷つきながら、夢を見る」を見てほしい。

前年公開の前作「DOCUMENTARY of AKB 48 to be continued 10年後、少女たちは今の自分に何を思うのだろうか？」はインタビュー中心のドキュメンタリーだったが、今作品は、被災地訪問のトラックの荷台でのステージや、各イベントの舞台裏を、夢を追う少女達の成長をそのまま見せるというAKBのコンセプトのまま常にカメラで記録していたものを、1つの映画にしたもの。

こういう舞台裏を映したものを見る以前に、その作品の素晴らしさと、そこにAKBのスタッフとメンバーがかけている手間ひま、汗の量はハンパではないと分かっていたが、表から見てて分かっていたその事を、この映画では舞台裏の視点から改めて見た。

AKBに少しでも興味ある人ならもちろん、そうでない人も感動や、静かに沸き上がってくる元気をもらえる映画だ。

日本という国において、その象徴となっているのは言うまでもなく天皇陛下。神話そのものでもなく、何千年前にこの世を去って神格化された人間でもなく、現在、我々がその肉声を聞き、見ることのできる人間。

そして、その源流となっている神話、記紀の神話の神々の何と人間くさいことか。

神々のドロドロした愛憎うずまく話、そしてそれにとどまらず性の話やら糞便やら、これでもかと人間の匂い充満の話。神からつながる天皇の正当性を、権威をつけるためには、もっと神々しく綺麗なものを描いてよさそうなものだが、この、どこまでも人間くさい神々。

プロレスラーは、裸の神様であり、プロレスは裸の強き神々のお祭りだ。

まるで記紀の神々を彷彿とさせる。リングで躍動する肉体。飛び散る汗、血。

実際は基準がはっきりしているジャンルではないが、建前上は勝敗、タイトルの有無などによ

ってはっきりした差がつけられる特殊な世界ゆえに起こる嫉妬、様々な人間くさい思惑。そして、それらを抱えながらリング上で裸の肌をあわせる者どうし。それを見つめる観客の目。

プロレスほど人間くさいジャンルを他に知らない。

AKBほど人間くさい芸能集団を他に知らない。

※1 AKB劇場・戸賀崎支配人が劇場スタートに向けて準備をしていた頃を思い出して語った話「何もないところに、というのはポイントで、当時の照明さんとかは、LEDの基盤を床と壁に入れれば、いろんな映像が出せるしいろんな演出ができますよって提案してくれたんですけど、秋元さんは『いや、ステージは木だ』と。で、『後ろも真っ黒でいい』。『何もないところで、生身の人間達が世界観を作りだしていくのがいいんだ、テクノロジーに頼るものは飽きられちゃうぞ』っていうことで、今のような木張りのステージになった。」(Quick Japan vol.87 AKB48 永久保存版大特集 83ページ)

※2 冠番組の1つで、そのキツイ企画の数々が伝説となっているCS「ファミリー劇場」の「AKB48ネ申テレビ」プロデューサーの佐藤正之氏はこう語っている「彼女達はアイドルですが、彼女達の普段の様子を掘り下げようと思いました。でも、カメラを向けた状態で『いつも通りのあなたでいてください』と言ってもなるわけがないんです。そこで生まれた工夫が『むちゃぶり』です。『ちょっと怖いな』と思うようなことをしてもらおうと、素の声が出るんですよ。我々が1番観てほしいのはそこです。家族と接している時の、そ彼女達を観てほしいけれど、家族と一緒にのところを映すわけにはいかないから、家族のかわりにむちゃがあるんです(笑)。」(「QuickJapan vol.87 AKB48 永久保存版大特集」より)

※3 なんてたってアイドル 1番歌詞

なんてたってアイドル

なんてたってアイドル

赤いコンバーチブルから

ドアをあけずに飛びおりて

ミニのスカートひらり

男の子達の

視線を釘付け

黒いサングラスかけても

プライバシーをかくしても

ちよっとくらいは誰かに

そうよ私だと

気づかなくちゃ イヤ・イヤ
恋をするにはするけれど
スキャンダルなら ノーサンキュー
イメージが大切よ
清く 正しく 美しく

なんてたってアイドル
私はアイドル

(You are an idol)

なんてたってアイドル
ステキなアイドル

(You are an idol)

アイドルはやめられない
Yeah! Yeah! Yeah!

なんてたってアイドル
なんてたってアイドル
なんてたってアイドル

AKB個別握手会。

千円の劇場版CDに、握手会参加券が1枚。1枚は1回10秒の握手。

1度に出せるのは3枚（30秒）まで。

同じメンバーの列に何度も並ぶことをループと呼ぶ。

この握手会の話聞いて

「そんなの、時間と金のこと考えたら、キャバクラ行ったほうがいいじゃん」とか言う輩がいる。

これも「AKBのメンバーよりも俺の彼女のほうが可愛い」と同様、苦笑するしかない。

プロレス見て、

「なんでロープにふられて返ってくるの？」と言うのと同じレベルだ。

世の中には全部「ガチ」でとらえることしかできない人間がどうしたっているようだ。

もし、AKB握手会が1人のメンバーと30分、酒飲みながら話せるイベント…輩のおっしゃるキャバクラのような…だとしたら、それはもう、アイドルでもなんでもなくなるし、なんだろう…説明するのもアホらしい(笑)

たった10秒単位の短い時間だから、アイドルたりえるし、そこに共同幻想が成り立って、握手会独特の楽しさがあるのだ。

握手会は、プロレスの地方興行と似ている。

自分自身もそうだったが、地方のプロレス少年が、地方巡業の興行を見に行く楽しみは、生のプロレスを見ることももちろんながら、会場のアチコチにいるプロレスラーを生で見ることに、入場のたびに、花道に殺到してレスラーを触ること、写真を撮ること。

最初に興行の告知のポスターを見た瞬間から、脳内カレンダーのその日が大きい金色の文字に輝く。

当時はコンビニで発券とかネットで注文、なんて想像もしてなかった時代。

プレイガイドでチケット買うことにワクワクし、勉強机の棚にしまったチケットを何回も眺めながらニヤニヤ。当日まで友達とあれこれ話し、当日は朝から、今、この街のどこか、半径何キロか内にプロレスラーがいることに興奮。

うそのような…というかアホのような、自分でもよく分からない話だが、当時、自分にとって、年に1、2度自分の街に巡業に来るプロレスを見に行くというのは聖なるお祭りに参加するこ

とだったから、会場に向かう前に歯をみがいてた(笑) 身を清めるとのことなら風呂に入るとかの方がと、今になって思うが(笑)

会場にはもちろん、開場時間の30分前には着く。

開場入りするプロレスラーを見るため。レスラーが見れなくとも、あわただしく出入りする関係者や機材などに、祭りが始まる前の鼓動を感じていた。

チケット当日売り場の奥で、プロモーターらしき人…その筋とも言えないが、普通のカタギでもない匂いをその襟足長い髪と真っ白のスーツから放ってるおじさんが札束を勘定してるのを見て、“大人の色気”を感じて興奮した。

会場に入る。椅子が整然と並べられていて、その向こうにリングが見える。

鉄柱がピカピカと光り、ロープは黒くて堅そうでピンと張っている。

リング上を覆うように組み上げられた照明セットからの反射が、その周辺数メートルまで“リング”という空間にしていた。

初詣客が、まずはお参りを済ませるように、おっかなびっくり、まずはそのリングの近くまで来た少年達は、さわってはいけないリングのキャンバスを、試合前の軽い調整をする若手レスラーが動くたびにそこにきしむ波や、リングシューズでへこむわずかな曲線を見て、その固さ、質感を目で触り味わってから、会場隅の売店へ走る。

グッズ、パンフレット売り場では、必ずパンフレットを買った。

その1ページ目にスタンプで押されている「本日のカード」が、いつもは東京にあるプロレスが、今日は自分達のものになっているまぎれもない証拠だった。

パンフレットに書かれているプロレスラーの紹介など、プロレス少年達には先刻承知のことだが、そんなことは関係ない。

今日、この空間にいるという確かな事実を手で握って確かめるためにパンフレットを買うことは絶対に必要なことだった。

売店では、グッズを買ってくれたファンへサインをサービスするためにレスラーがいた。

パンフレットを買うくらいがお小遣いの限界だった少年達は、しかし売店からすぐには離れない。

お金に余裕あるファンが買ったグッズにサインする、手を伸ばせば届く距離にいるレスラーの一挙手一挙動を見逃すまいと、目の前で他人様を凝視することは少々無遠慮で失礼な行為であることも知らずに、目の前のプロレスラーを、今で言う“ガン見”する。

しかし、責められる行為ではない。そこにいるのは“プロレスラー”なのだから。

ファンに一挙手一投足を見られることこそが、プロレスラーの（そしてアイドルの）仕事である。

全日本プロレスでは、在りし日のジャイアント馬場がそこにいた。

リングアナウンサーの毎回おなじみのアナウンス

「現在、会場売店では、ジャイアント馬場選手が、お買い上げいただいたグッズに記念のサインを入れております。観戦の記念に、ご家庭へのお土産にぜひお買い求め下さい…」

そして、

「なお、会場内は禁煙となっております。おタバコをお吸いのお客様は、会場ロビー指定の喫煙所にてお願いします」

というアナウンスも流れる中を、馬場さんは葉巻をくゆらせながら、ゆったりと巨大な足を組んでそこに座り、グッズを買ってくれたファンに特に笑顔を向けるわけでもなく、スタッフから渡されたグッズを流れ作業で、手元に来た部品に何十年と手に染みついた作業を行う職人のようなたたずまいでサインを入れていた。その無愛想さがたまらなかった。

禁煙の会場内で葉巻を吸っていても、誰も何も疑問に思わなかった。

馬場さんは“プロレスラー”であることも超越して、“馬場さん”だった。

いよいよレスラーの入場となれば、花道に走る。

いいポジションをキープして触る、写真を撮る、プロレスラーの匂いをかぐ。

入場が終われば、今度はその相手が入場してくる反対側の花道に走る。

長州力をさわりに行った時に、付け人をしていた二十歳そこそこ、デビューしたての佐々木健介に「どけ、おらあ！！」と顔をはたかれた。

今なら訴えるのなんのという話にもつながりかねないが、当時はプロレスラーの方が絶対に立場が上、客はそれを見せていただいている、という感覚が団体にもファンにもあったため、そんなことは考えもしなかった。

何よりはたかれた少年が喜んでいて、こうして中年になった今でも、メジャーな存在になった健介にはたかれたことを自慢として書いている。

全試合が終わったら、濡れた身体にTシャツを着て、そこから伸びる太い手で荷物を持って引き上げるプロレスラー達を遠巻きに見て、チャンスがあればサインをねだる。

橋本は意外に優しいぞ、三沢にサインもらった！！、長州は全然ダメだ…そんなこんな戦果をその場で友達としゃべり、次の日も学校で喋る話の種にする。

…プロレス少年だった自分から見える景色を皆さんにも見てもらった。

AKBの握手会も同じ。

プロレス地方興行でのプロレス少年に返ってここに綴ったふうに、現在AKB握手会でAKBヲタクのおっさんが見ている風景を、握手券の抽選に申し込むところから綴ってもいいのだが、やめて

おこう(笑)

要は同じなのだ。

握手会当日まで、短い時間内にメンバーに何を話そうかあれこれ考え、会場に向かう人波と一緒に、映像がスクリーンで流され、グッズ売り場やファンどうしの生写真の交換スペースでガヤガヤしている会場に入る。

思い思いのメンバーのTシャツや推しメンの名前入り特攻服を着た人達を見つつ、列に並んで、握手が終われば一緒に来た友達と、それぞれメンバーとどんな話をしたか喋り、時間が来たらまた別のメンバーの列に並ぶ…。

プロレスの興行も、AKBの握手会も“お祭り”である。

縁日の屋台(握手)も楽しいけど、なんといっても、そこでワイワイやるのが楽しいのだ。

何も無いところでワイワイやっててもこんなに楽しくはない。同じことを同じように喋ってたとしても。

屋台(握手)があって、そこに時々行きながらワイワイやるのが楽しい。

生写真のトレードも、毎回繰り広げられる楽しい風景だ。

そこへの行き帰り、そこで1つ1つ目にするもの、空気の全てを楽しみに行っているのであって、

「千円で10秒ならキャバクラでも行ったほうがいい」

などという見方がいかに的外れというか、そういう物の見方しかできない即物的な人間にはプロレスもAKBも永遠に分かるまい。

さらに言うなら、当日の楽しみだけではない。

握手券を手に入れた日から握手会当日までの数カ月もの間、メディアに出ている最上のメンバーを見るたびに、あと何カ月、何週間、何日後には、あの彼女を目の前にして直接喋れるんだとワクワクしながら過ごせるのだ。数か月間ワクワクして過ごせることを思えば握手券など安いものである。

「おもしろきこともなき世をおもしろく すみなすものは心なりけり」

とはよく言ったものだが、与えられた材料で、自由に想像力で自らの楽しみを見出して遊んで、世をおもしろくすみなしているAKBファン。そして、既に確立された、世間が認知している楽しみ方でしか楽しむことができないがゆえにAKBを理解できずに批判して自らの世をつまらなくしているアンチAKB。

握手会に行くのは、お目当てのメンバーに会いたくてしょうがないから、千円で10秒であっても、遠方からでも行く、ということではないのだ。

…いや、ないということもなくて、もちろんそういう面もあるのだが、握手会それ自体が楽しくて行ってる。

AKBが好きで好きで見たくて会いたくてしょうがないからそのためにヲタク活動をやってる、とばかり思われがちだが、ヲタク活動そのものが楽しくてやっている、という面も大きい。

観光旅行に行く目的は、遠方の土地のあれこれを見て歩くこと、その手段として電車や飛行機に乗って行き、ホテルに泊まる。…ということなら、もしも「どこでもドア」があって、ドアを開けたら金閣寺、見終わってドアを開けたら嵐山、いろいろまわって、移動の時間がゼロなので1日で行きたい所を見終わったので宿泊する必要もありません、となればいいはずだ。しかし、こんな旅行のどこが楽しいのか？…まあしかし、前述の即物的、単純脳の持ち主はこういう旅行が最高なんでしょうなあ。べつにいいけど、人生、損してますよ。

皇居で1月2日や天皇誕生日に行われる一般参賀。

長時間並んだ後、お出ましになるのは5分ほど。

お出ましの様子やお言葉はたいてい、その日のニュースでも流される。

ならば、一般参賀に行くことはくだらない行為なのか？

冬の寒空のもと、なぜに毎年たくさんの人が繰り返し皇居に集まるのか？

皇居に集まる人々は、皇居で長時間、他の、皇室を敬愛する人達と一緒に列に並ぶことや国旗を振ること、それらすべての一般参賀という体験を体験しに行っているのである。

茶の間で、テレビで陛下のお言葉を様子を聞くのと、電車を乗り継ぎ東京駅からの人の波にのって皇居まで歩き、陛下のお出ましを待ってお言葉を聞き、歓声をあげて日の丸を振るのとは、全く違う行為である。

テレビでプロレスを見るのと、会場でプロレスを見るのも全く違う行為。

恋人とデートするのと、「アイドル」の握手会行くのも全く違う行為。

言うまでもない当たり前のことなのだが、偏見という杭で脳が固定されている人間にはそれが分からない。

4 5 AKB握手会の笑顔を「営業」と見下す者は、人間そのものを見下している

AKBのメンバーが握手会で振りまく笑顔やファンへの言葉を、「営業」「嘘」と、したり顔で話す者が多い。

彼らは、＜第1章 3「プロレス、AKBのファンは虚像を見ている」と見下す者こそが虚像を見ている。ファンが見ているのは実像＞で書いた「虚像を見ている人」である。

あるいは、全か無か、オールorナッシングでしか物事を見れない単純な頭の持ち主か。

彼らにとって、例えばメンバーがファンに

「会いたかったよ～」 「また来てね～、待ってるよ」という言葉をかけたとすると、それが「本当」ならば、メンバーはそのファンとリアルにお友達になってもいいはずだし、それでなければ「営業用の嘘」ということになるのだろう。

あるいは、ブログで「ファンの皆さん、大好きです！」てなことを書いても、同様に思うのだ。

彼らにとっては「生身」の状態ですら「本当」のことを言っていなければ「嘘」になるのだ。

彼女達はアイドルとして、来てくれたファンに、ありがとう、また来てねと笑顔を向け、ブログで大好きですと書く。

どこに嘘がある？

彼らは言うだろう。

「いや、アイドルとして…なんでしょ？だから嘘ってことじゃん」

彼らは

「真剣にプロレスをする」という言葉の意味も分からないだろう。

「それって真剣勝負のプロレスをするってこと？」

「違う。プロレスはエンターテインメントだよ。」

「????じゃあ、嘘ってことだよな？」

彼らのために説明しよう。

彼女達は、アイドルとして、ファンに元気を与えることを喜びとし、また、応援してくれるファンに感謝している。

それを言葉で、笑顔で伝えている。（※1）

だから、握手会という、アイドルとしてファンに対峙する場で、笑顔で対応したり、常連のファンに「また来てくれた嬉しい」と言ったりするのに嘘はない。

「アイドル」と「ファン」である限りは。

もし街中でファンが、彼の推しメン（※2）とバッタリ会ったとしよう。

その時にファンが「大好きで、応援してます！握手して下さい！」

と手を差し出して、それにアイドルが笑顔で応えるのは「アイドル」と「ファン」であるからだ。

そこで、ファンが「これからよかったらお茶しませんか？」

とでも言ったら、彼女は表情硬くして去っていくだろう。

それを言ったが最後、「アイドル」と「ファン」という関係を壊しているから。

ごく当たり前のことだが、前述した、「営業」「嘘」と見下す者からしたら、ファンのことを大好きって言ってるんならそこでお茶に付き合わなかったら「嘘」じゃん！ってことになるんだろう（苦笑）

ここで書いたようなことは、これもまた人生、この社会そのものである。

握手会はボランティアでやっているわけではないのだから（※3）、それを営業という言い方をしたいならば営業である。

しかし、そう言うならば、お金がからむことは全て営業である。

八百屋のおじさんが、お得意さんと笑顔で元気よく喋るのも営業。

旅館の女将さんが、お客さんを精一杯もてなすのも営業。

プロスポーツ選手が笑顔でファンの歓声に応えるのも営業。

政治家が選挙で演説して握手するのも票獲得のための営業。

しかし、「今日も八百屋のおじさん、威勢よかったよ〜」「あそこの女将さんの接客は素晴らしいね」「巨人の〇×選手のヒーローインタビュー、さわやかで好感持てるなあ」「〇×代議士、いい人だったよ！」

これらの話をして

「それは営業だね」

とクールに返す人はあまりいないと思うが、これがアイドルの握手会の話となると、ことさらに「営業」と言いたい人が多いのだ。

八百屋のおじさんも、旅館の女将さんも、客の好印象を持たれることが売上アップにつながる。

(プロスポーツ選手も、人気があがって成績があがることはないが、人気があった方が団体(球団など)に商品価値があがるし、スポンサーもつく。)

旅館の女将は何を思って精一杯の笑顔、温かい会話で客をもてなすのか？
その女将さんによって違うというのはもちろんとして。

まず、商売を成り立たせるために、客に好印象を持ってもらうため。この部分を称して「営業」と言えるのだが、その心情は？

人によっては

「うぜえなあ…。まあ、金、金、金のためだ！嘘の笑顔とおべんちゃらで今日も客だますか！」という女将もいるかもしれないが(笑)…アイドルの握手を営業と断じて見下す人間は、アイドルはみな、こういう心情で握手してる、となぜか断じているんでしょうな。

しかし、こんな女将は少数だろうし、もしいれば、その心はどこかでにじみ出てしまっているだろう。アイドルも同じだ。ファンはメンバーの握手時の対応で(その他、ステージでのMC、ブログの言葉などからも)その気持ちを忖度して、推しメン選びの参考にする。それは別に特別なことでもなんでもなく、アイドルに対してだけではなく、人は誰でも他人の表面上の言葉や表情の向こうにその本音を読み取りながら、その人間との付き合い方を考えている。

女将の話に戻ると、個人差はともかく、おそらく多くは「商売繁盛させなくてはいけない。そのためには、またお客さんに来ていただけるように、精一杯のもてなしをして喜んでもらおう」という気持ちで接客しているのではないか？繁盛してる旅館は、こういう気持ちでやっているから客は満足して、結果、繁盛するのであろう。

して、このような女将の接客を表すとしたらなんだ？
「営業」か？

もちろん、それもあろう。しかし、営業であると同時に、「真心」でもある。

そして、客が「客」という領域を超えて、美人女将にモーションをかけて、それを断ったら、それまでの真心の接客は「嘘」だったことになるのか？
アイドルの笑顔の対応も同じことだ。

これも、特別なことではない。

どんな仕事でも、仕事である以上、その対価として金を受け取る。「営業」だ。と同時に、客へのサービスをいくらかの真心で行っている。

仕事だけではない。

男が、心から大好きだけどまだ深い関係になってない女に優しくする時、それは「下心」か「本心」か？

人間の気持ちなど、この時の気持ちはこれ！と単純に色分けできるものではない。当たり前である。

AKBの人気メンバーの個別握手会は、1部1時間半で、それを1日6部。

その間、1枚10秒の参加券を持って次から次へと流れてくるファン。

握手だけしていればいいわけではない。

ファン1人1人、握手しながらその日のために何を話そうか考えてきたことを話しかけてくる。それに対し笑顔で愛想よく対応しなくてはいけない。

ほとんどのファンは、もちろんそのメンバーのファンなのだから喜ぶようなことを言うだろうが、中にはダメ出しをしてきたり、あるいはこれだけファンが増えれば少数ながら、失礼なことやひどいことを言う輩もいる。

ごくわずかでもそういうのがいれば、次から次へ流れてくるファンに対し、「次は大丈夫か」という緊張があるだろう。

もちろん、自分のファンという人間が、自分と握手するためにはるばる来て長い列つくって、大多数は「〇〇なところが好きです！とか」「頑張ってください！」等、ファンとしての言葉かけてくれるわけだから、気持ちがいいというものもある（※4）だろうが、疲れることもたしかだと思ふ。

それを、したり顔で見下したい人間が聞けばまた

「無理矢理愛想笑いと営業トーク続けて、大変な商売だな」

と嘲笑するのだろう。（※5）

これまた、他の仕事では疲れながらもがんばって接客している人間のことは褒めるのが普通だと思ふのだが、なぜかアイドルのことになると嘲笑の類になるのである。

仕事でなくても、たとえば落ち込んで飲みたい友人と一緒に酒の席で、「もう疲れたから帰りたい」と思いながら付き合ってる時の気持ちは「嘘」なのか？

それを「本音で」正直に話すのが、「本物の」関係なのだろうか？

疲れて帰りたいけど「もっと飲もう」と「嘘」を言って付き合う気持ちが「本物」であると思ふのだが。

アイドルがファンと握手して言葉を交わしている気持ち、それはそのアイドルそれぞれだろうが、いろんな感情が混然一体となっているだろう、普通の人間の営みがそうであるように。

混然一体…「これは仕事だ」「自分の仕事はファンを獲得すること」「そのためには来てくれた人に満足して帰ってもらうこと」「疲れてるけどがんばろう」「仕事のため」「ファンのため」2つが同時に重なって存在していて何の矛盾もない。

その笑顔の対応にはいろんな想いがあるろう。

ファンを増やしたい。

それによって売りたい。

来てくれた人にちょっとでも良い思い出にしてもらいたい。

売りたいという想いを不純とするか純粋とみるか。

ここにも「嘘」か「本当」か、という2択の単純な思考では割り切れない想いがある。

売れることで、大きいステージで歌って踊りたい、表現したいという想いもあるだろう。売れることで、文字通りお金がほしいという想いもあるかもしれない（※6）

単細胞的考えでは割り切れぬいろいろな想いがあるのは誰しも同じ、人生そのもの。

アイドルが来てくれたファンに精一杯の笑顔や言葉で応えるのが、「営業」としか思えない人間は、その当人自身が金がからむことに関しては損得勘定でしか動かない人間だからそうとしか思えないのか、あるいは、アイドルとそのファンを偏見で見ているだけである。

あるいは、アイドルを純粋無垢でお金のことなど関係ない、という虚像で見ているがゆえに、そこに金がからんでいるのが許せないのか。（第1章 3「プロレス、AKBのファンは虚像を見ている」と、見下す者が虚像を見ている。ファンが見ているのは実像＞の項参照）

アイドルは、「人間」を観るジャンルなのだから、清濁あわせもった人間のいろいろな想いをそのコから見てとって想像したり、そういう「人間」を応援するのが嬉しいのだ。

アイドルの笑顔を「営業」と見下すしか能のない人間は、つまるところは人間そのものを見下しているのと同じであるから、「人間」を観るアイドルというジャンルを好きになれないのは当然である。

※1 もちろん、心の中で何を思っているかはメンバーそれぞれによって違うだろうし、中には心の中で舌を出しながらやっているメンバーもいるかもしれない。中には痛いファンもいるので、その時その時、目の前にいるファンによっても変わるだろう。

しかしながら、すべてを「営業」「嘘」と断じる理由はどこにもない。

※2 「推しているメンバー」の略。AKB用語なのか、それ以前のアイドルグループから使われていたかは知らないが、AKBによって一般にも浸透した言葉だろう。

※3 最近は「地下アイドル」という、それで生活しているのではない、言わばアマチュアのアイドルも増えている。ライブは有料でも、人によっては赤字かもしれない。赤字ではなくとも、時給に換算したら普通のバイトのほうがいい場合もあるだろう。そうなると、完全に、お金のためではなく、アイドルという活動が好きでやっているのだ。

※4 「AKBの仕事の中で握手会が1番好き」というのは指原莉乃。彼女は元々アイドルヲタクで、九州で行われるアイドルの握手会等のイベントでは名物的存在だった。そのため、アイドルファンの気持ちがよく分かるのだ。また、握手会は元気の源、とブログに書くメンバーもいる。

※5 逆に、「たった10秒の握手で、楽でぼろい商売」と書いてる週刊誌もあった。要は批判するためなら何でもいいのだろうが、あれを「楽」と言えるような想像力のない批判記事を書いて売っている方が楽でぼろい商売だろう。

※6 ただし、アイドルの給料はびっくりするほど低いという話をよく聞く。

テレビ番組の中で秋元才加（AKB48、チームKキャプテン）は月給20万未満（『[みみたこ～職業別よく聞かれる質問バラエティ～](#)』（フジテレビ系）2011年9月29日放送）と発言。元モーニング娘。の市井紗耶香、元おにゃんこクラブの新田恵理は、それぞれ最高月給が12万、20万だったと明かした。（『ガチガセ』日本テレビ 2012年4月27日）モーニング娘。は、市井脱退後に給料があがったらしいが。AKBは人数的に（メンバーのみならず、マネージメントや、衣装等裏方の仕事もメンバーの数だけ多くなる）1人に多くの給料を出すことは難しいであろう。メンバーにもよって給料の差はあるだろうが、多忙なスケジュールのことを考えると、お金のため、という動機だけではやっていけないのではないか。

46 推しメンとファンのプロレス

推しメンのブログに毎回コメントを書きこんだり、握手会でいつもループ（※1）したりしてメンバーに認知されているファン。

あくまで物事を“ガチ”でしか捉えられないアンチAKBは、そういうファンを嘲笑し、それならキャバクラ行けよだの、彼女つくれよだのといったようなことを言うのだが、それらとAKBメンバーとファンとの関係は全く別物である。

<第1章 3「プロレス、AKBのファンは虚像を見ている」と見下す者こそが虚像を見ている。ファンが見ているのは実像>で、AKBのファンこそ実像を見ていると書いたが、くだらない事を言うアンチと違って、虚と実をしっかりと見ているからこそ、自分で、アイドルとそのファンとしての自分、という虚像を構築し、そこで遊ぶことができる。

虚像といっても、CGでもない、映画の中の世界でもない、まぎれもなく生身の人間どうしがつくるリアルな虚像だ。こんなに楽しい道楽があろうか。

AKBのメンバーは、AKBという装置、舞台にあがっているからそこに共同幻想が成り立つ。

AKBヲタクは、それを分かっている。

もし仮に、AKBヲタが日常生活の中で自分の推しメンと同じかそれ以上タイプの女の子と知り合い、彼女が「ねえねえ、千円10秒（※2）で握手しながらお話ししてあげてもいいよ？」と言ってきたら、「アホか」で終わりだろう(笑)

千円が百円であっても同じだ。

会いたいけど、アイドルだから握手会くらいしか会えない…ではない。

握手会くらいしか会えない、であるからこそアイドルたり得るのであり、アイドルたり得ている存在だからこそ、彼女に認知されて握手会やブログを通じて、直にエールを送ったり交流できることが楽しいのだ。

通常のアイドルを好きになった場合、〇〇のファンになる、という言い方をするのに比べ、よく知られているようにAKBの場合、〇〇を推す、と言う。（※3）受動的ではなく、「推す」という意志が込められている。

大人数の中での競争…正規メンバーへの昇格や選抜、総選挙など、人間ドキュメンタリーを見せる仕掛けの中、ルックスのいい悪いだけでなく、AKBというシステムの中で、誰なら応援のしがいがあり、誰となら楽しくブログやグーグルプラス、握手会で交流していけるか、ファンを本当に大切にしてくれるのは誰なのか、そういったものを見立てて「推す」

「ファンになる」という受けの姿勢ではなく、推すという行動を楽しんでいる点においても、AKBファンは自分のやっていることをよく認識していて、確信犯的で、AKBというジャンル

と共犯関係にある。この世で1番強い絆は共犯関係である。

推しメンと、彼女に認知されているファンの関係は何かと言われたら。

「本物」？「虚構」？

自分の中で1番腑に落ちる言葉は、「プロレス」である。

そう。アイドル…とりわけAKBメンバーとファンとの関係は「プロレス」メンバーが握手会で顔なじみのファンに「会いたかったよ(^0^)/」と言う。ブログで「みんなに会えるの楽しみにしてるよ~(*^_^*)」

と書く。

ファンもそれにメンバーの活動への感想や、激励のメッセージを直に伝える。

交わす言葉のやりとりで、1つの関係を築いていく。

それは、「アイドル」として「ファン」に対して言っている言葉として、また逆に「ファン」が「アイドル」に言っている言葉として本物なのだ。

虚と実がないまぜになって、虚構でありながら生身の人間どうしが、ステージやブログ、握手会というリングで言葉という技を使って1つの攻防、関係を成り立たせていく。

いいプロレスを成り立たせることができる相手を見立てて「推す」

これもまた、本音と建前がないまぜになっている、日常の人間関係を凝縮している風景である

。

日常の人間関係の中の虚と実を認識できているリアリストだからこそ、アイドルと自分の虚実を楽しむことができるのであり、日常の中の虚を認識できていない、つまり普段の人間関係は100%の「本物」と思っている手合いが、アイドルやそのファン、そして両者の関係をことさらに「嘘」だと見下すのだ。

※1 握手会を複数枚持ち、同じメンバーのところに何回も握手に来ること

※2 AKBの個別握手会は参加券1枚で約10秒握手できる。全国握手会は1枚で1~3秒ほど。全国握手会の場合は握手の前にミニライブなどがある。

※3 言葉としては、AKB以前にハロプロなどからあったもよう（著者がハロプロヲタの友人から聞いた話）

2011年は、AKB48がスタートして、6年。

スタート時は、毎日、常設劇場で公演をし、毎日会いに行けるアイドルという新しい試みに、試行錯誤しながら今のかたちが出来上がっていったわけだが、同時に、ファンがAKBを楽しむスタイルも、運営側の試行錯誤と共に徐々に築かれていったものと思う。

アイドルたらんと歌にダンスにトークに努力する（また、AKB卒業後の歌手や女優を目指す）、夢を追う少女たちの成長をすぐそばで目撃し、しかも握手会などで直に励ますことができ、「推しメン」を決め、メンバーからも認知されて…。

そういう、AKBの楽しみ方、AKBというジャンル、文化が既に確立して数年たって社会現象にまでなっていた2011年に、AKBの「公式ライバル」として「乃木坂46」がスタートした。他の姉妹グループと違い劇場公演はないが、秋元康がプロデュースし、多人数（36名でスタート）で、曲ごとに選抜、センターが選ばれるというアイドルドキュメンタリーを見せてくれるという部分ではAKBのそれを踏襲している。

すでにAKBというジャンルが確立したうえでの、そのようなグループのスタートだったので、ファンは最初から、そういう楽しみ方を踏まえて応援している。

AKBは劇場公演でスタートし、それを基盤としながらCDデビュー、様々なファンとの交流イベントを経て、メンバーのキャラクターを、魅力を表現する場として冠番組も出来て行ったのだが、乃木坂46は劇場公演もなく、CDデビューする前に、まず冠番組「乃木坂ってどこ？」（テレビ東京 日曜深夜0時～0時半）がスタート。

ファンを招いての最初のイベントは「お見立て会」：メンバー1人1人が3分ほどの持ち時間で自分のアピールをし、ファンはその中の1人を「暫定推しメン」としてアンケートに記入し、退場時に「暫定推しメン」と握手して帰る、というもの。来たファンにはこのイベント限定で「ファンの証」を発行。

その後も、デビュー以前に握手会等のイベントを数回行い、東京での握手会にはデビュー前にも関わらず長蛇の列が出来た。

曲のデビュー前から番組やらイベントなど…と憤慨するとしたら、従来のジャンルの概念にこだわる思考回路の持ち主だろう。元々は歌というジャンルから派生していったアイドルというジャンルだが、いつまでも曲ありきでなければいけない、などという決まりなどない。

人間そのもののキャラクターを観る、ということがメインになったっていいのである。

最終的に見る側になんらかの楽しみなり何かをもたらせばいいのであって、既成の概念の定義に基づいてしか物事を楽しめない人間は、それはそれでそういう流儀で物事を見ていればいいが、既成概念にとらわれずに自由に物事を見ている人間を非難する必要はない。

既成概念にこだわる必要はないが、すでに確立された楽しみ方を踏まえてサービスを提供するのは悪いことではない。劇場公演がない、という大きな違いはあるものの、AKBというジャンル、楽しみ方が確立されていたからこそ、デビュー前からの乃木坂の仕掛けがあったと言える。

特にそれは数度行われた「お見立て会」に集約されているだろう。

まず、イベントの名称が、推しを決めるべくメンバーを見立てようという主旨がそのままズバリ。

「推し」を決める、誰々を「推そう」、というのは「ファンになる」というのとは少しニュアンスが違う。

「ファンになる」が受動的な感覚であるのに対して、「推す」というのは、ハッキリした意思だ。（※1）

このメンバーを応援して一緒に夢を見る、あるいは、握手会やブログのコメントで交流を持って、そこから元気や喜びを得られるかどうか、それらを考えて見定めて、意思をもって「推そう」と決めるのだ。単純に顔がかわいいとかタイプだとかだけの問題ではない。

従来のアイドルの概念だけで「AKBってそんなにかわいい奴いねえじゃねえか」と言う者にはそこが分かってないのだろう。（※2）ルックスや歌唱力だけでファンになるのなら、一度ファンになれば、ずっとそのメンバーのファンなのだろうが、AKBにおける「推し」はそういうことではなく、それも含みながらも各メンバーの成長や、彼女との交流という、変化していくものを楽しむものであるから、やはり変化がある恋愛において別れや出会いがあるが如く、「推し変」することはよくあることだ。（※3）

そこを分かっているから、お見立て会の段階でアンケートに記入して握手して帰るメンバーは「暫定推しメン」だ。自分もお見立て会の時に決めた暫定推しメンから推し変してしまっている。

そして、「ファンの証」の発行。

AKBを古くから応援しているファンを「古参」、新しくハマったファンを「新規」と呼ぶ。特に境目が定義されているわけではないが、2011年にファンになった自分などは、少なくとも2012年の現段階では「ド新規」である。

そういう、新規のファンが共通して思うこと。

「もっと昔から見とけばよかった…」

AKBは1つのジャンル、文化であり、同時に1つのドラマでもある。観客がなかなか埋まらなかった劇場公演を経験し、やがて満員になり、メンバーの卒業、加入、昇格、選抜総選挙、メンバーの人気の浮き沈み…。それらを、最初はAKB自体が全く人気なかった状態から徐々に花咲く過程を、一緒になって夢見て応援しながら見ていたかった…という思い。

特に、2010年以降は大ブームによって自分のような新規のファンが大量に誕生した。

「古くから見とけばよかった…！」

そういう思いを持つた皆さんのファンの前に現れたのが乃木坂46である。これは、今となっては果たせないその思いを果たせる機会の到来である。

「乃木坂古参」になれる…！

もちろん、成長していく様を最初から見て応援したい、というのは心の問題であるのだが、やはり「最初から見てた」という証はあった方が嬉しい。ビッグになった時に自慢したい、という

やらしい気持ちも含めて(笑)

であるがゆえ、最初のイベント「お見立て会」参加者のみに発行される「ファンの証」が嬉しい。

その後、CDデビューする数カ月前からメンバー全員がブログを開始してからも、多くのファンが推しメンのそれにコメントを書き込み、握手会も盛況だ。

要は、乃木坂46の出現と、デビュー前から彼女達と交流するファンは、すでにAKBという楽しみ方、ジャンル……AKBという新しい文化が確立した証明なのだ。

そう言うと、乃木坂のメンバー達は「私達はAKB人気の副産物なのか…」と気を悪くするかもしれないが、もちろん、メンバー、グループに応援する魅力がなければ「乃木坂古参」になるべくデビュー前から馳せ参じたファンも離れて行く。

しかし、そこはAKB人気の影響はファンだけでなく、アイドルを志望する女の子達にも当然影響し、乃木坂オーディションはこれまでのどの48グループのオーディションよりも多い3万8千人超という超激戦になり、そこから選ばれた33名(※4)だけに、どのメンバーもそれぞれ個性を十分に持っており、本当に応援しがいのあるグループになっている。

もちろん、今後の展開もAKBとはまた違った軌跡を描いていくに違いない。

既成概念に縛られることなく時代を切り開いていく天才・秋元康のプロデュースのもと、これからの展開が楽しみである。

※1 お見立て会では、メンバーの顔写真、名前の横に空白のメモ欄がある用紙が配られた。まさに、メンバーをしっかりと見立てて下さい！という運営側の意思の表れだ。

※2 作品の素晴らしさや、劇場公演の良さも分かってないだろうが。

※3 AKBに入る前(今も?)にアイドルヲタクだった指原莉乃は「推しは変えるものではなく、増やすもの」という名言を吐いている。番組や劇場公演をチェックし続けた結果、ルックスだけでは分からない、メンバーのそれぞれの魅力に気付いていくのである。

※4 36名でスタートし間もなく、辞退で33名になった。

握手会で推しメンに

「もう2年彼女がいないんだけど、どうしたらいいと思う？」
と聞いたら、

「それは、あれですよ！……私と出会うためですよ！（ドヤ顔）」

と言われたファンがいる。

…自分だけど（笑）

（ちなみに推しメンとは、乃木坂46の自分の推しメン、せいりりんこと永島聖羅ちゃん）

こういう会話を人に話すと「それはどうなの？(^_^;)」とか「そういうの真に受けるやつもいるかもね」

的な反応をされたりするのだが、どうもその感覚が分からない。

ここでも、物事を「ガチ」か「嘘」でしか捉えられない人っているんだなあと感じる。

そもそも！

握手会の10～20秒で、その質問に対して真面目な解決策を考えて答えてもらおうとは思ってない…当たり前だろう（笑）

聞かれたほうもそれは当然分かっている。質問というか、こっちがふった話の種に短い時間で、どういうインパクトのある、面白い答えが返ってくるかを楽しみに聞いているのであって、このばあいの「私と出会うためですよ！（ドヤ顔）」は100点満点の答えだろう。

「ガチ」か「嘘」かしかない人には、その答え聞いてデレデレしてる自分に対してアホかと言うんだろうけど…まあ、ツッコミとしてのアホかっ！ならいいんだがそうではなく、軽蔑の眼で、「そんなの嘘に決まってるだろう」と。

あのですね、では、あなた方の言うところの「嘘」でないリアルであればデレデレしてもいいんでしょか？

もし知り合いの女に「私と出会うためにあなたはこの2年彼女いなかった！」とガチで言われたら、ただデレデレしてるわけにはいかないんであって。

そこまで熱く惚れられたら、嬉しいと同時に、この人とはうまくいくかなとか、いろんなこと考えちゃいますよ、リアルならば。

握手会という場で好きなアイドルに…この場合、「嘘」という表現は違うだろと思うのだが彼らが「嘘」というのであれば、仮に「嘘」として…「嘘」であるからこそ、心悩ますことなく、めいっぱいデレデレを楽しむことができる。

こんなことを説明しないと分からないような野暮な人間が世の中を窮屈でつまらないものになっているのだ。

49 既成概念でしか物事を捉えられない人々

第1章 5<天皇を存続させた日本人のメンタリティが日本のプロレス、アイドル、AKBを生んだ>で、アイドルの起こりについて述べた。

歌謡という世界を母体とし、それと共にありつつも、しかしそこからの新しいジャンルとして飛び出した“アイドル”という世界。

新しいジャンルと呼ぶか、単に、歌の世界の中でルックスだけで売っているレベルの低いものと呼ぶべきか。それは、提供する側がアイドルという世界をどこまで真剣に追求していくか、そして見る側がそれをどこまで“アイドル”というジャンルとして真正面から受け止めるかによる。

アイドルというジャンルができていく過程の時期、またできたばかりの時は、その新しく芽生えたジャンルを受け止められない、単に「ルックスだけで売っているレベルの低い歌手」としか見れない人間がどうしたってある程度いる。

提供側が新しい「アイドル」というジャンルの可能性に気づき、歌手の、若さ、異性から見た魅力を引き出すための歌、衣装、演出etc.を追求して提供した作品を見て、あ、これはこれまでとは違ってこういう楽しみ方をすればいいんだな、と感じ・気づいて、これまでと違う楽しみ方を構築していく人間達は、既成のジャンルの概念にこだわらず、自由にもものを見ているわけだ。

それと逆に、既成の概念でしか物事を捉えられない人間は、新たな楽しみ方を追求しているジャンルが現れても、従来のジャンルのカテゴリでしかものを考えられないため、既成のジャンルのいずれかの物差しをかざしながら見る。そして、その別のジャンルの物差しで測った結果、それを「本物」ではないと見下す。

そして、時が経って、“アイドル”というジャンルが世間一般から認知されるようになった。既成のジャンルのカテゴリからしか物事を捉えられない人間の中にも、“アイドル”は既成のジャンルとなったが故に、捉えられることができる。

と、そこに現れたのがAKB48。

せつかく、“アイドル”が誰からも分かるジャンルになったところに、その既成概念にこだわらない一群が出てきたのだ。

そうすると、やはり既成の概念でしか物事を捉えられない人間は、AKBも既成の“アイドル”というジャンルの概念でしか見れない。

ゆえに「アイドルなのに」ルックスがたいしたことない、「アイドルなのに」会いに行けるなんて、キャバクラか？etc…。

劇場でたくさんの少女が毎日のように公演をしながら、夢を切磋琢磨しながら追い求めて行く様を見るというドキュメンタリー。

いつの時代も、既成概念でしか物事を捉えられない人間は、これまでになかったものには批判するしか能がない。いや、その不自由な考え方で理解ができていないだけなので、批判とすら呼べない。

プロレスを見下す人間が、それをショーと言いながら、プロレスがショー的要素を全面に出しているシーンを見てなぜか眉をひそめるのも（第1章 3<「プロレス、AKBのファンは虚像を見ている」と見下す者こそが虚像を見ている。ファンが見ているのは実像>参照）、既成の概念でしか物事を捉えられない不自由な脳のせいである。「真剣勝負」か「ショー」か。「本当」か「嘘」か。既成の概念「 」のうちの何かでしか捉えられないゆえに、そういう人間にとってプロレス側がプロレスを真剣勝負という建前をとっているということは、プロレスは「真剣勝負」の「嘘」、「真剣勝負」のレベルの低いもの、としか捉えられない。

プロレスとAKBの共通点は、“人間”を見ることだとか、ファンがその世界を支えながら“共犯者”になっていることだとか書いてきたが、もう1つの共通点は、それまでにあったジャンルに当てはまらないものであること。

ゆえに、既成の概念でしか物事を見れない人間は、その魅力を理解できず、批判とすら言えぬレベルの低い批判を繰り返す。

天皇陛下をただの人間じゃねえかと批判する者も同じかもしれない。

彼らにとっては「神様」か「ただの人間」かしかないのだ。

神話の世界からの物語を背負っておられる人、という、それこそ他に類を見ない概念は彼らの頭にはついで浮かばない。

前項の〈既成概念でしか物事を捉えられない人々〉の続きになるが、プロレス、AKBを見下す人間は、物の見方、考え方が世間の常識におもねっている。

まず単純に、プロレス、アイドルは見下すもの、という常識にのっている、というもの。

そして、世間ですでにルールがしかれている枠内でしか、物事を捉えられない・考えられない・楽しめない、ということ。

スポーツとは、ルールのもとで競い合うのを見て楽しむもの。

世間でそう認知されている。これは楽しめる。オッケー！

ショー。たとえば、映画、テレビドラマ。コンサート。舞台。

あらかじめ決められた台本にそって、演者がやっているのを客席で見て楽しめばいい。オッケー！

プロレス？

はて、スポーツ…ではないようだ。

ショー？うん、ショーみたいだけど、本人達は勝負だって言ってるし、実際すごい身体しているし、ファン達もスポーツ見てる時のノリで歓声送ってる。

みんなショーだって言ってて、結果が普通の新聞やテレビで報道されることもない。だけど、深夜とはいえテレビで放送されてて、そこではスポーツの感じで実況してる。

世間的な地位は低いけど、プロレスラーの何人かはテレビ出たりして有名で、そこでも、プロレスは勝負という前提で扱われている。

???

「スポーツ」で楽しめばいいの？

「ショー」で楽しめばいいの？

わかんない。

アイドル。

…って何??

歌を楽しむの？

それなら、「本物」の歌手の歌聴いたほうがいいじゃん。

ダンスを楽しむの？

それなら、「本物」のダンス見て楽しんだほうがいいじゃん。

ドラマ？舞台？

「本物の実力」ある役者使えよ。

会いにいけるのがいいの？

千円のCDで10秒握手だったら、キャバクラでも行ったほうがコスト的にいいじゃん。

疑似恋愛？

だったら、「ホント」の恋愛したほうがいいじゃん。

……これらはいったい全体、何を言ってるのか？

全て、世間で認知されていて、それがゆえに楽しみ方の分かるジャンルを持ちだして、そのジャンルの楽しみ方で比較し、だったらプロレスよりこっちの方が、アイドルよりあっちの方が…と言ってるわけだ。

まったく、ナンセンスとはこのこと。

「アイドル」というジャンルが、まだちゃんと世間で認められていないがために、〇〇というジャンルはこれこれこういうもの、という世間の定義でしか物事を考えられない人間、言い換えれば、物事に「自分の見方」「自分の楽しみ方」を見出すことができない人間には、アイドルを楽しむ、プロレスを楽しむ、ということはできない。

楽しみ方の提示はされていないけど、見下し方の提示はたくさんされてるから、既成概念「
」が大切で、「自分」がない人間にとっては見下したほうがそりゃ楽ちんである。

そもそも！

「ジャンルに貴賤なし。されど、そのジャンルの中のは超一流から五流までである。」という言葉は、村松友視さんの本で知ったが、自分も、ジャンルそのものを見下す奴は阿呆だと思う。

プロレスならプロレスというジャンルの自分なりの楽しみ方を見つけたうえで、この団体は好きじゃない、このレスラーはしょっぱいな（※1）、今日の興行はつまんなかった、と批判するのはありだが、ジャンルそのものを見下す、というのは、その人間がそのジャンルを理解できていない、というだけの話だ。（※2）

そして、世間の常識、枠におもねった考え方、見方しかできない人間には、しっかり規定されていない、認められていない（＝彼らには楽しむことができない）ジャンルが盛り上がっている、ということは不気味であり、理解できないがゆえに嫌悪し、見下す。

AKBがアイドルの中でも特に攻撃されるのもそう。

もはやAKBはそのコンセプト、システムからアイドルでありながら、従来のそれからは新しい世界を築いた1つのジャンルである。

「本物」よりレベルの低い「アイドル」という、世間的地位の低いジャンルの中で、さらになんとかよく分からないシステムで、「アイドルなのに」ルックスもたいしたことない…そして独特のシステム、世界を持っている。

つまり、一般の人々からはほんとなんとかよく分からない。

そういう分からないものは、その分からなさなりの、マニアックで少人数で楽しんでるぶんには許せるが、それが国民的アイドルと言われるまでに多くの人間が夢中になってることは許せない、のだ。出る杭を打ちたい、という日本人の短所もそこには作用している。

おまけに、アイドルヲタクなど、世間一般には阿呆とイメージされている。

そしてそこに、流行を批判する人間は頭よさげであるってことも加わると…
も〜う、たまらん！批判した〜〜い！！ と、ネットの真ん中でバカは叫ぶ。

皇室の場合は、言うまでもなく世間で認知されている。

本著では、天皇、プロレス、AKB、に共通している点と、それに対する偏見、攻撃のアホさ加減を浮き彫りにする事を主題としているが、プロレス、AKBが一般に見下されているのに対し、皇室は一定の反対論者はいるものの、一般に認められている。

それにはいろいろ理由があるだろう。

国民の多くが日本、天皇の歴史を知り、その存在の尊さを理解しているから…ならば喜ばしいが、実際はどうであろうか。

もちろんそういう国民も多いことはたしかとは思いますが、一方、日本史は学校で習ったのみ、世界の王室と比べての天皇の希少性も理解せず、単に、「世間で認められているから」という理由で、支持か不支持かと聞かれればなんとなく「支持する」にしている人も多いかもしれない。

日本の歴史もよくは知らず、世界の王室との比較での希少性云々は知らずとも、ともかく、自分の感覚で、しっかり自分の考えとして支持を出しているならまだいいと思うし、全く無知であっても、ともかく、被災地を見舞われる陛下とそれに感謝の頭を垂れる被災者の姿を見ていると涙が出てくる…という人のことも否定はしない。

しかし、日本人の、既存の価値感の枠でしか物事を見れない、権威に弱い傾向を見ていると…本著の主題で言えばプロレスへの偏見や、AKBへのバッシングをしている人間の類は、皇室への支持も、世間の常識におもねっているがゆえ、単に今は皇室が大きな権威で、世間が認めているからなんとなく自分も支持している…という程度ではないか。

こういう人間は、この先もしも敗戦級の体制転換があり、その時に外圧等で天皇制廃止の方向で「世間のジョーシキ」が動きはじめたら、あっという間にそれに賛成する可能性が高いだろう

自由に・物事の本質を見る目を持ちたいものである。

- ※ 1 ダメ、という意味のプロレス業界用語。プロレスの業界用語の多くが、力道山が相撲界から持ち込んだ相撲用語と、アメリカプロレス界から来たものと思われるが、これは相撲から。ちなみに、AKBの握手会でメンバーの良くない対応を「塩対応」といったり「今日の〇〇は塩でした」などと表現するのは、おそらくここから来ていると思われる。

- ※ 2 そういうお前は本著の中で、スポーツというジャンルを見下してるじゃないかという声が聞こえてくるが、べつにスポーツそのものを見下しているのではなく、スポーツ=とりあえず押さえておくもの、として、ショーを見下している、プロレス的、アイドル的なものを見下しているジョーシキがむかつくだけ。その意味、気持ちを説明する文脈で、スポーツそのものを見下していると誤解されるような文はたしかにあるが、そのところを誤解なきようおっかなびっくりの表現で書いても、言いたいことが伝わりにくく、読んでても面白くない。ただ一言、ここでスポーツそのものを見下しているわけではないことを断っておく。

5 1 プロレスやAKBを見下す類の人間は、切り捨て御免の侍

自分は、プロレスやAKBを見下す類の人間が嫌いである。

自分がプロレス、AKBのファンだから、それを見下すのがむかつくということももちろんあるが、それ以上に、「プロレスやAKBを見下す類の人間」そのものが嫌い。

どういうことか？

要は、ジョーシキや既成概念に沿った考え方しかできない人間が嫌いなのだ。

そういう人間が、いいことや偉そうなことを話してても、物事の本質を捉えたうえでの見解、その人間なりの考えでものを言っているのではなく、本人は自分の頭で考えていると思いつつも、世間のジョーシキ、既成概念に沿い、それを足がかりにしてしか物を考えられない、感じられない人間だろうと思うのだ。

自分が仕事で出入りしていた大企業のビルで、掃除のスタッフとして知的障害がある人達が働いていた。

その人達はみな礼儀正しく挨拶をよくしてくれたのだが、中でも、エレベーターに乗ってくる人に必ず「こんにちは」と明るく挨拶してくれる、10代後半くらいの男の子がいた。

かわいらしい顔立ちのコで、毎回こちらも「こんにちは」と返して気持ちよくエレベーターに乗っていたのだが、このエレベーターに乗ってくる、この大企業の、年齢的にも見た感じ的にもいわゆる偉いさんとおぼしきおじさんで、彼からの「こんにちは」をいつも思い切り無視するのが何人かいたのだ。

いわゆる立派な企業人である。

なぜ無視するのか分からないが…まあ、1日に何度もされて面倒なのかもしれないが、「こんにちは」と言うくらいたいした手間ではあるまいし…おそらく大企業で長年働いて出世してきた彼等はふだん挨拶くらいはできるだろうし、ふだんのオフィスで新入社員が挨拶をしないでおれば、「挨拶くらいできないのか、最近の若者は！」ともっともらしい顔して説教をたれると思うし、自分の子供たちにも挨拶はきちんとしなさいという教育はしているだろう。

しかし、知的障害の男の子の挨拶は無視する、無視してもいいと思っている人間の「挨拶しなさい」という考えはなんだろうと思うのだ。

同じ場所で働く人間どうしが、最低限のお互いの人間愛のようなものを確認し、人間どうしが気持ちよく接するため…という挨拶の本質（あくまで自分なりに考えたところのものだが）など関係なく、ただ、「立派な大人に見せるには挨拶するものだ」というジョーシキに沿っているだけではないのか。

だから、立派な大人に見られずともビジネスその他に差しさわりのない者の挨拶は無視すると。

こういう人間は、さらに言うなら「人殺しはいけない」も、人間愛に基づいたものではなく、この社会のジョーシキでやってはいけないことになっている、やれば「立派な大人」から脱落するからやってはいけない、程度の認識しかないのではないかと思ってしまう。

つまり、侍が町人や農民を斬ってもいい時代、それが「ジョーシキ」だった時代に侍として生まれていれば、しょうもない理由で平気で人を殺しているのではないかと。（※1）

そういう「立派な大人」は、自分の想像では、自分がそれを見て楽しめているのか、あるいはその人間なりに何かを感じているかは関係なく、とりあえず世間の人がおさえていること・認めているものとはにかく知っておかねばならぬと、メジャースポーツはチェックする類の人間…村松友視氏が「私、プロレスの味方です」で書いていたように、ボクシングというスポーツそのものには全く興味がないのに、メディアが大きくとりあげる世界タイトルマッチだけは注目する類の人間だ。

自分の中では、

知的障害者の挨拶は無視する「立派な大人」、

政治社会は見事に新聞・テレビの世論誘導にのる類の人間、

「ジョーシキ」は疑うことなく信じる人間、

たいして好きでなくともメジャースポーツはひととおりチェックしながら、プロレス、AKBは見下す人間

…これらはだぶって見えるのだ。

※1 「切り捨て御免」という言葉がよく知られる江戸時代は、実際には武士であっても、罪もない民を斬れば、詮議されてお咎めがあった、そういう記録が残っているという話を読んだことがある。そういう事実はおいとして、ここではあくまで自分の感覚を説明するための例え話としてあげた。

52 軽薄、非実力、キモイの代名詞として使われている「AKB」というデジタル記号

第2章 8 <AKB総選挙批判に対して 遊びに貴賤がつけられている不可解さ>

で挙げた、

「原発の問題が収束してないのにAKBなど…」

というよく声、その他、いろいろなところで「AKB」が軽薄、非実力、キモイの代名詞として使っている言葉をよく見る。

AKBのことはテレビでちらっと見る程度、要は何も知らないまま、このような使い方をしている人は多いのではないだろうか。

(ちなみに「インチキ」の代名詞として「プロレス」、何を勘違いしているのか最高権力者の代名詞として「天皇」を使っているのも時々目にする)

軽薄という点において、アイドルという存在そのものをそう捉えるむきもあるだろうが、それは完全に、高度経済成長、バブルの頃のフワフワした空気、遊んでいることがかっこいいともてはやされた時代にあだ花のように咲いたアイドルのイメージのまま現代のアイドルを観ている。

特にAKBは、平成大不況の只中、「頑張っていることがかっこいい」という価値観の中で、頑張っている姿をドキュメントでみてもらおうという運動体だ。それを観て、自分も前向きに頑張ろうという気持ちになれる。軽薄とは全く程遠い。そのシステム、歴史を知って、コンサートの様子、また、その核と言える劇場公演を見れば一目瞭然だが、芸能界でこれだけ泥臭く、汗の匂いのする存在はない。(※1)

1万歩譲っても、アイドルの中で特別に軽薄とされるいわれはない。

非実力という点についてだが、これが本格派の歌手と比べての歌の上手さ、プロのダンサーと比べてのダンスの巧拙、ということであれば旗色も悪くなるであろうが、少なくとも、他のアイドルグループに比べてAKBのそれが特別に劣っているとは思えない。(もちろん、たくさんいるメンバーの中でいろいろいる。平均的に、という話)

アイドルの歌唱力やダンスのレベルはAKBも含めて、昔より現在のアイドルの方がそのレベルの平均は格段に上がっているだろう。

キモイ、という点だが、これも昔の「オタク」のイメージのまま、現代のヲタク達を見ている。おそらくアイドルヲタクと言え、昔のイメージのままダサイ、キモイ的な服装、風貌で思われがちだが、AKBライブ、握手会の会場に来てるファン達はほとんど、普通に街歩いている人と変わりがない。

(熱狂的なファン=いわゆるヲタク達ばかりではなく、握手会等には行かない、作品だけを観

て楽しんでいるファンもいる)

中に、好きなメンバーの名前やら歌詞やらを縫い付けてる特攻服のファンがチラホラいたり、AKBのTシャツ着てるファンもいるけど、特攻服も、書いてある文字を見れば普通の人は引くだろうけど(笑)、文字を読まずに、パッと見、一つの特攻服と見れば、田舎のヤンキーのお姉ちゃんが惚れてしまってもおかしくない感じで(笑)決まっている。

AKBTシャツ着てるお兄さんも、そのTシャツ以外の髪型だったり帽子だったりズボンだったり、そしてTシャツの色含めたトータルのコーディネート、普通にかっこいいのである。もちろん、ドン小西とかが見たら何ていうか知らんし、そんな事はどうでもいいんだけど(笑)、みんな普通に垢ぬけてる若者だ。みんな、髪型などもバシッと決まっている。

来てるのも、だいたいグループでワイワイ楽しそうにしており、中にはカップルもいる。女性だけで来ている人も大勢いる。

メディアでAKBヲタクを取り上げたり登場させる時は、決まって、世間が想像するところのいかにも「オタクっぽい」人間を登場させる。画面に視聴者を引き付けるために、いかにもな人がいる絵がほしいからそうしてるのであって、テレビとは特にそういうものだが、雑誌等の記事でも、AKBヲタクに触れているところも、要は記者が(世間が)想像しているAKBヲタク像に沿って勝手に書いているだけで、明らかに実際にヲタクに取材も何もしてないか、してたとしてもその中で「いかにも」な部分を抜き出して書いていることが多い。

現代は、アニメヲタクの若者も、全く普通にオシャレである。

昔はそれこそアニヲタって言えば、ダサイ暗いキモイを全面に出してる感じだったが、今のアニヲタは全くそんな感じがしない、ごくごく普通の若者なのだ。

もちろん、アイドルヲタにしるアニヲタにしる、昔ながらの感じの人もいるはいるだろうが(笑)

昔は「オタク」と言えば蔑称に近い響きがあったが、現代では「マニア」「凝り性な性格」の代名詞のように使われているだけで、今の若者は自分で自分のことを普通に「AKBヲタです」「アニヲタです」と言うのだ。

しかし、何故にAKBは軽薄・非実力の代名詞のように使われ、そのファンはキモいもの、と思われるのだろうか。

そもそもアイドルというジャンルがイコール実力のない若いコ達がルックスだけで売っている、という昔ながらのイメージで捉えられていることがあるが、それに加えて一般の人にとってAKBのイメージとは、

秋元康がつくった、素人を集めたアイドル集団。おにゃんこの平成版。

秋葉原のヲタクを相手にした「会いにいけるアイドル」=きもいヲタク達ターゲットの集団。

…。

そのイメージに加えて、大集団ということが、偏見を助長している。

これが1人、または少人数のアイドルグループであれば、そのイメージで批判する前に、少なくともその、〇〇××子であれば、〇〇××子の歌なりダンスなりを見て聞いてからその実態に基づいて批評しようとなるのだろう。とにもかくにも、いったん、その対象に向き合おうとなる。

だが、AKBは大人数。（グループというより、1つのコンセプトなのだから当然なのだが）

完全に、そこに人間がいるということを忘れられているがごとく、記号化してしまう。

さらに、「AKBは完成されたパフォーマンスを見せるのではなく、一生懸命努力している過程を見せる集団」という言葉が、プロデューサーの秋元康をはじめ多くの人から語られていること。

それ自体は間違いではないのだが、実体を見ずにその言葉だけで判断していると、AKB=実力がない、という偏見のみ持つようになる。

ここまで述べたように、アイドルというジャンルに対するそもそものイメージ、秋元康プロデュースの集団=おにゃんこのイメージ、秋葉原のイメージ、「会いに行けるアイドル」から連想されるイメージ、あまりにも語られ過ぎた「一生懸命の魅力」イメージ、それらもろもろのイメージが、大人数アイドルということで記号化され、人々の頭の中で固定化している。アルファベットと数字というデジタルなその名前が記号化に拍車をかけているかもしれない。

まあしかし、言うてもそれらはイメージである。

物事を批判するにあたっては、イメージではなく、その対象をしっかりと観て聴いてからするのが道理だ。

だが、残念ながら、人は流行りものを批判したがる生き物らしい。特に日本人は。いったんジョーシキとして根付いたものには驚くほど従順なのだが、ジョーシキとして根付いていない段階の、新しいもの、既存のジャンルの枠とは違うものは叩く。

よって、AKBはその中核である劇場公演を見たこともない人間達から、その頭の中にできあがった、実力のない、軽薄なもの、キモイというイメージの記号化のままバッシングされている、というわけだ。

実際にはスタート当初から、どんどんそのパフォーマンスのレベルは上がっている。(※2) なにしろ、彼女達の舞台の場数はハンパではない。まだ研究生のうちから、こんなに舞台経験をつんでいるグループがあるか？そのうえ、常にAKB内での様々な競争原理にさらされているからなおさらである。

しかし、そんなことは出る杭を打つ快感に浸っている人間には見えない。見る気もない。その後ろ盾、批判できるバックボーンになっているのは、大多数がその記号化されたイメージを共有しているであろうという安心感。

本当に、AKBに関しては、そこに、血肉の通った人間達が関わっていること…人生を賭けて取り組む者、それを真正面から真摯に見つめている人間達がいることなど全く頭になきが如く、品性のかけらもない猛烈な見下し方をする人間が多いことに驚く。

プロレスをバカにする人間とAKBを批判する人間は似ている。

物事を批判するにあたっての覚悟がない。

通常、政治的な事柄はともかく、趣味嗜好の話で、その趣味を有する者の前でわざわざそれを見下したりすることはまともな大人のする事ではなく、かなりの覚悟があることなのだが、プロレス、AKBに関しては、「バカにしていいもの」という世間様、ジョーシキのお墨付きを得ており、覚悟も何もなく、安心して見下せるというわけだ。

その対象にまともに向き合わずに見下しているという点、実に浅いレベルで「本当のこと」を分かった気になっている点も同じである。

※ 1 何も知らぬ人にすぐにその一端が分かるものとしては、ドキュメンタリー映

画「DOCUMENTARY of AKB 48 Show must go on 少女たちは傷つきながら、夢を見る」
困難と試行錯誤の歴史が分かるものとしては「AKB 48 ヒストリー 研究生公式読本」「泣けるAKB 48 メンバーヒストリー」などがある。

※ 2 新しく入った研究生のそれがまだ拙く、メンバー個々によっても違いはあるのは当然だが。

53 アンチプロレス・アンチAKBは、見ている世界と同じ色に染まるカメレオン

普段、プロレスを取り上げることのないマスコミの中で、プロレスファンの記者ががんばって紙面を割くことに成功することが時々ある。

そんな中で、ある新聞記者が毎年恒例の新日本プロレスの1・4東京ドーム大会について記事にした際に、上司に記事の訂正を求められて悔しい思いをした話をどこかに書いていた。

(記憶の中のそれを再度確認しようとネットで検索してみたりしたのだが見当たらず、記憶に基づいて書くしかないことが残念。)

まず、「新日本プロレスが…」という箇所を「プロレスが…」に訂正させられる。

そして、プロレスを社会学的に真面目に考察したような箇所は削除したうえで、記事の最後「今後も一記者としてプロレスについて考え、今後も掲載できるようがんばっていきたい」というような文章を「プロレスを載せられるよう、闘魂で頑張らねば!」というような文章に訂正させられたとのこと。

これを読んで、プロレスファンを30年、AKBヲタクを約1年半やっている自分には、あ〜、あるあると合点がいった。

アンチプロレスファンでない、あるいはアンチAKBな人と、それらについて話す機会がある時の彼等の反応と共通してる点があるのだ。

「新日本プロレス」を「プロレス」に訂正させられた点だが、同様に、アンチはプロレスの団体名を使って話をしたり、団体によってスタイルが全く違うことを話すと「プロレスはプロレスでしょ?」という反応をする。

また、こちらがプロレスを、ビジネスの視点などリアルな話や考察などを話すと、なんともいえない怪訝な反応をする。

うまく言えないが、プロレスファンからそういった話を聞きたくない、というような反応なのだ。

AKBについても同様。

アンチは、「AKB商法」批判や、AKBを叩くことで商売している週刊誌やネットで憶えたスキャンダルや金がらみの話をこちらに話して喜々としているので、それに応じてこちらもAKBのビジネスの話や裏話で応じるのだが、これにもさきほど述べたアンチプロレス者と同じような怪訝な表情を浮かべる。

まとめると、彼らは、プロレス(orAKB)ファンが、具体的な話や、裏話、ビジネスについて真正面から取り上げた話や、社会学的な考察の話をするのを怪訝な顔で見る。

もちろん、興味もない人がそれらの話を長々と聞かされたらいやがるに決まっているが、この場合は、あくまで、話の流れの中、あるいは彼等がそういう話を振ってきたのに応じて話しているにも関わらず、である。

おそらく彼らの妄想の中では、プロレス (orAKB) ファンというのは、「プロレス (orAKB) の嘘に騙されて、金儲けのカモになっている」人間、なのである。
であるから、ファン=カモ達が、「本当のことを知っている」はずの自分達アンチよりも、裏の話を知っていたり、それらについて考察していることなど、あり得ない話なのだ。

また、それについて真面目に論じるということ自体に苦笑する向きもある。
彼らの頭の中では、プロレス (orAKB) 、あるいはショーというジャンルそのものに対して、それらはせいぜい茶化しながら見るもの、という認識しかない。

そして、世間一般の認識をそのまま受け入れた結果、彼らが高尚なものと思っているもの、例えば政治やスポーツについて真面目に熱く論じることには何の疑問も抱いていないのだ。

しかし、ショーはクソ真面目に見た方が、その本質が分かるものだ。

正解がない世界だから、その奥の深さは底なしで、それについて論じるのも、正解がないぶん、どこまでも自由に各人の思い入れを展開でき、こんなに楽しい話題もない。

自分はプロレス (orAKB) について話せと言われたら何時間でも楽しく話すことができる。

翻って、政治などは茶化しながら見る視線の方が、その本質を捉えることができる。これは決して政治社会を真面目に考えるな、ということではなく、風刺するような目を見たほうが、うまいこと言って大衆をだますのがうまい政治家の本質を見ることができる、ということだ。

プロレスは、大の男がパンツ一丁でぶつかりあう、また、よく分からない理由で「抗争」したり、マイクで叫んだり…言わばバカバカしい世界である。

AKBも、年端もいかない少女達がまだ発展途上の芸で歌ったり踊ったり…これもまた、バカバカしいと言うならばバカバカしい世界だ。

対して、スポーツは、カッコいいユニフォーム着て真剣な顔した人達がひたすらに一生懸命ボールを追いかけ、見たまんま真剣な世界。また、それを観て感動したり涙流したりという観賞の仕方が社会的に定番、構築されている世界である。

そして、政治の世界では、スーツ着てしかめつらしい顔した大人達が口泡とぼして演説したり議論したりと、いかにも真面目な表情をつくっている世界。

おそらく、そのまんま、表面を見たまんま、その表面と同じ態度で自身も物事を見る人間が、アンチプロレス (orAKB) になるのだ。

バカバカしく見える世界を見る時は自分もバカバカしく茶化しながら、真剣な顔でやっている世界は自分も真剣な表情になって見ているのであろう。

彼らは「バカバカしい」世界を真剣に語るプロレス (orAKB) ファンは「騙されている」と思

っているのだ。

逆ではないか？

表面的な、構築されている世界の色とカメレオンのように同じ色に染まって世界を見ている、彼らアンチの方が世界に騙されている。

54 プロレスやアイドルの「嘘」にキレル人間は、世の中の本当の嘘に騙される

芸能人にプロレスをさせるなどエンターテインメント性を前面に押し出したプロレス団体「ハッスル」（第7章 40＜嘘でも本当……華やかな虚構の世界を成り立たせるために流されている本物の汗＞参照）において、タレントで、当時、春風亭小朝との離婚でワイドショーをにぎわせていた泰葉のハッスル「参戦」記者会見が行われた。

泰葉の試合に向けたストーリーを絡めたあれこれ…マイクアピール合戦などが記者会見の席で展開されたわけだが、そのやり取りの後、一般マスコミのレポーターのお姉さんがキレ気味に発した一言が、

「これも演出ですか！？」

だった。

「いえ、違います。」と泰葉のマネージャー氏が答えていたが、レポーターのお姉さんのその質問を聞いた自分の頭は、

…。

…。

なんというか、…。である。

「これも演出ですか！？」??

泰葉…40代後半の、格闘技素人のおばさんが、安生洋二という男のプロレスラーと対戦する、という記者会見である。

「演出ですか！？」、とは??

それにプラス、安生は、アン・ジョーというキャラクターになり、カタコトの日本語で泰葉を挑発し、それに高田延彦扮する高田モンスター軍「高田総統」も絡んで、1人の素人おばさん相手に潰すの潰されるの倒すの倒されないのとやっている、その後に

「演出ですか！？」、とは??

何が言いたいのか、全く理解できない。

そういう質問をするということは、このレポーターのお姉ちゃんは、これが1%でも「ガチ」だと思っているのだろうか？
しかも、なぜキレ気味！？

普段、大人なプロレスファン相手にしているハッスル、この質問には面食らっただろう。

同じくハッスルで、やはり当時ワイドショーを賑わせていた狂言師の和泉元彌が「参戦」し寺。

和泉がWWE（※1）で活躍していた日本人プロレスラー・KENZOに「空中元彌チョップ」で勝った試合が放送された翌日、

女が2人、
「あれさ～、空中元彌チョップとかって絶対嘘だよね～」と話しているのを耳にした。
20～30代くらいのれっきとした大人の女性！である。

前述のレポーターのお姉さんの発言と聞いた自分の頭は「…。」であったが、これは「！！」である。

プロレスのことを全く知らない方たちだったとしても、格闘技素人のおっさんが、プロレスラーを相手に1対1で試合をする、という時点で何かこう、頭のスイッチの切り替えが行われなかったのか不思議なものであるが、既存のジャンルの概念にしかスイッチの行き先がなければこうになってしまうのであろうか。

テレビで見た感想を話していたのであるから、試合を見てるはずなのだが、その試合の冒頭はこうである。

当時、スケジュールの「ダブルブッキング」でイベントをヘリコプターで移動して間に合わせたことでワイドショーの話題になっていた和泉元彌。

試合前、元彌がまだ会場に到着していないことに対し、元彌ママがインタビュアーに「大丈夫です、ダブルブッキングもキャンセルもございません！」と言い切る様子が映像で会場とお茶の間に流される。

リング上では、先に登場した対戦相手のKENZOがしびれを切らせる中、なかなか登場しない元彌…。

と、その時、会場の横浜アリーナ内に、ヘリコプターのプロペラの轟音が！！

そこに、「遅刻もダブルブッキングもござらぬ～！！」ヘッドマイクを通して朗々と響き渡る狂言師の声と共に、会場の隅から空中に出現したハシゴと共に、元彌が出現！！またもやヘリコプター？移動で間に合った…。

試合では、「みどもはここじゃ～！闘え～！」マイクで拾われた元彌の素晴らしい声が館内に響き、何度もプロレスラーの力技でピンチに陥り、「狂言の未来が危うい！」とアナウンサーが実況する中、最後は、トップロープからKENZOの肩に飛び乗って、以前から予告していた必殺技「空中元彌チョップ」を振りおろし、崩れたKENZOを元彌がフォール！

かくして狂言の未来は守られた…。

泰葉のプロレス参戦会見にキレルレポーター、空中元彌チョップって嘘だよねと話すお姉さん達、両方とも「プロレス」という概念が頭にはないのはしょうがない。

しかし、この展開を見ているどこかで、頭の中にそういうジャンルの概念が生まれなかったのか？いや、概念がどうか難しい話ではなく、「これはこういう見方で楽しむジャンルだ」ということは分からなかったのか？

空中元彌チョップが嘘というお姉さんは、入場時に鳴り響いたヘリコプターの爆音をどういう思いで聴いていたのか？(笑)いや、そもそも普通の体格をした格闘技素人の狂言師がプロレスラーと闘うという話の時点で何か感じなかったのか？

さらに言うなら、何と云うか、こう…もうちょっと物事をおおらかに見れないものだろうか？

プロレスやAKB、アイドルの「嘘」にことさらキレたり、楽しめないタイプの方は、既存の価値観の枠でしか物事を考えられない傾向にあるので、これ即ち、世の中の本当の嘘にはとても鈍感な人のような気がする。テレビ、新聞の世論誘導であるとか、時代を支配している価値観を信じて疑うことを知らないような。

頭の中には、いろんな、既存の概念の形にくり抜かれた木の箱があり、その形にはまるものだけがすっぽりとそこに収納され、その形にないもの（プロレス、AKBなど）は固くて冷たい木の表面にはじかれ、まとめてガラクタ収納袋に入れられる。

そして、政府、テレビ、新聞の世論誘導というものは、人々の頭の中の既存の形にスッポリ入りやすいように形作られている。たとえば悪者に仕立て上げたい人物であれば「悪者」の形になりやすいように…いわゆるステレオタイプというもの。

既存の概念というものは、物事を考える足がかりにするための道具として使う分にはいいのだが、その道具がイコール真実だと考えると大間違い。

言葉はしょせん道具でしかなく、真実そのものではない、というのと同じこと。

前述のお姉さん達と対照的なプロレスファンのリアクションを1つ挙げてみよう。

かつて、闘龍門という団体で、イタリアンコネクションという、「イタリア人キャラ」のユニットがあった。メンバーはイタリアとは縁もゆかりもない日本人レスラー達なのだが、それぞれミラノコレクションA.T、コンドッティ修司、ペスカトーレ八木などというリングネームを名乗り

、コスチュームその他もイタリアな感じで活躍した。

そのイタコネが、ある日、後楽園ホールで試合後にマイクを握った。

何を言うのか、固唾を飲んで見守る観衆…。

そして、衝撃的カミングアウト

「すみません、実は僕達……………日本人だったんです！」

その言葉が出た次の瞬間、ホールを埋めたプロレスファン、一斉に

「え〜〜〜〜っ！！！！」

これがプロレスファン。

一瞬のうちに、レスラー達の仕掛けの意図を読み、自分達がそれにどう乗っかっていくか判断して、驚きの声をあげる。

この後、順番にミラノコレクションATの出身地がミラノではなく岩手県盛岡市だったことや、誰その実家が何県のパン屋だったことなど、「衝撃的」なカミングアウトをするたびに「驚きの声」をあげるプロレスファン達。

当たり前だが、「実はこれは嘘で、こういうふう楽しむものなんです」なんて説明を誰にされたわけでもない。

この「カミングアウト」を伝える「週刊プロレス」にも、そんな説明は全くなく、観客の反応を含めた、ことの一部始終が書かれているのみ。

自分は、プロレスの世界にどっぷりつかっていて、そういうのが大人の感覚だと思ってるから、泰葉参戦に「演出ですか！？」とキレる人の感覚というのが、どうにも理解できないのだ。

55 真正面から見る目がそのジャンルを育てる～プロレス、アイドルの進化～皇室を学ぶ必要性

プロレスは、その試合内容が昔に比べ、格段に進化している。

海外のプロレスもそうだが、ここでは、日本のプロレスについて。

エンターテインメントにおいて進化とかどちらが面白いといったことは、見る人の好みや着眼点においても違うので、いちがいには言えない。

昔のプロレスのほうが、間をしっかりと取り、技を大切にし…と、よかったという見方もある。自分も今のプロレスの嫌いな点や、昔に学ぶべき点を挙げようと思えば、たくさん挙げられるが、ここではそれはおいておくとして、少なくとも、一見さんが見た場合、今のプロレスの方が面白いことは確かだろうし、いろいろあるにしても、昔から今に向けておおむね進化してきたといってよいと思う。

プロレスを知らない人に、プロレスの進化って？と聞かれてごく簡単に答えるとしたら、試合が面白くなり、その他、煽り映像の発達や全体の進行など、興行全体の満足度があがってきているということである。

その進化には、エポックメイキングというべきプロレスラーの存在や新しいスタイルの登場があった。

猪木の“ストロングスタイル” 藤波のジュニアヘビー級路線 長州率いる“維新軍団”のハイスパートレスリング 四天王プロレス 大仁田厚の明るい、ロックテイストのデスマッチとインディー団体の成功 などなど。

この項で取り上げたいのは、新生UWF（※1）の登場である。

知らない方のために説明すると、1988年に「スポーツライクなプロレス」「ショー的要素を排除した真剣勝負」という触れ込みで旗揚げされた新団体で、一時はちょっとした社会現象になるほどにブームになった。

そのUWFも、多くの人を知るとおり、そして、総合格闘技の練習が各地のジムでできるようになった現在、そこに通う小中学生が見ても分かるとおおり、真剣勝負ではなかった。

だが、UWFの登場とそのブームは、思いもよらない影響を既存のスタイルのプロレス団体に及ぼした。

UWFの「これまでのプロレスと違ってUWFは真剣勝負」という宣伝戦略と、真剣勝負の格闘技ではなかったにしろ、それまでのプロレスとはかなり違った、格闘技の技術を大きく取り入れた攻防を見せたことにより、それまで既存のプロレスを真剣勝負（あるいは曖昧なもの）と見てきたファンの多くが、少なくとも、既存のプロレスがガチンコではない、という認識を持ち始めた。

それまでのプロレスはショーではあったが、見ている人の多くがガチンコという目で見ている

という前提にたったショーであった。

つまり、プロレスをエンターテインメントとして見、その満足感を求めて来ているファンを満足させて帰さねばならない今のプロレスに比べれば、ある種の甘えがあった。内容的につまらなくても、勝負なのだから仕方ない、と言えたということだ。

不完全燃焼な試合や、スター選手どうしの対戦での、両者の価値を保つための引き分け（※2）、不透明決着（※3）は、新生UWFの登場の少し前から減って来ている傾向にはあったような気はするが、それ以降は決定的になくなった。

真剣勝負だからそういう結果になることもある、とはいかなくなったのだ。

ファンが既存のプロレスがガチンコではない、という認識を持ち始めた以降の既存のスタイルのプロレス団体は、「エンターテインメントならば、面白い試合、見応えあるプロレスを見せて満足させてくれよ」という当たり前の期待をまともに受けることになり、それが、試合、興行をどんどんレベルアップさせる原因の1つになった。

「プロレス」を「プロレス」として真正面から認識して見る目がプロレスをレベルアップさせたのだ。

アイドルの楽曲、ダンスのレベル、そしてアイドル達のトーク力やバラエティ番組での対応力も、昔からどんどんレベルアップし、特に曲やダンスのレベルはアイドルによってすごいものになっていると思う。

自分はプロレスは子供の頃からずっと30年にわたって情報をチェックし会場にも足を運んでいる、1ファンではあるがプロレス村の村民という意識はある者だが、芸能界に関しては普通の平均的な日本人よりうとい。2011年にAKBによってアイドル道楽に開眼する（本当に、新たな世界が開けた気持ちだ）までは、アイドルに関しても人並み以下の知見しかなかった。

以下に述べることは、あくまで自分の思うところのアイドル進化史だ。

日本で言うところの“アイドル”が誕生した流れについては第1章 5<天皇を存続させた日本人のメンタリティが日本のプロレス、アイドル、AKBを生んだ>で触れたが、70年代に、歌が主役ではなく、異性としての、歌っている若い女（or男）が主役、という売り方をする歌手が登場してくる。

そこでは、便宜的に“アイドル”という言葉が生まれたものの、まだ、プロデューズ側にも、アイドル本人にとっても見ている側にとっても、新しく出てきた1つの“現象”に対し、手探りな状態であった…プロデューズ側には、はっきりした指針なりがあったかもしれないが、受けとる側がまだ未成熟な状態であれば、この段階では“アイドル”を売っているというより、歌手を“アイドルという売り出し方”で売っているという状態にとどまっていたと言っていいたいだろう。

それが80年代、松田聖子とそれに続くアイドルの登場で、“アイドル”というジャンルとして世間に認知され出した。

しかし、その頃、それを受け取る世間一般の見方は、「かわいい (orかっこいい) だけの若いコを、それ目当てで見てる若者に売り出している、レベルの低い歌手」という、蔑んだ目が色濃くあったことは確かだろう。

時は、高度経済成長を成し遂げ、バブル前夜、右肩あがりのイケイケな時代。

1980年に小学生になり、80年代を～中学生～高校生として過ごした自分は、いわば80年代的時代背景を、その時代の独特の特徴としては捉えず、それが当たり前、という認識で育っていた。遊んでいる人間がカッコイイ、真面目は人間はダサい。その時代の気分を一言で表すなら「遊ぼうぜ！」だった。

チャラチャラ遊ぶことがかっこよかった若者、そしてそれを戦争を体験した老人世代、真面目一筋で高度経済成長を支えてきた中年世代が苦々しく見ていた時代。

そんな時代にアイドル豊作の年といわれた82年組を中心としたアイドル達は、あくまでチャラチャラしているのがかっこよく、それを支持しているのは圧倒的にティーンネージャーであり、中年のファンというのは少数だったように思う。というより、ほとんどの中年達が「あんな歌も上手くないのに顔だけでテレビで出ているやつらの何がいい」という目で見えていたのではないか。

現在、AKBやその他アイドル（男性アイドルにも）に中年のファンがザラにいるのとは大違いだ。

しかし、真面目がダサく、チャラチャラヒラヒラしたものがかっこよかったティーンネージャーにとっては、堅苦しい大人達に苦々しく苦言を呈されている、というのは、若さとかっこよさの箔付けだった。

アイドルは歌が下手でよく、特にさしたる芸もなくてよく…それが支持される時代には、当然、売り出す側もそういうアイドルを売りだしていた。

歌手のかわいさやかっこよさという売り出し方を始めた70年代、そして、80年代は、若者の買い手側が、芸が未熟でかわいい・かっこいい若者を“アイドル”として認知し、大人に眉をひそめられながらティーンネージャーを中心とした若者がそれらを買った時代。

そして、バブル崩壊でチャラチャラしたものカッコ良いという感覚は徐々に薄まり、90年代は、「本物」志向が出始める。

(偶然か、新生UWFの活動期間は1988～1991年)

歌の世界も、それまでの歌謡曲がJ-POPと呼ばれるようになり、アイドルは80年代に比べ、完全にその存在感を薄くした。

90年代に売れた音楽を思いつくままあげると…

小室ファミリーや、ミスチル、R&B、ヴィジュアル系と呼ばれるバンド、後半には椎名林檎、宇多田ヒカルなど…。

それらを「本物」の音楽と呼ぶかどうかは人それぞれだが、少なくとも、アイドルという、“歌い手”（80年代のそれは特にルックス重視で、チャラチャラした時代の気分を反映したいた若者）を買うのではなく、それぞれの音楽の嗜好のもとに、好きな“音楽”を買っていたといえるだろう。

そして、バブル崩壊から全く立ち直らぬままさらなる不況へと突き進んだ00年代。

不況が一時的なものではなく、全く先が見えないトンネルに入った中で、人々は明るさを求め始める。しかし、いかんせん不景気で、80年代のチャラチャラ遊ぼう嗜好にも戻れず…。

そんな時代に、モーニング娘。をはじめとした、ハロプロのアイドル達が、アイドルの息を吹き返し始める。

その特徴は、80年代に認知されていた、芸は未熟だが、かわいい・かっこいいで売っていた、同年代の若者達だけをターゲットにしたアイドルではなかった。

明るさを求める時代背景のもとに、若くてかわいいアイドル、は前提条件としてあるが、そこに、90年代の本物志向を経て、また、長引く不況で本当に価値を認めたものにしか財布のひもを緩めない傾向で、“本物の”“アイドル”が生まれる土壌になった。

つまり、若くてかわいい女の子の魅力を売りにしつつも、それを最大限に引き出し楽しむための楽曲、それを表現するための歌唱力、大衆を楽しませるためのダンス（80年代のアイドルのそれは、「振付け」と呼ばれるにとどまっていた）

さらに、アイドルの売りの「若くてかわいいコの魅力」のそれは、70年代までは清楚でお人形さんのようなかわいさ、つまり基本的にはマイクの前でお行儀よくニコニコ歌っていればよかった。80年代は、イケイケの時代の中、明るく元気よく、難しいことは考えていないふうのアイドルが求められた。

00年代は、違う。

出口の見えない不況が続き、若者の価値観は「真面目に頑張っている人」こそかっこ良いというものになっていて、それは当然、アイドルにも求められた。

モーニング娘。は、バラエティ番組の企画オーディションで落ちたメンバーで結成され、インディーズCDを5日間で5万枚完売すればデビューできるという条件のもと、デビューまで頑張るメンバーの姿が番組で放送された。（00年代～としてまとめて書いてるが、実際にはこれは97年）

80年代にこれをやっても「ダサい」「暗い」で全く受けなかったろうが、頑張ることがカッコ良いという時代で…カッコ良さというよりも、そういう姿に人々が希望を感じる時代になっていたのだ。

つまり、同じ若くてかわいいコの魅力を売るのでも、昔と違い、ひたむきに頑張る人間像が売れたのだ。

求められる歌唱力のレベルがあがり、ダンスが激しくなったのは、本物志向もあるが、もう1つ。

同じ「楽しむ」という感覚においても、80年代は、若くてかわいいコがかわいく歌を歌っていれば、時代自体が浮かれていたので、あとは勝手に盛り上げられたのだ。

しかし、90年代後半以降はもはやそうはいかない。

沈んだ世相は、しっかり盛り上がるサウンドで、激しい、面白いダンスをきっちり用意しなければ盛り上がれない。トークも然り。

誰でも就職できた時代と違い、何かもってないとなかなか就職できない時代背景も、アイドルにも何か頑張っけて身につけたものを要求する原因になっているのかもしれない。

要約すると、00年代以降は、アイドルならば、アイドルというジャンルをしっかりと認識し、アイドルのプロを求める時代になったということだ。

(アイドルのプロとは? 第7章 42<アイドル、プロレスラーの「実力」>の項を参照)
「プロレス」を「プロレス」として真正面から認識して見る目がプロレスをレベルアップさせたのと同様だ。

ひるがえって、皇室。

現代ほど、日本の歴史上、一般大衆に「皇室とは何か?」という問いかけが真正面から突きつけられている時代はない。

明治維新以前まで、一般大衆が皇室をどれくらい認知し、どういう皇室観があったかは機会があれば勉強してみたいが、ともかく、その皇室観を時の権力者に表明したり公に影響を及ぼす手段は基本的になかった。

明治維新後～第二次大戦敗戦までは、左翼も含め知識人はそれぞれの天皇観を持ち、天皇機関説論争などそれが表面に出てくることもあり、また、一般大衆もそれなりに考え、許される範囲でそれを表明もできたろうが、不敬罪もあり自由に考えを表明できるわけでもなく、基本的に、国民が皇室とは何か・どうあるべきかなどと考えさせられている状況ではなかった。

それが戦後、国民主権のもと、「天皇制廃止」という考えまでも自由に表明できるようになった。

また、現在の制度(側室をおけない、男系男子のみしか皇位継承できないなど)と男子が少ない皇族の現状で将来の皇位継承をどうするかという議論(女性、また女系にも皇位継承を認めるか、女性宮家創設など)も盛んになっている。

「開かれた皇室」の名のもと、特に雅子さまのご病気のことなどがマスコミで、さかんに報道されている。

皇室とは何か、どうあるべきか、という皇室観が一般の国民にこんなに問われている時代は日本の歴史上初めてである。

プロレス、アイドルの世界は、そのジャンルを真正面から認識して見る目がレベルアップさせた。

そこには、競争原理が働き、ファンの目の変化が即座に集客、売上となって働き、即座にそのジャンルの進化を促した。

また、それ以上に、提供側に大衆の心理を読める天才がいれば、時代の変化を先取りして、そのジャンルの変化を引っ張っていった。

皇室の変化はそのように即座に簡単に起こせるものではもちろんない。

が、民主主義社会のもとで、今後の日本の皇室に、国民が皇室をどう捉えるかが影響を及ぼしていく。

今こそ、国民1人1人が、皇室を真正面から捉え、認識することが大切だ。

そのためには、ワイドショーや女性週刊誌の皇室報道を見ているだけではダメだ。

日本の歴史、皇室の歴史、および、世界の王室と比べて皇室がどのような存在であるか、などを勉強し、まずは事実を正しく認識し、そのうえで考えてみなければならない。

イデオロギーを決めてそこから事実を見ても、見えてくるのは勝手に気めつけた思想から見えてくる歪んだものである。

「アイドルはレベルが低いもの」という偏見の耳で聴けば、どんな曲でもつまらない曲にしか聴こえない。

「プロレスは真剣勝負か、レベルの低いショーか」というわけの分からない対比で見るから、身体能力と知性、感性が高くなければ観客を感動させられない、ハイレベルなショーだということが分からない。

皇室を考える際にも、まずはイデオロギー抜きでその歴史を勉強して、真正面から！基本事実を認識して、然るのち、自分の皇室観を持ちたいものだ。

(もちろん、各歴史本も、全く客観的に事実を書くということは難しい以上、“イデオロギー抜きの事実”を勉強することは難しいところはある、ということは留意したうえで)

(※1) それ以前に存在したUWFと区別するため、旧UWF、新生UWFという分け方をする。

(※2) 両者リングアウト…双方が場外(リングの外)で乱闘し、レフリーが20カウントする間にリングに戻らず引き分けという裁定。ここ20年くらいのファンは馴染みがないかもしれないが、昔は日常茶飯事だった

(※3) 反則勝ち、無効試合など。レスラーと衝突したレフリーが倒れ、レフリー不在の間に…という流れは今のプロレスでも時々あるが、昔はそのままそれが決着(反則決着など)につながる事がよくあった。全日本プロレスのメインレフリーだった、ジョー樋口(故人)の失神姿はオールドファンの郷愁を誘う懐かしの風景である。

プロレスが好きになったきっかけ。

それは人それぞれだが、1つだけ共通しているのは、会場であれテレビであれプロレスを観たことがきっかけ、ということであろう。

ところが、自分の場合は違う。プロレスを初めて見る前からプロレスにハマっていたのだ。

幼稚園か小学1年頃の時なので、はっきりした記憶はないのだが、まず、プロレス好きの東京の従兄が持ってきたもの…雑誌等で、写真の2次元のプロレスを目にしてその存在を知った時、プロレスって凄い、という妄想が強烈に心に焼き付いた。

もうその時点で、「プロレス」=この世界に存在する超人達の世界というファンタジーが完全に出来上がっていた。

とにかくごつい身体をした男達が、本気のケンカをしている…この世界にそういう異次元の世界がリアルにある、ということに何かこう、ワクワクした。

その頃、地元（石川県）ではプロレスを放送していなかったのも、まず、いつか東京の親戚の家に行ってテレビでプロレスを観る、ということが幼心にものすごい夢となった。

そして、小学1年の時だったか、東京に旅行に行った時、親戚の家で待望のプロレステレビ初観戦、となったのだ。

ここで大事なのは、あくまでこれはリアルなガチの世界である、という建前をとっていたからこそ、異次元の夢の世界、ファンタジーとして幼児の頭に焼きついたのだ。

ウルトラマンや仮面ライダーも、その頃は見ている間は作りごとなのか本当のことなのか曖昧だったかもしれないが、改めてあれは本当のことかと問えば、作りごとだと答えるだけの認識はもっていただろう。

つくりごと、ファンタジーの世界という前提をとっているものは、「これは作りごと」という現実認識を持たせてしまう時点でファンタジーではない。

「これはガチだ」という建前をとりながら、実際のガチではあり得ないような華麗な技の応酬や、因縁のストーリーが展開されるからこそ真のファンタジーとなる。

アイドルの場合もそう。

アイドル（AKB）にハマったのは37歳。

当然、プロレスと出会った幼稚園の頃とは違い、ガチでファンタジーを構築できる年齢ではなかったわけだが、プロレスと共に成長してきたことで、意識的にファンタジーの世界で遊べる大人になっていた。

「プロレス」を構築させている自分の中に「アイドル」というファンタジーも意識的に追加させた。

この場合重要なのは、テレビ、グラビア、またブログなども含めていいと思うが、メディアを通して見る存在であるということ。

メディアを通してその存在を認識していることが、手の届かない場所にいるあのコというファンタジーを成り立たせ、握手会にワクワクするのは、「ふだんメディアで見てるあのコ」がレーンで目の前に立っていて握手できる、言葉を交わる、ということ。

ファンタジーであると同時に生身の人間であるからこそその愉しみ。

アイドルを愉しむことを「楽しむ」と書かずに「愉」の字を使っている。

国語辞典では2つを区別して書いてないが、自分の中のイメージとして、「楽しむ」よりも、意識的・自覚的に深い関わり方…文化的といってもいい…を「愉しむ」と表現している。

アイドル道楽、という言葉も自分はよく使う。

アイドルを愉しむのは、プロレスと同様、奥が深く、一生の道楽と成りえるものなのだ。

プロレスの場合、たとえガチだと思っけてみているファンであっても、世間でプロレスはショーだと言われていることは当然知っている。また、たとえ格闘技が分からない人であっても、トップロープからの攻撃を下で寝て待っている等、疑問に感じる場所は多々あるに違いない。

それらに対して、自分はそれをどう捉えてプロレスと対峙し楽しむのか、無意識的にであれ自分の態度を決めている。

(プロレスをガチと思っけて観ている人をバカにする気は全くないが、子供ならともかく、大人で1度も何の疑問も感じたことがないという人がいるとしたら、ちょっといかなものかとは思う。)

アイドルも、アイドルと同世代かそれより若い世代がハマる分にはともかく、自分のようにいい年した大人がハマる場合、世間がそういう人間を蔑視する目に対しての理論武装なり、ハマっちゃってる自分の分析なども大抵はしているであろう。

皇室に対し敬愛の念を持つ人達も、それぞれの皇室観があり、意識的・自覚的に皇室と精神的な関わりをしていると思う。

何も考えず「みんなが偉い人って言ってるから敬う」では、単なる権威主義者である。

つまり、本著のテーマである、建前と生身が混然一体となっているジャンル・人間と関わり、それを肯定的に捉える場合、その特殊性ゆえ、否応なく自分がそれとどう関わりどう捉えるか、何がしかのスタンスを取らざるを得ない。

その特殊性を理解しない「世間」の偏見があるからなおさらである。

その捉え方は、意識的であるがゆえ、関わっていく年月とともに深みを増し、プロレス、アイ

ドルにおいては見巧者となり、皇室においては深い敬愛となっていくのだ。

5 7 指原スキャンダルに見る、理想のファン像

2012年6月、昔からどういうわけか明らかにAKBを目のかたきにして「アンチAKB商法」で小銭を稼いでいる某週刊誌が、「さしこ」こと指原莉乃…自分の推しメンランキング5位（2012年7月現在）…の、過去の男性関係を暴露？する記事を掲載、その週の金曜のラジオ「AKB48のオールナイトニッポン」生放送にて秋元康からさしこに「HKT48（※1）への移籍」という訓令が言い渡された。

さしこは記事の内容については、嘘は多いがその元彼なる人物とお友達だったことは本当で、誤解を受けることをした、と謝罪した。まあ、その記事の内容がどこまで本当だったかはここでは関係ない。（ちなみに第5章 34<共同幻想>で書いているように、自分は自分の推しメンに過去であれ現在であれ彼氏がいても全然オツケーである。こういう人は多い）

ここで述べたいのは、そのどうでもいい記事のことではなく、それに対する処分への自分の反応のこと。

ラジオ生放送にて、まずはさしこが泣きながらファンに謝罪した。

それから、秋元氏との会話になったわけだが、まずは、今回の件に対する氏の考えなどをひとつおり述べたあと、誰も予想してなかった通告をした。

「明日から指原莉乃は、HKT48に移籍します」

一瞬間があいた後、さしこが、音声にギリギリ拾われるくらいのあつけにとられた声で

「……え？……」

これを聴いた瞬間、自分は一人自室で、腹を抱えて大爆笑してしまったのである。おそらく、自分の人生を振り返った時に、5本の指には入るであろう、実に心からの大爆笑。

ふざけんな！と思われる方も思う。

しかし、念のため言っておくと、自分も、あいも変わらずAKBをおとしめることに執心する某週刊誌に対しての怒り、それによって傷ついたファン、さしこ本人、関係者の悲しみも十分身にしみている。

懸命に謝罪の言葉を語るさしこの涙声を、目はうるませながら聴いていたのだ。しかし、それでもHKTへの移籍通告への、さしこの、本当にあつけにとられた「…え？…」には爆笑した。

この放送を聴いたのは、生放送の数日後。

つまり、放送を聴く前にHKTへの移籍を知ったのだが、その時にも、「これは面白い展開だな」

とニヤリとしてしまった。

つまり、総選挙4位になってこれからさらに昇り調子でいくかと思われた矢先での左遷（※2）

さしこのヘタレ、いじられキャラと相まって、「ああ～、やっちゃったな、さしこ～」と、失敗してもヘタレでも憎めない彼女を苦笑しながら頭をなでてあげたいような…ここでこういう物語展開になったか、という面白さ。

処分について語った後、

「しかしまさかさ、指原にスキャンダルが出るとは思わなかったね。こりゃ驚いたね～。指原と芦田愛菜ちゃんだけは俺、スキャンダル起きないと思ってたけどね」

と、泣いているさしこも思わず笑わせた秋元氏の、こういう場面でユーモアを放つ感覚も大好きだ。

何が楽しいのか、好きでもないはずのAKBのスキャンダル情報をせっせと収集し、必死に鬼の首でもとったかのようにネットであれこれ書いているアンチ達とは対照的である。

くどいようだが、今回の件で起きているさしこをはじめ、たくさんの人の大変さ、悲しみを感じたうえで、である。

いや、悲しみを感じているからこそ、面白いのだ。

これもまた「プロレス」だ。

エンターテインメントをノンフィクションという建前で提供しているプロレス。

このさしこの件は、悲しみというノンフィクションを、HKT移籍というドラマ、エンターテインメントに転換させてしまった。見事である。

プロレスが、生身の身体の痛みを伴ってこそ極上のエンターテインメントとなっているのと同じように、この件は、そこに本物の悲しみ、痛みがあるからこそ、本物の人間ドラマ＝エンターテインメントになっている。

つまり、本物の痛み（生身の感情）もあり、エンターテインメント（建前、表面）もあり…いや、両者が共に重なり合ってプロレス、AKBは成り立っていて、どちらかが欠ければ、それはもはやプロレス、AKBではない。

そして、それを観る側は、重なり合っている生身と建前を自由自在にカメラのフォーカスを変えて見ることができてこそ、この極上のジャンルを楽しむことができるのだ。

そのフォーカスをなめらかに操るには、ジョーシキに縛られずに、物事を自由におおらかに見る余裕が必要。

アンチのように「嘘か本当か」という、リアルな人間社会にはない、人工的で不自由な2つの

カメラしか持たず、したがってプロレスもAKBも楽しめない人間と違い、自由自在にフォーカスを変え、建前も楽しみ、その建前の中にある生身の人間の感情も観察し、感動することができるカメラを持っている。

この件に関して言えば、（あくまで自分の尺度での）理想のファンは、さしこの涙の謝罪に目をうるませ、しかし、いや、それだからこそ、さしこの「…え？…」に大爆笑してしまう人。

そう、自分自身の尺度で見る限り、（当たり前だが）自分は理想のプロレス、AKBファンである。

表舞台で理想の強さ、若さ、可愛さを見せてくれながら、それを表現するためにめいっぱい生きている生身の人間達のドラマを楽しんでいる。

※1 HKT48…博多に劇場を持つ、2011年10月に初お披露目された、つまり、この件の時点で1年足らずの新しい、AKBの姉妹グループ。初お披露目された時点での平均年齢が13.8歳（HKTホームページより）であり、2012年7月現在、グループ最年少。

※2 左遷についてはHKTに失礼、この処分はそういう意味ではないと秋元氏は言っていたし、それに異を唱えるものではないが、AKBとHKTとどっちが上ということではなく、これまで慣れ親しんできた劇場から遠く離れた、年齢の離れた新人達の劇場への突然の移動命令は本人にとっては大変な環境変化であり、そういう試練という意味では左遷といってしまっても差し支えはないと思う。HKTをバカにしてるのではないので誤解なきよう。

終わりに

まず、タイトルについて。

読んでいただくとおわかりのとおり、AKBとプロレスについては自分なりの論を書いてきたが、ご皇室については、プロレス、アイドルとリンクする部分について述べただけで、「皇室論」と呼べるようなものは書いてない。当初は「AKB＝プロレス論 皇室を戴く日本人の心性がAKB、日本のプロレスを～」というようなタイトルを考えていたが、長すぎる。よって、「AKB＝プロレス＝皇室論」にした。この「＝」は一緒、という意味ではもちろんない。3者に共通するものを軸にした論、という意味で付けた。

ご皇室についての考察、著作は右から左まで山ほど出ているので、そちらを読んでいただければと思う。

本著では、プロレスがエンターテインメントであることを前提に筆を進めた。

第3章 18<虚実が入り混じっているプロレスとアイドル、そして人生>の文末の注釈で、「自分が言う『プロレスはショー』という言葉の意味には、そこに誇りこそあれ、プロレスを見下している意味は全く含まれていない。」「ショーと呼んでいることでプロレスをなめているように感じるとしたら、それはそう感じる人が『ショー』をなめているのである。」と書いた。

それはその通りなのだが、一方、プロレスをショーと呼ぶことへの抵抗、というか何か引っかかりも同時に感じる自分もいる。

(「いや、やっぱり真剣勝負かな？」という意味では全然ない)

1つは、伝説の力道山VS木村政彦など、プロレスには暗黙の了解が壊れる試合、完全に壊れるまではいかずとも、プロレスの途中で気に食わない相手に「仕掛けたり」といった、ショーの綻びが時にある、ということ。

そして、それより大きいのが、そのような綻びがない、いわゆる普通のプロレスでも、プロレスラーはリングの上で闘っている、ということだ。

よくプロレスを形容する時に使われる言葉、「観客との闘い」ってこと？

それが間違いとは言わないが、ここで自分が言っているのはそういうことではない。

もし、プロレスをただのガチンコだと思っているファンが大好きなプロレスラーに、「お願い！今度の試合勝ってね！」と、綺麗な瞳をまっすぐぶつけて訴えきたとする。

ファンの言葉に、プロレスラーは

「分かった。全力出して勝つよ。」と約束したとする。

試合の結果は決まっている。

しかし、この場合、このプロレスラーは嘘をついていないと自分は考える。

もしこの試合の結果が勝ちならば、興行後、ファンに言うべきである。

「君の応援のおかげで勝てたよ。」

この言葉にも嘘はない。

もし、最初のお願いの前にファンが

「プロレスって勝敗が決まってるって言われてるけど、違うよね？真剣勝負だよ？」
と聞いてきたとする。

もし自分がプロレスラーなら、そのファンの瞳をまっすぐに見て、堂々と答えられる。

全プロレスラーもそうだろう。

「もちろんだ。真剣勝負だよ。」

なぜ堂々とそう言えるのか？

そこに嘘はないからだ。

全く非論理的な話だが。

しかし、このプロレスラーは嘘をついていない。

そして、絶対にそう答えるべきであると思う。

プロレスファンなら分かってくれる人もいるかと思うが、プロレスを全く知らなかった人が、本著を読んでその意味が、というよりその心が、少しでも分かっていたら幸いである。

が、無理だろう。

表面の部分でなんとなくその「意味」が分かる…という方はいても、プロレスを心から好きになったことがない人には、本著を読んだだけでその心は理解できないと思う。本著をきっかけにプロレスを見始め、10年後、20年後にその心が分かるようになっていただければ嬉しいのだが。

プロレスがショーであるという表層の事実を分かっている（※1）なおかつプロレスは闘いだということの意味、心が分かる人は、AKBファンになる素質を持っている。

人間誰しも、ファンタジー（各所、各場面で装っている自分）とリアル（素の自分）が重なった存在。

その人間の在り様を凝縮して見せているプロレス、AKB、アイドルについて、仕事をする傍ら、原稿を書きだしてからなんだかんだと1年近く…長々と、地味にカチャカチャ書いてきた。

この本はAKB、プロレスについて自分の思うところを述べたものだが、感情的な動機としては、AKB、プロレスに限らず、ジョーシキの枠からはみ出したものへの世間の偏見への怒りである。まだ書きたいテーマは多々ある。

自分は、物心ついてから、社会に、世間に、「ジョーシキ」にずっとイライラしている…何をイライラしているのか、それをAKB、プロレスについて述べることで吐き出した、それが本著かもしれない。

そんなわけで、お見苦しいところも多々あったとは思うが、ご容赦願いたい。

2012年8月27日 前田敦子AKB卒業公演のあった日の夜、自宅にて。

高橋 慶介

(※1) 念の為書いておくが、「プロレスはショーだ」と言っている世の中のほとんどの人間、特にプロレスファンではない人間のほとんどは「ショーだ」と言っはいるものの、何も分かってないまま言っているだけで、この場合の「分かって」いる人間には含まない。

【2013年10月21日追記】

本著を星海社新人賞に応募しました！

新人賞サイトで紹介されていますhttp://ji-sedai.jp/school/application/post_147.html

参考文献

【AKB、アイドル】

- 「AKB 48 ヒストリー 研究生公式読本」(週刊プレイボーイ編集部・編集英社)
「AKB 48 握手会完全攻略ガチマニュアル」(秋葉いくお&チームW コスミック出版)
「QuickJapan vol.87 AKB 48 永久保存版大特集」(太田出版)
「秋元康の仕事学」(NHK出版)
「AKB 48 の経済学」(田中秀臣 朝日新聞出版)
「最下層アイドル あきらめなければ明日はある!」(大堀 恵 WAVE出版)
「AKB 48 総選挙に学ぶ心をつかむ技術」(三浦博史 フォレスト出版)
「別冊カドカワ 総力特集 失われた詩人としての秋元康」
「アイドル進化論 南沙織から初音ミク、AKB 48 まで」(太田省一 筑摩書房)
「アイドル工学」(稲増 龍夫 筑摩書房)
「AKB 48 ビジネスを大成功させた“7つの法則”」(溝上幸伸 あつぷる出版社)
「指原莉及1stフォトブック さしこ」(講談社)
「AKB 48 がヒットした5つの秘密 プレーク現象をマーケティング戦略から探る」(村山涼一 角川書店)
「泣けるAKB 48 メンバーヒストリー」(本城零次 サイゾー)
「48 現象」(ワニブックス)
「AKB 48 神公演クロニクル ～少女たちは劇場で何を叫んだか～」(本城零次 株式会社メディアックス)
「高橋みなみ 1st フォトブック たかみな」(講談社)
「非選抜アイドル」(仲谷明香 小学館)

【プロレス、スポーツ】

プロレス関連の本は小学生の頃から30年以上、膨大な数の本を読んでいるので、ここでは、本著の中で引用させていただいた本を筆頭に、他、本著の内容に関連ある数冊のスポーツ関連の本だけ挙げておきます。

- 「リングサイド プロレスから見えるアメリカ文化の真実」(スコット・M・ピークマン 早川書房)
「私、プロレスの味方ですー金曜午後八時の論理」(村松友視 情報センター出版局)
「当然プロレスの味方です」(村松友視 情報センター出版局)
「ダーティ・ヒロイズム宣言」(村松友視 情報センター出版局)
「流血の魔術最強の演技ーすべてのプロレスはショーである」(ミスター高橋 講談社)
「『大相撲八百長批判』を嗤う 幼稚な正義が伝統を破壊する」(玉木正之 飛鳥新社)
「トップスポーツビジネスの最前線2009」(講談社)
「日本は、サッカーの国になれたか。電通の格闘。」(濱口博行 朝日新聞出版)

【皇室】

本著では、皇室に関しては、プロレス、アイドルについての考察に関して述べているのみで、特に直接参考にさせていただいたという本はないのですが、読書録を付け始めた2008年以降に自分が読んだ関連本を記しておきます。内容的には右から左まで、さまざまです。

- 「近代知識人の天皇論」(石田圭介 日本教文社)

「歴史のなかの天皇」（吉田 孝 岩波新書）
「皇族の『公』と『私』 思い出の人、思い出の時」（寛仁親王 工藤美代子 PHP研究所）
「日本人として知っておきたい皇室のこと」（中西輝政+日本会議 PHP研究所）
「歴代天皇の実像」（所 功 モラロジー研究所）
「天皇家の歴史」（高瀬広居 河出書房新社）
「物語 英国の王室」（黒岩徹 中公新書）
「イギリス王室物語」（小林章夫 講談社現代新書）
「皇室はなぜ尊いのか 日本人が守るべき『美しい虹』」（渡部昇一 PHP研究所）
「象徴天皇制とは何か」（日本現代史研究会編 大月書店）
「驕れる白人と闘うための日本近代史」（ヒサコ・マツバラ, 田中 敏 文藝春秋）
「これが新しい日本の右翼だ」（鈴木邦男）
「新右翼」（鈴木邦男）
「天皇の起源」（林 房雄）
「マンガ入門シリーズ 皇室入門」
「マンガ 天皇制を知るための近代史入門」
「天皇—その論の変遷と皇室制度」（大原康男 展転社）
「ゴーマニズム宣言SPECIAL 天皇論」（小林よしのり 小学館）
「だから皇室は大切なのです」（篠沢秀夫 草思社）
「『聖断』虚構と昭和天皇」（瀨瀬 厚 新日本出版社）
「ゴーマニズム宣言SPECIAL 昭和天皇論」（小林よしのり 幻冬舎）
「天皇はなぜ生き残ったか」（本郷和人 新潮新書）

【その他】

その他、本著の内容に関わりあるかと思われる数冊を挙げておきます。

「遺書」（松本人志 朝日新聞社）
「松本」（松本人志 朝日新聞社）
「松本人志 仕事の流儀」（NHK「プロフェッショナル」制作班 イースト・プレス）
「松本裁判」（松本人志 ロッキング・オン）
「増補版 電通の正体 —マスコミ最大のタブー—」（『週刊金曜日』取材班 株式会社金曜日）
「電通」（田原総一郎 朝日新聞社）

AKB=プロレス=皇室論 ジョーシキに染まったアンチAKBへの宣戦布告

<http://p.booklog.jp/book/53632>

著者：高橋慶介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/parufe102/profile>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53632>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ

この本の、紙の書籍としての出版を検討して下さる方がいましたらご連絡下さい。

原稿の主旨に興味を持って検討していただけるならば、原稿の修正、加筆、その他応じられます。（加筆する分には、本稿に掲載したもの以外に、ほぼ骨格が固まっている目次タイトルは10以上あります）

※当電子書籍パー利用規約の17条に「本サービスを利用して投稿されたテキスト・画像等の著作権は、当該テキスト・画像等を創作した者に帰属します。」とあり、念のため問い合わせたところ、当サイトで公開した作品を紙の書籍として出版することは問題ありません、という回答をいただいております。

連絡先 parufe102@yahoo.co.jp 高橋慶介